

国立国語研究所学術情報リポジトリ

国立国語研究所年報 2017年度

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000002245

国立国語研究所

年報

2017 *NINJAL YEARBOOK*

国立国語研究所の活動（2017 年度）



東吳大学日本語文學系との学術交流協定
(2018 年 1 月 25 日, 東吳大学)



ハワイ大学マノア校との学術連携協定
(2018 年 2 月 16 日, ハワイ大学マノア校)



NINJAL 国際シンポジウム
「第 10 回日本語実用言語学国際会議 (ICPLJ)」
(2017 年 7 月 8-9 日, 国立国語研究所)



NINJAL 国際シンポジウム
“Methods in Dialectology XVI”
(2017 年 8 月 7-11 日, 国立国語研究所)



NINJAL 国際シンポジウム
“Exploiting Parsed Corpora: Applications
in Research, Pedagogy, and Processing”
(2017年12月9-10日：国立国語研究所)



国際シンポジウム
“Spies, Prisoners, and Farmers:
The Origins of Japanese Studies at Michigan”
(2017年11月29日：ミシガン大学)



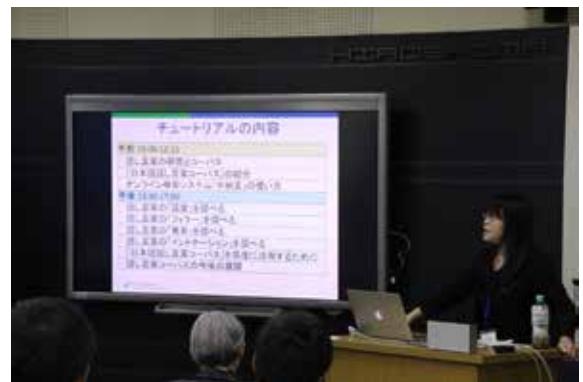
国立国語研究所日本語教師セミナー（国内）
「地域に定住する外国人の日本語使用と言語
生活について考える—縦断調査の結果や多言
語社会としての日本の現在を踏まえながら—」
(2018年1月20日：国立国語研究所)



国立国語研究所日本語教師セミナー（海外）
「学習者は日本語をどう理解しているか
—聴解・読解の困難点とその指導—」
(2018年2月25日：ハンブルグ大学)



第 12 回 NINJAL フォーラム
「ことばの多様性とコミュニケーション」
(2018 年 2 月 3 日: 東京証券会館ホール)



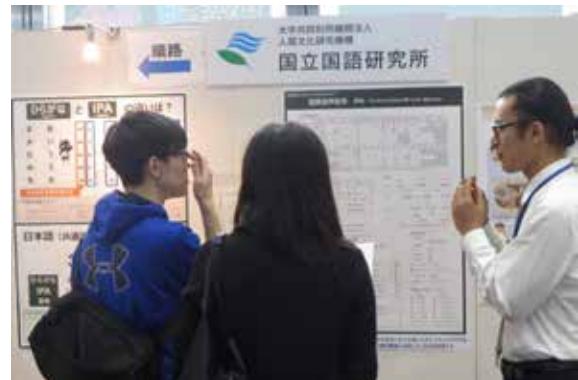
第 26 回 NINJAL チュートリアル
「コーパスに基づく話し言葉の研究」
(2017 年 11 月 30 日: 広島大学)



「平成 29 年度 危機的な状況にある
言語・方言サミット (北海道大会)」
(2017 年 12 月 3 日: 北海道大学)



立川市歴史民俗資料館共同企画講演会
「立川の歴史における多文化共生」
(2018年1月21日：
立川市女性総合センターA1ム)



大学共同利用機関シンポジウム 2017
「研究者に会いに行こう！
—大学共同利用機関博覧会—」
(2017年10月8日：アキバ・スクエア)



「平成29年度 子ども国際化学デー」
(2017年8月2-3日：文部科学省)



「二ホンゴ探検 2017—1日研究員になろう！」
(2017年7月15日：国立国語研究所)

目 次

2017 年度年報の発刊に当たって	1
I. 概要	3
1. 沿革とミッション	4
2. 2017 年度の活動の概略	4
3. 組織	6
(1) 組織構成図	6
(2) 運営組織	7
・運営会議	7
・外部評価委員会	7
・所内委員会組織	7
(3) 構成員	8
・所長・研究教育職員・特任研究員	8
・客員教員	10
・名誉教授	11
・プロジェクト PD フェロー	11
・外来研究員	11
4. 2017 年度の予算および決算	12
II. 共同研究と共同利用	13
1. 共同研究プロジェクト	14
2. 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト	33
3. 外部資金による研究	35
4. 2017 年度公開中のコーパス・データベース	37
5. 学術刊行物	42
(1) 所員による著書・編書	42
(2) 国立国語研究所論集	43
6. 研究成果の発信と普及	45
(1) 国際シンポジウム	45
(2) 合同シンポジウム・研究発表会	65
(3) プロジェクトの発表会	66
(4) NINJAL コロキウム	86
(5) NINJAL サロン	87
(6) 講習会・セミナー	88
7. センター・研究図書室の活動	90
(1) 研究情報発信センター	90
(2) コーパス開発センター	90
(3) 研究図書室	91
III. 国際的研究協力	93
1. 世界の大学・研究機関との提携	94
2. 国際シンポジウム・国際会議の開催	94
3. 日本語研究英文ハンドブック	94
4. 海外の研究者の招聘・受入	95
IV. 社会連携と広報	97
1. 消滅危機言語・方言の調査・保存・分析	98
2. 日本語コーパスの拡充	98

3. 第二言語(外国語)としての日本語教育研究	98
4. 地方自治体との連携	98
5. 見学・研修・視察等	98
6. 学会等の後援・共催	98
7. 広報	99
(1) 刊行物	99
(2) Web発信等	99
(3) 一般向けイベント	99
(4) 児童・生徒向けイベント	100
V. 大学院教育と若手研究者育成	103
1. 連携大学院	104
2. 特別共同利用研究員制度	104
3. NINJALチュートリアル	104
4. 優れたポストドクターの登用	105
VI. 教員の研究活動と成果	107
略歴, 所属学会, 役員・委員, 受賞歴, 参画共同研究, 研究業績(著書・編書, 論文・ブックチャプター, データベース類, その他の出版物・記事), 講演・口頭発表, 研究調査, 学会等の企画運営, その他の学術的・社会的活動, 大学院教育・若手研究者育成	
VII. 資料	199
1. 運営会議	200
運営会議規程	200
2017年度の開催状況	200
運営会議の下に置かれる専門委員会	201
2. 評価体制	202
(1) 自己点検・評価委員会	202
(2) 外部評価委員会	202
(3) 基幹研究プロジェクトの評価	203
3. 所長賞	203
4. 研究教育職員の異動	204
VIII. 外部評価報告書	205
平成29年度業務の実績に関する外部評価報告書	207
1. 評価結果報告書	212
平成29年度「機関拠点型基幹研究プロジェクト・センターの研究活動」に関する評価結果	213
平成29年度「管理業務」に関する評価結果	295
2. 資料	301

2017 年度年報の発刊に当たって

2017 年度の年報をお届けします。私が昨年 10 月 1 日付けで着任以来 1 年がすぎました。2017 年度の年報の内容は一部が私の任期と重なり、感慨深いものがあります。

国立国語研究所（以下「国語研」）は 1948 年 12 月 22 日に設立されました。2018 年 12 月には創立 70 周年を迎えます。また、2009 年 10 月 1 日には、独立行政法人整備合理化計画により、大学共同利用機関法人人間文化研究機構の一員として再発足しましたので来年 10 月 1 日には人間文化研究機構移管 10 周年を迎えます。この 70 周年、10 周年を記念して、この 1 年間は様々な記念行事がおこなわれることになっています。その一つとして放送大学と共同で日本語の番組を作ります。第 1 回目は「生きた言葉と格闘する—日本語研究 70 年」と題し、国語研が設立以来おこなってきたさまざまな研究活動を日本語研究の歴史とともに見ていくというものです。国語研の創立以前は、話し言葉や生活に密着した日本語の研究はおこなわれていなかったといつても過言ではありません。国語研の使命は、書き言葉にせよ、話し言葉にせよ実際に使われている言葉をデータとして集め、それに基づいた経験科学的なアプローチを採用し、その成果によって我々の言語生活が豊かになるようにすることでした。それまではそのような「生きた日本語」の研究はおこなわれていませんでしたから、まず、国語研ではその研究のための方法を考えることから始めています。日本における社会言語学的な研究、さまざまな機器を用いた実験科学的な研究、実地調査に基づくフィールドワーク的研究、統計数理研究所との共同研究による統計サンプリング調査による研究がそれです。放送大学の第 1 回目の番組はこのような設立以来、今日に至るまでの日本語研究の歩みを、国語研を中心として扱っています。

第 2 回目は、日本語研究の未来を考える内容になる予定です。現在のビッグデータや AI 時代の到来に際し、日本語研究はどのように変わっていくのか、国語研はそれにどのように関与していくのかを考えます。2016 年の年報のご挨拶にも触ましたが、国語研は単なる文系の研究所ではなく、文理融合的な特徴を持った機関です。そこでは文学部出身の工学博士や、計算機科学を専攻していながら言語学的研究もおこなっている研究者が互いに切磋琢磨しながら、言語研究の未来を開拓しています。文理の融合だけでなく、文献学とフィールド言語学の両方をやったり、最新の言語理論の研究者がフィールドワークをやって言語再生プログラムの研究をしたりしています。また、文字デザインなどの芸術分野とのコラボの試みもなされています。一見、ばらばらの動きに見えますが、このような異種の文化との交わりから新しい研究の未来が見えてくるのではないかと思います。ご期待ください。

2018 年 10 月
国立国語研究所長
田 窪 行 則

I

概要

1 沿革とミッション

沿革

国立国語研究所は、国語に関する総合的研究機関として1948（昭和23）年に誕生した。幕末・明治以来、国語国字問題は国にとって重要な課題であり、様々な立場からの議論が行われてきた。第二次世界大戦の敗戦とその後の占領期は大きな転機となり、戦後、我が国が新しい国家として再生するに当たって、国語に関する科学的、総合的な研究を行う機関の設置が強く望まれるようになった。各方面の要望を受けて「国立国語研究所設置法」が昭和23年12月20日に公布施行され、国家的な国語研究機関である国立国語研究所の設置が実現したのである。その後、明治時代から大正、昭和初期にかけての日本語の混乱（漢字の激増や、文語と口語の違いなど）を收拾し日本語の安定化に資するという当初の設置目的が薄れるとともに旧国立国語研究所は廃止され、2009（平成21）年10月1日に大学共同利用機関法人人間文化研究機構の下に設置された。現在、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館に次ぐ6番目の研究機関として再発足し、日本語および関連する領域の学術研究機関として活発な活動を展開している。

ミッション

国立国語研究所は、日本語学・言語学・日本語教育の国際的研究拠点として、国内外の大学・研究機関と連携することによって大規模な共同研究を全国的・国際的に推進し、共同研究から得られた各種の成果や学術情報を研究者コミュニティと一般社会に提供することで、日本語と人間文化の新しい研究領域を開拓することを実質的なミッションとしている。そのため、大学共同利用機関への移行にあたっては研究所の英語名称に“linguistics”（言語学）という言葉を加え、National Institute for Japanese Language and Linguistics（「日本語と日本語言語学の国立研究所」、略称NINJAL（ニンジャル））とした。言語学・日本語学とは、日本語を人間言語のひとつとして捉え、ことばの研究をとおして人間文化に関する理解と洞察を深めることを意図した学問であり、そこには、当然のことながら、「国語及び国民の言語生活、並びに外国人に対する日本語教育」（設置目的）に関する研究が含まれる。

日本語の研究を深めることは、究極的には日本という国を発展させることにつながる。私たちの財産である日本語を将来に引き継ぎ、発展させていくことが国立国語研究所の役割である。

2 2017年度の活動の概略

国立国語研究所では、国内外の諸大学・研究機関と連携して、個別の大学ではできないような研究プロジェクトを全国的・国際的規模で展開しているが、それらの土台となるのは「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」という研究所全体の研究目標である。この目標の達成に向けて2016年度に研究領域に設けられた合計6件の共同研究プロジェクトとセンターでの研究テーマのもとに、引き続き数々の共同研究プロジェクトを実施した。

日本語研究の国際化に向けては、外国人研究者を専任教員、客員教員、共同研究員として招聘するとともに、中国・北京日本学研究センター、台湾・中央研究院語言學研究所、オックスフォード大学人文科学部、ペンシルベニア大学言語学科、ヨーク大学言語学科、ブランドン大学情報科学科、コロラド大学ボルダー校言語学科との協定に加え、新たにミシガン大学、東吳大学日本語學系、ハワイ大学マノア校との学術交流協定を締結した。また、ドイツ・De Gruyter Mouton社との協定による日本語研究英文ハンドブックシリーズ（全12巻）については、順次刊行している（既刊は7巻）。

学術研究の成果は専門家の枠を超えて広く一般社会の様々な方面で利用・応用されるべきであるから、多くの成果物を電子化し、ウェブサイト上で無償提供している。専門家向けに『国語研ことばの波止場』、『国立国語研究所論集』などの刊行物、一般向けに『NINJAL フォーラムシリーズ』などの冊子、

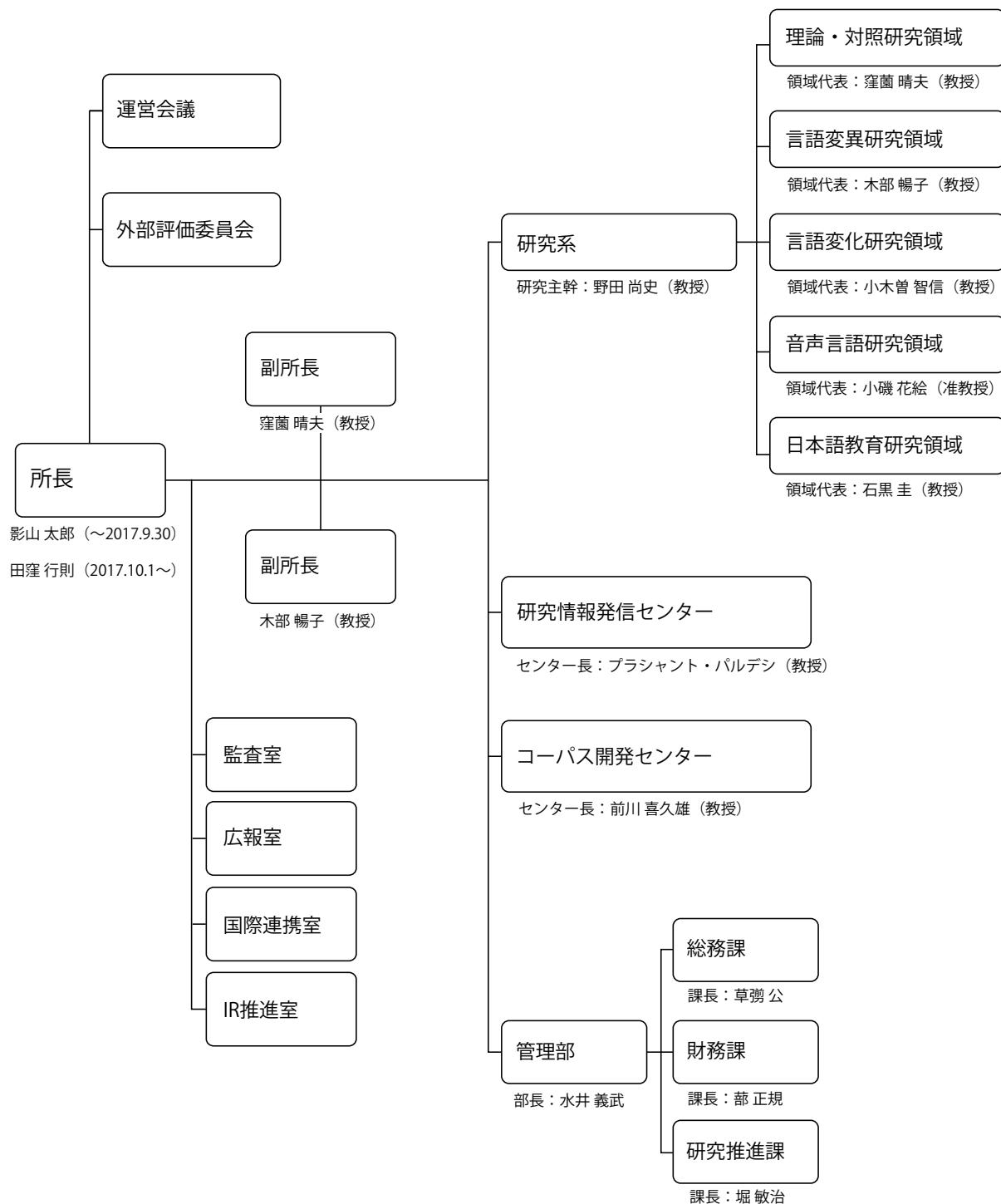
研究資料・研究材料として『現代日本語書き言葉均衡コーパス』,『日本語歴史コーパス』,『アイヌ語口承文芸コーパス—音声・グロスつき—』などのコーパス群,あるいは,日本語教育者・学習者向けには『中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断発話コーパス』,『基本動詞ハンドブック』,『複合動詞レキシコン(国際版)』などのデータベース類と,多岐にわたる。さらに対象者別に,国際シンポジウム,コロキウム,チュートリアル,フォーラム,セミナー,ニホンゴ探検など,種類の異なるイベントを多数開催した。また,地方自治体との連携による地域社会への研究成果還元の一環として,宮崎県東臼杵郡椎葉村椎葉民俗芸能博物館事業「椎葉村方言調査と『椎葉村方言語彙集』の作成」(2014年度から5年間)に基づき,同館と共同で消滅の危機の度合いの高い椎葉村方言を村全域にわたって調査・収集するとともに,椎葉村と交流協定を締結し,方言語彙集の刊行へ向けて具体的な協議をおこなった。また,島根県松江市,宮崎県椎葉村及び鹿児島県薩摩川内市と連携して講演会を3件開催した。

活動・成果の詳細は各項目をご覧いただきたい。

3 組織

(1) 組織構成図

2017 年度



(2) 運営組織

運営会議

(外部委員)

伊東祐郎	東京外国語大学副学長 / 教授
上野善道	東京大学名誉教授
呉人恵	富山大学人文学部教授
近藤泰弘	青山学院大学文学部教授
田窪行則	京都大学名誉教授（-2017年9月30日）
樋口知之	統計数理研究所長 / 情報・システム研究機構理事
福井直樹	上智大学大学院言語科学研究科教授（2017年10月1日-）
益岡隆志	関西外国語大学外国語学部教授
馬塚れい子	理化学研究所脳科学総合研究センターシニア・チームリーダー

(内部委員)

木部暢子	副所長 / 教授
窪薙晴夫	副所長 / 教授
野田尚史	研究主幹 / 教授
Prashant Pardeshi	研究情報発信センター長 / 教授
前川喜久雄	コーパス開発センター長 / 教授
小木曾智信	教授（2017年10月1日-）

任期：2015年10月1日-2017年9月30日（2年間）

2017年10月1日-2019年9月30日（2年間）

外部評価委員会

門倉正美	横浜国立大学名誉教授
田野村忠温	大阪大学大学院文学研究科教授（-2017年9月30日）
小野正弘	明治大学文学部教授
沖裕子	信州大学人文学部教授
木村英樹	追手門学院大学国際教養学部教授（-2017年9月30日）
片桐恭弘	公立はこだて未来大学学長
坂原茂	東京大学名誉教授（2017年10月1日-）
佐久間まゆみ	早稲田大学大学院日本語教育研究科教授
橋田浩一	東京大学大学院情報理工学研究科教授
森山卓郎	早稲田大学文学学術院教授（2018年1月1日-）

任期：2016年10月1日-2018年9月30日（2年間）

所内委員会組織

連絡調整会議（所長，専任研究教育職員，管理部長）

連絡調整会議のもとに，各種委員会を設置

・管理運営関係

- ・自己点検・評価委員会
- ・情報セキュリティ委員会
- ・知的財産委員会
- ・情報公開・個人情報保護委員会
- ・ハラスメント防止委員会
- ・研究倫理委員会
- ・施設・防災委員会

- 研究図書室運営委員会
 - 選書部会
- 将来計画委員会
- 学術・発信関係
 - コーパス開発センター運営委員会
 - 研究情報発信センター運営委員会
 - 広報委員会
 - 研究情報誌編集委員会
 - 論集編集委員会

安全衛生管理委員会

共同研究プロジェクト推進会議

(3) 構成員

所 長

- | | |
|------|---|
| 影山太郎 | 言語学, 形態論, 語彙意味論, 統語論, 言語類型論 (-2017.9.30) |
| 田窪行則 | 理論言語学, 韓国語, 琉球諸語, 言語ドキュメンテーション, 危機言語 (2017.10.1-) |

研究教育職員・特任研究員

- 理論・対照研究領域
 - 領域代表/教授
 - 窟薗晴夫 言語学, 日本語学, 音声学, 音韻論, 危機方言
 - 教授
 - Prashant Pardeshi 言語学, 言語類型論, 対照言語学
 - 松本曜 意味論, 認知言語学 (2017.10.1-)
- 言語変異研究領域
 - 領域代表/教授
 - 木部暢子 日本語学, 方言学, 音声学, 音韻論
 - 准教授
 - 朝日祥之 社会言語学, 言語学, 日本語学
 - 井上文子 方言学, 社会言語学
 - 熊谷康雄 言語学, 日本語学
 - 助教
 - 三井はるみ 日本語学
- 特任助教
 - 青井隼人 言語音声学, 音韻論, 琉球語学
 - 麻生玲子 言語学 (2017.12.1-)
 - 籠宮隆之 音声科学 (2017.8.1-)
 - 新永悠人 記述言語学, 琉球諸語 (2017.7.1-)
 - 原田走一郎 方言学, 琉球語学, 記述言語学 (-2017.9.30)
- 言語変化研究領域
 - 領域代表/教授
 - 小木曾智信 日本語学, 自然言語処理
 - 教授
 - 相澤正夫 社会言語学, 音声学, 音韻論, 語彙論, 意味論
 - 大西拓一郎 方言学, 言語地理学, 日本語学

山崎誠	日本語学, 計量日本語学, 計量語彙論, コーパス, シソーラス
横山詔一	認知科学, 心理統計, 日本語学
・准教授	
新野直哉	言語学, 日本語学
高田智和	日本語学, 国語学, 文献学, 文字・表記, 漢字情報処理
・特任助教	
藤本灯	国語学, 文献学, 古辞書
・音声言語研究領域	
・領域代表/准教授	
小磯花絵	コーパス言語学, 談話分析, 認知科学
・教授	
前川喜久雄	音声学, 言語資源
・准教授	
柏野和佳子	日本語学
山口昌也	情報学, 知能情報学, 科学教育・教育工学, 言語学, 日本語学
・日本語教育研究領域	
・領域代表/教授	
石黒圭	日本語学, 日本語教育学
・教授	
宇佐美まゆみ	言語社会心理学, 談話研究, 語用論, 日本語教育学
野田尚史	日本語学, 日本語教育学
・准教授	
野山広	応用言語学, 日本語教育学, 基礎教育保障学, 社会言語学, 多文化・異文化間教育, 言語政策・計画研究
・研究員	
福永由佳	日本語教育学, 社会言語学, 複数言語使用, 識字
・コーパス開発センター	
・准教授	
浅原正幸	自然言語処理
・特任助教	
石本祐一	音声工学, 音響音声学
・特任助教	
岡照晃	計算言語学, 自然言語処理
・IR推進室	
・特任助教	
山田真寛	言語学, 形式意味論, 言語復興

客員教員（2017年度在籍者）

・客員教授

・理論・対照研究領域

伊藤順子	カリフォルニア大学教授
Wesley M. Jacobsen	ハーバード大学教授
岸本秀樹	神戸大学教授
小泉政利	東北大学教授
斎藤衛	南山大学教授
John Whitman	コーネル大学教授
堀江薰	名古屋大学教授
松本曜	神戸大学教授（-2017.9.30）
宮田 Susanne	愛知淑徳大学教授
吉本啓	東北大学教授

・言語変異研究領域

狩俣繁久	琉球大学教授
新田哲夫	金沢大学教授
佐々木冠	札幌学院大学教授
渋谷勝己	大阪大学教授
岩崎勝一	カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授

・言語変化研究領域

金水敏	大阪大学教授
岡崎友子	東洋大学教授
田中牧郎	明治大学教授
橋本行洋	花園大学教授
青木博史	九州大学准教授
Bjarke Frellesvig	オックスフォード大学教授

・音声言語研究領域

伝康晴	千葉大学教授
大野剛	アルバータ大学教授
菊地英明	早稲田大学教授

・日本語教育研究領域

白井恭弘	ケースウエスタンリザーブ大学教授
田中真理	名古屋外国語大学教授
砂川有里子	筑波大学名誉教授
迫田久美子	広島大学名誉教授
糀山洋介	名古屋大学教授
今井新悟	筑波大学教授

・客員准教授

・理論・対照研究領域

秋田喜美	名古屋大学准教授
------	----------

・言語変異研究領域

下地理則	九州大学准教授
Anna Bugaeva	東京理科大学准教授

・音声言語研究領域

丸山岳彦	専修大学准教授
------	---------

名誉教授

角田太作	2012.4.1 称号授与
John Whitman	2015.10.1 称号授与
迫田久美子	2016.4.1 称号授与
影山太郎	2017.10.1 称号授与

プロジェクト PD フェロー (2017 年度在籍者)

熊谷学而	理論・対照研究領域
井戸美里	理論・対照研究領域
大島一	言語変異研究領域
居関友里子	音声言語研究領域
今村泰也	日本語教育研究領域
小西円	日本語教育研究領域
蒙韻	日本語教育研究領域

外来研究員

三樹陽介 (日本学術振興会特別研究員 (PD))	受入教員: 木部暢子 「消滅の危機に瀕する八丈語調査・記録と談話資料の作成・公開」(2015.4–2018.3)
劉金鳳 (無錫職業技術学院外国語及び観光学院 (中国) 副主任講師)	受入教員: 石黒圭 「日本語の接続詞の中日対照研究」(2016.9–2017.8)
玉栄 (内蒙古大学蒙古学学院 (中国) 教授)	受入教員: 前川喜久雄 「コーパスを利用した日本語, モンゴル語の韻律特徴の対照研究」(2016.9–2017.8)
陳鳳川 (暨南大学外国語学院日本語学部 (中国) 准教授)	受入教員: 野田尚史 「日本語学習者の日本語コミュニケーション能力育成の実践」(2016.10–2017.9)
林由華 (日本学術振興会特別研究員 (PD))	受入教員: 木部暢子 「琉球諸語および八丈語の諸方言における係り結びの類型化と機能の解明」(2017.4–2020.3)
下地美日 (日本学術振興会特別研究員 (PD))	受入教員: 木部暢子 「方言研究と古代日本語研究の融合による日本語格配列システムの解明」(2017.4–2020.3)
横山晶子 (日本学術振興会特別研究員 (PD))	受入教員: 木部暢子 「危機言語の継承に向けた実践的研究—琉球沖永良部語を事例に—」(2017.4–2020.3)
松井真雪 (日本学術振興会特別研究員 (PD))	受入教員: 窪塙晴夫 「音声パターンの共時的不均衡性と通時変化の接点」(2017.4–2020.3)
藤田保幸 (龍谷大学教授)	受入教員: 山崎誠 「現代日本語複合助詞の記述的研究」(2017.4–2018.3)
Armin Mester (カリフォルニア大学サンタクララ校 (アメリカ) 教授)	受入教員: 窪塙晴夫 “Tonal and metrical constraints in the pitch accent systems of Japanese” (2017.6–2018.3)
齊藤明美 (翰林大学校 (韓国) 教授)	受入教員: 宇佐美まゆみ 「韓国における日本語学習者の動機とイメージ形成に影響を与えた要因の変化研究—経年調査の結果からみえるもの—」(2017.9–2018.8)
王世和 (東吳大学 (台湾) 教授)	受入教員: 野田尚史 「文脈重視の日本語教育文法の研究—ティルの用法を例に—」(2017.9–2018.8)
Hoyt Long (シカゴ大学 (アメリカ) 教授)	受入教員: 小木曾智信 「コーパス分析を活用した日本近代文学の研究」(研究期間)
富岡論 (デラウェア大学 (アメリカ) 教授)	受入教員: 窪塙晴夫 “Grammatical realizations of discourse-related information in Japanese and beyond” (2017.12–2018.1)
楊紅 (重慶三峡学院 (中国) 講師)	受入教員: 石黒圭 「形容詞の連用修飾用法の中日対照言語研究」(2018.1–2019.1)

4 2017年度の予算および決算

国立国語研究所の2017年度の予算および決算を下表に示す。

(単位:千円)

	予算額(当初)	決算額
収入	1,077,290	1,205,986
運営費交付金	1,068,132	1,144,028
版権料	0	18,771
科学研究費補助金等間接経費収入	0	31,969
その他雑収入	1,664	893
寄附金収入	3,109	7,521
受託研究等収入	563	0
受託事業等収入	3,822	2,804
支出	1,077,290	1,191,077
研究経費	20,009	18,514
共同利用経費	436,203	304,077
教育研究支援経費	20,200	18,423
人件費	508,093	711,405
一般管理費	88,400	136,927
受託研究経費	563	0
受託事業経費	3,822	1,731

II

共同研究と共同利用

本章では、共同研究活動として、(1) 各種の共同研究プロジェクト、(2) 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト等、および(3) 外部資金による研究をまとめるとともに、共同利用のための成果として、(4) 2017年度公開中の各種コーパス・データベース、(5) 学術刊行物、および(6) 研究成果の発信・普及のための国際シンポジウム、研究系の合同発表会、プロジェクトの発表会、コロキウム、サロンなどの催しを掲げる。

1 共同研究プロジェクト

第3期中期計画における国語研全体の研究課題は「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」である。これを達成するため、5研究領域とコーパス開発センターでは共同研究プロジェクトを開拓している。共同研究プロジェクトは、プロジェクトリーダーを中心とし、国内外の共同研究員の参画によって成り立っており、研究領域・センター間、プロジェクト間で連携しながら研究を進めている。また、この研究課題は、国語研が所属する人間文化研究機構における、機関拠点型基幹研究プロジェクトの1つとして位置付けられている。

2017年度は、「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」のプロジェクトとして基幹型(6件)、領域指定型(5件)、および新領域創出型(3件)の3タイプと、コーパス基礎研究(1件)を実施した。

なお、各プロジェクトの概要については、『大学共同利用基幹法人人間文化研究機構 国立国語研究所 平成29年度業務の実績に関する外部評価報告書』の各プロジェクト・センターの評価から抜粋した。詳細は、第VIII章を参照。

(1) 【基幹型】6件

基幹型プロジェクトは、国語研における研究活動の根幹となる大規模なプロジェクトで、日本語の全体像の総合的解明という学術的目標に向けて研究所が総力を結集して取り組むものである。5研究領域の専任教員のリーダーシップのもと、国内外の研究者・研究機関との協業により全国的、国際的レベルで展開している。

・対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法

- ・プロジェクトリーダー：(所属・職名) 理論・対照研究領域教授 (氏名) 窪薙晴夫
- ・研究期間：2016.4–2022.3

《研究目的および特色》

日本語の研究は日本国内に長い伝統と優れた成果を有している一方で、他の言語と相対化させる努力が十分ではなく、(i) 世界諸言語の中で日本語がどのような言語であるのか、(ii) 一般言語学・言語類型論の視点から見ると、日本語の分析にどのような知見が得られるのか、(iii) 日本語の研究が世界諸言語の研究や一般言語学・言語類型論にどのように貢献するのか、いまだ十分に明らかにされたとは言えない。現代の日本語研究に求められているのは、日本語の研究が世界諸言語の研究、とりわけ一般言語学や言語類型論研究にどのように貢献できるのかという「内から外を見る」視点と、一般言語学や言語類型論研究が日本語の分析にどのような知見をもたらすかという「外から内を見る」視点である。

本プロジェクトは、この両視点から日本語の言語事実を分析することにより、日本語(諸方言を含む)を世界の諸言語と対照させて日本語の特質を明らかにし、それにより日本語研究の国際化を図ることを主たる目的とする。日本語の音声・音韻、語彙・形態、文法、意味の構造を、言語獲得(第一言語獲得、第二言語習得)はもとより、言語に関係する他の学問分野(心理学、認知科学他)との接

点・連携をも視野に入れて、対照言語学・言語類型論の観点から分析することにより、諸言語間に見られる類似性（普遍性）と相違点（個別性・多様性）を明らかにする。このような対照研究を通じて得られた研究成果を国内外に向けて発信する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトは音声・音韻特徴を分析する音声研究班と、形態・文法・意味構造を分析する文法研究班の2つの研究班（サブプロジェクト）を組織する。音声研究班は「語のプロソディーと文のプロソディー」を主テーマに、文法研究班は「名詞修飾表現」「とりたて表現」「動詞の意味構造」の3つをテーマに研究を進める。ともに海外の研究者との国際共同研究と国際シンポジウムの開催・誘致を軸に、論文集（英文、和文）の刊行や、アジアを中心とする諸言語の構造の異同を可視化する言語地図（電子媒体）の刊行を目指す。

《2017年度の主要な成果》

1. 研究

対照言語学研究を推進するために、国内外の研究者32人を共同研究員として追加し、合計123人の組織で事業を遂行した。4つの研究班ごとの公開研究発表会を計9回、4班合同の発表会（Prosody and Grammar Festa 2）を1回、国際ワークショップ・シンポジウムを2回開催した。これらの企画において計76件の研究発表が行われ（うち学生が筆頭発表者のもの8件）、計610名（延べ）の参加者が得られた（うち海外機関研究者68人、大学院生を含む学生74人）。またプロジェクトの所内メンバーが合計7冊の研究論文集を刊行、3冊の研究論文集の編集を行い、さらに3冊の一般書・啓蒙書を刊行した。これらの図書は国内外の専門誌の書評欄において好意的な評価を受け、また一般書・啓蒙書は複数の新聞の書評欄等で取り上げられた。

プロジェクト共同研究員の研究成果も含めると、プロジェクト全体で論文19件、図書10冊、発表・講演43件を公開・刊行した（いずれもプロジェクトへの謝辞を記したもののみ）。

2. 共同利用・共同研究

複数の基幹型プロジェクトにまたがる企画としてNINJALシンポジウム「日本語の名詞周辺の文法現象—名詞修飾表現ととりたて表現—」を開催し、56人の参加者を得た（発表6件、基調講演1件）。

国際ワークショップ Workshop on Prosody and Prosodic Interfaces と Nominalization and Noun modificationを開催するにあたってアドバイザリーボードのメンバーに意見を求め、その意見をテーマや招待講演（発表）者の選定と成果の刊行計画立案に活用した。

また、立命館大学大学院言語教育情報研究科と連携して第11回NINJALフォーラム「オノマトペの魅力と不思議」を大阪で開催し、一般市民と大学生を中心に215人の参加を得た。NINJALフォーラムとしては東京以外での初めての開催であった。

3. 教育

NINJALチュートリアル「日本語の音声と文法」を台湾東吳大学で開催し、対照言語学的観点から見た日本語の音声と文法について各4コマの講義を行った。大学院生67人を含む合計99人の参加を得た。

若手育成として新規にPDフェローを2人雇用し、また学振PD1人を外来研究員として受け入れ指導を行った。またプロジェクト全体で6人の非常勤研究員を雇用し、対照言語学の事業を推進した。

さらに大学院生6人、学振PD1人を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、このうち3人（延べ）にプロジェクト主催の発表会等で研究発表の機会を与えた。また共同研究員以外に、各班の研究発表会や国際ワークショップ等において延べ5人の大学院生（筆頭発表者）に発表の機会を与えた。上記の発表を含め、若手研究者28人に対して旅費を支援し、加えて計2名の若手研究者に対して方言調査の旅費を援助した。

4. 社会との連携及び社会貢献

社会との連携として鹿児島県薩摩川内市と甑島方言の保存・調査・啓蒙活動について協議を行い、甑島の2ヶ所で島民向けの講演会を行った。研究成果を社会へ還元するために、立命館大学大学院言語教育情報研究科と共催で第11回NINJALフォーラム「オノマトペの魅力と不思議」を開催し、その内容をネット配信した。またオノマトペに関する啓蒙書『オノマトペの謎』と、日本語の多様性

に関する啓蒙書『通じない日本語—世代差・地域差からみる言葉の不思議』をそれぞれ刊行した。

社会人の学び直しとして、台湾東吳大学で開催された NINJAL チュートリアルにおいて、32人の社会人（現地日本語教師）に対して「日本語の音声と文法」の講義を行った。また東京言語研究所が小中高の教員向けに開催した「教師のためのことばワークショップ」と、関西外国語大学イベロアメリカ研究センターがスペイン語教員向けに開催した第10回スペイン語教授法研究会において、それぞれ講演をそれぞれ行った。

5. グローバル化

プロジェクトの所内メンバーが合計5冊の英文研究論文集を刊行した (Haruo Kubozono (ed.) *The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants* (Oxford University Press, 計408頁), Haruo Kubozono and Mikio Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization* (De Gruyter Mouton, 計383頁), Masayoshi Shibatani, Shigeru Miyagawa and Hisashi Noda (eds.) *Handbook of Japanese Syntax* (De Gruyter Mouton, 計852頁), Prashant Pardeshi and Taro Kageyama (eds.) *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics* (De Gruyter Mouton, 計722頁), Kenshi Funakoshi *et al.* (eds.) *Japanese/Korean Linguistics 24* (CSLI, 計400頁))。

また寺村秀夫の名詞修飾表現に関する一連の研究の英語訳をホームページ公開した。

さらに国際イベントとして、JK Workshop on Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean (ハワイ大学), The 14th International Cognitive Linguistics Conference のテーマセッション「Diversity of Path Coding in Languages」, NINJAL チュートリアル「日本語の音声と文法」(台湾東吳大学)の3つのイベントを開催した。

・参加機関名

北海道大学, 室蘭工業大学, 筑波大学, 東京大学, 東京外国語大学, 一橋大学, 新潟大学, 富山大学, 金沢大学, 岐阜大学, 名古屋大学, 愛知教育大学, 三重大学, 京都大学, 大阪大学, 神戸大学, 鳴門教育大学, 九州大学, 熊本大学, 宮崎大学, 琉球大学, 国際日本文化研究センター, 国立民族学博物館, 首都大学東京, 大阪府立大学, 島根県立大学, 熊本県立大学, 北星学園大学, 麗澤大学, 神田外語大学, 慶應義塾大学, 上智大学, 聖心女子大学, 大東文化大学, 東京理科大学, 東邦大学, 日本女子大学, 法政大学, 早稲田大学, 神奈川大学, 京都外国語大学, 京都産業大学, 同志社大学, 立命館大学, 関西大学, 関西外国語大学, 大阪保健医療大学, 美作大学, 福岡大学, 沖縄大学, 京都外国語短期大学, 神戸市立工業高等専門学校, 理化学研究所, 防衛大学校, 与那国町教育委員会, カリフォルニア大学, スタンフォード大学, ハーバード大学, ライス大学, ルンド大学, マサリク大学, 赤峰学院, アンカラ大学, 国立東洋言語文化大学, ネワール言語文化研究所

・共同研究員数: 113名

・統語・意味解析コーパスの開発と言語研究

- ・プロジェクトリーダー: (所属・職名) 理論・対照研究領域教授 (氏名) Prashant PARDESHI
- ・研究期間: 2016.4–2022.3

《研究目的および特色》

現在世界の主要言語について Penn Treebank 方式の統語解析情報付きコーパス (ツリーバンク) が作られ、言語学および言語処理の研究に目覚ましい成果を挙げている。しかし日本語については十分な規模の公開されたツリーバンクは存在しない。

本プロジェクトでは、上記のような日本語研究の遅れを挽回し、多様な日本語の機能語、句、節および複雑な構文を大量の言語データから検索・抽出して研究することを可能とする統語・意味解析情報タグ付き日本語構造体コーパス NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) を開発するための基礎研究を行い、十分な規模のコーパスを構築し、公開する。さらに、このコーパスを利用して、日本語の研究を行い、その成果を国内外に向けて発信する。コーパスの共同利用の推進の一環として、最終年度までに5~6万文規模のコーパスを完成させる予定であり、言語処理の技術を持た

ない人でも簡単に利用できるインターフェースとともに、国立国語研究所のホームページから一般公開する。また、日本語に堪能でない海外の研究者にも本コーパスを利用できるようにローマ字版も用意する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトでは、日本国内外の研究者から構成される研究班に加えて国立国語研究所、東北大学、神戸大学にコーパス開発班を設け、それらの班が相互に連携しながら開発と研究を進める。また、日本語研究の国際化を目指して、世界のコーパス言語学研究の最前線で活躍している海外の研究者および日本国内の中堅研究者で Advisory Board を構成し、このメンバーのアドバイスを中心に諸企画の方針・方向を決定し、国際的研究ネットワークの構築を図る。また、国際シンポジウムなどを開催し、その成果を海外の定評のある出版社・研究雑誌を通じて発信する。

《2017年度の主要な成果》

1. 研究

本プロジェクトは、統語・意味解析コーパスの開発とそれを用いた日本語研究を推進するために、国内外の研究者をアドバイザーや共同研究員として新たに迎え、合計 32 名（うち、海外の研究機関所属の研究者 7 名）の組織でプロジェクトを遂行した。コーパス構築班と言語研究班は次のような活動を行った。言語研究班は、公開研究発表会・講演会を 2 回、国際シンポジウムを 1 回、ワークショップを 1 回開催した。これらのイベントにおいて計 26 件の研究発表（学生が筆頭著者の研究発表 2 件を含む）が行われ、計 93 名（延べ）が参加した（うち、海外の研究機関所属の研究者 19 名、大学院生を含む学生 12 名）。

プロジェクト全体で、学術論文・国際学会プロシーディングス論文・著作分担章等 3 件、コーパス・データベース・ソフトウェア（インターフェース開発）等 2 件、発表・講演 10 件、講習会・チュートリアル 3 件があった。

2. 共同利用・共同研究

コーパス構築班は、アノテーション情報の充実と新たなデータ 1 万文のタグ付けを進め、前年度公開した 1 万文と合わせた 2 万文を、アノテーターによるチェック作業を経て NINJAL Parsed Corpus of Modern Japanese (NPCMJ) として公開した。また、コーパス検索の利便性の向上のために、インターフェースに 5 種類の機能（データのローマ字化、フレームグラフ、依存関係・意味役割の表示、文中・文間の照応関係、結合値のプロフィール）を加え、インターフェースの使用法に関する日英語のオンラインドキュメンテーションを作成・公開した。さらに、権ツリーバンク方式のアノテーションマニュアルの第 1 版を日英語で作成・公開した。

NPCMJ コーパスは、日本語の記述的研究・理論的研究に利用されており、2017 年 4 月 1 日～2018 年 3 月 31 日間のページビュー数は、82,724 件であった。

国内の大学・研究機関と様々な形で連携・交流を進めた。筑波大学・お茶の水女子大学とは、テキスト含意認識システムに統語・意味解析コーパスとその処理ツールを提供するための共同研究を行なった。慶應義塾大学とは、FrameNet と統語・意味情報コーパスとの連携に関する研究交流を進めた。神戸大学の協力を得て、コーパスの新たなインターフェースの開発を進めている。東北大学とは、アノテーション方式の中国語への適用を進めている。また、NTT コミュニケーション科学基礎研究所および大阪大学大学院情報科学研究所と連携し、機械翻訳および対話システムに統語・意味解析コーパスとその処理ツールを提供するための共同研究について検討し、研究計画を作成した。本プロジェクトのコーパス構築の技術が他のコーパスに利用されている。NPCMJ コーパスのために開発されたアノテーション方式とインターフェースは Man'yoshu97 Parsed Corpus (MYS97) で使用され、2017 年 5 月に公開された (<http://www.compling.jp/mys97/>)。このプロジェクトは NPCMJ の方針をそのまま上代語に適用する試みである。また、NPCMJ コーパスのインターフェースは Oxford-NINJAL Corpus of Old Japanese (ONCOJ) で使用され、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」の傘下で、2018 年 3 月に公開された (<http://oncoj.ninjal.ac.jp/>)。データ形式だけでなく、今後は NPCMJ コーパスのより高度な分

析法も取り入れる予定である。

アドバイザリーボードからの意見を受けながら、国際シンポジウム “Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing” を企画・開催した。また、コーパスの機能に関する有益な助言を受けており、今後のコーパス開発に取り入れてゆく予定である。

3. 教育

NPCMJ コーパスに関する講習会を国内の大学（慶應義塾大学、お茶の水女子大学、神戸大学）において3回開催した（参加者は合計41名、うち大学院生を含む学生12名）。

若手研究者育成のため、非常勤研究員3名、技術補佐員2名を雇用し、また、大学院生5名に共同研究員としてプロジェクトに参画してもらい、コーパス開発およびコーパスに基づく言語研究を推進した。

本プロジェクト共同研究発表会（神戸大学）および東海意味論研究会（名古屋学院大学）における研究発表を行うため、若手研究者2名に対して旅費を支援した。

4. 社会との連携及び社会貢献

NTT コミュニケーション科学基礎研究所による機械翻訳の精度向上に関する研究をサポートするための機能をNPCMJ コーパスに加えた。また、新たな連携研究の計画を検討・作成した。株式会社アスコエパートナーズと、行政サービスに関する情報提供システムと統語・意味解析コーパス研究の連携を議論し、本プロジェクトの開発する統語解析機で解析を行った文書、およびコーパス開発ツールを提供した。

5. グローバル化

NPCMJ コーパスのインターフェース、オンラインドキュメンテーション、アノテーションマニュアルはすべて日英両言語で作成してある。また、NPCMJ コーパスのデータのローマ字化を進め、日本語の仮名・漢字表記に不慣れな研究者でもコーパスが利用できるような環境を整えた。

NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) のローマ字版構築の準備を進めた。

・参加機関名

東北大学、筑波大学、東京大学、お茶の水女子大学、北陸先端科学技術大学院大学、名古屋大学、三重大学、神戸大学、鳥取大学、愛知淑徳大学、同志社大学、立命館大学、関西外国語大学、デラウェア大学、ペンシルベニア大学、マサチューセッツ大学、コーネル大学、ヨーク大学

・共同研究員数：24名

・日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成

- ・プロジェクトリーダー：(所属・職名) 言語変異研究領域教授 (氏名) 木部暢子
- ・研究期間：2016.4–2022.3

《研究目的および特色》

本プロジェクトは、日本の消滅危機言語・方言の記録・分析・継承を目的として、各地の言語・方言の調査を実施し、言語資源の整備・分析を行うとともに、言語・方言の継承活動を支援して地域の活性化に貢献する。

近年、世界的な規模でマイナー言語が消滅の危機に瀕している。2009年のユネスコの危機言語リストには、日本で話されている8つの言語—アイヌ語、与那国語、八重山語、宮古語、沖縄語、国頭語、八丈語—が含まれている。特に、アイヌ語は危機の度合いが高く、系統関係も不明で、その解明のためのデータの整備と分析が急がれる。それだけでなく、日本各地の伝統的な方言もまた、消滅の危機にさらされている。これらの言語・方言が消滅する前にその包括的な記録を作成し言語分析を行うこと、また、これらの言語・方言の継承活動を支援することは、言語学上の重要課題であるばかりでなく、日本社会においても重要な課題である。

本プロジェクトの実施内容は、以下のとおりである。(1) 語彙集、文法書、談話テキストの作成と言語分析、(2) 音声・映像資料（ドキュメンテーション付き）、『日本語諸方言コーパス』をはじめと

する言語資源の整備、(3) 地域と連携した講演会・セミナーの開催、(4) 若手育成のためのフィールド調査の手引き書の作成。

なお、実施にあたっては、機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」の「方言の記録と継承による地域文化の再構築」、ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査研究・活用」と連携する。

《2017年度の主要な成果》

1. 研究

日本の消滅危機言語・方言の記録・継承のために、琉球 25 地点、八丈 1 地点、本土 14 地点の計 40 地点で各地点担当者が語彙集・文法書・談話テキスト、言語教材の作成のための調査を行なった。29 年度のテーマは、「指示詞・代名詞」である。共通の調査票をもとに、各地点で「指示詞・代名詞」の調査を行った。

40 地点調査のほか、1 地点の方言を集中的に調査・記録する合同調査を 29 年 8 月に愛知県一宮市木曽川町で実施した。調査には、国語研スタッフ・共同研究員、公募による学生・大学院生、および愛知県立大学学生が参加した。また、宮崎県椎葉村と共同で実施している『椎葉村方言語彙集』の作成のための調査は、今年度で 4 年目を迎え、29 年 9 月と 30 年 3 月に 3 地域の調査を実施した。

40 地点調査と連動させて、「指示詞・代名詞」に関する研究発表会を 29 年 6 月と 30 年 3 月に開催した。また、5 月にハワイ大学マノア校で危機言語に関するワークショップを歴博、ハワイ大学と共同で開催した。

成果の公開に関しては、『島根県隠岐の島方言調査報告書』(27・28 年度に合同調査実施)、『石川県白峰方言調査報告書』(28 年度に合同調査実施) を刊行した。これらを含め、29 年度は論文 10 件、図書・報告書 4 件、データベース等 3 件、発表・講演 39 件の研究成果を公表した(プロジェクトの企画によるもの、および謝辞のあるものに限る)。

2. 共同利用・共同研究

鹿児島県沖永良部方言の基礎語彙データ(音声付)、沖縄県石垣島・鹿児島県徳之島の自然談話データ(音声付)を新規公開、アイヌ語口承文芸コーパスデータ(音声付)を増補公開した。また、『日本言語地図データベース』(『日本言語地図』(LAJ) の原資料カードの画像の電子化とデータベース化)に 5 項目分のデータを追加し公開した。

方言の談話資料を使った『日本語諸方言コーパス』の構築のため、全国 47 地点、24 時間分のデータの整備を行なった。30 年度に方言コーパス・モニター版を公開する予定である。また、このデータを使った研究発表を 5 件(国際学会 1 件、国内シンポジウム 2 件、国内講演 2 件)行なった。

日本言語資源の包括的検索システムの構築に向けて、「日常会話コーパス」、「通時コーパス」、「学習者のコミュニケーション」のプロジェクトと合同で、29 年 9 月にコーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—話者の属性—」を開催した。

3. 教育

愛知県一宮市木曽川町における合同調査を愛知県立大学と連携して実施し、フィールドワークを通して大学支援と学生指導を行った。指導にあたっては、調査前に事前ワークショップを開催し、フィールドワークの概要を理解した上で調査に参加させ、調査後には事後指導を実施し、調査報告書の作成の仕方について指導を行なった。なお、事前ワークショップ、事後指導は、東京外大 AA 研 LingDy3 との共同実施である。

また、椎葉村方言調査に九州大学の学生を参加させ、フィールドワークを通して学生指導を行なった。

若手研究者の育成のために、プロジェクト PD フェローや非常勤研究員と共同で調査データや諸方言コーパスデータの分析を行い、ハワイ大ワークショップ、Methods XVI、コーパス合同シンポジウム、JK25 で共同発表を行なった。

4. 社会との連携及び社会貢献

文化庁や北海道教育委員会、北海道大学等と共同で、29 年 12 月 3 日に北海道大学で「日本の消滅

危機言語・方言サミット（北海道大会）」を開催した。サミットは今年が4回目で、各地の状況やアイヌ語の継承活動に関する報告等が行われた。

平成26年から宮崎県椎葉村と共同で『椎葉村方言語彙集』の作成のための調査を行なっている。29年度は椎葉村と正式に交流協定を締結し、方言語彙集を出版するための基盤を整えた。また、30年3月25日に椎葉民俗芸能博物館と共同で市民向け講演会「暮らしをうつす椎葉の方言」（椎葉村向山日添公民館）を開催し、調査の中間報告を行なった。

まつえ市民大学と共同で、自主企画講座「出雲弁は消えてしまうのか」（29年7月29日、市民活動センター）を開催し、出雲方言の特徴と継承について意見交換を行なった。また、鹿児島県沖永良部知名町下平川小学校の方言継承学習を支援し、子どもたちの方言学習の成果発表会（29年11月・下平川小学校、30年2月・国語研）を開催し、これらをとおして、地域の社会人の学び直しに貢献した。

企業との連携として、今年から始まった「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」において、歴博、および博物館や科学館などの展示を手がける丹青社と共同で方言の可搬型展示コンテンツを2台作成した。

5. グローバル化

海外の大学と連携して危機言語・方言の研究を進めるために、30年2月に危機言語の研究拠点であるハワイ大学と交流協定を締結した。その準備として、29年5月16-18日にハワイ大学マノア校で‘NINJAL/NMJH/UHM Workshop Underdescribed Languages and Histories: Linguists' and Historians' Challenges’を開催し、研究紹介と研究発表を行なった（機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査研究・活用」と共同開催）。30年8月に開催する国際シンポジウム‘Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization’の中で、国際交流協定締結記念の講演を行う予定である。

「日本の危機言語・方言」データ公開のページの英訳を作成し、各地基礎語彙の英語検索、沖縄県瀬底方言、首里方言の自然談話の英訳、喜界島方言調査報告書の英訳を公開した。今後、隨時、データや研究成果を英語で発信する予定である。

6. その他

今年度から、機構の「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」が始まり、国語研として「消滅危機言語・方言の展示を通した最先端研究の可視化・高度化」プロジェクトを設置し、参加することとなった。その一環として、タイポグラフィのデザイナーである大日本タイポ組合と共同で方言を動物等の形に図案化した「なんでももじもじ方言版」と、標準語にない方言の音に対して新しい文字を創作する「ひらがなの成り立ち」を作成し、29年11月3日～12月17日に開催されたATELIER MUJI「え、ほん？」展で展示を行なった。また、歴博や丹青社と共同で、可搬型の方言展示コンテンツを2台作成した。30年度に神奈川大学、弘前大学、まつえ市市民活動フェスティバル、富山大学で可搬型展示コンテンツを使った展示を開催する予定である。

・参加機関名

岩手大学、東北大学、千葉大学、東京大学、東京外国語大学、一橋大学、金沢大学、京都大学、島根大学、岡山大学、広島大学、徳島大学、福岡教育大学、九州大学、長崎大学、琉球大学、首都大学東京、愛知県立大学、熊本県立大学、北星学園大学、弘前学院大学、文教大学、目白大学、駒澤大学、東京理科大学、日本女子大学、立正大学、立命館大学、関西大学、広島経済大学、安田女子大学、別府大学、沖縄国際大学、浦添市立浦添小学校、椎葉民俗芸能博物館、与那国町教育委員会、カリフォルニア大学、シンガポール国立大学、オークランド大学、フランス国立科学研究所

・共同研究員数：56名

・通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開

- ・プロジェクトリーダー：(所属・職名) 言語変化研究領域教授 (氏名) 小木曾智信
- ・研究期間：2016.4-2022.3

《研究目的および特色》

本プロジェクトは、上代（奈良時代）から近代までの日本語資料をコーパス化し、日本語の歴史研究が可能な通時コーパスと語誌のデータベースを構築する。そして、このコーパス・データベースを活用することで新たな観点から日本語史研究を展開する。従来の日本語史研究は、専門知識を必要とするさまざまな文献を取り扱う必要から、研究が特定の資料や形式に偏ったものになりがちであった。通時コーパスを構築し活用することによって個別の資料だけでなく日本語史全体をマクロな視点から見た研究を展開することを可能にする。さらにコーパス言語学で培われてきた新しい研究手法を導入し、従来行えなかった視点からの研究を展開する。

既に国語研究所では『日本語歴史コーパス』の構築に着手しているが、本プロジェクトではこのコーパスを通時コーパスとして利用可能にするために大幅に拡張する。第2期中期計画で構築済みの「平安時代編」（平安仮名文学作品）、「室町時代編」（狂言）等に加え、上代の万葉集・宣命、中古以降の和歌集、中世のキリスト教資料・軍記物・抄物、近世の洒落本・人情本、近代の雑誌・教科書・文学作品等をサブコーパスとして追加する。このほかにも、日本語史研究に資する資料を選定してコーパスに追加し、上代から近代までの日本語を一本に繋ぐ通時コーパスとして完成させる。また、コーパスと関連付けた語誌データベースを構築し、語誌情報のポータルページを公開し、研究者のみならず日本語の歴史に興味を持つ人々に役立つ情報を提供する。コーパスを活用する研究班には、上代、中古・中世、近世・近代の各時代別の研究グループの他、文法・語彙、資料性・アノテーションの検討の研究グループを設け、コーパス構築に携わるメンバーも全員が参加して研究活動を展開する。

なお、プロジェクトの実施にあたっては、オックスフォード大学東洋学部日本語研究センター、および人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」（代表者・高田智和）と連携して行う。また、実践女子大学との提携に基づきデジタル化された所蔵資料の活用を図る。

《2017年度の主要な成果》

1. 研究

『日本語歴史コーパス』を通時コーパスとして拡充するため、キリスト教資料と洒落本のコーパス化のための調査・研究を行った。またコーパスと連携した語誌研究のため、古辞書データベース・言語地図データベース・言語記事データベースを整備した。さらに、コーパスを活用した研究を行うため、研究グループを設けて計8回の研究発表会を開催した。8月には、各グループ合同の研究会として、「通時コーパス活用班合同研究集会」を開催した。3月にはプロジェクト成果の発表会として「通時コーパス」シンポジウム2018を開催した。以上の研究成果は、プロジェクトに対する謝辞を含むものだけで論文・ブックチャプター等8件、研究発表・講演45件、コーパス・データベース等5件であった。

2. 共同利用・共同研究

『日本語歴史コーパス』に新たに「奈良時代編I万葉集」「室町時代編IIキリスト教資料」「江戸時代編I洒落本」を追加、公開した。万葉集とキリスト教資料は、漢字かな交じり校訂本文と万葉仮名やローマ字の原文とを対照して利用できるようにし、洒落本は国内研究機関がインターネット上で公開している原本画像データの当該ページとのリンクを整備し、原資料の確認を容易にした。語誌データベースの一部として、古辞書データベースと言語地図データベースの一部を公開した。また、オックスフォード大学東洋学部日本語研究センターとの共同研究により『オックスフォード上代日本語コーパス』を整備し、『オックスフォードNINJAL上代日本語コーパス』として国語研究所のWebサイトから公開した。

3. 教育

東京外国語大学・一橋大学との連携協定に基づき、クロスアポイントメント教員、連携教員として各1名が大学院の授業・学生指導を行った。プロジェクトで雇用したプロジェクト非常勤研究員や、共同研究員として参加させた大学院生・若手研究者らに研究発表の機会を与えるとともに国際学会

を含む研究発表のための旅費を援助した。大学院生・若手研究者らを対象に『日本語歴史コーパス』中納言講習会を4回開催した。

4. 社会との連携及び社会貢献

(株) 小学館・(株) ネットアドバンスと連携して新規公開した『日本語歴史コーパス』「奈良時代編1万葉集」のデータについても、検索アプリケーション「中納言」とジャパンナレッジ「新編日本古典文学全集」本文とのリンクを行った。また、情報システム研究機構・人文学オープンデータ共同利用センター(CODH)と共同で、八木書店・日本近代文学館と覚書を交わし、近代文献のOCRに関する研究のためのデータ利用環境を整備した。中学校・高等学校の国語科教員及び教職課程の学生院生向けに『日本語歴史コーパス』活用の講習会を2回開催した。

『日本語歴史コーパス』をコーパス検索アプリケーション「中納言」を通してインターネット上で無償にて一般公開し、新規の申し込みユーザー数が3,507、検索件数が112,467 あった。

5. グローバル化

国際発信のためヨーロッパ日本研究協会(EAJS2017・リスボン)において通時コーパスのパネル発表“Construction and utilization of the Corpus of Historical Japanese: Man'yoshu and Christian materials”を開催した。このほか、ハワイ大学マノア校で開催された研究集会、ソウルで開催された韓国日本語学会、モントリオールで開催されたDigital Humanities 2018などで研究発表を行った。

また、オックスフォード大学と共同で「NINJAL オックスフォード上代日本語コーパス」を公開するための英語Webサイトの作成を行ったほか、『日本語歴史コーパス』の新規公開データ(万葉集・キリスト教資料・洒落本)について、英文のWebページを作成し情報の発信をおこなった。

・参加機関名

北海道大学、岩手大学、東北大学、茨城大学、群馬大学、埼玉大学、千葉大学、東京大学、お茶の水女子大学、富山大学、福井大学、愛知教育大学、三重大学、大阪大学、奈良先端科学技術大学院大学、福岡教育大学、九州大学、青山学院大学、國學院大學、駒澤大学、上智大学、昭和女子大学、白百合女子大学、成城大学、玉川大学、中央大学、東京電機大学、東洋大学、二松學舎大學、日本女子大学、明治大学、常葉大学、中京大学、名古屋女子大学、花園大学、立命館大学、関西学院大学、シカゴ大学、コーネル大学、オックスフォード大学、啓明大学校

・共同研究員数: 52名

・大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究

- ・プロジェクトリーダー: (所属・職名) 音声言語研究領域准教授 (氏名) 小磯花絵
- ・研究期間: 2016.4-2022.3

《研究目的および特色》

本プロジェクトの目的は、均衡性を考慮した大規模な日本語日常会話コーパスを構築し、それに基づく分析を通して、日常会話を含む話し言葉の特性を、レジスター・相互行為・経年変化の観点から多角的に解明することである。そのために、(1) 多様な日常場面の会話200時間を納めた大規模コーパスの構築を目指す会話コーパス構築班、及び、構築したコーパスを用いて、(2) 語彙・文法・音声などに着目してレジスター的多様性や仕組みを研究するレジスター班、(3) 会話相互行為の中で文法が果たす役割や構造を研究する相互行為班、(4) 語彙・文法・音声などに着目して話し言葉の経年変化を研究する経年変化班の4つの班を組織して研究を進める。

会話コーパス構築班では、日常の会話行動に関する調査にもとづき、自宅・職場・店舗・屋外での家族・友人・同僚・店員との会話など、多様な日常場面での会話を網羅するようコーパスを設計するものであり、世界的に見ても新しい試みである。また、従来の多くの会話コーパスのように収録のために人を集めて会話をもらうのではなく、生活の中で生じる会話を会話者自身に収録してもらうことにより、日常の会話を自然な形で記録する点にも特色がある。会話の音声・映像を収録し、文字化した上で、形態論情報や統語情報、談話情報などのアノテーションを施し、一般に公開する。これ

により、話し言葉に関する高度なコーパスベースの研究基盤の確立を目指す。こうしたコーパスは、話し言葉や会話行動に関する基礎研究だけでなく、日本語教育や辞書編纂、音声情報処理、ロボット工学などの応用研究にも資するものである。また、後世の人々が21世紀初頭の日本人の生活や文化を知るための貴重な記録となる。

コーパスに基づく話し言葉研究では、現代の日常会話に加え、講演などの独話や発話を前提に書き言葉で記されたシナリオ、発話を前提としない小説などの会話文、50年前の話し言葉など、多様なデータを対象に、高度な統計的分析や緻密な微視的分析を通して、話し言葉の語彙・文法・音声・相互行為上の特性や仕組み、その経年変化の実態を、実証的に解明する。こうした研究を支えるものとして、昔の話し言葉のデータやBCCWJの小説などの会話文、国会会議録などを対象にデータを整備し一般に公開する。

このように本プロジェクトでは、大規模日常会話を含む様々なコーパスやデータベースを整備・構築し一般に公開することによって、共同利用・共同研究の基盤強化をはかる。

《2017年度の主要な成果》

1. 研究

構築中の『日本語日常会話コーパス』のうち20時間のデータを、10月に本プロジェクトおよび領域指定型プロジェクト「創発参与」のメンバーに公開し、各班で整備を進めた他のコーパスと合わせ、研究を推進した。その成果の報告会としてシンポジウム『日常会話コーパス』IIIを30年3月19日に国語研で開催した。

世界における通時音声コーパスの開発状況や研究の可能性について議論するために、29年9月4日に国際シンポジウム‘International Symposium on Diachronic Speech Corpora’を国語研で開催した。

コーパス関係のプロジェクトや科研と合同で、29年9月8日に合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—話者の属性—」を国語研で、30年3月18日にシンポジウム「ことば・認知・インタラクション」6を東京工科大で開催し、連携を深めた。

以上の研究成果は、プロジェクト共同研究員の研究成果も含めて論文2件、報告書・図書1冊、ブックチャプター1件、発表・講演30件、データベース等6件として公開した。

2. 共同利用・共同研究

『日本語日常会話コーパス』のデータとして490時間の会話の収録、94時間の転記1次作業、41時間の形態論情報付与を実施し、公開のための処理を終えた50時間のデータを30年3月にプロジェクトメンバーに限定公開した。

『昭和話し言葉コーパス』については、独話25時間について予定通り音声と同期付けた転記テキストの作成を終了し、29年6月にプロジェクトメンバーに限定公開した。

『BCCWJ』のうち2419サンプル（図書館サブコーパスの小説の76%に相当）の会話文への話者情報の付与を終了し、29年12月にプロジェクトメンバーに限定公開した。

『国会会議録』ひまわり版に対し話者の生年情報を追加、『名大会話コーパス』中納言版に会話メタ情報を追加した上で、それぞれ29年6月、30年3月に再公開した。

『女性のことば・男性のことば—職場編—』（ひつじ書房）収録テキストを形態素解析し、出版社および開発者の許諾を得た上で、コーパス開発センターと共同して中納言で一般公開する準備を進めた。

『日本語日常会話コーパス』設計のために実施した会話行動調査の生データを整理し、30年3月にプロジェクトのホームページで公開した。

3. 教育

コーパス言語学分野の人材を育成するために、若手研究者や大学院生を主対象に、第3回コーパス利用講習会（ひまわり・中納言の2コース）を2017年9月7日に、第4回コーパス利用講習会（同2コース）を2018年3月19日に開催し、それぞれ23名、32名が参加した。また講習会で用いた資料をプロジェクトのホームページで公開した。

若手研究者を主対象に、NINJALチュートリアル「コーパスに基づく話し言葉の研究」を、29年

11月30日と30年3月8日に開催し、それぞれ、21名、24名が参加した。

一橋大学との協定に基づき、2名の連携教授が、コーパスを活用した計量的研究の演習を担当した。

共同研究員が指導する大学生・大学院生3名に『日本語日常会話コーパス』の一部を提供し、うち1名がコーパスを活用した研究で卒業論文を執筆した。また3名がシンポジウム『日常会話コーパス』III（30年3月19日）で発表した。

4. 社会との連携及び社会貢献

プロジェクトで整備・公開した『名大会話コーパス』、『国会会議録』を、インターネットを通して一般に公開した。『名大会話コーパス』は会話研究・日本語教育研究において広く利用されており、今年度、中納言版は485件、ひまわりパッケージ版は266件の新規利用があった。また『国会会議録』は経年変化・レジスター研究において広く利用されており、ひまわりパッケージ版について今年度は340件の新規利用があった。

「通時コーパス」プロジェクトと共同し、日本語の変化をテーマとする一般向けのフォーラムを企画し、30年11月4日の開催に向けて準備を進めた。

5. グローバル化

29年9月4日に国際シンポジウム‘International Symposium on Diachronic Speech Corpora’を国語研講堂で開催し、英語、フィンランド語、イタリア語、フランス語、日本語を対象とする通時音声コーパスの開発状況や研究の可能性について議論した。

30年5月に開催される言語資源に関する国際会議LREC（11th Language Resources and Evaluation Conference）でワークショップ‘Language and Body in Real Life’を提案し、採択された。今年度は30年5月7日の開催に向けて準備を進めた。

・参加機関名

千葉大学、東京大学、お茶の水女子大学、一橋大学、名古屋大学、九州大学、熊本大学、公立はこだて未来大学、慶應義塾大学、成蹊大学、専修大学、東洋大学、日本女子大学、早稲田大学、フェリス女学院大学、愛知学院大学、同志社大学、同志社女子大学、関西学院大学、国際交流基金、NHK放送文化研究所、アルバータ大学

・共同研究員数：26名

・日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明

- ・プロジェクトリーダー：(所属・職名) 日本語教育研究領域教授 (氏名) 石黒圭
- ・研究期間：2016.4–2022.3

《研究目的および特色》

本プロジェクトの目的は、日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するとともに、その成果を日本語教育に応用する方法を明らかにすることである。具体的には、日本語教育やその関連領域の研究者や教育者、そして日本語学習者に有益なコーパスを構築すること、論文集や教師指導書を刊行すること、シンポジウムや研修会を開催することである。

本プロジェクトでは日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するために、3つのサブプロジェクトを設ける。「日本語学習者の日本語使用の解明」、「日本語学習者の日本語理解の解明」、「日本語学習のためのリソース開発」である。

サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」では、「学習者の会話能力の解明」と「学習者の日本語習得過程の解明」を行う。「学習者の会話能力の解明」としては、母語話者と学習者の自然会話コーパスを構築し、それをもとにして学習者の会話能力を解明する。この研究は、自然な日常会話をデータとした研究であることに特色がある。「学習者の日本語習得過程の解明」としては、さまざまな言語を母語とする学習者の対話や作文のコーパスを構築し、それをもとにして異なる言語を母語とする日本語学習者の日本語の習得過程を解明する。この研究は、日本を含む世界のさまざまな地域において統制された条件で収集したデータを用いることにより、母語による違いを重視

することに特色がある。

サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」では、「学習者の読解過程の解明」と「学習者の聴解過程の解明」を行う。これまでの研究は学習者の言語産出活動である発話や作文に焦点を当てたものが中心であったが、この研究は学習者の言語理解活動である読解や聴解に焦点を当てたものである。学習者に理解した内容を母語で語ってもらったデータや教室での学習者の談話を通して、外からは見えない読解や聴解の過程を可視化する研究である点に特色がある。

サブプロジェクト「日本語学習のためのリソース開発」では、「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」と「読解教材・聴解教材の開発」を行う。「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」としては、日本語の基本動詞が持つさまざまな意味を図解なども用いてわかりやすく解説する音声付オンライン辞典を作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、大規模コーパスを活用して作成した辞典である点に特色がある。「読解教材・聴解教材の開発」では、日本語学習者用の読解教材・聴解教材を作成するための共同研究を行った上で、ウェブ版教材サンプルを作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」で得られた調査結果に基づいて教材を作成する点に特色がある。

《2017年度の主要な成果》

1. 研究

2017年7月8, 9日に、本プロジェクトの研究成果を日本語教育の分野における実際的な応用に役立てるため、NINJAL国際シンポジウム「第10回日本語実用言語学国際会議（ICPLJ）」を開催し、本プロジェクトの成果に関する研究発表を7件行った。シンポジウム全体としては、42件の研究発表が行われ、参加者は207名（うち国外機関所属者38名、学生65名）であった。

学習者の作文コーパスを分析した成果として研究論文集『わかりやすく書ける作文シラバス』（石黒圭編、くろしお出版）を刊行した（2017年12月）。また、2018年1月14日に、シンポジウム「新たな作文研究のアプローチ—わかりやすく書ける作文シラバス構築を目指して—」を開催し、141名（うち国外機関所属者7名、学生28名）の参加者を得た。

プロジェクト共同研究員の研究成果も含めて、プロジェクト全体で、論文25件、図書1冊、発表・講演85件、データベース等7件、その他23件を公開・刊行した。

プロジェクト全体として、83機関（うち外国の大学・研究所は35機関）、105名の共同研究員（うち大学院生4名）を組織し（当初の計画では約100名）、プロジェクト非常勤研究員（PDフェロー）3名、非常勤研究員14名、技術補佐員5名を雇用した（当初の計画では順に3名、約13名、約3名）。

2. 共同利用・共同研究

母語話者と学習者の自然会話コーパスである『BTSJ（Basic Transcription System for Japanese）日本語自然会話コーパス』の構築を前年度から継続して行い、『BTSJ日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2017年版』（333会話）を所内に先行公開するとともに、『自然会話リソースバンク（Natural Conversation Resource Bank: NCRB）』のプラットフォームを構築・改良した。また、BTSJに関して、活用方法講習会を国内3回、海外1回の計4回（参加者合計79名、うち国外機関所属者21名、学生37名）、シンポジウム2件を行った（参加者合計57名、うち国外機関所属者3名、学生35名）。

多言語を母語とする日本語学習者コーパスである『I-JAS（International corpus of Japanese As a Second language）多言語母語の日本語学習者横断コーパス』の構築を前年度から継続して行い、2017年5月20日に、検索システムであるI-JAS中納言とともに、第二次公開として225名分の発話データおよび158名分の作文データを公開した。また、「第三回学習者コーパス・ワークショップ」を開催した（参加者81名、うち国外機関所属者2名、学生16名）。

日本語学習者の読解コーパスとして、『日本語非母語話者の読解コーパス』と『文脈情報を用いた日本語学習者の読解過程コーパス』を前年度から継続して構築した。構築のためのデータ収集を行うとともに、前者は45件のコーパスデータ、後者は3名分のコーパスデータを公開した。また、後者に関して、シンポジウム1件を開催し（参加者116名、うち国外機関所属者2名、学生29名）、日

本語教育学会 2017 年度秋季大会におけるパネル発表 1 件を行った。

オンライン日本語基本動詞辞典である『基本動詞ハンドブック』の作成を継続し、15 見出しと視聴覚コンテンツのショートアニメ 31 点を追加公開した。また、5 件の講演を行った。

日本語学習者用のウェブ版教材について、読解教材の作成を継続するとともに、聴解教材の作成を開始し、読解教材 3 シリーズ 10 レッスン、聴解教材 4 シリーズ 18 レッスンを公開した。

連携協定を結んでいる北京日本学研究センターと共同で、日本語習得過程に関するデータ収集を 3 回（国内 1 回、海外 2 回）行った。

連携協定を結んでいる国際交流基金日本語国際センターと共同で、日本語学習者の聴解および読解に関する研究とウェブ版聴解教材の開発を行った。

3. 教育

一橋大学との連携協定に基づき、修士 2 名、博士 10 名の指導教員として研究論文の指導に当たった。

コーパス構築作業に 13 名の大学院生を参加させるとともに、コーパスを用いた研究の指導を行った。

プロジェクト非常勤研究員（PD フェロー）を 3 名雇用し、日本語教育研究に関する研究指導を行った。大学院生 4 名を共同研究員としてプロジェクトに参画させた。

日本語教師セミナーを当初の計画のとおりに国内・海外で 1 回ずつ開催し（参加者合計 67 名、うち国外機関所属者 28 名、学生 11 名）、日本語教師の研修に努めた。

4. 社会との連携及び社会貢献

クラウドワークス社と研究データ提供に関する契約を締結し、日本テレワーク学会 Job Casting 部会との協力のもと、研究に着手した。

『基本動詞ハンドブック』の例文音声の収録を立川市の朗読ボランティアグループや近隣の大学の学生の協力を得て行った。

日本語教師セミナーを国内・海外で 1 回ずつ開催し（参加者合計 67 名、うち国外機関所属者 28 名、学生 11 名）、研究成果の社会への普及に努めたほか、日本語教師、ボランティア、高校生などを対象とした講演を各地で行った。

5. グローバル化

海外在住の研究者 38 名を共同研究員として、日本語学習者のコミュニケーションに関する研究を推進しているほか、連携協定を結んでいる北京日本学研究センターと共同で、学習者の日本語習得過程に関するデータ収集を継続している。

NINJAL 国際シンポジウム「第 10 回日本語実用言語学国際会議（ICPLJ）」を開催した。

日本語教師セミナー（海外）をドイツのハンブルク大学で実施した。

EAJS2017（ポルトガル・リスボン新大学）で、共同研究員とともに 3 件のパネル発表を行った。

プロジェクト全体で、海外の学会や研究会における講演・発表を 37 件行った。

インド人的資源開発省管轄の大学認可・助成委員会（UGC）およびネルーア大学の依頼により、大学院生向け日本語学教材を開発した。

6. その他

『基本動詞ハンドブック』の用例を利用して「文型」をキーにして用例を検索・抽出できるウェブ版のリソースのプロトタイプを開発した。

・参加機関名

北海道大学、東北大学、筑波大学、宇都宮大学、埼玉大学、東京大学、東京外国語大学、東京学芸大学、一橋大学、東京海洋大学、金沢大学、北陸先端科学技術大学院大学、福井大学、名古屋大学、京都大学、京都教育大学、大阪大学、神戸大学、島根大学、岡山大学、広島大学、山口大学、九州大学、佐賀大学、琉球大学、国際教養大学、首都大学東京、明海大学、麗澤大学、実践女子大学、聖心女子大学、法政大学、早稲田大学、学習院女子大学、愛知学院大学、中京大学、名古屋学院大学、名古屋外国語大学、大阪産業大学、大阪女学院大学、関西学院大学、武庫川女子大学、関西看護医療大学、ノートルダム清心女子大学、東亜大学、神戸市立工業高等専門学校、国際交流基金、カリフォル

ニア大学, コロンビア大学, サンフランシスコ市立大学, サンフランシスコ州立大学, ハワイ大学, ミネソタ大学, ヨーク・セント・ジョン大学, ロンドン大学, グリフィス大学, アルバータ大学, 明和大学校, 慶熙大学校, バルセロナ自治大学, リュブリヤーナ大学, チュラーロンコーン大学, 台湾元智大学, 東海大学, 華南農業大学, 広東培正学院, 西安外国语大学, 大連外国语大学, 中国人民大学, 中山大学, 天津外国语大学, 北京日本学研究センター, 香港大学, 華中科技大学, 無錫職業技術学院, ミュンヘン大学, オークランド大学, ブタペストビジネススクール, リオデジャネイロ州立大学, グルノーブルアルプス大学, パリ・ディドロ大学

- ・共同研究員数：105名

(2) 【領域指定型】5件

第3期中期計画において、新たな研究領域の創出に資するため、外部研究者をリーダーとする共同研究を開始した。領域指定型は、中期計画に定められた基幹研究プロジェクトの範囲内で、各研究領域における共同研究を充実・補完するもの。

・日本語から生成文法理論へ：統語理論と言語獲得

- ・プロジェクトリーダー：(所属・職名) 南山大学教授 (氏名) 村杉恵子
- ・研究期間：2016.10–2019.9

《研究目的および特色》

日本語を他の多くの言語と区別する主要な統語的特徴には、多重主語文・自由語順・項省略・生産的な複合述語形成などがある。本プロジェクトは、これらの現象を対象に、その統語的性質と獲得過程を明らかにし、それにより言語理論および言語獲得理論の構築に日本語の分析から貢献することを目的とする。

現代統語理論（極小主義アプローチ：Chomsky 2013, 2015）の基本的操作・概念（併合・ラベリング・フェイズなど）により、上記の日本語の主要な統語的特徴、そしてより一般的に、言語間変異をどのように説明しうるのかという課題に取り組む。さらに、それらの特徴を幼児は「刺激の貧困」の状況下でどのように獲得するのかについて、心理実験・コーパス分析など方法を用いて考察し、言語獲得と統語の両面から日本語の類型的な特徴の分析と極小主義理論の精緻化を試みる。

《2017年度の主要な成果》

プロジェクトメンバー 19名が公刊した論文は 40編（うち 25編が国外出版）であり、*Journal of East Asian Linguistics* や *Syntax* といった専門誌に論文を公表した。また、52件の研究発表を行い、うち 11件が海外での発表であった。

2017年4月22～23日に、*The Linguistic Review* の特別号を準備するための公開ワークショップを南山大学で開催し（言語学研究センター主催）、5月13～14日には、日本語研究の成果を解説するコロキュアムを慶應義塾大学において行った（言語文化研究所主催）。

2017年12月9日～10日に国立国語研究所において、コネティカット大学（アメリカ）の Zeljko Boskovic 教授、東国大学（韓国）の Myung-Kwan Park 教授を招聘して、ワークショップを開催した。

コネティカット大学と南山大学が協力して独自に集めてきた幼児の発話データベース、ならびに南山大学言語学研究センターが構築してきた幼児の発話データベースをもとに、幼児の言語獲得について、特に二語文期について整理した。

・参加機関名

北海道大学、東北大学、山形大学、横浜国立大学、大阪大学、神戸大学、九州大学、明海大学、獨協大学、金城学院大学、中京大学、南山大学、関西学院大学、福岡大学

- ・共同研究員数：19名

・議会会議録を活用した日本語のスタイル変異研究

- ・プロジェクトリーダー：(所属・職名) 福岡女学院大学教授 (氏名) 二階堂整
- ・研究期間：2016.10–2019.9

《研究目的および特色》

本研究は、方言・社会言語学的研究で、「フォーマル」「カジュアル」のように単純に場面への言語的反応とされた「スタイル」という概念を、言語への意識や話題等に対する話者の心的態度や社会的立ち位置の表明などにより生じる「言語変異の社会的意味」を考慮し、話者が創り上げる言語的構造物であると仮定する。その上で、議会の委員会や本会議の状況に生じるスタイル変異を考察することで、日本語のスタイル研究に新たな発展をもたらすことができると考えている。

また海外のスタイル研究では、質的側面からの議論があるが、本研究でも、待遇表現、ポライトネス等の質的側面の研究からの考察を行い、より総合的・包括的に言語変異とスタイル構築の関連を明らかにする。

さらに、議会会議録をデータベースとして整備することで、他分野を含め、議会会議録を利用した国内外の研究での新たな相互作用が期待できると考えている。

《2017年度の主要な成果》

議会会議録によるスタイル研究の目的を達成するため、講演会・研究発表会を2回(9月18日：関西大学、12月10日：国立国語研究所)、発表会・検索講習会を1回(3月9日：東洋大学)開催した。

国際会議(METHODS 16)で共同研究員4名が研究発表を行い、それをもとに3名がプロシーディングスに投稿した。

研究会内での議論から高丸、内田、木村、松田による地方会議録と国会会議録を組み合わせた新プロジェクトを発足させた。

地方議会会議録のデータベースの整備・高度化を進め、平成23年の第17回統一地方選挙より4年間(任期)分の期間を区切ってのデータを収集・整備した。

大学院生2名が共同研究員として、さらに院生(修士)1名が研究協力者としてプロジェクトに参加し、9月・12月の研究会で発表した。その際、発表のための経費を支援した。

・参加機関名

小樽商科大学、弘前大学、東北大学、富山大学、山口大学、高知大学、鹿児島大学、北海学園大学、宇都宮共和国大学、専修大学、関西大学、神戸松蔭女子学院大学、福岡大学、福岡女学院大学

・共同研究員数：15名

・古文教育に資する、コーパスを用いた教材の開発と学習指導法の研究

- ・プロジェクトリーダー：(所属・職名) 群馬大学准教授 (氏名) 河内昭浩
- ・研究期間：2016.10–2019.9

《研究目的および特色》

古文教育は今、岐路に立っている。従来の古文教育は、現代語の教育と切り離されて行われてきた。しかしこれからの古文教育では、古代から現代までの、言葉のつながりを理解させることが求められている。高等学校では、上代から近現代までの言葉を網羅した「言語文化」という科目が新設されることになった。通時にわたるコーパスの設計は、こうした潮流と合致している。本研究は、新しい古文教育研究の先駆であり、今後の古文教育の基盤となるものだと確信している。

教材の開発として、コーパスを用いた古文単語集、文法集、及び自習用教材などの作成などを想定している。また学習指導法の研究として、コーパスを用いた古文教材研究の方法や、授業におけるコーパス活用方法の提示を想定している。加えてワークショップを開催し、教育関係者に本研究成果を広く公開する予定である。

《2017年度の主要な成果》

公開研究会を3回実施(7月30日：国立国語研究所、12月27日：国立国語研究所、3月15日：

群馬大学）した。また、第1回、第3回研究会と併せて国語教育活用ワークショップを開催した。

本プロジェクトに関して、メンバーが論文発表3件及び口頭発表3件を行った。

『新しい古典・言語文化の授業』（仮題、朝倉書店）として、メンバー全員の執筆による書籍を刊行することになった。書籍には通時コーパスから抽出した単語集、文法集を掲載する予定であり、研究会でそのための準備を進めた。

プロジェクトリーダーが、複数の教員向け研修で、日本語歴史コーパス等のコーパスの紹介や実演を行った。次期学習指導要領では、語彙指導と古典教育の充実が求められており、授業改善の一方策としてコーパスの使用を促している。

・参加機関名

群馬大学、埼玉大学、富山大学、駒澤大学、昭和女子大学、名古屋女子大学

・共同研究員数：8名

・会話における創発的参与構造の解明と類型化

・プロジェクトリーダー：（所属・職名）成蹊大学講師（氏名）遠藤智子

・研究期間：2016.10–2019.9

《研究目的および特色》

日常の生活の中で人々は様々な活動に参与する。場面ごとに各参与者に期待される参与の仕方は多様であり、また、参与の構造は固定的ではなく創発的なものである—やりとりの中で各人がどのような役割を担い、どのような行動をするのかは、その場で進行しているやりとりのターンの中で形作られる。参与構造は、言語だけではなく、視線・姿勢・ジェスチャー・パラ言語情報・周囲の環境等が総体的に寄与することで実現する。

本研究は、日常会話に加え、宗教儀礼・教室場面・医療活動・ミーティングやインタビュー場面等の一見特殊とも思える活動の中でのやりとりをマルチモーダルに分析することにより、参与構造の創発性を解明し、類型化する。

《2017年度の主要な成果》

日常会話コーパスプロジェクトおよび相互行為班と合同で公開研究会およびシンポジウムを開催した（2017年8月：名古屋大学、2018年3月18日：東京工科大蒲田キャンパス、3月19日：国立国語研究所）。

宮古島を始めとし、各メンバーがフィールド調査を行ったほか、国語研日常会話コーパスの内部公開データを用いて各自分析を開始し、2018年1月には大阪大学にてデータセッションを行った。

英語による研究図書または学術誌特集号（題名未定）を海外の出版社から刊行（2019年予定）する準備として、プロポーザルの執筆に着手した。

プロジェクトの実績評価および学術誌特集号刊行準備のために、海外研究者（アルバータ大学大野剛教授）を含むアドバイザリーボードを設置した。

・参加機関名

東京外国語大学、静岡大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学、国立情報学研究所、慶應義塾大学、成蹊大学、玉川大学、愛知大学、京都産業大学、摂南大学

・共同研究員数：14名

・「具体的な状況設定」から出発する日本語ライティング教材の開発

・プロジェクトリーダー：（所属・職名）早稲田大学教授（氏名）小林ミナ

・研究期間：2016.10–2019.9

《研究目的および特色》

日本語教育におけるこれまでのライティング教材は、既習の文型や語彙を定着させるための作文が主であり、「学習者が実際に書く／打つ状況」を踏まえたものはほとんど見られない。学習項目も、

教材作成者や教師によって経験的に設定されたものであり、「何を書きたいのか」「どのような支援が必要か」といった実態を踏まえていない。また、現実のコミュニケーションにおけるライティングは、「手で書く」から「キーボードやタッチパネルで打つ」に移行しているが、それを視野に入れた教材開発は遅れている。

本研究では、「具体的な状況設定」から出発する日本語学習のためのライティング教材の開発」を目的とする。「状況設定」「必要なスキル」「学習者が抱える困難点」に関する3つの実態調査の成果を踏まえて教材を作成する。

《2017年度の主要な成果》

公開研究会（2018年1月28日：国立国語研究所）を開催した。

「状況調査」「スキル調査」「困難点調査」について、パイロット調査に着手し、データ収集の方法論、および、データベースの仕様について検討を行った。その成果は、専門誌投稿論文2本、学会等発表9件、招待講演2件として発信した。

2017年6月に教材試作版作成に着手し、非公開研究会（7月、1月）において、内容と仕様を検討した。

若手育成及び国際連携のため、大学院生2名及び海外の大学に所属する研究者3名を共同研究員に加えた。

・参加機関名

群馬大学、金沢大学、京都大学、大阪大学、藤女子大学、帝京大学、早稲田大学、金沢工業大学、同志社大学、長崎外国語大学、ロイヤルメルボルン工科大学、ナンヤン理工大学、ブラジリア大学

・共同研究員数：17名

（3）【新領域創出型】3件

第3期中期計画において、新たな研究領域の創出に資するため、外部研究者をリーダーとする共同研究を開始した。新領域創出型は、研究領域や基幹研究プロジェクトの枠を越えて、新たな研究の展開・創出を探るための萌芽的研究。

・語用論的推論に関する比較認知神経科学的研究

- ・プロジェクトリーダー：（所属・職名）早稲田大学教授（氏名）酒井弘
- ・研究期間：2016.10–2019.9

《研究目的および特色》

「狭義の言語機能は語用論機構に繋がっていなければ役に立たない」という趣旨の Chomsky (2014) の言葉をひくまでもなく、人間の言語コミュニケーション能力を解明するためには、狭義の言語能力に加えて語用論能力の研究を推進することが必要不可欠である。そこで本研究プロジェクトでは、狭義の言語能力のアウトプットである論理形式から表意（明意）や推意（暗意）を導く語用論的推論のプロセスと神経基盤を、日本語と系統的・類型的に異なる言語を比較しつつ、脳機能計測を含む種々の実験手法を用いて実証的に研究する。さらに将来的には、日本語学習者にとって困難であるとされる発話意図を表す文末表現やイントネーションの学習、語用論的推論が苦手だとされる自閉症児のコミュニケーション能力の発達、さらには「社会脳」の障害であると言われる認知症患者の推論能力などに関する研究を通してこれらの問題の解決に貢献し、人類の幸福に寄与することをめざす。

《2017年度の主要な成果》

2017年7月に国立国語研究所において、国際学会 MAPLL-TCP2017 を開催し、実験語用論研究の分野で国際的に活躍する研究者3名を招聘してシンポジウムを開催した。

2017年7月に早稲田大学において国際ワークショップを開催して若手研究者と海外からの招聘研究者の交流を行った。

日独二国間交流事業「量化に関する実験語用論的研」との合同ワークショップをチュービンゲンに

おいて開催した。

日本語用論学会 20 周年記念特別シンポジウムにおいて招聘講演「含意と推論の基盤を探る」を実施した。

大学院生 2 名, 学術振興会特別研究員 1 名がプロジェクトに参加し, 国際学会において学会発表, 論文掲載を実施した。

・参加機関名

東北大学, 目白大学, 津田塾大学, 早稲田大学, ロンドン大学, ライデン大学

・共同研究員数: 9 名

・all-words WSD システムの構築及び分類語彙表と岩波国語辞典の対応表作成への利用

・プロジェクトリーダー: (所属・職名) 茨城大学教授 (氏名) 新納浩之

・研究期間: 2016.10–2018.3

《研究目的および特色》

文中の単語の語義を推定する処理 (語義曖昧性解消, WSD) は, 自然言語の意味解析における最も基本的な処理と言える。現状, 教師あり学習の手法を用いて, 語義曖昧性解消を高い精度で行えるが, 多くの応用システムでは語義曖昧性解消を行ってはいない。これは教師あり学習による語義曖昧性解消が, 対象単語を限定せざるを得ないからである。このため全ての単語に語義を付与する all-words WSD システムが期待されている。ここでは機械学習手法と手作業を併用しながら, 2 つの all-words WSD システムを構築する。一つは語義の定義として分類語彙表のコード番号を用いるものと, もう一つは岩波国語辞典を用いるものである。これら 2 つの all-words WSD システムを利用して, 分類語彙表と岩波国語辞典の対応表も作成する。

《2017 年度の主要な成果》

2017 年 9 月 15 日に研究発表会を茨城大学で開催し, WSD に関する議論を行った。また, 最終研究発表会を 30 年 3 月 25 日に国立国語研究所で開催した。

本プロジェクトの成果として, 国際会議 PACLING-2017 及び PAULIC-31 にてそれぞれ 1 件 (計 2 件) の研究発表を行った。また情報処理学会第 231 回自然言語研究会にて 1 件の研究発表を行った。また言語資源活用ワークショップ (国立国語研究所) にて 2 件の研究発表を行った。

言語処理学会に技術資料を 1 件投稿し, 採録され『自然言語処理』の Vol.24, No.5 に掲載された。また 2018 年 3 月 12 日から 16 日に開催される言語処理学会第 24 回年次大会にて本プロジェクトの成果として 8 件の研究発表を行った。

本プロジェクトの研究成果として岩波辞書の語義を付与する all-words WSD システムを公開した。

・参加機関名

茨城大学, 北陸先端科学技術大学院大学, 山梨大学

・共同研究員数: 5 名

・日本語の間接発話理解: 第一言語, 第二言語, 人工知能における習得メカニズムの認知科学的比較研究

・プロジェクトリーダー: (所属・職名) 東京学芸大学教授 (氏名) 松井智子

・研究期間: 2016.10–2019.9

《研究目的および特色》

ポライトネスのひとつとして間接発話が多用されている。しかし, ヒトが間接発話を理解するメカニズムやその獲得プロセスには不明な点が多いのが現状である。言語学のみでなく, 心理学や認知科学を含む学際的な研究領域として方法論も確立しつつある今, 人工知能の研究の方法論も加えて, アイロニーや間接的表現の計算モデルの構築と検証が成功すれば, 世界に先んじた研究として注目されることが期待される。そこで, 本研究では文脈を用いて間接発話を解釈する能力がどのように習得されるのかについて, 学習者の第一言語と第二言語, そして人工知能との比較をとおして明らか

かにすることをめざす。具体的には、「アイロニー」「遠回しな言い方」など2つ以上の意味解釈が可能な間接発話を題材とする。

《2017年度の主要な成果》

「アイロニー」や「遠まわしな言い方」を含む新たな実験課題を開発し、日本人の成人を対象とした妥当性を検証する調査を実施した。結果、作成した刺激は、日本人の成人においては、適切に皮肉文として解釈されることが確認された。なお、結果は、資料「アイロニー刺激の行動実験の集計結果」としてまとめた。

11月に研究発表会を実施し、意見交換をおこなった。

・参加機関名

東京学芸大学、電気通信大学、愛媛大学、琉球大学、慶應義塾大学、上智大学

・共同研究員数：6名

(4) 【コーパス基礎研究】1件

基幹型プロジェクト等で構築される予定の日本語史、日常会話、方言、日本語学習者に関するコーパスを効率的な構築を実現するために基礎研究を実施している。

・コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究

・プロジェクトリーダー：(所属・職名) コーパス開発センター准教授 (氏名) 浅原正幸

・研究期間：2016.10–2022.3

《研究目的および特色》

形態論情報つきコーパスの整備が進む中、より高次の情報を付与することが言語研究において求められている。コーパス開発センターは、統語・意味・音声の三つの班により、既存のアノテーションの拡張手法、複数のアノテーションの統合手法、またその自動化の基礎研究を行う。

統語班は、文節係り受け・述語項構造・節境界に関する研究と、統語アノテーションの国際化プロジェクトである Universal Dependencies プロジェクトに参画し、言語資源整備を進める。意味班は、『分類語彙表（増補改訂版）』を中心とした拡張として、UniDic 語彙素番号-分類語彙表番号対応表（現代・古典）や『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）、『日本語歴史コーパス』（CHJ）に対する分類語彙表番号アノテーションを行う。

音声班は、『日本語話し言葉コーパス』（CSJ）に対する声質情報自動付与、調音運動データベースの設計、音声・テキスト自動アライメントの精度向上とともに、形態論情報と同期した音声ブラウジング環境の開発を行う。

《2017年度の主要な成果》

『言語資源活用ワークショップ』（LRW2017）を開催した（2017年9月5日～6日、総参加者数123名、発表件数36件）。また併設イベントとして、国立情報学研究所データセット共同利用研究開発センターと共同で「音声資源活用シンポジウム」を開催した（2017年9月7日、総参加者数114名、発表件数6件。）

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『日本語歴史コーパス』『日本語話し言葉コーパス』『名大会話コーパス』の4つを対象とした包括的検索系の試作版を開発した。

自動形態素解析用辞書 UniDic の公開サイトを新設一元化し、分散していた情報をサイト内の用語集として集約した（サイトアクセス数：19,076）。また、BCCWJ と CSJ での短単位の出現頻度・連接頻度に基づく統計的言語解析モデル unidic-cwj-2.2.0 と unidic-csj-2.2.0 を構築、UniDic の7年ぶりのメジャーアップデートとして公開し、それぞれ510件、210件のダウンロードが行われた。年度末には Windows 向け GUI、ChaMame を同梱した unidic-cwj-2.3.0 と unidic-csj-2.3.0 を公開した。

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『日本語話し言葉コーパス』の語彙表・語数表の整備を行った。

各種研究成果を発表した。国際論文誌1件、国内論文誌5件（技術資料1件含む）、ブックチャプ

ター 2 件（海外 1 件、国内 1 件）、解説 2 件、国際会議発表（11 件）、国内学術発表 26 件（言語資源活用ワークショップ 2017 発表分を除く）。

以下の言語資源を新規公開した。「UD Japanese-BCCWJ」、「UD Japanese-Modern」、「unidic-cwj-2.3.0_beta」、「unidic-csj-2.3.0_beta」、「wlsp2unidic-1.0.1（分類語彙表-UniDic 対応表）」、「nwjc2vec skip-gram モデル」、「分類語彙表増補改訂版データベース」（ver.1.0.1）、「鶴岡調査データベース」（言語変化研究領域と合同）、「日本語話し言葉コーパス」中納言版（発音情報拡張）（音声言語研究領域と合同）、「名大会話コーパス」中納言版（メタ情報拡張）（音声言語研究領域と合同）、「現日研・職場談話コーパス」中納言版（音声言語研究領域と合同）、「日本語歴史コーパス」「奈良時代編」「室町時代編 II」「江戸時代編 I」中納言版（言語変化研究領域と合同）。

・参加機関名

茨城大学、宇都宮大学、東京外国語大学、京都大学、奈良先端科学技術大学院大学、統計数理研究所、国立情報学研究所、早稲田大学、立命館大学、甲南大学、日本アイ・ビー・エム株式会社、内蒙古大学

・共同研究員数：19 名

2 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構では、国内外の大学等研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進し、人間文化の新たな価値体系の創出を目指している。国立国語研究所もそれらのプロジェクト等に参画している。

（1）広領域連携型基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構を構成する 6 機関が協業して、国内外の大学等研究機関や地域社会と連携し、新たな人間文化研究システムを構築するとともに、異分野融合による新領域創出を目指すもの。

・日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築

国語研・歴博が主導機関となって、「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」と題する連携研究を 2016 年度に開始した。日本列島において地域が直面しているさまざまな課題、特に地域社会の変貌や災害によって多様性が失われつつある状況が惹起する諸問題とその解決のために、人間文化研究機構の各機関が相互に連携し、地域における大学・博物館等とも協働しながら調査研究を推進している。

〈国語研ユニット〉方言の記録と継承による地域文化の再構築

・研究代表者：木部暢子（言語変異研究領域教授）

・共同研究員数：14 名

地域社会の変貌により、地域の貴重な文化資源である方言が急速に衰退しつつある。国語研ユニットでは、自治体や各地の大学・研究者と連携して地域の方言の記録や方言の継承活動を行うことにより、方言を主軸とする地域文化の再構築の可能性と方言の持つ文化的意義について研究を行う。

・異分野融合による「総合書物学」の構築

歴史的典籍の「書物」としての面に着目して、従来の書誌学に異分野融合の観点を加え、「総合書物学」という研究分野の構築を目指す。国文研が主導機関となり、歴博、国語研、日文研の 3 機関の共同研究を基礎に、分野横断的な研究の進展を促し、新たな研究分野である「総合書物学」を構築することを目標としている。

〈国語研ユニット〉表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化

・研究代表者：高田智和（言語変化研究領域准教授）

- ・共同研究員数：11名

文献学と言語計量の手法により、言語単位（単語、文節、句、文など）と表記・書記単位（仮名字体、漢字字体、連綿文字列、句読点等表記記号など）と書物や版面の形状（装丁、料紙、版型、頁遷移、行遷移など）との相関関係を明らかにする。また、国語研で構築している『日本語歴史コーパス』に表記情報と書誌形態情報を加え、言語・表記（文字）・書物の重層構造を精緻に記述した言語コーパスのプロトタイプを作成することを目標としている。

(2) ネットワーク型基幹研究プロジェクト

・日本関連在外資料調査研究・活用事業

欧米にある日本関連資料の中には、現地の日本文化研究者の不足や個人所蔵であることから、所在情報や資料価値の掌握がされていない貴重な資料が多数存在する。本事業はこうした文書、音声、実物資料を含む多様な資料の調査研究を進めると同時に、その成果を国内外で活用し、海外における日本研究者育成や日本文化理解を促進する。

〈国語研プロジェクト〉北米における日本関連在外資料調査研究・活用—言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築

- ・研究代表者：朝日祥之（言語変異研究領域准教授）

- ・共同研究員数：7名

主として近現代に北米に移住した日本人、つまり北米の日系移民に注目し、言語史・社会史・生活史を基点としながら、日系社会に関する資料についての資料調査・研究を行っている。劣化や廃棄リスクが高まっている日系人に関わる音声・映像資料について、データ救出と資料の評価を行うとともに、日系社会の歴史のうち、これまでの十分に光が当たってこなかった領域を取り扱い、移民をめぐる新たな資料論へつなげることを目指す。

(3) 研究資源高度連携事業

人間文化研究機構を構成する6研究機関及び国立国会図書館並びに京都大学地域研究統合情報センター等が開発・蓄積したデータベースの横断検索が可能な統合検索システム（nihuINT）に次のデータベースを提供している。また、統合検索システムでの検索をより行いやすくするために人名一覧基盤システムの作成に協力している。

- ・ことばに関する新聞記事見出しデータベース
- ・蔵書目録（図書）データベース
- ・蔵書目録（雑誌）データベース
- ・日本語研究・日本語教育文献データベース
- ・『日本言語地図』画像データベース
- ・『方言文法全国地図』画像データベース
- ・米国議会図書館本源氏物語翻字本文データベース
- ・国立国語研究所学術情報リポジトリ

(4) 博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業

機構の機関と大学等研究機関とが連携し、博物館および展示を活用して人間文化に関する最先端研究を可視化し、多分野協業や学界並びに社会との共創により研究を高度化する研究推進モデル「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化サイクル」を構築し、新領域創出を目指す。

〈国語研事業〉消滅危機言語・方言の展示を通した最先端研究の可視化・高度化

- ・代表者：木部暢子（言語変異研究領域教授）

地域の大学や博物館、市民と協業して当該地域の危機言語・方言の研究に取り組み、情報科学と連

携して展示を制作し、その展示を各地域で巡回し、社会との共創による研究展示システムのモデル構築を行う。「言語・文化の多様性」を未来の目標に設定し、その実現に向けた「言語の展示」の企画、情報科学との連携、情報発信の仕方を検討し、実際に展示を制作・公開することを通じて研究を可視化・高度化し、新たな研究領域である「言語・文化情報学」の創出に繋げることを目標とする。

3 外部資金による研究

科学研究費助成事業（科研費）

研究種目	研究代表者	研究課題名	交付額 (直接経費) (千円)
基盤研究 (A)	浅原正幸	日本語歴史コーパスに対する統語・意味情報アノテーション	5,500
基盤研究 (A)	小木曾智信	日本語歴史コーパスの多層的拡張による精密化とその活用	8,300
基盤研究 (A)	木部暢子	日本語諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓	6,600
基盤研究 (A)	窪蘭晴夫	日本語諸方言のプロソディーとプロソディ一体系の類型	8,400
基盤研究 (A)	迫田久美子	海外連携による日本語学習者コーパスの構築および言語習得と教育への応用	7,100
基盤研究 (A)	野田尚史	読解コーパスの構築による日本語学習者の読解過程の実証的研究	9,200
基盤研究 (B)	石黒圭	文脈情報を用いた日本語学習者の文章理解過程の実証的研究	1,900
基盤研究 (B)	小磯花絵	コーパス言語学的手法に基づく会話音声の韻律特徴の体系化	3,200
基盤研究 (B)	高田智和	字体記述のデジタル化に基づく文字規範史の定位	2,500
基盤研究 (B)	田窪行則	言語使用と非言語的認知操作における空間指示枠の相関についての実験的研究	3,900
基盤研究 (B)	Prashant Pardeshi	統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に	2,200
基盤研究 (B)	前川喜久雄	リアルタイム MRI および WAVE データによる調音音声学の精緻化	5,500
基盤研究 (B)	松本曜	移動表現による言語類型：実験的統一課題による通言語的研究	2,800
基盤研究 (B)	山崎誠	会話文への発話者情報の付与によるコーパスの拡張	2,600
基盤研究 (C)	朝日祥之	北海道北見市常呂町居住者の方言と郷里方言との相関に関する社会言語学的研究	1,100
基盤研究 (C)	Alastair Butler	統辞・意味解析情報タグ付き日本語ツリーバンクからの資格意味情報の抽出と応用	900
基盤研究 (C)	石本祐一	音声アシスタントとの円滑な話者交代を実現する音声言語特徴の解明	1,000
基盤研究 (C)	井上文子	地域的多様性の教材としての参加型方言データベースの構築	1,300
基盤研究 (C)	鳥日哲	アカデミック・ライティング技術の習得を目指したピア・レスポンスの実証的研究	1,300
基盤研究 (C)	大島一	ハンガリー語の周辺方言における結合の複数に関する調査研究	1,100
基盤研究 (C)	籠宮隆之	実環境下を想定した聴覚補助器による非言語・パラ言語情報伝達性能評価試験の開発	1,200
基盤研究 (C)	柏野和佳子	学術的文書作成のための文体差のある語の計量的分析	1,100
基盤研究 (C)	近藤明日子	形態論情報付きコーパスを活用した近代日本語の位相の計量的研究	200
基盤研究 (C)	田中啓行	ノートの筆記過程の分析に基づく日本語学習者の講義理解過程の実証的研究	1,600
基盤研究 (C)	長崎郁	19世紀半ば～20世紀半ばロシア北東地域のユカギール語資料に関する言語学的研究	800
基盤研究 (C)	新野直哉	近現代の新語・新用法および言語規範意識の研究	500
基盤研究 (C)	飛田良文	近代小説 100 冊における外来語の研究	900
基盤研究 (C)	福永由佳	多言語環境にある外国人の日本語観と言語選択に関する研究—在日パキスタン人を中心に—	1,500

(続く)

基盤研究 (C)	藤原未雪	日本語学習者の小説読解困難点に関する実証的研究と読解支援教材開発のための研究	900
基盤研究 (C)	三樹陽介	消滅の危機に瀕した八丈語の音声資料作成とその分析に関する研究	1,100
基盤研究 (C)	宮崎由美	LINE における待遇表現ストラテジーの計量的研究	500
基盤研究 (C)	山口昌也	ビデオアノテーションを利用した協同型実習活動支援システムに関する研究	900
基盤研究 (C)	渡辺美知子	後続要素の複雑さが言い淀みの発生に及ぼす影響についての日英語対照研究	800
挑戦的萌芽研究	大西拓一郎	方言周辺論と方言区画論の統合による新しい言語地理学の創生	1,000
挑戦的萌芽研究	野山広	基礎教育保障学の構築に向けた萌芽研究	800
挑戦的萌芽研究	Prashant Pardeshi	大規模コーパスに基づく日本語機能語の基礎研究と機能語検索ツールへの応用	900
挑戦的研究 (萌芽)	石黒圭	クラウドソーシングを用いたビジネス文書のわかりやすさの言語学的研究	2,100
挑戦的研究 (萌芽)	窪瀬晴夫	促音（重子音）に関する学際的・国際的共同研究のためのネットワーク形成	1,800
挑戦的研究 (萌芽)	高田智和	漢文訓点資料の国際文書構造記述による共有化と書き下し文自動作成のための基礎研究	1,900
挑戦的研究 (萌芽)	野田尚史	日本語聴解用辞書の開発を目的とした日本語学習者の聴解実態の実証的研究	2,000
挑戦的研究 (萌芽)	山崎誠	日本語研究用オントロジーの設計と開発	1,900
挑戦的研究 (萌芽)	横山詔一	疫学的統計手法と人工知能学の融合活用による敬語の変化予測研究	2,400
若手研究 (B)	臼田泰如	日本語語彙的複合動詞を構成する動詞の組み合わせに関する実証的・計量的研究	1,800
若手研究 (B)	加藤祥	コーパスから取得しやすい情報と取得しにくい情報の研究	990
若手研究 (B)	下地美日	日本方言の活活性に関する基礎的研究	1,000
若手研究 (B)	原田走一郎	消滅の危機に瀕した八重山語諸方言の音声・例文付き辞書作成	1,000
若手研究 (B)	藤本灯	『色葉字類抄』を中心とする本邦国語辞書収録語彙の通時的研究	1,500
若手研究 (B)	三樹陽介	消滅の危機に瀕した八丈語の音声資料作成とその分析に関する研究	1,100
若手研究 (B)	村山実和子	語構造情報を付与した狂言コーパスによる語形成の歴史的研究	900
若手研究 (B)	山田真寛	琉球諸語の記述と復興研究のためのプラットフォーム基盤構築研究	800
研究活動スタート支援	井戸美里	構成的アプローチに基づく日本語否定極性表現の研究	900
研究活動スタート支援	大槻知世	津軽方言の談話資料を用いた複数種の対格の使用動機の究明	1,200
研究活動スタート支援	川端良子	対話コーパスに基づく指示場面における発話機能の実証的研究	700
研究活動スタート支援	南雲千香子	明治期法律用語の成立と展開	1,200
研究成果公開促進費	井上文子	日本の消滅機器言語・方言データベース	5,200
特別研究員奨励費	下地美日	方言研究と古代日本語研究の融合による日本語格配列システムの解明	1,200
特別研究員奨励費	林由華	琉球諸語および八丈語の諸方言における係り結びの類型化と機能の解明	1,200
特別研究員奨励費	松井真雪	音声パターンの共時的不均衡性と通時変化の接点	1,100
特別研究員奨励費	三樹陽介	消滅の危機に瀕する八丈語の調査・記録と談話資料の作成・公開	1,100
特別研究員奨励費	横山晶子	危機言語の継承に向けた実践的研究—琉球沖永良部語を事例に—	1,200

寄附金（2017 年度受入金額）

- ・「多文化・多言語社会としての日本の理解—消滅危機言語の相互理解性と世代間継承度のための客観的尺度の創出—」（山田真寛）トヨタ財団（トヨタ財団 2015 年度研究助成プログラム）2,920 千円
- ・「宮古語池間方言と八重山語波照間方言における無声鼻音の研究」（林由華）鹿島学術振興財団（鹿島学術振興財団 2016 年度研究助成）1,650 千円
- ・「「何もしなければ」消滅してしまう琉球のことばを、記録、共有して、継承するために」（林由華）電気通信普及財団（電気通信普及財団助成（研究調査関係））750 千円

- ・「危機言語の言語継承に向けた教材開発研究」（横山晶子）住友生命保険相互会社（スミセイ女性研究者奨励賞）630千円
- ・「消滅の危機に瀕する八丈語の保存・継承のための音声資料と教材作成に関する研究」（三樹陽介）三菱財団（第46回（平成29年度）三菱財団人文科学研究助成）300千円

4 2017年度公開中のコーパス・データベース

Webサイトにおいて、共同研究の成果としてのコーパスおよびデータベース等を公開しているが、2017年度は、下記資料の公開（ないし公開の継続）をおこなった。

コーパス

国立国語研究所で構築したコーパス（言語を分析するための基礎資料として、書き言葉や話し言葉の資料を体系的に収集し、研究用の情報を付与したもの）を記す。

- ・現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）

現代日本語の書き言葉の多様性を把握するために構築したコーパスで、書籍、雑誌、新聞、白書、Web、法律などから無作為に抽出した約1億語のテキストに形態論情報、文書構造タグを付与し、オンラインおよびDVDで公開している。

- ・BCCWJ全文検索サイト『少納言』

国立国語研究所で開発されたWebアプリケーションで、初心者でも簡単にBCCWJ内の文字列を検索することができる。

- ・NINJAL-LWP for BCCWJ（NLB）

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を検索するために、国語研とLago言語研究所が共同開発したオンライン検索システムである。

- ・日本語話し言葉コーパス（CSJ）

日本語の自発音声を大量にあつめて多くの研究用情報を付加した話し言葉研究用のデータベースであり、国立国語研究所、情報通信研究機構（旧通信総合研究所）、東京工業大学が共同開発した、質・量ともに世界最高水準の話し言葉データベースであり、音声言語情報処理、自然言語処理、日本語学、言語学、音声学、心理学、社会学、日本語教育、辞書編纂など幅広い領域で利用されている。

- ・日本語歴史コーパス（CHJ）

日本語の歴史を研究するための資料を集めたコーパスであり、将来的に上代から近代までをカバーする通時コーパスとすることを目標に開発が進められている。現在は、構築済みの部分を公開している。

- ・国語研日本語ウェブコーパス

3か月間にわたり1億URLをクロールして構築した200億語規模のWebテキストのコーパスであり、形態素解析・係り受け解析済みテキストからなる。

- ・中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断発話コーパス（C-JAS）

日本語学習者6名の3年間の縦断的発話データを公開している。

- ・多言語母語の日本語学習者横断コーパス（I-JAS）

12言語の母語の学習者210名および日本語母語話者15名の第一次データを公開した。発話データ（ストーリーテリング、ロールプレイ、対話、絵描写）、作文データ（ストーリーライティング、エッセイとメール文（任意））、発話の音声データを所収しており、完成時には、学習者1000名、日本語母語話者50名のデータを公開する予定である。

- ・近代語のコーパス

明治・大正時代の日本語を研究するために構築されたコーパスであり、『太陽コーパス』、『近代女性雑誌コーパス』、『明六雑誌コーパス』、『国民之友コーパス』を公開している。

・コーパス検索アプリケーション『中納言』

国立国語研究所で開発されたコーパスを検索することができる Web アプリケーションで、短単位・長単位・文字列の 3 つの方法によってコーパスに付与された形態論情報を組み合わせた高度な検索を行うことができる。

・アイヌ語口承文芸コーパス—音声・グロスつき—

木村きみさん（1900–1988、沙流川上流域のペナコリ出身）がアイヌ語で語った物語 10 編（ウエペケレ（散文説話）8 編、カムイユカラ（神謡）2 編）約 3 時間分の音声に、日本語と英語による訳とグロスや注解を付けた初めてのアイヌ口承文芸デジタル集成である。

・日本語学習者による、日本語・母語対照データベース

国立国語研究所日本語教育センターが作成した「作文対訳データベース」および「発話対照データベース」を掲載している。いずれも日本語学習者が同一の課題に基づき、日本語および自分の母語によって行った言語表現を対照可能な形でデータベース化したものである。

・統語・意味解析情報付き現代日本語コーパス（NPCMJ）

現代日本語の書き言葉と話し言葉のテクストに対し、文の統語・意味解析情報をタグ付けしたものであり、簡単にコーパス内のツリー（統語構造付き文）を検索、閲覧、ダウンロード可能なウェブインターフェースとともに公開している。

・名大会話コーパス

129 会話、合計約 100 時間の日本語母語話者同士の雑談を文字化したコーパスである。

・オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス

単語情報・統語情報などの包括的なアノテーションを施した上代日本語のフルテキストコーパスであり、現在は、「万葉集」など上代の全ての和歌のテキストを収録している。

・危機言語データベース

日本の消滅危機言語・方言の音声データを紹介しており、様々な方言の基礎語彙の他、生の方言で語られているたくさんのお話（談話資料）も公開している。

オンライン辞書

オンラインで検索できる辞書・用例集である。

・基本動詞ハンドブック

日本語学習者・日本語教師が基本動詞の理解を深めることができるように、基本動詞の多義的な意味の広がりを図解なども用いて分かりやすく解説したオンラインツールであり、例文、コロケーションなどの執筆には、国語研の『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』（約 1 億語）や筑波大学の『筑波ウェブコーパス』（約 11 億語）などの大規模日本語コーパスを積極的に活用し、他のレファレンスには見られない生きた情報を提供している。

・複合動詞レキシコン（国際版）

「押し上げる、晴れ渡る」など、日常よく使われる日本語複合動詞（2,700 語以上）に意味や用法の情報を付与した言語研究及び日本語学習用のオンライン辞書である。英語・中国語・韓国語翻訳付きであり、研究教育目的での元データのダウンロードも可能である。

・トピック別 アイヌ語会話辞典

1898 年に刊行された『アイヌ語会話字典』を底本とし、口語訳や音声・ビデオ・写真などのデータを付与したオンライン辞典である。

・寺村誤用例集データベース

日本語教育研究の礎を築いた故寺村秀夫氏による、諸外国からの留学生が書いた作文に見られる日本語の誤用を収集・分類したデータベースである。

・Web データに基づく用例データベース

複合動詞、形容詞、サ変動詞の用例のデータベースであり、用例は、語ごとに構築した専用の Web コーパスからおこなっている。構築に際しては、（1）語ごとに一定量以上の用例を収集でき

ること、(2) 収集用例の偏りの軽減、に配慮している。

言語地図

言語の多様性・分布を地図に表現した資料である。

- 使役交替言語地図

世界の言語の形態的関連のある有対動詞を収集した地理類型論的なデータベースであり、日本語を含む諸言語の有対自他動詞の類型論的な情報を、世界地図およびチャート(表)上で可視化し、有対自他動詞を類型論的な視点から分析できるウェブアプリケーションである。

- 『日本言語地図』地図画像

各地の方言で、どのような語形や発音がどこに現れるかを表示した言語地図(方言地図)で、全国の方言の地理的分布を一望できる基礎資料である『日本言語地図』所載の地図の画像(全300図)を公開している。

- 『方言文法全国地図』地図画像

文法事象の全国的な分布を展望できる言語地図(方言地図)で、方言研究における基本的な資料である『方言文法全国地図』所載の地図の画像(全350図)を公開している。

- 言語地図データベース

日本で刊行されてきた方言地図・言語地図のデータベースである。地図集(アトラス)の書誌(著者・書名・刊行年・調査時期・調査対象地域などを含む)、地図集に収録されている各地図の内容(タイトル・内容の分類などを含む)、地図の画像(可能な限りジオタグを付与)から構成されている。

- 全国方言分布調査(FPJD)・新日本言語地図(NLJ)

全国方言分布調査(2010–2015年度実施、全国554地点)のデータならびに関連情報(調査項目、準備調査結果、調査マニュアルなど)、また、調査結果を地図化した『新日本言語地図』関係のデータを公開している。

画像・PDF

方言地図や貴重書の画像ファイル、論文のPDFファイルなどである。

- 日本語史研究資料(国立国語研究所蔵)

国立国語研究所研究図書室蔵書のうち、日本語史資料として著名なものや、歴史コーパスの原材料として利用できるものを選定し、デジタル画像や翻字本文を順次公開している。

- 米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文

米国議会図書館アジア部日本課が所蔵する『源氏物語』(LC Control No.: 2008427768)の桐壺から夢浮橋まで全54巻の翻字本文(電子テキスト)を公開している。また、全54巻を対象とした文字列検索も提供している。

- 米国議会図書館蔵『源氏物語』画像

米国議会図書館アジア部日本課が所蔵する『源氏物語』(LC Control No.: 2008427768)のうち、桐壺・須磨・柏木の原本画像を閲覧できる。また、原本画像と翻字本文を対照表示させることができる。

ツール

言語資料を扱うためのプログラムやWeb上で利用するツールである。

- UniDic

形態論情報を付与した語彙資源であり、形態素解析器MeCabのモデルを同梱している。

- 形態素解析ツールWeb茶まめ

各種のUniDicを使って形態素解析を行うためのツールであり、形態素解析に必要な一連の作業

- を Web 上でわかりやすいインターフェイスによっておこなうことができる。
- ・(方言研究の部屋) データとプログラム
『方言文法全国地図』全データ (1-6 集), 最新版 PDF 『方言文法全国地図』(1-6 集), 方言文法全国地図作成の機械化 (イラストレータ用プラグイン・白地図・記号), 準備調査 (調査票と地図・データ), 言語地図データベースを公開している。
 - ・全文検索システム『ひまわり』
コーパス, 用例集, 辞書といった言語資料を全文検索するために開発されたソフトウェアである。XML で記述された言語資料を全文検索し, 検索文字列に対する前後文脈や付与情報 (書誌情報など) を表示することができる。
 - ・教育活動観察支援システム FishWatchr
リアルタイムに進行する活動や, ビデオ撮影された活動に対する注釈づけを実現するとともに, 注釈付け結果を用いて, グループでの振り返りを支援するツールである。

カタログ

図書・研究資料などの書誌情報を中心とする資料である。

- ・雑誌『国語学』全文データベース
日本語学会の(旧)機関誌『国語学』全巻の全文テキストデータベースであり, 誌面の PDF ファイルも公開している。
- ・日本語研究・日本語教育文献データベース
学術雑誌, 論文集等に掲載された日本語関係の論文等のデータベースであり, データは定期的に追加される。ウェブ上で約 24 万件のデータから文献を検索することが可能である。
- ・国立国語研究所蔵書目録データベース
国立国語研究所研究図書室の所蔵する図書約 15 万冊と雑誌約 5,800 タイトルの目録・所蔵情報が検索できるデータベースであり, 貴重書や視聴覚資料, 特殊文庫の目録・所蔵情報も掲載している。
- ・ことばに関する新聞記事見出しデータベース
国立国語研究所が 1949 年から 2009 年 9 月までのことばに関する新聞記事を集めた「切抜集」所収の新聞記事の発行日・新聞名・見出し等を収録した「見出し(目録)データベース」である。
- ・国立国語研究所刊行物データベース
創立(1948 年)から現在に至るまでの, 国立国語研究所の刊行物を検索することが可能なデータベースである。
- ・国立国語研究所学術情報リポジトリ
国立国語研究所における学術研究・教育活動の成果および国立国語研究所が所蔵する学術資料を電子的形態で収集・保存し, Web 上で公開している。
- ・国立国語研究所研究資料室収蔵資料
国立国語研究所が実施した調査研究において収集・作成した研究資料の概要の目録である。
- ・北米における日本関連在外資料目録
ハワイ・北米の日系社会で収集された資料(音声・映像資料, 写真等)に関する現地の所蔵機関別の目録である。

その他データ

各種言語調査等のデータである。

- ・『分類語彙表 増補改訂版』研究用データ
分類語彙表とは, 「語を意味によって分類・整理したシソーラス(類義語集)」で, 書籍版の『分類語彙表—増補改訂版—』の元となったデータを加工したものである。データベースソフトに

取り込めるよう CSV 形式になっており、レコード総数は 101,070 件である。

- ・現代雑誌 200 万字言語調査語彙表

2001–2004 年におこなわれた「現代雑誌の語彙調査 —1994 年発行 70 誌—」の調査結果の語彙表である。

- ・「学校の中の敬語」アンケート調査データ

国立国語研究所が 1989–1990 年に中学生・高校生を対象に実施した敬語使用と敬語意識に関するアンケート調査で得られたデータである。中学生は東京 2,456 名、山形 339 名、高校生は東京 2,222 名、大阪 1,004 名が回答している。

- ・岡崎敬語調査データベース

国立国語研究所が中心となって、愛知県岡崎市で行った敬語調査のデータベースである。岡崎敬語調査 (OSH) は、1953 (昭和 28), 1972 (昭和 47), 2008 (平成 20) 年におこなわれ、戦後の 55 年という長いタイムスパンの実時間の変化が分かる。

- ・沖縄語辞典データ集

国立国語研究所資料集 5 『沖縄語辞典』の本文篇、索引篇、地名一覧表のデータである。

- ・『日本語教育のための基本語彙調査』データ

国立国語研究所報告 78 『日本語教育のための基本語彙調査』(1984) の「基本語彙 五十音順表」、「意味分類体語彙表」、「分類項目一覧表」を電子化したものである。

- ・『幼児・児童の連想語彙表』データ

国立国語研究所報告 69 『幼児・児童の連想語彙表』(1981) の「全連想語彙調査表」および「頭音連想語彙調査表」を電子化したものである。

- ・甑島方言アクセントデータベース

推定話者数 3,000 人の危機方言である甑島（鹿児島県薩摩川内市）の方言音声（アクセント）を教育研究に資する目的で公開している。

- ・鶴岡調査データベース

国立国語研究所が中心となって、1950, 1971, 1991, 2011 年の 4 回にわたって山形県鶴岡市でおこなった共通語化調査の回答データである。

- ・X 線映画「日本語の発音」

日本語発音時の調音運動を撮影した X 線映画（1965, 1967 年撮影）である。

- ・寺村秀夫連体修飾論文英訳集

1970 年代から 1980 年代にかけて日本語学・日本語教育の学術的基盤を築くのに大きく貢献した故・寺村秀夫教授（1928–1990）が残した学術論文の幾つかを英語に翻訳して提供している。

- ・日本語史研究用テキストデータ集

国立国語研究所共同研究プロジェクト等で作成したテキストデータ（TXT, XML など）を公開している。

- ・『方言談話資料』データ

『方言談話資料』全 10 卷（1978–1987 年刊）の本文テキストデータと音声ファイルを公開している。

- ・『方言録音資料シリーズ』データ

『方言録音資料シリーズ』全 15 卷（1978–1987 年刊）の本文テキストデータと音声ファイルを公開している。

- ・ヲコト点図データベース

漢文訓読の記号であるヲコト点図のデータベースであり、ヲコト点図の種類、付与位置、記号形状、読みなどをキーに、ヲコト点を検索することができる。

5 学術刊行物

(1) 所員による著書・編書

Haruo Kubozono

The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants, Oxford University Press, 2017.4.27.

野田尚史, 野田春美

『〈アクティブ・ラーニング対応〉日本語を分析するレッスン』, 大修館書店, 2017.4.

木部暢子, 山本友美, 原田走一郎, 坂井美日

『椎葉村方言語彙集—桝尾・不土野編—』, 国立国語研究所, 2017.5.15.

大西拓一郎 (編)

『空間と時間の中の方言—ことばの変化は方言地図にどう現れるか—』, 朝倉書店, 2017.5.15.

窪塙晴夫

『オノマトペの謎—ピカチュウからモフモフまで』, 岩波書店, 2017.5.18.

石黒圭

『文章予測—読み解力の鍛え方—』, KADOKAWA, 2017.9.

Masayoshi Shibatani, Shigeru Miyagawa and Hisashi Noda (eds.)

Handbook of Japanese Syntax, De Gruyter Mouton, 2017.10.

石黒圭

『形容詞を使わない大人の文章表現力』, 日本実業出版社, 2017.11.

松本裕治, 奥村学

『コーパスと自然言語処理 (講座日本語コーパス第8巻)』, 前川喜久雄 (監修), 朝倉書店, 2017.12.10.

窪塙晴夫

『通じない日本語—世代差・地域差からみる言葉の不思議』, 平凡社, 2017.12.15.

石黒圭

『大人のための言い換え力』, NHK 出版新書, 2017.12.

庵功雄, 石黒圭, 丸山岳彦 (編)

『時間の流れと文章の組み立て 林言語学の再解釈』, ひつじ書房, 2017.12.

石黒圭 (編)

『わかりやすく書ける作文シラバス』, くろしお出版, 2017.12.

陳奕廷, 松本曜

『日本語語彙的複合動詞の意味と体系—コンストラクション形態論とフレーム意味論—』, ひつじ書房, 2018.2.20.

木部暢子, 麻生玲子 (編)

『新しい地域文化研究の可能性を求めて Vol.3 ことばは文化の源』, 人間文化研究機構, 2018.2.28.

Prashant Pardeshi and Taro Kageyama

Handbook of Japanese Contrastive Linguistics (Handbooks of Japanese Language and Linguistics [HJLL] Series 6), De Gruyter Mouton, 2018.2.

ハラセイコ, 山田真寛

『くいんだし あんびんだんぎ』, 沖縄時事出版, 2018.2.

Haruo Kubozono and Mikio Giriko

Tonal Change and Neutralization, De Gruyter Mouton, 2018.3.5.

木部暢子 (編)

『日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成 島根県隠岐の島方言調査報告書』,
国立国語研究所, 2018.3.31.

見野久幸, 朝日祥之

『北海道方言の地理的・年齢的勢力分布と動態 (1) —若年層(高校生)と壮年層(30歳代~50歳代)での男女別使用—調査データグラフ集語彙編』, 2018.3.31.

見野久幸, 朝日祥之

『北海道方言の地理的・年齢的勢力分布と動態 (2) —若年層(高校生)と壮年層(30歳代~50歳代)での男女別使用—調査データグラフ集語彙・語法編』, 2018.3.31.

山田真寛, 森澤ケン

『与那国の人とことば 2017』, 言語復興の港, 2018.3.

田中弥生, 柏野和佳子, 角田ゆかり, 伝康晴, 小磯花絵

『国立国語研究所「日常会話コーパス」プロジェクト報告書2『日本語日常会話コーパス』の構築—個人密着法に基づく会話の収録—』

(2) 『国立国語研究所論集』 (NINJAL Research Papers)

国立国語研究所における研究活動の活性化と成果の発表および所内若手研究者の育成を目的として, 各年度に2回(7月と1月), オンラインと冊子体の両形態で発刊している。

第13号 (2017年7月)

青井隼人

「南琉球宮古多良間方言における2種類のアクセント型の中和」, pp.1-23,
<https://doi.org/10.15084/00001369>.

陳奕廷

「基底と精緻化から見た複合語の分類: 日本語複合動詞を中心に」, pp.25-50,
<https://doi.org/10.15084/00001370>.

居關友里子

「制度的場面における会話の終結に関する一考察: 実習反省会の観察から」, pp.51-64,
<https://doi.org/10.15084/00001371>.

小林雄一郎, 岡崎友子

「中古における接続表現の統計的分析: 指示詞を構成要素とするものを中心に」, pp.65-77,
<https://doi.org/10.15084/00001372>.

小西円

「日本語学習者と母語話者の産出語彙の相違: I-JAS の異なるタスクを用いた比較」, pp.79-106,
<https://doi.org/10.15084/00001373>.

窪田悠介

「統語構造アノテーション支援ツールの開発」, pp.107-125, <https://doi.org/10.15084/00001374>.

桑原陽子

「初級読解教材作成を目指した非漢字系初級学習者の読解過程の分析」, pp.127–141,
<https://doi.org/10.15084/00001375>.

間淵洋子

「近代雑誌コーパスにおける漢語語彙の特徴：BCCWJ との比較から」, pp.143–166,
<https://doi.org/10.15084/00001376>.

大内康裕

「磁気テープの多チャンネル読み取りによる高速ディジタルアーカイビング」, pp.167–185,
<https://doi.org/10.15084/00001377>.

田中啓行, 布施悠子, 胡方方, 石黒圭

「学習者の情意面の評価に基づくピア・リーディングの授業改善の可能性：学術的文章を読む読解授業の談話データから」, pp.187–208, <https://doi.org/10.15084/00001378>.

上野善道

「徳之島浅間方言のアクセント資料（4）」, pp.209–242, <https://doi.org/10.15084/00001379>.

第14号（2018年1月）

青井隼人

「南琉球宮古多良間方言におけるピッチ上昇：複数の韻律句が連続する場合のピッチパターンの記述」, pp.1–27, <https://doi.org/10.15084/00001410>.

黄均鈞, 霍沁宇, 田佳月, 胡芸群

「中国人日本語専攻生の学術コミュニティへの参加過程の分析：中国の大学から日本の大学院へ」, pp.29–54, <https://doi.org/10.15084/00001411>.

加藤祥

「特徴的な要素と用例頻度の関係：角を例とした一考察」, pp.55–72, <https://doi.org/10.15084/00001412>.

近藤明日子

「明治・大正期の文語文における一人称代名詞の通時的变化：『日本語歴史コーパス 明治・大正編I 雜誌』と『東洋学芸雑誌』を用いた分析」, pp.73–88, <https://doi.org/10.15084/00001413>.

松井真雪, ホワンヒョンギヨン

「「置換反復発話」におけるピッチパターンの再現可能性：Warner (1997) の追検討」, pp.89–97,
<https://doi.org/10.15084/00001414>.

松倉昂平

「福井県坂井市三国町安島方言の三型アクセント：付属語のアクセントと型の中和」, pp.99–123,
<https://doi.org/10.15084/00001415>.

蒙櫻

「文章理解過程における日本語学習者の固有名詞の意味理解：文脈的手がかりに着目して」, pp.125–143, <https://doi.org/10.15084/00001416>.

中川奈津子, 山田真寛

「竹富島『星砂の話』の絵本制作と一般読者向け文法概要の執筆」, pp.145–167,
<https://doi.org/10.15084/00001417>.

中井好男, 船橋瑞貴, 副田恵理子, 向井裕樹

「LINE での日本語母語話者からの誘いを非母語話者はどう断っているか：「再誘い」を誘発する要因とその背景にある意識」, pp.169–192, <https://doi.org/10.15084/00001418>.

中西久実子

「なぜ「数量語+だけだ」は不自然になりやすいのか」, pp.193–207, <https://doi.org/10.15084/00001419>.

西内沙恵

「次元形容詞はどんなときに使われるか：日本語とスペイン語の対照研究」, pp.209–230, <https://doi.org/10.15084/00001420>.

関川雅彦, 山口亮

「研究資料室中央資料庫収蔵資料の公開に向けての取り組みと課題」, pp.231–239, <https://doi.org/10.15084/00001421>.

竹内史郎, 岡崎友子

「日本語接続詞の捉え方：ソレデ, ソシテ, ソレガ, ソレヲ, ソコデについて」, pp.241–254, <https://doi.org/10.15084/00001422>.

田中啓行, 石黒圭

「日本語学習者の作文執筆修正過程：中国人学習者と韓国人学習者の修正の位置と種類の分析から」, pp.255–274, <https://doi.org/10.15084/00001423>.

田中弥生, 柏野和佳子, 角田ゆかり, 伝康晴, 小磯花絵

「『日本語日常会話コーパス』の構築：会話収録法に着目して」, pp.275–292, <https://doi.org/10.15084/00001424>.

上野善道

「徳之島浅間方言のアクセント資料（5）」, pp.293–322, <https://doi.org/10.15084/00001425>.

楊秀娥

「日本語ピア・リーディング授業における学習者の批判的思考の活性化」, pp.323–345, <https://doi.org/10.15084/00001426>.

6 研究成果の発信と普及

国立国語研究所では、研究成果を社会に発信・還元するために、各種のシンポジウムや研究会を開催している。ここでは、専門家向けのものを挙げる。

（1）国際シンポジウム

国立国語研究所が主体となって実施する研究や、他機関との連携研究による優れた研究成果のうち、時宜を得た課題を取り上げ、海外からの専門家も交えて、論旨を深めながら学術界に公表するため、国際シンポジウムの開催や国際学会の共催をおこなっている。

NINAJL 国際シンポジウム

第 10 回 日本語実用言語学国際会議（ICPLJ）[2017 年 7 月 8–9 日（国立国語研究所）]

7 月 8 日

・招待講演（日本語）

・南雅彦（サンフランシスコ州立大学）

「第一言語習得と第二言語習得をつなぐ：マクロとミクロのナラティヴ構造視点からの考察」

• ポスターセッション（日本語）

- 高橋圭子（フリーランス）、東泉裕子（東京学芸大学）
「近現代語コーパスにみる「(さ) せていただく」の用法」
- 張晶鑫（神戸大学）
「現代日本語における「スル」化オノマトペの語彙構造の再考—BCCWJ を用いた計量的調査をふまえて—」
- 田昊（一橋大学）
「独話音声と対話音声における 2 種類の「けど」類発話に関する考察—『日本語話し言葉コーパス』を資料として—」
- 小西円（国立国語研究所）
「文体的特徴と使用ジャンルから見た「から」と「ので」の相違—日本語教育の観点から—」
- 田中啓行（国立国語研究所）
「日本語学習者の作文執筆修正過程の分析」
- 布施悠子（国立国語研究所）
「日本語学習者の作文執筆過程における自己修正動機の分析」
- 石黒圭（国立国語研究所）
「日本語学習者の講義理解に見られる話段の諸相」
- 稲葉みどり（愛知教育大学）
「発話数・単語数・形態素数の推移からみた物語文の発達過程」
- 福永由佳（国立国語研究所）
「日本語学習リソースとしての家族についての一考察—在日パキスタン人の事例から—」
- バリー・カヴァナ（東北大学）
「日本人の母親は子どもをどのようにバイリンガルに育てるか—イギリス在住の国際児についての考察—」
- 劉琳（江蘇大学）
「日本書紀古訓形容詞の意味的構造について」

• 口頭発表 1-1：日本語

- 増田恭子（ジョージア工科大学）、岩崎典子（ロンドン大学 SOAS）
「多義語「に」と「で」のペアワークにおけるランゲージング—どのようなランゲージングが長期的習得につながるのか—」
- 増田辺和子（日本女子大学）、野口潔（上智大学）、大須賀茂（シートンホール大学）、岡田彩（オクラホマ大学）
「リレー式ライティングによる相互行為とコミュニケーション・ストラテジー」
- ダニエル・ロング（首都大学東京）、朝日祥之（国立国語研究所）、高野駿（首都大学東京）
「研究と教育の融合をめざした授業実践報告とその効果に関する考察」

• 口頭発表 1-2：日本語

- 馮荷菁（九州大学）
「日本語ディベートの「立論」「反駁」におけるスピーチレベル・シフトについて—日本語母語話者の場合—」
- 小玉安恵（サンノゼ州立大学）
「体験談ナラティブにおける引用助詞ッテとト及び無助詞の機能」
- リュドミラ・ヴァシリエヴァ（モスクワ国立総合大学付属アジア・アフリカ諸国大学）
「日本とロシアにおける国語施策：共通と相違の点について」

• 口頭発表 1-3：英語

- MATSUO Ayumi (Kobe College) and Letitia NAIGLES (University of Connecticut)
“The Cues Japanese Children Use When Learning Novel Verb Meanings”

- Seth J. GOSS (Emory University)
“Influence of L1 Semantic Knowledge on Japanese Kana Recognition by Chinese Learners of Japanese”
- CHEN Yiting (Mie University)
“The Constructionalization of Japanese Double Negatives”

7月9日

- パネルセッション：日本語
 - 「相互行為分析が言語教育にもたらすもの」
 - 趣旨説明：柳町智治（北星学園大学）
 - 発表1「相互行為における発話の構築」：西阪仰（千葉大学）
 - 発表2「L2としての日本語使用者の相互行為研究のパノラマ的観察と事例紹介」：池田佳子（関西大学）
 - 発表3「会話分析のアイディアを日本語教育の実践に活かす試み」：岩田夏穂（政策研究大学院大学），初鹿野阿れ（名古屋大学）
 - ディスカッサント：小林ミナ（早稲田大学）
 - 口頭発表 2-1：日本語
 - 石一含（九州大学）
「日中辞書における中国語訳語の問題点に関する一考察—無標可能表現に使える有対自動詞を対象に」
 - 遠山千佳（立命館大学）
「中国人日本語学習者の第一言語と第二言語による指示表現の比較」
 - 吳佳穎（首都大学東京）
「話し手の顔から得られる視覚情報が聞き手の内容理解に及ぼす影響—易しい課題と難しい課題の比較を通して—」
 - 口頭発表 2-2：英語 & 日本語
 - Cade BUSHNELL (University of Tsukuba)
“Letting It Pass with a Smile: A Conversation Analytic Examination of Recipient Smiles and Laughter in Multiparty L2 Interaction”
 - YONEZAWA Yoko (The Australian National University)
“Reflecting the Fluidity of Relationships: A Study of Address Terms in Japanese – Drama Analysis and Its Pedagogical Implications –”
 - 蒙櫻（国立国語研究所）
「読解過程における日本語学習者の固有名詞の意味理解—文脈情報を手がかりとして—」
 - 口頭発表 3-1：日本語
 - 西郷英樹（関西外国語大学）
「「今日、めっちゃ暑いネ。」に日本語母語話者と非母語話者はどう答えるのか—発話連鎖から「ネ」を考える—」
 - 小野正樹（筑波大学），牧原功（群馬大学），李奇楠（北京大学），山岡政紀（創価大学）
「現代日本語の繰り返し表現—表現形式と対人的機能の観点から—」
 - 竹田らら（東京電機大学）
「日本人教員と学生の初対面相互行為における重複発話—「不均衡を解消させること」に対するジャンルの影響を考慮して—」
 - 口頭発表 3-2：日本語
 - 山口真紀（東京工業大学），野原佳代子（東京工業大学）
「古典の現代語訳における助詞の調査—外国人学習者のための古典日本語学習支援として—」

- ・ケード・ブッシュネル（筑波大学）、関崎博紀（筑波大学）、永井絢子（筑波大学）、伊藤秀明（筑波大学）、ルート・ヴァンバーレン（筑波大学）、許明子（筑波大学）、小野正樹（筑波大学）、今井新悟（筑波大学）、木戸光子（筑波大学）、酒井たか子（筑波大学）、加納千恵子（筑波大学）
「会話分析研究に基づく日本語初級教科書開発の試案」
- ・胡芸群（一橋大学）、田佳月（一橋大学）、霍沁宇（一橋大学）、黃均鈞（華中科技大学）
「大学院における留学生のアカデミック活動への参加過程の分析—中国の日本語専攻卒業生の学習経験をもとに—」
- ・口頭発表 3-3：日本語
 - ・本橋美樹（関西外国語大学）、石澤徹（東京外国語大学）
「第二言語としての日本語の習得における音韻と書字の関連性」
 - ・張銘（北京外国语大学）
「和語の動機付けの分類及び教育への応用」
 - ・アルカディウシュ・ヤブオニスキ（アダム・ミツキエヴィチ大学）
「言語分類に適した文法説明を目指して—膠着語の日本語と屈折語の母語話者」

Methods in Dialectology XVI [2017 年 8 月 7-11 日 (国立国語研究所)]

8 月 7 日

- ・Plenary 1 (Chair: Yoshiyuki Asahi)
 - ・Paul Kerswill (University of York)
“Demography vs. identity in the formation of new urban contact dialects”
- ・Dialect contact 1 (Chair: Dimitris Papazachariou)
 - ・Liina Lindström, Maarja-Liisa Pilvik, and Kristel Uiboaed
“Pronoun omission in Estonian dialects: contact-induced changes vs. functional motivations”
 - ・Carmen LeBlanc
“On dialect contact between vernaculars: levelling and shifting in North American French”
- ・Dialect Innovation 1 (Chair: Rebecca Starr)
 - ・Hui-ju Hsu
“The Influences of Taiwan Mandarin innovative variations on Taiwanese – from young people's /iN/ variation”
 - ・Chingduang Yurayong
“An innovation in the contact of North Russian and Central Veps dialects”
 - ・Hajime Oshima
“Innovative Possessive Marker in the Burgenland Dialect of Hungarian in Austria”
- ・Geolinguistic (Chair: Akemi Yamashita)
 - ・Jung-Min Li and Hsiao-feng Cheng
“A geolinguistic research of west coastal Taiwanese using “Glottogram””
 - ・Hiroyuki Suzuki and Lozong Lhamo
“Where is a negative marker? A geolinguistic approach towards a grammaticalisation in Khams Tibetan”
 - ・Chitsuko Fukushima
“Comparing integrated geographical distributions to grasp language changes”
- ・Phonetic and phonological Variation 1 (Chair: Kohei Nakazawa)
 - ・Jack Chambers, Erin Hall, and Mary Aksim
“Dialect Asymmetries in Vowel Perception”

- Martijn Wieling and Mark Tiede
“Dialect-specific articulatory settings”
- Yao Yao and Alan C.L. Yu
“An online survey of phonetic variation in Hong Kong Cantonese”
- Perceptual Dialectology (Chair: Jakob Leimgruber)
 - Yvette Freake
“Hillbillies, Schmucks and Gangsters: A Perceptual Dialectology Study of the Greater Toronto Area”
 - Aya Inoue
“Analyzing variation in perception grammar of non-standard languages: A case of Hawai'i Creole”
- Corpus-based study and beyond 1 (Chair: Nynke K de Haas)
 - Tyler Kendall, Charlie Farrington, and Jason McLarty
“Public Corpora and Research on African American Language”
 - Martin Schweinberger
“Using Semantic Vector Space Models to investigate lexical replacement: a corpus based study of ongoing changes in intensifier systems”
 - Janne Bondi Johannessen, Øystein Alexander Vangsnes, Signe Laake, and Tor Åfarli
“A Multimodal Dialect Corpus”
 - Mercedes Durham
“Dialectology in the age of facebook *likes*: Using questionnaires to chart change in discourse markers and quotative forms”
- Workshop 1: The Spoken (Social/Regional) Dialects in Media (Organizers: Yoshiyuki Asahi, Rebecca Starr, and Mie Hiramoto; Discussant: Momoko Nakamura)
 - Rebecca Starr
“Investigating the suprasegmental features of ASMR, a new pan-regional, cross-linguistic register”
 - Rika Ito
“You used dialect!: The representation of Hokkaido dialect in a Japanese anime, Silver Spoon”
 - Mie Hiramoto and Yoshiyuki Asahi
“[V + ~te ageru] in instructor speech: Polite register as a social dialect in YouTube tutorial videos”
 - Cindi SturtzSreetharan
“Representing dialect: Semiotic partials, saliency, and masculinity”
- Plenary 2 (Chair: Yoshiyuki Asahi)
 - Daniel Long (Tokyo Metropolitan University)
“Language Contact and Contact Languages involving Japanese”

8月8日

- Plenary 3 (Chair: Yoshiyuki Asahi)
 - Yukari Tanaka (Nihon University)
“The ‘Dialect Cosplay’ Phenomenon: Detaching Regional Dialects from Geographical Localities”
- Dialect contact 2 (Chair: Daming Xu)
 - Heike Wiese
“Pronoun omission in Estonian dialects: contact-induced changes vs. functional motivations”

- Akiko Okumura
 - “Variation and change in the Japanese velar consonant (g) in a new town”
- Dimitris Papazachariou, Argiris Archakis, Rania Karachaliou, and Angela Ralli
 - “Greek dialects as a linguistic repertoire among Greek immigrants in Canada: Dialect Performance”
- Yoshiyuki Asahi
 - “Picture brides and their Japanese dialects: Evidence from their life story interviews in Hawai’i”
- Morphosyntactic variation 1 (Chair: Ruth King)
 - Yusuke Hiratsuka and Souichiro Harada
 - “Adjective suffix variation in Kagoshima dialect”
 - Xiaoshi Li and Robert Bayley
 - “Lexical Frequency and Morphosyntactic Variation: Subject Pronoun Use in Mandarin Chinese”
 - Izumi Konishi
 - “Object markers in Japanese dialects: focusing on the factor of adjacency to verbs”
- Language contact 1 (Chair: Miriam Meyerhoff)
 - Susanne Wagner
 - “Pretty darn amazing, pretty awesome or just pretty good? From compromiser to booster and beyond—pretty and its adjectival collocates in Englishes world-wide”
 - Eva Kuske
 - “The Influence of American English on Guam English”
 - Sara Lynch
 - “The Influence of Static and Mobile Language Contact on an Emerging Pacific English”
 - Kazuko Matsumoto
 - “Social embedding of linguistic change in progress in adolescent Palauan English”
- Workshop 2: Implicitness and experimental methods in language variation (Organizers: Laura Rosseel and Stefan Grondelaers)
 - Laura Rosseel and Stefan Grondelaers
 - “Introduction”
 - Robert McKenzie
 - “Implicit and explicit evaluations of Northern English and Southern English speech in England: Implications for the measurement of language attitude change and investigation of language change in progress”
 - Christoph Purschke
 - “Tapping practical relevance in artificial situations. Evaluation routines and sociolinguistic experiments”
 - Gitte Kristiansen and Jesús Martín Tévar
 - “Measuring the strength of factors on the implicitness-explicitness continuum”
 - Andrew J. Pantos
 - “Implicitness, automaticity, and consciousness: Are they related and how do we measure them?”
 - Eric McCready and Gregoire Winterstein
 - “Effects of Implicit Attitudes on Epistemic Credibility”
 - Zoe Adams
 - “The persuasiveness of British accents in enhancing parental self-efficacy towards children’s oral health”
 - Laura Rossee
 - “The relational responding task (RRT) : a novel approach to measuring social meaning of language variation”

- Dennis R. Preston
 - “Implicitness, variability, and the complexity of language regard”
- Phonetic and phonological variation 2 (Chair: Martijn Wieling)
 - Katharina Pabst, Alexah Konnelly, Melanie Röthlisberger, and Sali Tagliamonte
 - “The individual vs. the community: Evidence from t/d deletion in Canadian English”
 - Naoki Hayashi
 - “Understanding the “Vagueness” of Accents with Acoustic Methods: A Case Study of the Eastern Tokyo Metropolitan region”
 - Anne-France Pinget
 - “Full merger in progress: evidence from Dutch labiodental fricatives”
- Lexcial variation 1 (Chair: Daniel Long)
 - Fumio Inoue
 - “Memory time of “father”—Area and age differences by Glottogram—”
 - John Huisman, Asifa Majid, and Roeland van Hout
 - “Variation in word meaning across closely related language varieties: a look at Ryūkyūan”
 - Dirk Geeraerts, Karlien Franco, and Dirk Speelman
 - “Heteronymy in dialect data: three case-studies on the influence of semantic concept features”
- Linguistic Atlas 1 (Chair: Chitsuko Fukushima)
 - Fernando Brissos
 - “Building an acoustic atlas from a traditional linguistic atlas: theoretical assumptions, challenges, procedures and results”
 - Yasuo Kumagai
 - “A quantitative observation of the relation among population distributions, road networks, and dialect similarities”
- English dialects (Chair: Jack Chambers)
 - Beat Glauser
 - “The ‘Great Vowel Shift’ again: the evidence of the traditional Northern dialects”
 - Rob Penhallurick
 - “On Writing the History of the Study of English Dialects”
 - Heinrich Ramisch
 - “Joseph Wright’s English Dialect Dictionary as an electronic research tool”
- Methods 1 (Chair: Kenjiro Matsuda)
 - Miriam Meyerhoff
 - “Oral histories and sociolinguistic data collection”
 - Sheila Embleton, Dorin Uritescu, and Eric S. Wheeler
 - “Metadata for Analyzing Geolinguistic Variation”
 - Melissa Farasyn and Anne Breitbarth
 - “New methods for Middle Low German dialect research”
- Poster Presentation
 - Irantzu Epelde
 - “Dialect contact in a Basque valley”

- Dominique Hess
“Challenges in a variationist sociolinguistic analysis of a newly emerging contact variety of English”
- Mateusz Maselko
“Syntactic variation in the German minority dialect Riograndese Hunsrik”
- Chen Shen
“You have Sheffield vowels: Dialect acquisition in second language—A preliminary study”
- Chie Yamane-Yoshinaga and Megumi Kukita
“Dialect usage of residents in Hansen’s disease (Leprosy) sanatoriums”
- Shinsuke Kishie, Razaul Faquire, Yukako Sakoguchi, Nanami Shiokawa, and Yukichi Shimizu
“East-West Opposition with Regard to the Negative Form of Verb in Japan”
- Kaori Ototake
“Distribution of Particles ka, ja, and zo in Interrogatives in Sanuki Dialect”
- Max Sondag, Thom Castermans, Bettina Speckmann, and Martijn Wieling
“Advanced mapping in dialectometry”
- Rika Yamashita
“Emerging use of ‘Nanodesu’ by fictional characters and girl idols on SNS”
- Kevin Heffernan
“The diffusion of lexical bundles from an urban center to a rural community in Japan”
- Mihoko Kubota
“Different Paths in the Acquisition of Japanese Negative Words Meaning Prohibition: Dame in the Standard Form and Akan in the Western Dialect”
- Watit Pumyoo
“Classification of Early Written Tai Dialects; a Matter of Socio-Politic Factors”
- Briana VanEpps
“Gender assignment in the Jämtlandic dialect of Swedish”

8月9日

- Dialect Innovation 2 (Chair: Kevin Heffernan)
 - Ewa Ciszek-Kiliszecka
“Innovative Late Middle English dialectology of the preposition and adverb beyond”
 - Jos Swanenberg
“Does dialect loss give more or less variation? On language creativity and dialect leveling”
 - Wilkinson Daniel Wong Gonzales
“Typological features of mixed languages: A case study of Hokaglish”
- Geolinguistics 2 (Chair: Yasuo Kumagai)
 - Curdin Derungs, Adrian Leeman, and Luca Scherrer
“A tool for measuring spatial saturation in large-scaled dialectological survey data”
 - Alexandre Nobajas
“Automatic Isogloss Maps from Twitter Data: The Catalan Case”
- Morphological and syntactic variation (Chair: Shunsuke Ogawa)
 - Ruth King and Carmen LeBlanc
“A Comparative Study of Subject-Verb Agreement in Subject Relative Clauses in Acadian French: The Interplay of internal and External Factors”

- Christa Schneider
 - “Numeral Gender in Bernese German”
- Workshop 3: Beyond the well-known: current foci and issues in research on intensification
(Organizer: Susanne Wagner)
 - Tine Breban
 - “Collocational expansion and semantic generalization: the development of adjectives ending in -y into intensifiers”
 - Belen Mendez-Naya
 - “Of right heirs and right idiots: A historical account of the intensifying adjective right”
 - Cathleen Waters
 - “Very different and most important: Examining lexical patterns in degree modification”
 - Sali Tagliamonte
 - “Into the hinterlands: Probing urban to rural diffusion in intensifier variation”
- Dialect Contact 3 (Chair: Paul Kerswill)
 - Grace Chong
 - “Singapore Mandarin as a new dialect: the case of beneficiary usage of gen”
 - Björn Lundquist and Øystein Vangsnæs
 - “Using eye tracking to assess separation of grammars in bi-dialectal speakers”
 - Hannah Hedgard
 - “Linguistic Upheaval on a Speck in the Ocean: The Development of English on the Cocos Islands”
- Real-time (Chair: Tyler Kendall)
 - Marjatta Palander
 - “Change in spoken Finnish: the dialect of 7-year-olds of two generations”
 - Brian Jose
 - “A Real-Time Perspective on the Southern Vowel Shift in Kentuckiana”
 - Stephen Levey and Heike Pichler
 - “Revisiting Transatlantic Relatives: Evidence from British and Canadian English”
- Mutual Intelligibility (Chair: Rika Ito)
 - Charlotte Gooskens and Cindy Schneider
 - “Measuring mutual intelligibility between language varieties of northern Pentecost Island, Vanuatu”
 - Hanna-Ilona Härmävaara
 - “Naturally occurring conversations as data for studying questions related to mutual intelligibility”
 - Tekabe Feleke
 - “The similarity and Mutual Intelligibility between Amharic and Tigrigna Varieties”

8月10日

- Plenary 4 (Chair: Yoshiyuki Asahi)
 - Jeff Siegel (University of New England)
 - “Acquisition and dialect change: An overview”
- Dialect contact 4 (Chair: Cindi Sturtz Sreetharan)
 - Ichiro Ota
 - “Sociolinguistic Representation of Code choice and Code-Switching in a Japanese TV Drama”

- Xuan Wang
 - “The interplay between explicit awareness and individual speakers’ attitude in dialect contact”
- Andres Enrique-Arias
 - “On the emergence of contact varieties: the Spanish of Mallorca from a historical perspective”
- Stephen Laker
 - “The definite article in Frisian and neighbouring dialects from an areal and contact perspective”
- Attitude (Chair: Dennis Preston)
 - Laura Rosseel, Dirk Geeraerts, and Dirk Speelman
 - “Measuring language attitudes in context: exploring the possibilities of the P-IAT. A case study on regional varieties of Dutch in Belgium”
 - Susan Fox and Ruth Kircher
 - “The role of attitudes in the innovation and spread of Multicultural London English”
 - Jakob Leimgruber
 - “Local bilingualism and global connectedness: New Montrealers’ language attitudes and repertoires”
 - James Major
 - “Perceptual Dialectology in Japanese-English video game translations”
- Variables (Chair: Mie Hiramoto)
 - Keiko Hirano and David Britain
 - “Accommodation and Social Networks: Grammatical Variation among Expatriate English Speakers”
 - Karen Corrigan
 - ““They’re not proud of the fact that they’re not from here”: Acquiring Northern Irish English as linguistic camouflage”
 - Tyler Kendall and Charlotte Vaughn
 - “Sociolinguistic variables and internal constraints from a listener perspective”
 - Adina Staicov
 - “Ethnicity and morphosyntactic variation: Indexing identity in San Francisco Chinatown”
- Workshop 3: Beyond the well-known: current foci and issues in research on intensification (Organizer: Susanne Wagner)
 - Ulrike Stange
 - “Beyond adjectives—So going to in the SOAP corpus”
 - Martin Schweinberger
 - “Modelling intensification in New Zealand English data”
 - Susanne Wagner and Ulrike Stange
 - “Beyond the intensifier: the importance of 2-grams in adjective intensification”
- Dialect Innovation 3 (Chair: Karen Corrigan)
 - Yuhan Lin
 - “Constructing a new linguistic self: Stylistic variation in a second dialect”
 - Gerard Van Herk and Ismar Muhic
 - “Who’s “urban” in Newfoundland?”
 - Matthias Hahn
 - “Between process and product: regional reduction strategies in German ‘standard-in-use’-varieties”

- Language Change 1 (Chair: Fumio Inoue)
 - Salvatore Carlino

“The state of dialect usage and transmission in Iheyā”
 - Fnu Dawazhuoma

“Principal reasons for the formation of language differences in Minyag Ganzi (Sichuan, China)”
 - Kazuko Tanabe

“An analysis of Japanese honorific usage succession at home through Mixed Methods Research”
- Dialect resource (Chair: Charlotte Gooskens)
 - Amelie Dorn and Caitlin Gura

“Participatory Cultural Lexicography Innovating a dialectal dictionary by applying an Open innovation in science approach. The example of exploreAT!”
 - Motoei Sawaki, Chitsuko Fukushima, and Yumi Nakajima

“Making a tagged dialect corpus using a computer: Verbal conjugation can be automated”
 - Harumi Mitsui, Kanetaka Yarimizu, and Motoei Sawaki

“The structure of diversified language usage in metropolitan Tokyo: Analyses using large-scale data base for word accent”
- Workshop 4: Contrastive Geolinguistics (Organizer: Takuichiro Onishi)
 - Ray Iwata

“Introduction”
 - Takuichiro Onishi

“Reconsideration of blending change”
 - Akihiko Shibahara

“Dialect distribution and topography”
 - Yuji Kawaguchi, Ray Iwata, and Seiichi Naka

“Item-based contrastive map: Potato in French, Chinese and Japanese”
 - Takuichiro Onishi and Yuji Kawaguchi

“Problems of standardization: Japanese and French”
- Methods 3 (Chair: Kuniyoshi Kataoka)
 - Hiroto Ueda

“Unilateral Correspondence Analysis: Applied to Spanish linguistic data in space and time”
 - Bror-Magnus Strand

“The roleplaying variety of Northern Norwegian preschool children”
 - Stefano De Pascale and Stefania Marzo

“Token-based Vector Space Models as semantic control for lectometric research in lexical variation”
- Corpus-based studies and beyond 2 (Chair: Sali Tagliamonte)
 - Nobuko Kibe, Kumiko Sato, Taro Nakanishi, and Kohei Nakazawa

“Corpus based study of Japanese dialects: Regional differences in case marking system”
 - Chihkai Lin

“Pazeh-Kaxabu Affinity Revisited: from a corpus-based approach”

- Eveline Wandl-Vogt, Amelie Dorn, Roberto Barbera, and Davor Davidovic
“Cloud Computing, Open Science, Data Analytics Towards new research paradigms for Bavarian dialectology in using advanced research infrastructures. DARIAH-Competence center in a nutshell”
- Language change 2 (Chair: Susanne Wagner)
 - Niina Kunnas and Liisa Mustanoja
“Changing nature of idiolects in the light of Bayesian analysis”
 - Melissa Farasyn
“Apparant variation in non-restrictive relative clauses in the Middle Low German dialects”
 - Ariane Borlongan and Robert Fuchs
“Recent diachronic change in the use of the Present Perfect and Past Tense in Philippine and Indian English”

8月11日

- Workshop 5: Hansards as a dialect resource (Chair: Hitoshi Nikaido)
 - Kenjiro Matsuda
“Toward Hansard linguistics”
 - Keiichi Takamaru
“Demonstration of the Online Local Assembly Minutes”
 - Kenjiro Matsuda
“On the birth and diffusion of the group language in the National Diet”
 - Suguru Kawase
“Regional differences in the conjunctives in the minutes of local assemblies”
 - Hitoshi Nikaido
“Speech style in the Fukuoka Prefectural Assembly”
- Methods 2 (Chair: James Walker)
 - Péter Jeszenszky, Curdin Derungs, and Robert Weibel
“Automatically detecting boundaries and transition zones in swiss german morpho-syntactic variation”
 - Robert Fuchs
“The importance of dialect, age, gender and social class in the sociolinguistics of intensifier usage”
- English dialects 2 (Chair: Heinrich Ramisch)
 - Nynke de Haas
“The Northern Subject Rule in Middle English dialects: individual syntactic constructions”
 - Nicole Eberle
“Bermudian English: Origins and Typological Affinities”
- Methods 3 (Chair: Laura Rosseel)
 - Eveline Wandl-Vogt, Barbara Piringer, Davor Ostoic, Ksenia Zaytseva, Lukas Mörtl, Heimo Rainer, Alisa Goikhman, and Roberto Theron
“Innovation through Cooperation Designing Collaborative Ecosystems on the example of “Biodiversity and Linguistic Diversity: A Collaborative Knowledge Discovery Environment””
 - Nanna Haug Hilton, Adrian Leemann, and Charlotte Gooskens
“Crowd-sourcing Variation in Minority Languages: Illustrated with Frisian”

- Language contact 2 (Chair: Marjatta Palander)
 - Helka Riionheimo

“How do young Finns perceive foreign influence? Folk linguistic recognition test as a contact linguistic tool”
 - Malcah Yaeger-Dror and Moshe Dror

“Variation Triggered by Language Contact: a Game Theoretical Perspective”
- Language contact 3 (Chair: Mercedes Durham)
 - Bhim Lal Gautam

“Changes in language attitude through contact: A case study of Newar in Kathmandu valley”
 - Tobias Leonhardt

“Kiribati and the outside: About language contact in a remote and isolated Pacific island nation”
- Phonetic and Phonological Variation 3 (Chair: Takuichiro Onishi)
 - Henna Massinen

“Contact-induced Phonological Variation in Border Karelian Dialect”
 - Masako Fujimoto and Shigeko Shinohara

“Articulatory manifestation for voiced geminates and initial geminates in Ikema Ryukuan”
 - Sayako Uehara

“The role of vocalic outliers on the perception of sound change”
 - James Walker

“Intersect(ING) Variables”
- Workshop 6: Synchronic transfers in Colloquial Singapore English: Case studies based on text message data (Organizer: Jacob R. Leimgruber, Leslie Lee, and Mie Hiramoto; Discussant: Jeff Siegel)
 - Leslie Lee, Taohai Lin, and Ten Tingkai

“Already, le, and liao: distributions and functions in Colloquial Singapore English text messages”
 - Mie Hiramoto and Jun Jie Lim

“Sentence-final adverbs in a corpus of Colloquial Singapore English text message data”
 - Jakob R. E. Leimgruber, Wei Xing Change, and Magdalene Ong Wenli

“Colloquial Singapore English one and de in a corpus of WhatsApp text messages”
 - Mie Hiramoto, Tong King Lee, and Xue Ming Jessica Choo

“The sentence-final particle sia in a corpus of Colloquial Singapore English text message data”
- Plenary 5 (Chair: Yoshiyuki Asahi)
 - Daming Xu (University of Macao)

“Demystifying the sociocultural identities of language and dialect”

Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing

[2017年12月9-10日 (国立国語研究所)]

12月9日

- Opening remarks: Yukinori Takubo (NINJAL)
- Session 1 (Chair: Kei Yoshimoto (Tohoku University))
 - Susan Pintzuk (University of York)

“Adding linguistic information to parsed corpora”

- Alastair Butler, Stephen Wright Horn, and Iku Nagasaki (NINJAL)
“Seeding lexical semantics: resources using parsed corpora”
- Session 2 (Chair: Yusuke Kubota (University of Tsukuba))
 - Sean Wallis (University College London)
“Exploiting parsed corpora in grammar teaching”
 - Liesbeth Augustinus (KU Leuven)
“Using parallel treebanks for comparative syntax with Poly-GrETEL”
- Posters
 - Gerard Kempen (Max Planck Institute for Psycholinguistics) and Karin Harbusch (Universität Koblenz-Landau)
“Verb frequency as a sentence-production factor modulating historical Object-Verb to Verb-Object changes in West-Germanic languages”
 - Zhen Zhou (Tohoku University)
“Analysis of Chinese noun phrase: On the difference between topic and subject”
 - Seonmin Park (KAIST)
“Corpus-driven approach for vocabulary variation and sentence complexity in medicine journal articles”
 - Kevin Heffernan (Kwansei Gakuin University), Yusuke Imanishi (Kwansei Gakuin University), Masaru Honda (Kwansei Gakuin University), and Yo Sato (Satama Language Services, England)
“Case particle omission correlates with the object syntactic complexity: Evidence from the Corpus of Kansai Vernacular Japanese”
 - Yoo Lae Kim (Dongguk University), Jaejun Kim (Dongguk University), and Sanghoun Song (Incheon National University)
“Metaphorical usage with the expression ‘love’ in Learner Corpus”
 - Susanne Miyata (Aichi Shukutoku University) and Alastair Butler (NINJAL)
“Developing a model of typical Japanese grammar development: The role of parsed corpora and parsing programs”
 - Sanghoun Song (Incheon National University)
“Analyzing the unanalyzable: Creation of the error-production rules”
 - Alastair Butler (NINJAL) and Stephen Wright Horn (NINJAL)
“Treebank Semantics parsed corpus series”
 - Yumiko Kinjo (NINJAL) and Iku Nagasaki (NINJAL)
“The *-te aru* construction in context: A corpus-based study of Standard Japanese”
 - Ayaka Suzuki (NINJAL) and Misato Ido (NINJAL)
“Examples of using the NPCMJ Corpus for theoretical linguistic studies”
 - Wataru Okubo (Tokyo University of Foreign Studies / NINJAL)
“Extracting complex expressions from a parsed corpus through post-processing techniques”

12月10日

- Session 3 (Chair: Alastair Butler (NINJAL))
 - Kei Yoshimoto (Tohoku University) and Akiko Takahashi (Miyagi University of Education)
“Exploiting coreferential information in NPCMJ for L2 reading of Japanese texts”
 - Nianwen Xue (Brandeis University)
“Building a Chinese AMR SemBank with Word-Concept Alignment”

- Session 4 (Chair: Iku Nagasaki (NINJAL))
 - Yusuke Kubota (University of Tsukuba) and Ai Kubota (ex-NINJAL)
 - “A case study on the Coordinate Structure Constraint in Japanese”
 - Hideki Kishimoto (Kobe University) and Prashant Pardeshi (NINJAL)
 - “Parsed corpus as a source for testing generalizations in Japanese syntax”
- Session 5 (Chair: Hideki Kishimoto (Kobe University))
 - YAnthony Kroch and Beatrice Santorini (University of Pennsylvania)
 - “Evidence for two kinds of OV word order”
- Closing Remarks: Prashant Pardeshi (NINJAL)

国際シンポジウム

NINJAL-NMJH-UHM Workshop [2017年5月16–18日 (ハワイ大学マノア校)]

5月16日

- Opening remarks (Chair: Timothy Vance)
 - Nobuko Kibe (NINJAL)
 - “Opening remark”
 - Robert Huey (EALL, UHM)
 - “Welcome remark”
 - Kamil Deen (Linguistics, UHM)
 - “Welcome remark”
 - Yoshiyuki Asahi (NINJAL)
 - “NINJAL’s Introduction”
- Keynote Talk 1
 - Yukinori Takubo (EALL, UHM)
 - “The making of the digital museum of Nishihara, Miyako Island” [introduced by Timothy Vance]
- Session 1: Endangered languages in Ryukyu and Japan (Session chair: Yukinori Takubo)
 - Nobuko Kibe (NINJAL)
 - “Outline of ‘Endangered Languages and Dialects in Japan’: NINJAL’s research project”
 - Soichiro Harada (NINJAL)
 - “Making dialect records on a small island of Okinawa and doing linguistic research through it”
 - Kumiko Sato (NINJAL)
 - “Variation of Japanese dialects in CJD”
- Keynote Talk 2
 - Shoichi Iwasaki (UCLA)
 - “Which language(s) to be saved? – a Ryukyuan context” [introduced by Yukinori Takubo]

5月17日

- Session 2: Language Documentation and Conservation at UHM (Session chair: Kamil Deen)
 - Bradley McDonnell (Linguistics, UHM)
 - “On utilizing corpus and experimental methodologies in language documentation”

- Eva Okura (Linguistics, UHM)
“Voices from language nests: The realities of operating early childhood endangered language revitalization programs”
- Ashleigh Smith (Linguistics, UHM)
“The Language Documentation Center at the University of Hawai'i Mānoa”
- Bradley McDonnell, Ryan Henke, Peter Scheulke, Ashleigh Smith, Ben Clossen, Margaret Ransdell-Green, and Khairunnisa
“Collaborative digital language documentation methodologies in field methods”
- Poster Presentations
 - Thomas Dougherty (Linguistics, UHM)
“What to do with initial geminates in Okinawan”
 - David Iannucci (Linguistics, UHM)
“The Hachijo language of insular Tokyo”
 - Micah Mizukami (Linguistics, UHM)
“Producing a Shimaguchi Musical: Language Revitalization or Preservation?”
 - Hilson Reidpath (EALL, UHM)
“From Arakaki to Zukeran: A historical survey of Okinawan names”
 - Justin Tanaka and Ryler Nielsen (EALL, UHM)
“Kakari-musubi in Modern Ryukyuan”
 - Justin Tanaka and Ryler Nielsen (EALL, UHM)
“Tooshindoi: Kachaashi of Okinawa”
- Keynote Talk 3
 - William O'Grady (Linguistics, UHM)
“Saving Jejueo: Analytic and pedagogical strategies” [introduced by Shoichi Iwasaki]
- Session 3: Revitalization (Session chair: Shoichi Iwasaki)
 - Christianne Ono (Linguistics, UHM)
“Impacts of Ikema Language Documentation Workshops: A student's perspective”
 - Micah Mizukami (Linguistics, UHM)
“Revitalization on Tokunoshima: Shimaguchi in a Dialect Musical”
 - Masahiro Yamada (NINJAL)
“Creating contents for language learning: Collaboration with language communities”
- Keynote Talk 4
 - Mark Turin (UBC)
“Collaborations in language: From endangerment to resurgence” [introduced by Yukinori Takubo]

5月18日

- Introductory remarks
 - Yoshiyuki Asahi (NINJAL)
“Introduction”
 - Nobuko Kibe (NINJAL)
“Welcome”

- Kosuke Harayama (HMJH)
“NMJH Introduction”
- Session 1: Sociolinguist's approaches
 - Yoshiyuki Asahi (NINJAL)
“Sociolinguistic approaches to ‘buried voices’ in Hawai’i”
 - Daniel Long and Shun Takano (Tokyo Metropolitan U)
“Dialect and Language Contact Features in the Speech of a Hawaiian Nikkei Speaker”
 - Discussion
Commentator: Kent Sakoda (UHM)
- NINJAL Demonstrations
 - Tomokazu Takada (NINJAL)
“Hentaigana database for education and coded character set”
 - Toshinobu Ogiso (NINJAL)
“Introduction to the Corpus of Historical Japanese”
- Session 2: Nikkei collection manager/curator approaches
 - Shigeru Kojima (Japanese Overseas Migration Museum)
“Rediscovering the history of Nikkeis at JOMM in Yokohama”
- Session 3: Historian's approaches
 - DVD presentation (Biography Hawai’i) KOJI ARIYOSHI (UHWO and UHM)
Introduction by William Puette (UHWO)
 - Kosuke Harayama (NMJH)
“Koji Ariyoshi in the context of Japanese history”
 - Discussion
Commentator: Dennis Ogawa (UHM)

MAPLL Satellite Workshop & 国際学会 MAPLL-TCP 2017 [2017年7月21–23日 (早稲田大学, 国立国語研究所)]

7月21日

- Hara Yurie, Sakai Hiromu (Waseda University), and Orita Naho (Tohoku University)
“Factors contributing to speakers' choice of evidential markers in Japanese: Causal judgement and direct witness”
- Emmanuel Chemla (CNRS)
“Quantifier spreading”
- Tanaka Mikihiro (Kona Women's University)
“The Production of Metonymic Expressions: Evidence from Priming in Japanese”
- Florian Schwartz (University of Pennsylvania)
“Presuppositions in quantified contexts: teasing apart factors behind variation”
- Ruth Filik (University of Nottingham)
“Investigating factors involved in sarcasm comprehension”

7月22日

- Oral Presentation 1
 - Sanako Mitsugi (KU)
“The use of classifier for predictive processing in second language Japanese”

- Aine Ito and E. Matthew Husband (Univ. Oxford)
 - “How robust are effects of semantic and phonological prediction during language comprehension?
A visual world eye-tracking study.”
- Yao-Ying Lai (Yale Univ.), David Braze (Haskins Lab.), and Maria Pinango (Yale Univ.)
 - “Context and semantic composition of multiple dimension representations in real-time comprehension”
- John Matthews, Makiko Hirakawa (Chuo Univ.), Kazue Takeda, Michiko Fukuda (Bunkyo Univ.), Mari Umeda, Neal Snape (Gunma Pref. Univ.), and Yahirō Hirakawa (Tokyo Inst. of Tech.)
 - “Establishing reference with reflexive pronouns in the course of spoken language recognition”
- Oral Presentation 2
 - Ruth Filik (Univ. Nottingham)
 - [Invited Talk] “Irony and sarcasm: Comprehension and emotional impact”
 - Michele Burigo and Thomas Schack (Univ. of Bielefeld)
 - “Understanding spatial language without eye movements”
- Oral Presentation 3
 - Agnieszka Ewa Tytus (Univ. of Mannheim)
 - “The Representation of the Trilingual Lexico-semantic Memory: Insights from a Translation and Picture-recognition Tasks”
 - Panpan Yao (Queen Mary Univ. of London)
 - “L2ers’ acquisition of unique-to-L2 constructions through implicit learning”
 - Alice Foucart (UGent), Hernando Santamaria-Garcia (INCYT), and Rob Hartsuiker (UGent)
 - “Do you believe foreigners? Impact of a foreign accent on cognitive processes.”
- Poster Presentation 1
 - David J. Lobina (UB)
 - “The Universe of the Logical Connectives in Language”
 - Aine Ito (Univ. of Oxford), Max S. Dunn iii, and Martin J. Pickering (Univ. of Edinburgh)
 - “Effects of language production on prediction: Word vs. picture visual world study.”
 - Masataka Yano (Tohoku Univ./JSPS), Yui Suzuki, and Masatoshi Koizumi (Tohoku Univ.)
 - “The Effect of Emotional State on the Processing of Morphosyntactic and Semantic Reversal Anomalies – Evidence from a Linear Mixed-Effects Modeling Analysis of Event-Related Potential –”
 - Maria Mercedes Pinango and Yao-Ying Lai (Yale Univ.)
 - “A model of semantic linguistic composition under conditions of morphosyntactic underspecification: the case of eventive iteration construal”
 - Masayuki Asahara (NINJAL)
 - “Word Familiarity Rate Estimation for ‘Word List by Semantic Principles’ – a Case Study of Adjective –”
 - Yoko Nakano (KGU)
 - “Linguistic Generalization in Producing Past-Tense Verb Forms in L1 and L2 Japanese”
 - Hirokazu Yokokawa (Kobe Univ.), Satoshi Yabuuchi (Kyoto Seika Univ.), Hisaki Sato (Ryukoku Univ.), Michiko Bando (Shiga Univ.), Tomoyuki Narumi (Osaka Kyoiku Univ), Ken-ichi Hashimoto (Hyogo Univ. of Education), Mayu Hamada, Ayako Hirano (Kobe Univ.), and Yasunari Harada (Waseda Univ.)
 - “Building a Database of Sentence Construction Familiarity of Japanese EFL Learners: Pilot Study”

- Kiyoshi Ishikawa, Ryo Yamashita, and So Ishii (Hosei Univ.)

“Mora-based control for the length effect – A self-paced reading study in Japanese –”

7月23日

• Oral Presentation 4

- Tara Shashikanta (NIT Raipur)

“Loanwords dominate equivalent native words in adaptation: A study of English loanwords and equivalent native words in Hindi”

- Tao Ma (SSU)

“Syntactic patterns to the semantic processing of Chinese spatial metaphors – New evidence from latencies and ERPs –”

- Yohei Oseki (NYU), Yasutada Sudo (UCL), Hiromu Sakai (Waseda), and Alec Marantz (NYU)

“Inflectional Directionality in Morphological Productivity”

- Florian Schwartz (Univ. of Penn)

[Invited Talk] “The Time-course of Presupposition Projection – Experimental Data and Theoretical Issues –”

• Poster Presentation 2

- Mei Yoshimoto (Tsuda Univ.), Satoshi Nambu (Monash Univ.), and Hajime Ono (Tsuda Univ.)

“Evaluating individual reading time differences through a psychological measure”

- Ying Deng (Univ. of Tokyo / RIKEN) and Chie Nakamura (MIT / JSPS)

“Structural priming effects in Japanese sentence production – Stronger influence of voice than word order –”

- Toshiyuki Yamada (Gunma Univ.)

“Why do L2 Learners Accept Ungrammatical Sentences? – A Preliminary Study –”

- Kazunori Suzuki (Tokyo Inst. of Tech. / JSPS), Makiko Hirakawa (Chuo Univ.), Michiko Fukuda (Bunkyo Univ.), and Yinshi Jiang (Tokyo Inst. of Tech.)

“Comprehension and Production of Chinese Relative Clauses by Heritage Chinese Speakers”

- Robert Price (WKU)

“A Psycholinguistic Analysis of Activation and Selection in Multilingual Lexemic Transfer in the Foreign Language Classroom”

- Revathi Suresh (EFLU)

“Processing of Casuative Structures in Malayalam”

- Nawasri Chonmahatrakul and Chutamanee Onsuwan (Thammasat Univ.)

“Relaxation of phonological restrictions in loanwords versus contemporary words: a case study of Thai”

- Julian Northbrook and Kathy Conklin (University of Nottingham)

“Formulaic sequence processing in Japanese junior high school English Learners”

- Mikihiro Tanaka (Konan W. Univ.)

“The production of Metonymic Expressions: Evidence from Priming in Japanese”

- Alice Rees and Lewis Bott (Cardiff Univ.)

“A visual world priming investigation of Gricean inferences”

• Oral Presentation 5

- Chuyu Huang (Univ. of Tokyo / JSPS), Tzu-Yin Chen, Yuki Hirose, and Takane Ito (Univ. of Tokyo)

“The Rating Responses to Different Violation Types of Taiwanese Tone Sandhi”

- Tzu-Yin Chen, Yuki Hirose, and Takane Ito (Univ. of Tokyo)
“The prosodic information of Mandarin Tone 3 Sandhi helps disambiguate between N-N compound and N-N coordination structure – A visual world paradigm study –”
- Tomoko Monou (Mejiro Univ. / Keio Univ.) and Shigeto Kawahara (Keio Univ.)
“Language and us – Insights from MyVoice –”
- Oral Presentation 6
 - Emmanuel Chemla (CNRS)
[Invited Talk] “Conceptual alternatives”

通時音声コーパス [2017年9月4日 (国立国語研究所)]

9月4日

- Opening Remarks
- Bas Aarts (University College London, UK)
“Exploring the grammar of spoken English using the Diachronic Corpus of Present-Day Spoken English”
- Marja-Liisa Helasvuo (University of Turku, Finland)
“Finnish spoken corpora: A diachronic perspective”
- Takehiko Maruyama (Senshu University / NINJAL, Japan)
“What's left for diachronic research of Japanese Speech?”
- Alessandro Panunzi (University of Florence, Italy)
“The LABLITA Corpus of spoken Italian in diachrony: Theoretical framework, corpus design, and a lexical comparison”
- Marie Skrove (University of Orleans, France)
“A diachronic spoken corpus for French: ESLO, a variationist survey”
- Commentaries and discussion

Spies, Prisoners, and Farmers: The Origins of Japanese Studies at Michigan

[2017年11月29日 (ミシガン大学)]

11月29日

- Welcome Remarks
- Panel 1: U-M's Army Intensive Japanese Language School
Yoshiyuki Asahi (NINJAL) and Tomokazu Takada (NINJAL) ;
Moderator: Erin Brightwell (University of Michigan)
- Panel 2: Japanese-Americans and the Origins of Japanese Studies at Michigan
Katsumi Nakao (J.F. Oberlin University) and Kosuke Harayama (National Museum of Japanese History) ;
Moderator: Leslie Pincus (University of Michigan)
- Panel 3: The CJS Okayama Field Station
Hitomi Tonomura (University of Michigan) and Yoko Taniguchi (Senshu University) ;
Moderator: Christopher Hill (University of Michigan)
- Panel 4: Reflecting on the Origins of Japanese Studies at Michigan
Ezra Vogel (Harvard University) and John Campbell (University of Michigan) ;
Moderator: Kiyoteru Tsutsui (University of Michigan)

JK 25 Workshop: Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean

[2017年10月11日 (ハワイ大学マノア校 韓国研究センター)]

- Taehong Cho (Hanyang University)

“Prosodic strengthening and lexical pitch accent in South Kyungsang Korean and implications for Seoul Korean”

- Haruo Kubozono (NINJAL)

“Secondary High Tones in Koshikijima Japanese”

- Junko Ito, Armin Mester (UC Santa Cruz)

“Pitch Accent and Tonal Alignment in Japanese”

- Sun-Ah Jun (UC Los Angeles)

“Exploring the prosody-syntax-focus interface in Yanbian Korean”

- Akiko Matsumori (Japan Women's University)

“A prosodic unit and phonological process of the Miyako-jima and Tarama-jima systems in Miyako Ryukyuan”

• Poster Session

- Toshio Matsuura (Hokusei Gakuen University)

“Towards a typology of compound and loanword prosody in tonal dialects of Kyushu Japanese”

- Kohei Matsukura (University of Tokyo)

“The Syllable Structure of the Antoh Dialect (Fukui Prefecture) Revealed through its “Three-pattern” Accent System”

- Nick Kalivoda and Jeff Adler (UCSC)

“A Factorial Typology of Pitch-Accent Alignment in Japanese Dialects”

- Hyunsoon Kim (Hongik University)

“The effect of L1 AP-initial boundary tones in Korean adaptation of Japanese plosives followed by a H or L vowel”

- Stuart Davis and Young Hwang (Indiana University)

“The course of intergenerational suffixal accent change in English loanwords of North Kyungsang Korean”

- Hisao Tokizaki (Sapporo University)

“Initial accent and head-finality in Japanese”

- Kohei Nakazawa (Yonaguni-chō Education Board)

“The Characteristics of the Accentual Unit in the Yonaguni Dialect (Okinawa Prefecture) through Comparison with other Japanese / Ryukyuan Dialects”

(2) 合同シンポジウム・研究発表会

複数のプロジェクトが共同でおこなうシンポジウムや研究発表会。

平成 29 年度コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—話者の属性—」

[2017年9月8日 (国立国語研究所)]

• 招待講演

- 蒲谷宏

「待遇コミュニケーションにおける「人間関係」と「表現形式」との連動」

• 研究発表

- 迫田久美子, 細井陽子

「学習者コーパスに見る言語環境の違いとコミュニケーション」

- ・木部暢子
「諸方言コーパスに見る男性の言葉・女性の言葉」
- ・小磯花絵
「話し言葉コーパスに見る言葉の年齢差」
- ・小木曾智信
「歴史コーパスにおける話者属性アノテーションとその可能性」
- ・まとめ（ディスカッションおよびフロアからの質問）

NINJAL シンポジウム「日本語の名詞周辺の文法現象—名詞修飾表現ととりたて表現—」

[2017年12月23日（国立国語研究所）]

- ・高山善行
「とりたて表現の歴史的展開をどう捉えるか—助詞の文末制約を中心に—」
- ・小林隆
「とりたての地理的傾向」
- ・中俣尚己
「学習者コーパスからみるとりたて表現の使用状況」
- ・佐々木冠
「日本語方言における連体と終止」
- ・金水敏
「連体形の機能の歴史的变化について」
- ・堀江薫
「「内の関係」と「外の関係」のマーキングに関する言語間のバリエーション—クメール語と日本語の対比を中心に—」
- ・基調講演
・村木新次郎
「連体修飾節のようで、連体修飾節でないもの—日本語の連体修飾語のみなおしをかねて—」

(3) プロジェクトの発表会

プロジェクト等の主催で、公開研究発表会や学術シンポジウム等を、日本各地を会場として開催している。

プロジェクト主催のシンポジウム・ワークショップ

成城学園創立100周年・大学院文学研究科創設50周年記念

国立国語研究所共催シンポジウム「私たちの知らない〈日本語〉—琉球・九州・本州の方言と格標示—」

[2017年7月2日（成城大学）]

- ・下地理則
「日琉諸語における分裂自動詞性と有標主格性」
- ・新永悠人
「沖縄県久高島方言の主格のゼロ標示」
- ・坂井美日
「九州の方言と格標示—熊本方言の分裂自動詞性を中心に—」

- 竹内史郎, 松丸真大
「格標示とイントネーション—京都市方言の分裂自動詞性再考—」
- 下地理則, 新永悠人, 坂井美日, 竹内史郎, 松丸真大
「日琉諸語の分裂自動詞性はどのように説明できるか?」
- コメンテータ: 風間伸次郎, 木部暢子
- 司会: 竹内史郎

第1回 会話・談話研究シンポジウム「日本語教育の新展開 (1) —談話研究の可能性—」

[2017年7月10日 (国立国語研究所)]

- 宇佐美まゆみ
「日本語教育になぜ談話研究が必要なのか?」
- 南雅彦
「比較文化心理学の視点から眺めた文化と言語教育—異文化の中での談話のインテラクションから—」
- 楊秀娥
「日本語ピア・リーディングにおける批判的読みの活性化」

通時コーパス活用班合同研究集会 [2017年8月19日 (国立国語研究所)]

- テーマセッション 「『日本語歴史コーパス』の構築と活用—万葉集とキリストン資料」
 - 川口敦子
「キリストン資料と『日本語歴史コーパス』—キリストン資料の概要と課題」
 - 片山久留美, 村山実和子, 渡辺由貴
「『日本語歴史コーパス 室町時代編 II キリストン資料』の構築上の課題」
 - 鴻野知暁
「万葉集コーパスの特徴とその活用事例」
 - 野村剛史
「完了の接尾辞, ツ・ヌ, タリ・リの変遷」
- ポスター発表
 - 片山久留美
「『日本語歴史コーパス 室町時代編 II キリストン資料』の進捗と展望」
 - 近藤明日子
「『明治初期口語啓蒙書コーパス』の構築」
 - 堤智昭
「『Web 茶まめ』の改良—Chaki 形式出力の実装—」
 - 南雲千香子, 近藤明日子
「『東洋学芸雑誌』コーパスの構築」
 - 服部紀子
「言文一致体および標準語の規範としての国定教科書—教科書コーパスを用いたその検討と課題—」
 - 藤本灯, 錢谷真人
「人情本コーパスの現状—翻字本文テキストの公開<8作品>—」
 - 松崎安子, 富士池優美
「八代集コーパス構築の計画と進捗」
 - 村山実和子
「『日本語歴史コーパス 江戸時代編 I 洗落本』の本公開に向けて」

- ・口頭発表
 - 高橋雄太
「近代における和語の仮名表記」
 - 高田智和
「『哲学字彙』掲出語に対する語彙素 ID 付けの試み」
 - 田中牧郎
「近代雑誌に見る外来語の変容」
- ・『日本語歴史コーパス』の使い方相談に対する回答（小木曾智信）

言語資源活用ワークショップ 2017 [2017 年 9 月 5–6 日 (国立国語研究所)]

2017 年 9 月 5 日

- ・口頭発表 A グループ
 - 王海涛
「日本語特殊形容詞の製定用法の出現傾向について」
 - 森秀明
「一般的な日本語テキストにおける助詞比率の規則性」
 - 金賢真
「ウェブコーパス「梵天」による敬語研究—その活用可能性に関する事例的検討—」
 - 張莉
「非情の受身の「状態」の意味について」
- ・ポスター発表 A グループ
 - 松本理美
「従属節の意味分類基準策定について—バンク基準互換再構築の検討—」
 - 馮荷菁
「現代日本語における公的場面で行われる談話に関する言語資源の現状と開発」
 - 岩崎拓也
「接続詞の直後に読点が打たれる要因について：一般化線形モデルを用いた分析」
 - 浅原正幸, 田中弥生
「修辞ユニット分析における脱文脈化指数の妥当性の検証」
 - 今田水穂
「外の関係の連体修飾節を伴う名詞述語について」
- ・ポスター発表 B グループ
 - 柴田好葉
「話し言葉における接続詞の文体的特徴について」
 - 高橋雄太
「形容詞「ハヤイ」の意味と表記」
 - 新納浩幸, 古宮嘉那子, 佐々木稔
「nwjc2vec の fine-tuning」
 - 高橋圭子, 東泉裕子
「「お／ごへされる」とその周辺」

- 大村舞, 浅原正幸
「現代日本語書き言葉均衡コーパスの Universal Dependencies」
- 招待講演
‣ 美馬秀樹
「近代文献のデジタルアーカイブ化と研究・教育での活用—岩波書店『思想』を題材に」
- 口頭発表 B グループ
‣ 岡照晃
「CRF 素性テンプレートの見直しによるモデルサイズを軽量化した解析用 UniDic—unidic-cwj-2.2.0 と unidic-csj-2.2.0—」
‣ 石川慎一郎
「学習者コーパス研究における標本数の問題」
- 2017 年 9 月 6 日
- 口頭発表 C グループ
‣ 前川喜久雄
「鶴岡市共通語化調査データの確率論的再検討」
‣ 小磯花絵, 伝康晴
「日本語日常会話コーパス』のデータ公開方針—法的・倫理的な観点から—」
‣ 畠田悠介
「ツリーバンク検索への「UNIX 的」アプローチ」
‣ 近藤泰弘
「『源氏物語』コンコーダンスとその応用」
- ポスター発表 C グループ
‣ 追田久美子, 蘇鷹, 張佩霞
「中国人日本語学習者の「念押し」表現に見る母語の影響—I-JAS のロールプレイにおける依頼表現に基づいて—」
‣ 遊佐宣彦, 佐々木稔, 古宮嘉那子, 新納浩幸
「単義語と共に起する多義語に対する分散表現を利用した語義分析」
‣ 小椋秀樹
「書き言葉と話し言葉における外来語語末長音のゆれ」
‣ 大山浩美, 馬場良二, 和田礼子, 田川恭識, 嵐洋子, 島本智美, 吉里さちこ, 大庭理恵子
「地域社会により順応するための方言教材作成のための方言データベースの開発について」
‣ 春木良且, 田中弥生, 田村寛之
「ナレーション分析を用いた川崎市政ニュース映画の映像理解の試み—市民アーカイブズ構築のための枠組みとして—」
‣ 小木曾智信, 岡照晃, 中村壮範, 八木豊
「『日本語歴史コーパス』における原文 KWIC 表示機能の実装」
‣ 本多由美子
「複合格助詞における丁寧形の機能—『日本語話し言葉コーパス』を用いた分析—」
- ポスター発表 D グループ
‣ 加藤祥, 浅原正幸
「分類語彙表番号を用いた比喩表現収集の試み」

- ・山崎誠
「レジスター・位相の違いによる会話文の語彙的多様性」
- ・笛島眞実
「言語形式に基づく児童作文の類型化」
- ・石本祐一, 河原英紀
「日本語話し言葉コーパスの F0 値再抽出に関する検討」
- ・山口昌也
「国会会議録における言語表現の時間的変化の予備的分析」
- ・西川賢哉, 玉栄, 前川喜久雄
「モンゴル語アクセント研究のためのデータベース (2)」
- ・招待講演
 - ・折田奈甫
「コーパスを用いた談話情報の定量化」

第 2 回 BTSJ 日本語会話コーパス活用シンポジウム [2017 年 9 月 9 日 (国立国語研究所)]

第一部 講演とディスカッション

- ・趣旨説明 (宇佐美まゆみ)
- ・講演
 - ・重光由加
「会話データによる日・英談話スタイルの対照研究：実験会話実施から分析まで」
 - ・宇佐美まゆみ
「BTSJ と自然会話データ分析の意義について」
- ・ディスカッション

第二部 第 7 回 BTSJ 活用方法講習会

ワークショップ「プロソディ研究のための方法論：コーパス・生理・文タイプ」 [2017 年 10 月 1 日 (東京大学本郷キャンパス)]

- コメンテーター：松井理直
- ・松浦年男, 安永大地, 水本 豪
「ERP を用いた複合語アクセントの研究：現状と課題」
 - ・五十嵐陽介, 広瀬友紀
「曖昧文の産出実験によるイントネーションの方言差の研究」
 - ・北原真冬
「日英のコーパスを用いたプロソディ研究」

シンポジウム「変体仮名のこれまでとこれから」 [2017 年 11 月 25 日 (国立国語研究所)]

- ・セッション 1 「変体仮名のこれまで」 (司会：小助川貞次)
 - ・矢田勉
「平仮名の成り立ちと変体仮名」
 - ・岡田一祐
「いろは仮名といまの平仮名—近代における仮名の体系化—」

- 錢谷真人
「『秋萩帖』と近代活字」
 - セッション 2 「変体仮名の文字コード標準化」(司会:田代秀一)
 - 高田智和
「ISO/IEC 10646 の変体仮名セット」
 - 増田浩之
「IPA 変体仮名のデザインが確立するまで」
 - 小林龍生
「変体仮名はどのようにして国際標準になったか—戦略と戦術—」
 - セッション 3 「変体仮名・くずし字学習」(司会:矢田勉)
 - 飯倉洋一
「くずし字学習支援アプリの可能性」
 - 橋本雄太
「変体仮名文字情報基盤を利用した学習システム開発」
 - 斎藤達哉
「大学における古典解説基礎知識としての変体仮名教育」
 - セッション 4 「字形データベースと OCR」(司会:小木曾智信)
 - 山本和明
「歴史的典籍 NW 事業と字形データセット—なぜ国文研が字形データなのか—」
 - 大澤留次郎
「くずし字 OCR 技術の現在と課題」
 - 當山日出夫
「表記情報研究のこれからと OCR」
- 第三回 学習者コーパス・ワークショップ—学習者コーパスから第二言語習得を考える—**
[2017年12月3日 (国立国語研究所)]
- 第一部 講演・ポスター発表
- 講演
 - 山口有実子
「学習者コーパスによる第二言語習得理論～Processability Theory～の検証」
 - 清水崇文
「語用論的転移に関する諸問題」
 - ポスター発表
 - 小山宣子
「学習者言語に見られる動詞の並列表現「たり」「とか」—I-JAS の第一次公開データを使って—」
 - 小西円
「日本語学習者のレベルごとにみた感動詞の使用の変化」
 - 佐々木藍子, 阿部新
「日本語学習者のエッセイに見られる評価群別の言語特徴—I-JAS におけるヨーロッパ学習者のデータを対象に—」

・野口美美

「日本語学習者の否定的応答表現—真偽疑問文に対する否定的応答に注目して—」

・細井陽子, 迫田久美子

「日本語習得における言語環境とレベルの違いの影響—「依頼」のロールプレイの言語使用に基づいて—」

・三谷絵里, 杉本美穂, 林亜友美

「ストーリーテリングにおける談話展開」

・姚一佳

「日本語学習者コーパス I-JAS におけるアスペクト仮説の検証—学習環境の影響を中心に—」

第二部 ワークショップ

・初心者コース (担当: 細井陽子, 須賀和香子)

・既習者コース (担当: 佐々木藍子)

シンポジウム「新たな作文研究のアプローチ—わかりやすく書ける作文シラバス構築を目指して—」

[2018年1月14日 (国立国語研究所)]

趣旨説明 (石黒圭)

・岩崎拓也

「正確で自然な読点の打ち方」

・宮澤太聰

「説得力のある段落の組み立て方」

・田中啓行

「日本語学習者の作文執筆のプロセス—どう修正するのか? —」

・布施悠子

「日本語学習者の作文執筆のプロセス—なぜ修正するのか? —」

・庵功雄

「適切な文法形式の選び方」

全体ディスカッション

シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア—談話研究・対照研究・習得研究を中心に—」

[2018年1月27日 (国立国語研究所)]

・趣旨説明 (野田尚史)

・司会: 佐藤琢三

・石黒圭

「接続詞の選択に垣間見えるジャンルの違い—社会科学の専門文献を例に—」

・定延利之

「非流ちような発話への文法的接近」

・司会: 中俣尚己

・井上優

「「文化」の問題か「文法」の問題か—張英 (2000) の議論の再検討—」

・渋谷勝己

「第二言語習得者における文法構築メカニズムの再検討—多言語能力の視点から—」

・司会: 森篤嗣

・庵功雄

「日本語教育文法から見た「は」と「が」—「は」と「が」はこんなに簡単だった！—」

・野田尚史

「非母語話者が日本語を「聞く」「読む」ための文法」

「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」プロジェクトの公開研究会

[2018年2月9日 (国立国語研究所)]

・安岡孝一

「古典中国語（漢文）の形態素解析とUniversal Dependencies」

・藤本灯

「人情本コーパスのためのタグ付け」

Prosody and Grammar Festa 2 [2018年2月17-18日 (国立国語研究所)]

2018年2月17日

・名詞修飾班

・吉岡乾

「ブルシャスキー語の名詞修飾表現」

・高橋清子

「タイ語の名詞修飾表現」

・江畠冬生

「サハ語の連体修飾節—内容補充節での補文標識挿入に関する日本語との対照—」

・公募班

・原由理枝, 折田奈甫, 酒井弘

「証拠性（Evidentiality）と因果関係の非対称性」

・村杉恵子, 斎藤衛, 高橋大厚

「言語類型の精密化と説明をめざす試み—項省略現象を例として」

・シンポジウム「日本語と言語類型論」

・窟蘭晴夫

「日本語のアクセントと言語類型論」

・秋田喜美

「日本語のオノマトペと言語類型論」

・野田尚史

「日本語のとりたて表現と言語類型論」

・堀江薫

「日本語の名詞修飾表現と言語類型論」

・松本曜

「日本語の移動表現と言語類型論」

2018年2月18日

・とりたて表現班

・岸本秀樹

「シンハラ語のとりたて表現について」

- ユラ・マテラ
「チェコ語におけるとりたて表現」
- デロワ中村弥生
「フランス語のとりたて表現」
- 音声研究班
 - 久保智之
「アルタイ諸語のイントネーション研究に向けて」
 - 新田哲夫
「南琉球多良間方言アクセントの下降と上昇」
 - 上野善道
「琉球久米島方言のアクセント」
- 動詞の意味構造班
 - 河内一博
「クプサビニイ語（南ナイル、ウガンダ）のダイクシスの表現：ビデオ実験データの分析」
 - 吉成祐子
「イタリア語における言語的働きかけによる使役移動表現：日本語、英語との対照研究」
 - 守田貴弘
「ダイクシスは経路の一部なのか」

シンポジウム「日本語学習者はどのように文章を理解しているのか—目の動きから見えてくるもの—」

[2018年3月3日（国立国語研究所）]

- 講演
 - 石黒圭
「日本語学習者の読解過程の解明」
- 研究発表
 - 張秀娟
「複雑な文の構造をどう理解するのか」
 - 田中啓行
「日本語学習者は文脈指示をどう理解するのか」
- 前半部のディスカッション
- 講演
 - 浅原正幸
「読み時間と節境界について」
- 研究発表
 - 井伊菜穂子
「日本語学習者はどのように接続詞を使って文章を理解するのか」
 - 烏日哲
「中国語を母語とする日本語学習者のトピックレベルでの文章理解」
- 後半部のディスカッション

「通時コーパス」シンポジウム 2018 [2018年3月10日 (国立国語研究所)]

・口頭発表

・小木曾智信

「『日本語歴史コーパス』ver.2018.3 通時コーパス構築進捗報告」

・北崎勇帆

「中世後期から近世にかけての行為要求表現の体系変化—『日本語歴史コーパス 室町時代編』を用いて—」

・高谷由貴

「通時コーパスに見る引用由来の接続表現」

・大木一夫

「中世後期日本語動詞形態小見」

・ポスター発表・デモ

・大西拓一郎

「方言地図データベースについて」

・片山久留美

「『日本語歴史コーパス 室町時代編 II キリスト教資料』の公開に向けて」

・近藤明日子

「近代口語文の語種率・品詞率の通時的变化」

・南雲千香子, 近藤明日子

「『東洋学芸雑誌』コーパスの構築 I—本文テキストの電子化と『ひまわり』版パッケージの作成—」

・新野直哉

「「新聞記事データベース」について—概要と活用例—」

・服部紀子

「近代語研究における国定教科書—教科書コーパスの構築とその課題—」

・藤本灯, 銭谷真人

「ひまわり版「人情本コーパス」公開に向けて」

・松崎安子

「八代集コーパス構築の進捗」

・村山実和子

「『日本語歴史コーパス 江戸時代編 I 洗落本』の公開と活用」

・山崎誠, 相澤正夫, 大西拓一郎, 柏野和佳子, 高田智和, 新野直哉, 藤本灯

「語誌データベースの設計とその活用 (2)」

・テーマセッション『日本語歴史コーパス』のフロンティア

・矢島正浩

「近代日本語資料としての落語」

・常盤智子

「英学資料とコーパス—『会話篇』の試み—」

・萩原義雄

「「聖徳太子」の古辞書記載」

・月本雅幸

「訓点資料訳読文コーパスに関する一問題—訓点の複線性をめぐって—」

・全体討論

第2回 国語教育活用ワークショップ [2018年3月15日 (群馬大学)]

- ・通時コーパス概要説明
- ・「中納言」講習
- ・国語教育への応用について

シンポジウム「日常会話コーパス」III [2018年3月19日 (国立国語研究所)]

- ・口頭発表
 - ・片岡邦好
「日常会話コーパスを用いた相互行為分析：引用と身体」
 - ・佐野真一郎
「自然発話における単音・促音の持続時間変異—最小対、対立保持、情報性の観点から—」
 - ・村井源
「小説説における会話文体体の基本パターンと性別・年齢層による変化」
 - ・山本真理
「自己開始修復における受け手反応—「うん／うんうん」「はい／はいはい」等の使い分けに注目して—」
- ・ポスター発表・デモンストレーション
 - ・遠藤智子
「参与構造の創発に関する諸要因の整理に向けて」
 - ・林誠, 細田由利, 森本郁代
「修復の前置き (repair preface) としての「てゆうか」」
 - ・杉浦秀行
「物語りに対する受け手間のやり取りが「見られる」こと」
 - ・秦かおり
「日常会話コーパスにみる大人と子供の相互行為：参与構造の創発と動的プロセスをみる」
 - ・丸山岳彦
「『昭和話し言葉コーパス』の構築 (2)：その進捗状況と問題点」
 - ・入江さやか, 金明哲
「年代別・性別による音韻融合形「ちゃ・じゃ・きや・にや・りや」の使用状況」
 - ・横森大輔
「会話におけるトラブルへの言及と発話フォーマット」
 - ・吳青青
「「からかい」連鎖における繰り返し」
 - ・山崎誠
「翻訳小説における会話文の語彙的特徴」
 - ・宮崎由美, 柏野和佳子, 山崎誠
「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』収録の小説における発話箇所認定について」
 - ・居関友里子, 伝康晴
「二段階発話連鎖アノテーション：意味・語用論と相互行為」
 - ・黒嶋智美
「「見ること」の帰属可能性と相互行為の基盤的構造」

- ▶ 高梨克也
「参与の次の問い合わせ：成員性と関与」
- ▶ 伝康晴
「日常会話における「と文末」」
- ▶ 坂井田瑠衣
「日常的活動に埋め込まれた会話場の再編」
- ▶ 早野薫
「保育士-保護者インテラクションにおける報告の組織」
- ▶ 服部匡
「「～テございます」の使用傾向の推移—「～テいる」「～テある」との対応関係に注目して—」
- ▶ 三条凪, 菊池英明
「大規模日常会話コーパスを用いた日常会話における話題転換構造の分析」
- ▶ 増田将伸
「副詞「もう」による強調の表示についての予備的考察」
- ▶ 安井永子
「子どもがいる場の相互行為における複数の関与、参与の管理」
- ▶ 柏野和佳子
「フォーマルな話し言葉に現れやすい書き言葉的な語」
- ▶ 山口昌也
「国会会議録における言語表現の時間的変化の予備的分析—衆議院本会議を対象に—」
- ▶ 白田泰如
「演技は参与枠組になにを引き起こすのか」

第2回 会話・談話研究シンポジウム「日本語教育の新展開（2）—自然会話を素材とするWEB教材の可能性—」
[2018年3月29日（国立国語研究所）]

- ・講演
 - ▶ 宇佐美まゆみ
「自然会話リソースバンク（NCRB）開発の趣旨と意義」
- ・基調講演
 - ▶ 伊東祐郎
「自然会話を素材とする教材に期待すること」
- ・デモンストレーション
 - ▶ 張洋子, 折田知之
「NCRBを使った教材作成の方法について」
- ・ポスター発表
 - ▶ 張洋子, 宇佐美まゆみ
「NCRBで教材を作成するための準備」
 - ▶ 折田知之, 宇佐美まゆみ
「自然会話データを用いた教材ユニットの作成について」

共同研究発表会

「日本語から生成文法理論へ：統語理論と言語獲得」研究発表会 [2017年5月13-14日 (慶應義塾大学)]

- ・越智正男
「名詞修飾節における格の交替現象」
- ・岸本秀樹
「文の構造と格の認可」
- ・藤井友比呂
「複文の構造」
- ・斎藤衛
「否定辞と数量詞の作用域に関する柴田義行氏の研究」
- ・多田浩章
「保守性と作用域再構築」
- ・高野祐二
「2種類のスクランブリング」
- ・宮本陽一
「名詞句内の省略」
- ・村杉恵子
「構造と格の獲得」
- ・杉崎鉱司
「移動と省略の獲得」

「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」研究発表会 [2017年6月9日 (国立国語研究所)]

- ・Toshiyuki Ogihara
“Japanese, English and Polish and the Typology of Tense”

「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」研究発表会 [2017年6月11日 (国立国語研究所)]

平成29年度第1回研究発表会「指示詞・代名詞」

- ・招待講演
・林徹
「トルコ語の指示詞についてわかったこと、どうしてもわからないこと」
- ・研究発表
・林由華、衣畠智秀
「宮古語諸方言における文脈指示のバリエーション」
- ・下地理則
「琉球諸語の代名詞：これまでの記述にもとづく類型化試論」
- ・ディスカッション

「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」研究発表会 [2017年6月18日 (国立国語研究所)]

音声研究班「語のプロソディーと文のプロソディー」平成29年度第1回研究発表会

- ・黄竹佑、陳姿因、広瀬友紀、伊藤たかね
「連続変調は規則なのか—台湾語における連続変調規則違反を例に」
- “Is Tone Sandhi A Rule? —The Case of Rule Violation in Taiwanese Tone Sandhi”

- ▶ 小川晋史
「お笑いコンビ名におけるメンバー名の並び順について」
“On a tendency observed in the ordering of names in comedy duos”
- ▶ 那須昭夫
「ナガラ節のアクセント変異と音韻句」 “Accentual variation of *Nagara-clause* and phonological phrase”
- ▶ 松森晶子
「3モーラのフットを持つ方言—南琉球宮古島の上地と与那覇の三型体系—」
“Ternary feet in Miyako Ryukyuan: Evidence from the three-pattern accentual systems in Uechi and Yonaha”

「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」研究発表会 [2017年7月29日 (大阪大学)]

文法研究班「名詞修飾表現」平成29年度第1回研究発表会

- ▶ 張麟声
「中国語における「後置型連体修飾語」の変遷について」
- ▶ 鄭聖汝
「歴史的観点からみた韓国語の連体修飾節」
- ▶ 梅谷博之
「モンゴル語の連体修飾節：事実の整理と今後の課題」
- ▶ 大崎紀子
「キルギス語の名詞修飾節：分詞節と動名詞節」
- ▶ 江畠冬生
「サハ語の連体修飾節：dien「という」挿入に関する日本語との対照を中心に」
- ▶ 日高晋介
「ウズベク語の連体修飾構造—特に「底の接続助詞化」に着目して—」

「古文教育に資する、コーパスを用いた教材の開発と学習指導法の研究」研究発表会

[2017年7月30日 (群馬大学)]

第1回国語教育活用ワークショップ

- ・「通時コーパス」概要説明
- ・「中納言」講習
- ・国語教育への応用について (演習)

第4回研究発表会

- ▶ 宮城信
「中学校国語教科書に於ける古典教材と現場における古典の授業の取扱いについて」
- ▶ 河内昭浩
「高等学校国語教科書に於ける古典教材について」

「all-words WSD システムの構築及び分類語彙表と岩波国語辞典の対応表作成への利用」研究発表会

[2017年9月15日 (茨城大学)]

- ▶ 新納浩幸
「プロジェクト概要説明」
- ▶ 二宮崇
「シンボルグラウンディングと自然言語処理」

- ▶ 白井清昭
「分類語彙表の意味クラスを識別する語義曖昧性解消」
- ▶ 福本文代
「分野依存に基づく対訳語義の抽出」
- ▶ 古宮嘉那子
「複数のタグセットがついたコーパスによる転移学習の試み」
- ▶ 佐々木稔
「半教師あり深層距離学習を用いた語義曖昧性解消」
- ▶ 新納浩幸
「分類語彙表 ID を語義とした LSTM による all-words WSD」

「議会会議録を活用した日本語のスタイル変異研究」研究発表会 [2017年9月18日 (関西大学)]

- ・講演
 - ▶ 増山幹高
「議会会議録映像検索について」
- ・発表
 - ▶ 山際彰
「時間的意味から空間的意味への意味変化の可能性—「端境」の変遷を通して—」
 - ▶ 木村泰知
「地方議会会議録検索システムタグ付けについて」

「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」研究発表会 [2017年9月23日 (国立国語研究所)]

- ▶ 野田尚史
「趣旨説明」
- ▶ 桑原陽子
「非漢字系中級学習者の教育系論文読解過程における困難点」
- ▶ 守時なぎさ
「日本語学習者による名詞修飾節の解釈とテキストの理解」
- ▶ 中島晶子
「読解過程におけるヨーロッパの初級学習者の辞書使用」
- ▶ 甲田直美
「非漢字系上級学習者の読解プロセスと学習者の行動記録」

「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」研究発表会 [2017年10月14日 (名古屋大学)]

文法研究班「動詞の意味構造」平成29年度第1回研究発表会

- ▶ 松本曜
「動詞「泣く」の百科事典的意味論」
- ▶ 陳奕廷
「複合動詞から見た動詞の意味構造」

「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」研究発表会 [2017年10月29日 (富山大学)]

文法研究班「名詞修飾表現」平成29年度第2回研究発表会

・吉岡乾

「ブルシャスキー語の名詞修飾と名詞化」

・クロヤン・ルイザ, 堀江薫

「アルメニア語と日本語の名詞修飾表現の対照—「外の関係」の名詞修飾表現を中心に—」

・萬宮健策

「スインディー語における名詞修飾の実際」

・高橋清子

「タイ語の名詞修飾要素の分類：名詞修飾の機能体系に関する一考察」

・西岡美樹

「ヒンディー語における名詞句と「形容詞」の再考—インド伝統文法と体言化理論融合の試み—」

「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」研究発表会 [2017年11月4日 (神戸大学)]

「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」第2回共同研究会

・鈴木彩香

「NPCMJ コーパスを用いた研究事例—実例から見るトキ節のテンス解釈—」

・井戸美里

「NPCMJ コーパスを用いた研究事例—否定極性項目の節を超えた認可と副詞タイプについて—」

・Yusuke Kubota and Koji Minishima

“From Keyaki to ABC: A treebank conversion project”

・Alastair Butler, Iku Nagasaki, Stephen Wright Horn, Susanne Miyata, Zhen Zhou, and Kei Yoshimoto

“Parsed corpus annotation (ad)ventures”

「日本語から生成文法理論へ：統語理論と言語獲得」研究発表会 第2回ワークショップ

[2017年12月9-10日 (国立国語研究所)]

2017年12月9日

・奥聰

“Labeling, Scope, and Unaccusativity”

・高橋真彦

“On the Optionality of Raising in the Japanese ECM Construction”

・越智正男

“Nominative/Genitive Conversion and Feature Inheritance”

・和泉悠

“The Semantics of NPs in NP Languages”

・Zeljko Bošković

“Labeling, Scope, and Unaccusativity”

2017年12月10日

・Myung-Kwan Park

“The Syntax of Multiple Fragments in Korean: Scrambling, Overt Absorption, and Max-Elide”

・杉崎鉢司

“Children’s Knowledge about VP-ellipsis in English and Japanese”

- ・高野祐二
“Exploring External Merge: A New Form of Sideward Movement”
- ・村杉恵子
“On the Acquisition of Labeling”
- ・高橋大厚
“On the MaxElide Effect in Japanese”

「議会会議録を活用した日本語のスタイル変異研究」研究発表会 [2017年12月10日 (国立国語研究所)]

- ・講演
 - ・兼子次生
「速記文化と会議録と整文—話し言葉書き言葉化技術の多様性—」
- ・発表会
 - ・内田ゆず, 木村泰知, 高丸圭一
「会議録コーパスの活用方法の検討—議員の活動を可視化するために—」
 - ・馬場真琴
「配慮表現「させていただく」の変換—会議録にみられる用例を中心に—」
 - ・川瀬卓
「地方議会会議録に見る接続表現の地域差」
 - ・朝日祥之
「名古屋市議会会議録にみる名古屋方言的特徴に関する考察」

「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」研究発表会 [2017年12月12日 (早稲田大学)]

ワークショップ: Research Methods for the Penn Parsed Corpora of Historical English (PPCHE)
・講師: Anthony Kroch and Beatrice Santorini

「「具体的な状況設定」から出発する日本語ライティング教材の開発」研究発表会

[2018年1月28日 (国立国語研究所)]

- ・趣旨説明 (小林ミナ)
- ・基調講演
 - ・定延利之
「文字コミュニケーションと状況」
- ・研究発表
 - ・千石昂, 日野純子, 船橋瑞貴
「書く/打つ言語生活の実態調査—調査デザインと予備調査報告—」
 - ・副田恵理子, 大和えり子
「『書く』言語的スキルとは—LINEによる待ち合わせ場面の分析から—」
 - ・向井裕樹, 松田真希子
「複言語・複文化社会における日本語使用者のライティングプロセス—サンパウロとブラジリア在住の日系人を例にして—」

「北米における日本関連在外資料調査研究・活用—言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築」研究発表会 [2018年2月17-18日 (国立歴史民俗博物館)]

「ミシガン大学岡山分室と日本・アメリカの人文科学—インテリジェンス・日本語教育・地域研究—」

2018年2月17日

- ・第一部 基調報告

・中生勝美

「アメリカの日本研究：ミシガン大学の日本研究・戦争・陸軍日本語学校・日本研究センター」

- ・第二部 アメリカの日本語教育

・朝日祥之

「戦時中の日本語教育と陸軍日本語学校」

・高田智和

「陸軍日本語学校の漢字教育—Philip M. Foisie paper から—」

2018年2月18日

- ・第三部 ミシガン大学日本研究センターの活動と日本の人文科学研究

・篠原徹、柿崎京一（コーディネーター：河村能夫）

「ミシガン大学岡山分室と戦後日本の地域研究を語る」

・谷口陽子

報告「ミシガン大学岡山分室の研究成果」

- ・総合討論

・原山浩介

話題提供「人文科学研究の再審／再考：岡山フィールドからの問い」

「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」研究発表会 [2018年2月20日 (キャンパスプラザ京都)]

文法研究班「動詞の意味構造」平成29年度共同研究発表会

・中島浩貴

「フレーム意味論から見た英語名詞転換動詞」

・岩田彩志

「結果構文とEATフレーム」

「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」研究発表会 [2018年3月4日 (彦根勤労福祉会館)]

「日本語基本動詞ハンドブック」班 平成29年度研究発表会 (司会：今村泰也)

・糸山洋介

「多義語の意味と文型」

・加藤恵梨

「『気にかかる』『心にかかる』『気になる』の意味分析」

・永井涼子

「<変わる><変える>の作成過程における問題」

・プラシャント・パルデシ

「来年度以降の計画と論文集刊行について」

- ・全体討論、総括

「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」研究発表会 [2018年3月5日 (早稲田大学)]

第13回音韻論フェスタ（2018）プロソディー・セッション

- ・古川慧，広瀬友紀
「英語の強勢移動（stress shift）におけるアクセント削除の実験的検証」
- ・黄竹佑，古川慧，広瀬友紀
“Ichiro vs. Saburo: A production experiment of English antepenultimate stress assignment”
- ・平田秀
「熊野灘沿岸地域諸方言における式の対立」
- ・松森晶子
「奄美大島瀬戸内町の音節構造」
- ・Armin Mester
“Kattobase: The linguistic structure of Japanese baseball chants”

「議会会議録を活用した日本語のスタイル変異研究」研究発表会 [2018年3月9日（東洋大学）]

- ・会議録検索システム講習会
 - ・乙武北斗，高丸圭一
「地方議会会議録検索システムの概要と操作方法」
- ・発表会
 - ・田附敏尚
「津軽方言における「そうすれば」は気づかない方言か」
 - ・二階堂整
「福岡県議会における高年層の発言」
 - ・太田一郎
「会議録に載らない「ですね」について」
 - ・二階堂整
「会議録学の提言」

「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」研究発表会 [2018年3月11日（国立国語研究所）]

平成29年度第2回研究発表会「指示詞・代名詞（本土諸方言）」

- ・研究発表
 - ・野間純平
「島根県出雲方言の指示詞・代名詞」
 - ・三樹陽介
「八丈語三根方言の指示詞・代名詞」
 - ・白岩広行
「福島方言の記述の概況と指示詞・代名詞調査報告」
 - ・佐々木冠
「千葉県南房総市三芳方言の指示詞・代名詞」
 - ・中川奈津子
「青森県野辺地方言の指示詞・代名詞」
 - ・金田章宏
「山形南陽方言の指示の諸相」

- 基調報告
 - 下地理則
「指示詞・代名詞総括」

「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」研究発表会 [2018年3月17日 (サンフランシスコ州立大学)]

文法研究班「名詞修飾表現」平成29年度共同研究発表会

International Workshop: "Nominalization and Noun modification"

国際ワークショップ「名詞化と名詞修飾」

- Opening address
- Talks
 - SHIBATANI Masayoshi

“The grammar of noun modification: Beyond Teramura’s internal and external relations”

- CHUNG Sung-Yeo

“Nominal-based nominalization in Korean”

- Peter HOOK and Prashant PARDESHI

“Marathi’s Prenominal Noun-modifying Constructions: Their Protean Functions and Diverse Morphologies”

- HORIE Kaoru

“Functional utility of noun modification and nominalization relative to *renyō shūshoku setsu* (‘predicate modification clauses’) : A comparative study”

- MATSUMOTO Yoshiko

“General Noun-Modifying Clause Constructions in Japanese”

- Discussion

- Closing address

「all-words WSD システムの構築及び分類語彙表と岩波国語辞典の対応表作成への利用」研究発表会

[2018年3月25日 (国立国語研究所)]

- 新納浩幸
「プロジェクト概要説明」

- 新納浩幸
「双方向LSTMによるall-words WSDの半教師あり学習」

- 佐々木稔
「モダリティ表現を考慮しall-words WSD」

- 内田諭
「ことばの意味と多義性：語義曖昧性解消タスクのための言語学的基礎知識」

- 古宮嘉那子
「分類語彙表のall-wordsの語義曖昧性解消と岩波国語辞典の利用」

- 浅原正幸, 近藤明日子, 加藤祥
「国語研で開発している語義タグ付きデータと辞書」

- 福本文代
「語の分散表現に基づく辞書間の名詞語義対応」

- 白井清昭
「文内の語の分類語彙表の分類項目を識別する教師なし機械学習手法」

全体討論とまとめ

「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」研究発表会

[2018年3月25日（向山日添公民館 峰越の館）]

国立国語研究所・椎葉民俗芸能博物館 共同研究プロジェクト

椎葉方言調査 中間報告会

・あいさつ（甲斐眞后）

・プロジェクトの説明

　・木部暢子

「ことばは文化の源」

・発表

　・新永悠人

「宮崎県椎葉村尾前方言のカマデとカマサキ」

　・坂井美日

「<あい>の形は集落それぞれ」

　・山本友美

「“かてへり”の由来を探ってみよう」

・質疑応答

(4) NINJAL コロキウム

日本語・言語学・日本語教育のさまざまな分野における最先端の研究をテーマとした国内外の優れた研究者による講演会。研究者・大学院学生のみならず、一般にも公開。原則として月1回、国立国語研究所で開催している。2017年度は下記12件を開催した。

第79回 2017年4月18日

　・岩崎典子（ロンドン大学 SOAS Senior Lecturer）

「日本留学前後の英語話者の日本語力をめぐって—相互行為能力としての「話す力」を考える—」

第80回 2017年4月25日

　・Caroline HEYCOCK（エдинバラ大学教授）

“Introducing SCOSYA: The Scots Syntactic Atlas. Aims, Methodologies, Preliminary Results”

第81回 2017年6月13日

　・Andrej BEKEŠ（リュブリャーナ大学教授）

「言語単位の境界指示から見た括弧構造」

第82回 2017年7月4日

　・Amy J. SCHAFER（ハワイ大学准教授）

“Contrastive Prosody and Grammatical Aspect in Native and Non-native Reference Resolution”

第83回 2017年9月19日

　・岡崎友子（東洋大学教授/国立国語研究所客員教授）

「古代日本語指示詞再考」

第84回 2017年10月31日

　・Katsue Akiba REYNOLDS（ハワイ大学名誉教授）

「歌舞伎自称詞の歴史言語学的研究—過去から現在を見る試み」

第 85 回 2017 年 11 月 14 日

- ・吉本啓（東北大大学教授/国立国語研究所客員教授）
「統語・意味解析コーパス NPCMJ のアノテーション」

第 86 回 2017 年 12 月 8 日

- ・Anthony KROCH (ペンシルベニア大学教授) and Beatrice SANTORINI (ペンシルベニア大学 Senior Fellow)
“Constructing a Syntactically Annotated Corpus for Grammatical Research”

第 87 回 2017 年 12 月 12 日

- ・松本善子（スタンフォード大学教授）
「観点を変える日本語の連体修飾構造」

第 88 回 2018 年 1 月 16 日

- ・富岡諭（デラウェア大学教授/外来研究員）
「条件節と主題：その類似性と相違性に関する考察」

第 89 回 2018 年 1 月 23 日

- ・松井智子（東京学芸大学教授）
「言語的メタ表象と心理的メタ表象の発達—多言語環境で育つ子どもを例として」

第 90 回 2018 年 3 月 27 日

- ・片上大輔（東京工芸大学教授）
「人間と共に生きるシステム～言語と仕草で雰囲気を作る～」

(5) NINJAL サロン

国立国語研究所の研究者（共同研究員を含む）を中心として、おののの研究内容を紹介することによって、情報交換をおこなう場である。外部からの聴講も歓迎している。2017 年度は第 158 回から第 169 回まで、12 回開催した。

第 158 回 2017 年 4 月 11 日

- ・石本祐一（コーパス開発センター特任助教）、高田智和（言語変化研究領域/研究情報発信センター准教授）
「研究資料室所蔵音源データベース」

第 159 回 2017 年 5 月 30 日

- ・宇佐美まゆみ（日本語教育研究領域教授）
「ディスコース・ポライトネス理論」の新展開—「時間」、「フェイス充足度」、「フェイス均衡原理」という概念を中心に—」

第 160 回 2017 年 6 月 6 日

- ・山田真寛（IR 推進室特任助教）、中川奈津子（日本学術振興会特別研究員（PD）/千葉大学）
「言語復興の港」プロジェクト」

第 161 回 2017 年 6 月 20 日

- ・近藤明日子（コーパス開発センタープロジェクト非常勤研究員）
「近代文語文における一人称代名詞の通時的变化」

第 162 回 2017 年 6 月 27 日

- ・西内紗恵（理論・対照研究領域 プロジェクト非常勤研究員）
「次元形容詞はどんなときに使われるか—日本語とスペイン語の対照研究—」

第 163 回 2017 年 7 月 25 日

- ・今村泰也（日本語教育研究領域プロジェクト PD フェロー）
「基本動詞ハンドブックの開発—視聴覚コンテンツを中心に—」

第 164 回 2017 年 9 月 12 日

- ・河合将志（IR 推進室 / 大阪大学招へい研究員）
「機械学習アルゴリズムを用いたテキストデータのカテゴリー判別」

第 165 回 2017 年 10 月 3 日

- ・熊谷学而（理論・対照研究領域プロジェクト PD フェロー）
「日本語の語形成における同一性回避：実験的アプローチによる探求」

第 166 回 2017 年 10 月 10 日

- ・井戸美里（理論・対照研究領域プロジェクト PD フェロー）
「「ハ」の後接」から見るとりたて詞の否定呼応現象」

第 167 回 2017 年 11 月 7 日

- ・越智綾子（日本語教育研究領域プロジェクト非常勤研究員）
「日本語のムードを文法記述する—選択体系機能言語学の観点から」

第 168 回 2017 年 12 月 26 日

- ・岡照晃（コーパス開発センター特任助教）
「乱択アルゴリズムを使った『国語研日本語ウェブコーパス』からの UniDic 新規語彙素候補の自動抽出」

第 169 回 2018 年 3 月 20 日

- ・大島一（言語変異研究領域プロジェクト PD フェロー）
「日本語の「ら」における複数性について：ハンガリー語との対照」

（6）講習会・セミナー

2017 年 5 月 16 日

- ・第 4 回 BTSJ 活用方法講習会（国立国語研究所）

2017 年 6 月 10 日

- ・第 5 回 BTSJ 活用方法講習会（国立国語研究所）

2017 年 6 月 24 日

- ・第 6 回 BTSJ 活用方法講習会（西安外国语大学）

2017 年 7 月 6 日

- ・統語・意味解析コーパス（NPCMJ）チュートリアル（慶應義塾大学）

2017 年 9 月 7 日

- ・第 3 回コーパス利用講習会（国立国語研究所）

- ・コース 1

- 全文検索システム「ひまわり」講習会

- ・コース 2

- オンライン検索システム「中納言」講習会

- ・コース 3

- Praat 講習会

2017 年 9 月 9 日

- ・第7回 BTSJ 活用方法講習会（国立国語研究所）

2017年11月1日

- ・統語・意味解析コーパス（NPCMJ）チュートリアル（お茶の水女子大学）
講師：Alastair Butler, Stephen Horn and Iku Nagasaki

2017年11月4日

- ・統語・意味解析コーパス（NPCMJ）チュートリアル（神戸大学）
講師：Alastair Butler, Stephen Horn and Iku Nagasaki

2018年1月20日

- ・平成29年度 国立国語研究所日本語教師セミナー（国内）

「地域に定住する外国人の日本語使用と言語生活について考える—縦断調査の結果や多言語社会としての日本の現在を踏まえながら—」（国立国語研究所）

‣ 野山広, 北川裕子

「外国人散在地域（A県B市）での10年間の縦断調査を通して見えてきたこと」

‣ 福永由佳, 新矢麻紀子

「実践現場での（調査者と被調査者の）関係構築と形成的フィールドワーク」

‣ 石崎雅人, 村田晶子

「調査方法の在り方と Welfare Linguistics」

2018年2月25日

- ・平成29年度 国立国語研究所日本語教師セミナー（海外）

「学習者は日本語をどう理解しているか—聴解・読解の困難点とその指導—」（ハーバード大学）

‣ 野田尚史

「日本語学習者の聴解困難点と聴解技術」

‣ 石黒圭

「日本語学習者の読解における語彙理解の困難点と推測ストラテジー」

2018年3月19日

- ・第4回コーパス利用講習会（国立国語研究所）

‣ コース1

全文検索システム「ひまわり」講習会

‣ コース2

オンライン検索システム「中納言」講習会

7 センター・研究図書室の活動

(1) 研究情報発信センター

日本語研究の国際拠点である国立国語研究所の一部として、情報発信に関わる研究開発や、研究資料の収集・管理をおこなっている。

- ・利用者の利便性を向上させるため、研究所メインサイト（ホームページ）の改修を実施し、デザイン・レイアウトの変更、メニュー・コンテンツの整理をおこなった。
- ・「国立国語研究所研究資料室収蔵資料」ウェブサイトにおいて、収蔵資料群概要 12 点を追加公開するとともに、収蔵雑誌について「中央資料庫未製本雑誌所蔵リスト」を一般公開した。
- ・国語研の過去の研究で収集した映像資料の所内試視聴システム（所蔵映像データベース）を制作し、配信サービスを開始した（278 点）。
- ・音源資料の所内試聴システム（所蔵音源データベース）の改修を行うとともに、17,174 点を追加収録した（計 17,662 点）。
- ・収蔵資料の保全と再利用のため、音源資料（カセットテープ等）と映像資料（ベータビデオテープ等）のメディア変換を行った（全 2,224 点）。
- ・「日本語研究・日本語教育文献データベース」を定期的に更新し、新規データ 5,300 件を追加（計約 23 万件）するとともに、他機関のリポジトリ等で Web 公開されている論文（1985 年～）について論文本文へのリンク付与作業を完了した。
- ・「国立国語研究所学術情報リポジトリ」において『言語資源活用ワークショップ発表論文集』（2016 及び 2017：85 件）、『国立国語研究所論集』（13 号及び 14 号：30 件）、『国立国語研究所報告』（主に図書：177 件）、『幼児のことば資料』（6 件）、年報、要覧、記念誌等（75 件）を公開し、DOI 登録をおこなった。
- ・『国立国語研究所論集』13 号（2017 年 7 月）、14 号（2018 年 1 月）を刊行した。
- ・一般からのことばについての質問や相談に対応した（計 459 件）。
- ・コンピュータシステムの脆弱性対応等のセキュリティ対策を実施し、ネットワーク・サーバーの運用保守を実施するとともに、コンピュータ室電源容量の増設工事、入退室記録用のカメラ設置などをおこなった。

(2) コーパス開発センター

研究系と連携して言語資源の開発整備及び基礎研究を進め、言語資源に関する共同利用の利便性を高めることを目的としている。具体的には、言語コーパスにくわえ、形態素解析用電子化辞書、コーパス検索ツールなどの研究開発を進めている。

- ・『言語資源活用ワークショップ』（LRW2017）を開催した（2017 年 9 月 5 日～6 日、総参加者数 123 名、発表件数 36 件）。また併設イベントとして、国立情報学研究所データセット共同利用研究開発センターと共同で「音声資源活用シンポジウム」を開催した（2017 年 9 月 7 日、総参加者数 114 名、発表件数 6 件）。
- ・情報・システム研究機構：機構間連携・文理融合プロジェクトに 2 件参画した。
 - ・「言語における系統・構造・変異とその数理」（研究代表者：持橋大地（統計数理研究所））：「言語における系統・変異・多様性とその数理」シンポジウム開催（2018 年 2 月 2 日、参加者 55 名）。
 - ・「わかりやすい情報伝達の実現に向けた言語認知機構の解明とその工学的応用」（研究代表者：相澤彰子（国立情報学研究所））：シンポジウム「日本語学習者はどのように文章を理解しているのか—目の動きから見えてくるもの—」開催（2018 年 3 月 3 日、参加者 116 名、日本語教育研究領域と合同）。
- ・2017 年 9 月に『日本語話し言葉コーパス』の『中納言』上での音声配信機能を試験公開し、2018 年 3 月に同 USB 版契約者全員に同サービスの提供をはじめた。
- ・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『日本語歴史コーパス』『日本語話し言葉コーパス』『名大会話コーパス』の 4 つを対象とした包括的検索系の試作版を開発した。

- ・自動形態素解析用辞書 UniDic の公開サイトを新設一元化し、分散していた情報をサイト内の用語集として集約した（サイトアクセス数：19,076）。また、BCCWJ と CSJ での短単位の出現頻度・連接頻度に基づく統計的言語解析モデル unidic-cwj-2.2.0 と unidic-csj-2.2.0 を構築、UniDic の 7 年ぶりのメジャーアップデートとして公開し、それぞれ 510 件、210 件のダウンロードがおこなわれた。年度末には Windows 向け GUI、ChaMame を同梱した unidic-cwj-2.3.0 と unidic-csj-2.3.0 を公開した。
- ・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『日本語話し言葉コーパス』の語彙表・語数表の整備をおこなった。
- ・各種研究成果を発表した。国際論文誌 1 件、国内論文誌 5 件（技術資料 1 件含む）、ブックチャプター 2 件（海外 1 件、国内 1 件）、解説 2 件、国際会議発表（11 件）、国内学術発表 26 件（言語資源活用ワークショップ 2017 発表分を除く）
- ・以下の言語資源を新規公開した。
 - UD Japanese-BCCWJ
 - UD Japanese-Modern
 - unidic-cwj-2.3.0_beta, unidic-csj-2.3.0_beta
 - wlsp2unidic-1.0.1（分類語彙表–UniDic 対応表）
 - nwjc2vec skip-gram モデル
 - 『分類語彙表増補改訂版データベース』（ver.1.0.1）
 - 『鶴岡調査データベース』（言語変化研究領域と合同）
 - 『日本語話し言葉コーパス』中納言版（発音情報拡張）（音声言語研究領域と合同）
 - 『名大会話コーパス』中納言版（メタ情報拡張）（音声言語研究領域と合同）
 - 『現日研・職場談話コーパス』中納言版（音声言語研究領域と合同）
 - 『日本語歴史コーパス』「奈良時代編」「室町時代編 II」「江戸時代編 I」中納言版（言語変化研究領域と合同）
- ・以下の各種講習会を実施した。
 - 全文検索システム『ひまわり』講習会（2017 年 9 月 7 日、参加者 9 名）
 - オンライン検索システム『中納言』講習会（2017 年 9 月 7 日、参加者 17 名）
 - 『Praat』講習会（2017 年 9 月 7 日、参加者 12 名）
 - 『日本語ウェブコーパス』検索ツール『梵天』講習会（2017 年合計 13 回、参加者合計 411 名）
 - コーパス検索系講習会（2017 年 12 月 10 日、参加者 12 名）
 - 視線走査装置講習会（2018 年 3 月 2 日、参加者 2 名）
 - コーパス検索系（『梵天』・『ChaKi.NET』）講習会（2018 年 3 月 20 日、参加者 19 名）
 - 所内向け勉強会・講習会
 - Python 勉強会（9 か月間）
 - Praat 講習会（半年間）
 - UniDic Explorer 講習会（4 回）
 - 形態論情報修正作業講習会（1 回）
- ・Youtube Live! による『梵天』講習会のビデオ配信を行うとともに、英語版も作成し、ウェブサイト上で公開した。

（3）研究図書室

全国で唯一の日本語に関する専門図書館で、日本語研究および日本語に関する研究文献・言語資料を中心に、日本語教育、言語学など、関連分野の文献・資料を収集・所蔵している。

カードキーによる入退室の管理及び照明の人感センサーを整備し、所内教職員は夜間・休日も利用可能である。また、閲覧室に新着コーナーを設け、新着雑誌・図書を利用しやすい環境に整えている。

- ・開室日時：月曜日～金曜日 9 時 30 分～17 時（土曜日・日曜日・祝休日・年末年始・毎月最終金曜日は休室）
- ・主なコレクション：

- ・東条操文庫（方言）
 - ・見坊豪紀文庫（辞書）
 - ・林大文庫（国語学）
 - ・大田栄太郎文庫（方言）
 - ・カナモジカイ文庫（文字・表記）
 - ・輿水実文庫（国語教育）
 - ・保科孝一文庫（言語問題）
 - ・藤村靖文庫（音声科学）
 - ・中村通夫文庫（国語学）
- ・「国立国語研究所 藏書目録データベース」をウェブ検索できる。
 - ・図書館間相互協力サービス（NACSIS-ILL）により、所属機関の図書館を通して複写物の取り寄せや図書の貸出を受けることができる。
 - ・所蔵資料数（2018年4月1日現在）

	図 書	雑 誌
日本語	122,747 冊	5,366 種
外国語	31,866 冊	525 種
計	154,613 冊	5,891 種

※ 視聴覚資料など 7,431 点を含む。

III

國際的研究協力

国立国語研究所全体の研究テーマである「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」をグローバルな観点から推進するため、国際的な研究連携体制の多様化を図っている。

1 世界の大学・研究機関との提携

世界各地の大学や研究機関等と、共同研究の促進や研究者の交流等を目的とした学術交流協定を締結している。協定先は、海外で日本語や日本語教育を研究している機関に加え、言語学や情報科学の研究機関にも及び、これらの協定により、日本語研究から世界の言語研究へ、世界の言語研究から日本語研究へ、という両方向の交流を強化し、世界規模で研究を促進することをめざしている。

協定締結先（2018年3月31日時点）

- ・中央研究院（台湾）：2014.3-
- ・北京外国语大学 北京日本学研究センター（中国）：2014.6-
- ・オックスフォード大学 人文科学部（イギリス）：2015.7-
- ・ペンシルベニア大学 言語学科（アメリカ）：2016.7-
- ・ヨーク大学 言語学科（イギリス）：2016.7-
- ・ブランドイス大学 情報科学科（アメリカ）：2016.12-
- ・コロラド大学ボルダー校 言語学科（アメリカ）：2017.1-
- ・ネール大学 言語学科（インド）：2017.7-
- ・ミシガン大学 日本研究センター（アメリカ）：2017.8-
- ・東吳大學 日本語文學系（台湾）：2018.1-
- ・ハワイ大学マノア校（アメリカ）：2018.2-

2 国際シンポジウム・国際会議の開催

世界における日本語・日本語教育研究の発展のため、国際シンポジウムを毎年数回開催すると同時に、海外に拠点を持つ国際学会を国語研に招致している（2017年度開催のものは45ページに掲載）。

3 日本語研究英文ハンドブック

言語学関係の出版社として傑出した出版活動で世界をリードする De Gruyter Mouton（ドゥ・グロイター・ムートン社：ベルリン／ボストン）からの申し出により、国立国語研究所の優れた研究成果を英文で出版する包括的な協定を2012年7月に締結した。この協定に基づき、2014年から、日本語および日本言語学の研究に関する包括的な日本語研究英文ハンドブック、Handbooks of Japanese Language and Linguisticsシリーズ（全12巻予定）を順次刊行している。

このシリーズは、それぞれの領域におけるこれまでの重要な研究成果を俯瞰し、現在における最先端の研究状況をまとめるとともに、今後の研究方向にも示唆を与えるもので、国立国語研究所関係者（専任教員および客員教員、諸大学の共同研究員）だけでなく、各領域における国内外の第一線の研究者が執筆を担当し、国語研が中心となって編集を行う大規模な国際的プロジェクトである。これにより大学共同利用機関としての国語研の知名度を世界的に高めるだけでなく、日本語研究の成果ならびに動向を世界に広く問うことによって言語学の発展に資するとともに、日本語研究自体の進展にも寄与することとなる。

編集主幹

柴谷方良（ライス大学教授）Masayoshi Shibatani (Professor, Rice University)

影山太郎（国立国語研究所所長）Taro Kageyama (Director-General, NINJAL)

シリーズの構成（全巻英文、各巻600–700ページ）

Vol. 1: *Handbook of Japanese Historical Linguistics*

Edited by Bjarke Frellesvig, Satoshi Kinsui, and John Whitman

Vol. 2: *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*（既刊）

Edited by Haruo Kubozono

ISBN: 978-1-61451-198-4

Vol. 3: *Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation*（既刊）

Edited by Taro Kageyama and Hideki Kishimoto

ISBN: 978-1-61451-209-7

Vol. 4: *Handbook of Japanese Syntax*（既刊）

Edited by Masayoshi Shibatani, Shigeru Miyagawa, and Hisashi Noda

ISBN: 978-1-61451-661-3

Vol. 5: *Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics*

Edited by Wesley Jacobsen and Yukinori Takubo

Vol. 6: *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*（既刊）

Edited by Prashant Pardeshi and Taro Kageyama

ISBN: 978-1-61451-407-7

Vol. 7: *Handbook of Japanese Dialects*

Edited by Nobuko Kibe and Tetsuo Nitta

Vol. 8: *Handbook of Japanese Sociolinguistics*

Edited by Fumio Inoue, Mayumi Usami, and Yoshiyuki Asahi

Vol. 9: *Handbook of Japanese Psycholinguistics*（既刊）

Edited by Mineharu Nakayama

ISBN: 978-1-61451-121-2

Vol. 10: *Handbook of Japanese Applied Linguistics*（既刊）

Edited by Masahiko Minami

ISBN: 978-1-61451-183-0

Vol. 11: *Handbook of the Ryukyuan Languages*（既刊）

Edited by Nobuko Kibe and Tetsuo Nitta

ISBN: 978-1-61451-115-1

Vol. 12: *Handbook of the Ainu Languages*

Edited by Anna Bugaeva

4 海外の研究者の招聘・受入

海外の研究者を専任や客員教員として招聘すると同時に、研究プロジェクトに共同研究員として多数の参画を得ている。また、海外の研究者や大学院生が国語研に滞在して研究を行う、外来研究員（2017年度受入9名）や特別共同利用研究員（2017年度受入2名）として受け入れている。

IV

社会連携と広報

1 消滅危機言語・方言の調査・保存・分析

2009年にユネスコが発表した世界各地の消滅危機言語（話者が非常に少なくなってきた言語）には、日本国内の8つの言語（方言）が含まれている。国立国語研究所ではこれらの諸方言を集中的に記録し、言語学的に分析するプロジェクトを進めている。これによって、世界の危機言語研究に貢献すると同時に、方言を使用している地域社会とその文化の活性化に寄与することを目的としている。

2 日本語コーパスの拡充

ある言語の全貌を正確に把握するためには、その言語を大量に収集し、分析する必要がある。書き言葉や話し言葉の資料を、大量かつ体系的に収集し、それを詳細に検索できるようにしたものを、「コーパス」といい、国立国語研究所では日本語コーパスの整備を進め、現代の標準的な日本語に加え、方言や歴史的な日本語、学習者の日本語等、様々なコーパスを構築・公開し、日本語研究だけでなく、情報処理産業や教育界等、多方面に提供している。

3 第二言語（外国語）としての日本語教育研究

近年、日本で生活している外国人や留学生の増加にともなって日本語学習に対するニーズが拡大・多様化している中で、国立国語研究所では、日本語を母語としない人の学習・習得について基礎的な研究をおこない、国内外の日本語教育を学術的に支援している。

4 地方自治体との連携

立川市歴史民俗資料館との相互協力に関する合意書による活動

- ・子ども向け一般公開イベントニホンゴ探検において、歴史民俗資料館職員による所蔵品の展示及び説明をおこなった（2017.7.15）。
- ・立川市女性総合センター・アイムにおいて、野山広（日本語教育研究領域准教授）による共同企画講演会「立川の歴史における多文化共生」を開催した（2018.1.21）。

5 見学・研修・視察等

団体見学：5件（専修大学、東京外国語大学など）

研修対応：2件（文部科学省関係機関職員研修生実地研修など）

視察対応：5件（文部科学省研究振興局長など）

6 学会等の後援・共催

- ・平成29年度日本語教育能力検定試験（2017.10.22）
主催者：公益財団法人日本国際教育支援協会
- ・日本語ボランティアシンポジウム2017「わからない日本語、使ってない？～外国人に伝わる『やさしい日本語』を考えよう～」（2017.12.2）
主催者：公益財団法人名古屋国際センター、開催地：名古屋国際センター
- ・歴史的典籍オープンデータワークショップ（アイデアソン）（2017.12.8）
主催者：国文学研究資料館、開催地：大阪市立大学

- ・シンポジウム「ことばのプロフェッショナル」（2018.1.20）
主催者：言語系学会連合，開催地：東京証券会館ホール
- ・第16回全養協公開講座（2018.1.30）
主催者：一般社団法人全国日本語教師養成協議会，開催地：中央大学駿河台記念館
- ・「日本語のバリエーションと日本語教育」（2018.3.2）
主催者：フランス国立東洋言語文化研究学院日本研究センター，開催地：パリ・ディドロ大学
- ・第9回産業日本語研究会・シンポジウム（2018.3.5）
主催者：高度言語情報融合フォーラム（ALAGIN），一般財団法人日本特許情報機構，開催地：丸ビルホール

7 広報

（1）刊行物

『国語研 ことばの波止場』（NINJAL Research Digest）

国立国語研究所の研究活動及び研究成果に関する情報を研究者コミュニティだけでなく、大学生から一般市民の方までが読んで楽しめる研究情報誌。2017年度は第2号、第3号を発行した。

- ・Vol. 2 (2017.9)
特集：日本語の個性①方言研究・対照言語研究・日本語教育研究、コラム、研究者紹介、著書紹介
- ・Vol. 3 (2018.3)
特集：日本語の個性②統語意味解析コーパス研究・日本語史研究・音声言語研究、国立国語研究所・新所長から、研究者紹介、著書紹介

『国立国語研究所要覧 2017/2018』

国立国語研究所の特色や研究系・センターの活動、共同研究プロジェクト等の紹介冊子。

『国立国語研究所リーフレット』

『国立国語研究所英文リーフレット』

（2）Web発信等

国立国語研究所ウェブサイト（<https://www.ninjal.ac.jp/>）

各種催し物、データベース等、国立国語研究所の最新情報からこれまでに蓄積された研究成果まで、幅広いコンテンツを紹介している。

メールマガジン「国語研からの御案内」

シンポジウム、コロキウム等のイベント、データベース紹介、職員公募など国立国語研究所からお知らせしたい事項について登録者に発信している。原則として月2回発行。

「国語研ムービー」

国立国語研究所の研究を分かりやすく紹介した動画を制作し、Web配信（Youtube）やイベント時の上映をおこなっている。2017年度は以下の動画を制作・公開した。

- ・お答えします「文字の疑問」（1）字形、（2）変体仮名
- ・ことばのミニ講義「ん!？」、ことばのミニ講義「コトバはこころをうつしだす鏡～「上下」というけれど「下上」といわるのはなぜ～」

（3）一般向けイベント

NINJAL フォーラム

国立国語研究所が主体となって実施する研究や他機関との連携研究による優れた成果を、学術界だけでなく広く一般の方々に知っていただくとともに、社会との連携を積極的に推進して社会貢献に資するという

観点からフォーラムを開催している。2017年度は、第11回、第12回を開催した。

第11回「オノマトペの魅力と不思議」[2017年9月10日(立命館大学大阪いばらきキャンパス)]

- ・講演

- ・小野正弘(明治大学)

- 「オノマトペの意味は変化するか?」

- ・竹田晃子(立命館大学)

- 「オノマトペにも方言があるか?」

- ・秋田喜美(名古屋大学)

- 「外国語にもオノマトペはあるか?」

- ・坂本真樹(電気通信大学)

- 「「もふもふ」はどうやって生まれたか?」

- ・パネルディスカッション

- ・コーディネーター: 窪塙晴夫(国立国語研究所)

- ・パネリスト: 小野正弘、竹田晃子、秋田喜美、坂本真樹

第12回「ことばの多様性とコミュニケーション」[2018年2月3日(東京証券会館)]

- ・講演PART I〔地理的バリエーション〕

- ・田窪行則(国立国語研究所)

- 「方言はどこまで通じるか?」

- ・大西拓一郎(国立国語研究所)

- 「方言の生まれるところ」

- ・講演PART II〔社会的・機能的バリエーション〕

- ・金水敏(大阪大学)

- 「ポップカルチャーと役割語」

- ・定延利之(京都大学)

- 「ことばとキャラ」

- ・講演PART III〔外国語との係わりにおけるバリエーション〕

- ・石黒圭(国立国語研究所)

- 「日本語学習者のお国柄」

- ・宇佐美まゆみ(国立国語研究所)

- 「ていねいさは世界共通か?」

- ・パネルディスカッション「どうなる? これからの日本語」

- ・コーディネーター: 野田尚史(国立国語研究所)

- ・パネリスト: 田窪行則、大西拓一郎、金水敏、定延利之、石黒圭、宇佐美まゆみ

その他

- ・大学共同利用機関シンポジウム2017(出展)(2017.10.8)

- 開催場所: アキバ・スクエア

- ・「ことば」展示(「立川体験スタンプラリー」対象イベント)(2017.10.14)

- 開催場所: 国立国語研究所

(4) 児童・生徒向けイベント

NINJAL職業発見プログラム

中学生や高校生向けに、言語学や日本語あるいは日本語教育を研究することを通じて、学問のたのし

さや素晴らしさを知つてもらうためのプログラム。

- 2017 年度受入校

- 渋谷中学高等学校 (2017.4.28)
- 仙台第一高等学校 (2017.7.7)
- 兵庫高校 (2017.8.1)
- 宮城野高校 (2017.8.4)
- 明星学園中学校 (2017.8.10)
- 長岡高校 (2017.10.13)
- 横浜翠嵐高校 (2017.10.20)
- 愛知教育大学付属岡崎中学校 (2017.12.20)
- 開智高校 (2018.3.16)
- 群馬県立中央中等教育学校 (2018.3.16)

NINJAL ジュニアプログラム

小学生を対象に、子どもたちの身近にある題材を取り上げ、楽しみながら普段使っている日本語について考えられるような、ワークショップや出前授業などを実施した。

- 「作ってあそんで 辞書カルタ ことば博士になろう」 (2017.8.1)

場所：江戸川区子ども未来館、対象：小学校 3–6 年生、講師：柏野和佳子（音声言語研究領域准教授）

ニホンゴ探検 2017—1 日研究員になろう—

児童・生徒・一般を対象に研究所を公開し、「日本語」「ことば」の魅力と不思議に触れられるプログラムが人気のイベント。2017 年度は 7 月 15 日に国立国語研究所にて実施した。

- ことばのミニ講義

- 原田走一郎（言語変異研究領域特任助教）[共同企画：青井隼人（言語変異研究領域特任助教）]
「ん!?」
- 影山太郎（所長）

「コトバはこころをうつしだす鏡～「上下」というけれど「下上」といわないのはなぜ～」

- 日本語かかりうけゲーム

- 辞書引きコーナー
- にほんごスタンプラリークイズ
- れきみんワークショップ

その他

- 平成 29 年度子ども霞が関見学デー（出展）[2017 年 8 月 2–3 日（文部科学省）]

V

大学院教育と若手研究者育成

1 連携大学院

一橋大学大学院言語社会研究科・東京外国语大学大学院総合国際学研究科

2005 年度から、一橋大学との連携大学院プログラムを実施している。この連携大学院（日本語教育学位取得プログラム）は、日本語教育学、日本語学、日本文化に関する専門的な知識を備えた研究者や日本語教育者を育成することを目指している。また、2016 年度から東京外国语大学大学院総合国際学研究科との連携大学院を開始した。これらの連携大学院において、国立国語研究所は日本語学やコーパス言語学等の分野を担当している。

2 特別共同利用研究員制度

国立国語研究所では、国内外の大学の要請に応じて、日本語研究・日本語教育研究などの分野を専攻する大学院生を特別共同利用研究員として受け入れている。国立国語研究所の設備、文献等の利用や、国立国語研究所の研究者から研究指導を受けることができる制度である。

- 2017 年度受入：2 名
 - オックスフォード大学（イギリス）
 - 北京外国语大学北京日本学研究センター（中国）

3 NINJAL チュートリアル

日本語学・言語学・日本語教育研究の諸分野における最新の研究成果や研究方法を、第一線の教授陣によって、大学院生を中心とした若手研究者等に教授する講習会で、若手研究者の育成・サポートを目的としている。大学共同利用機関である国立国語研究所の特色を活かしたテーマを積極的に取り上げ、年数回、各地で実施している。2017 年度は台湾及びアメリカでの開催を含む第 24-27 回を実施した。

受講対象：原則として、大学院学生レベル

- 大学院学生（修士課程または博士課程に在籍する者）
- 修士課程または博士課程を修了後、原則として 6 年未満の者
- 当該諸分野を専門とした職務に従事している者
- 大学院進学を目指す学部学生等
- 第 24 回 [2017 年 10 月 28-29 日（東吳大学（台湾））]
「日本語の音声と文法」
講師：窪田晴夫（理論・対照研究領域教授）、野田尚史（日本語教育研究領域教授）
- 第 25 回 [2017 年 11 月 28 日（ミシガン大学日本研究センター（アメリカ））]
「文献資料を活用した言語研究」
講師：朝日祥之（言語変異研究領域准教授）、高田智和（言語変化研究領域准教授）
- 第 26 回 [2017 年 11 月 30 日（広島大学東広島キャンパス）]
「コーパスに基づく話し言葉の研究」
講師：小磯花絵（音声言語研究領域准教授）
- 第 27 回 [2018 年 3 月 8 日（国立国語研究所）]
「コーパスに基づく話し言葉の研究」
講師：小磯花絵（音声言語研究領域准教授）

4 優れたポストドクターの登用

若手のポストドクターが、各種共同研究プロジェクトの運営を補助するとともにプロジェクトに関する研究を自らおこなうことで、研究者としての自立性を向上させ、若手研究者のキャリアパスになる制度としてプロジェクト研究員（プロジェクト PD フェロー）制度を設け、公募により積極的に採用している（2017 年度在籍者は 11 ページを参照）。

VI

教員の研究活動と成果

影山 太郎 (かげやまたろう)

国立国語研究所 所長 (–2017.9.30, 国立国語研究所名誉教授 [2017.10])

【学位】 Ph.D. (言語学) (南カリフォルニア大学, 1977)

【学歴】 大阪外国語大学英語学科卒業 (1971), 大阪外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了 (1973), 南カリフォルニア大学大学院言語学科博士課程修了 (1977)

【職歴】 神戸学院大学教養部助手 (1973–1974), 大阪大学言語文化部講師 (1978–1980), 同助教授 (1980–1987), 関西学院大学文学部教授 (1987–2009), パリ第7大学招聘教授 (2008), 関西学院大学名誉教授 (2009), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構教授・日本語研究機関設置準備室長 (2009), 国立国語研究所所長 (2009.10–2017.9)

【専門領域】 言語学, 形態論, 語彙意味論, 統語論, 言語類型論

【所属学会】 日本言語学会, 日本語学会, 日本語文法学会, 関西言語学会, アメリカ言語学会

【学会等の役員・委員】 日本言語学会顧問 (元会長)・評議員, 日本語学会評議員, 関西言語学会運営委員, 特定非営利活動法人言語資源協会 (GSK) 理事, 日本国際教育支援協会 理事, 文化庁文化審議会国語分科会臨時委員, 財団法人新村出博士記念財団 委員, *Oxford Research Encyclopedia of Linguistics* (Oxford University Press) 顧問・代表編集委員

【受賞歴】

1994: 第22回金田一京助博士記念賞 (金田一京助博士記念会, 著書『文法と語形成』)

1980: 市河賞 (財団法人語学教育研究所, 著書『日英比較語彙の構造』)

1973: 東京言語研究所言語学懸賞論文賞 (東京言語研究所, 論文「場所理論的見地から」『言語の科学5』)

【研究業績】 (2017.9.30まで)

《論文・ブックチャプター》

影山太郎

「複合語の小宇宙から日本語文法の大宇宙を探る」, 西山佑司・杉岡洋子 (編) 『ことばの科学—東京言語研究所50周年セミナー—』, pp.2–26, 開拓社, 2017.9.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・日本言語学 (Japanese linguistics) の国際的普及のために次の活動を行った。
 1. Oxford University Pressとの出版契約により, 2013年12月開催のNINJAL国際シンポジウム「日本語およびアジア諸言語における複合動詞・複雑動詞の謎」をまとめた英文論文集 (Taro Kageyama, Peter Hook, and Prashant Pardeshi (eds.) *Verb-Verb Complexes in Asian Languages*) の編集・査読を進めた。
 2. Oxford University Pressとの契約により, オンライン刊行物 *Oxford Research Encyclopedia of Linguistics* (<http://linguistics.oxfordre.com>) のAdvisory Board及びSenior Editorとして, 日本言語学の諸分野を展望する論文の編集を行った。
 3. Cambridge University Pressとの契約により, Yoko Hasegawa (ed.) *The Cambridge Handbook of Japanese Linguistics* に論文“Events and Properties in Morphology and Syntax” (2018年4月出版) を寄稿した。

田窪 行則 (たくぼ ゆきのり) 国立国語研究所 所長 (2017.10.1–)

【学位】博士（文学）（京都大学, 2006）

【学歴】京都大学文学部言語学専攻卒業（1975），同修士課程修了（1977）

【職歴】大韓民国東国大学校慶州分校日語日文科招聘専任講師（国際交流基金教員拡充プログラムによる）（1980），神戸大学教養部専任講師（日本語日本事情担当）（1982），同助教授（1984），九州大学文学部助教授（言語学講座）（1991），同教授（1996），九州大学大学院人文科学研究院教授（2000），京都大学大学院文学研究科教授（2000），京都大学名誉教授（2016），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所所長（2017）

【専門領域】理論言語学，韓国語，琉球諸語，言語ドキュメンテーション，危機言語

【所属学会】日本言語学会，日本語学会，日本語文法学会，日本音声学会，東アジア日本学会（韓国），アメリカ言語学会

【学会等の役員・委員】言語学会 評議員，世界言語学者会議 常任理事，日本国際教育支援協会 理事，東アジア日本学会委員

【受賞歴】

1991：認知科学会論文賞（談話管理理論からみた日本語の指示詞）

【2017年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」：メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学からみた日本語の音声と文法」：アドバイザリーボードメンバー

【2017年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究（B）「言語使用と非言語的認知操作における空間指示枠の相関についての実験的研究」，17H02333：研究代表者
- ・基盤研究（C）「条件文と位相空間の相関—条件文が非単調推論になるメカニズムの解明」，17K02699：研究分担者
- ・基盤研究（B）「比較言語学的方法による日本語・琉球諸語諸方言の祖語の再建および系統樹の構築」，17H02332：研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Yosuke Igarashi, Yukinori Takubo, Yuka Hayashi, and Tomoyuki Kubo

“Tonal neutralization in the Ikema dialect of Miyako Ryukyuan”, Haruo Kubozono and Mikio Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization*, pp.83–128, Mouton De Gruyter, 2018.3.5.

【講演・口頭発表】

Yukinori Takubo

“The making of the digital museum of Nishihara, Miyako Island”（基調講演），NINJAL-NMJH-UHM Workshop: Underdescribed Languages and histories: Linguists' and Historians' Challenges, University of Hawai'i at Mānoa, 2017.5.16–18.

田窪行則

「認知と形式の接点：トコロデ構文の統語論、意味論、語用論から」（招待講演），Morphology and Lexicon Forum, 甲南大学, 2017.9.10.

Kenan Celik, Yukinori Takubo, and Rafael Núñez

“Spatial frames of reference in Miyako: Digging into Whorfian linguistic relativity”, The 25th

Japanese/Korean Linguistics Conference, University of Hawai'i at Mānoa, 2017.10.9.

Yukinori Takubo and Masahiro Yamada

“Modal Questions and Point-of-View Shift in Korean and Japanese”, 日本言語学会第 155 回大会公開シンポジウム Formal Approaches to Subjectivity and Point-of-View, 立命館大学, 2017.11.26.

【研究調査】

- ・ 2017.12.15 : 新宿シルバー人材センター, 空間指示枠に関する調査
- ・ 2017.12.28-31: 沖縄県宮古島市西原地区, 池間方言調査
- ・ 2018.3.21-27: 沖縄県宮古島市西原地区, 池間方言調査

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 「言語学と数理・統計・モデリング」シンポジウム（コメンテータ），TKP 東京駅大手町カンファレンスセンターホール, 2018.2.2.
- ・ 「方言はどこまで通じるか」（招待講演），第 12 回 NINJAL フォーラム「ことばの多様性とコミュニケーション」，東京証券ホール, 2018.2.3.

窪園 晴夫 (くぼぞの はるお) 研究系 (理論・対照研究領域) 教授, 領域代表, 副所長

【学位】 Ph.D. (言語学) (エジンバラ大学, 1988)

【学歴】 大阪外国語大学外国語学部卒業 (1979), 名古屋大学大学院文学研究科博士課程前期修了 (1981), 名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期中退 (1982), 英国・エジンバラ大学大学院博士課程修了 (1986)

【職歴】 南山大学外国語学部 助手 (1982), 同 講師 (1984), 同 助教授 (1990), 大阪外国語大学外国語学部 助教授 (1992), カリフォルニア大学サンタクルズ校 客員研究員 (フルブライト若手研究員) (1994–1995), マックスプランク心理言語学研究所 客員研究員 (1995), 神戸大学文学部 助教授 (1996), 同 教授 (2002), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 教授, 研究系長 (2010–2016), 同 研究系 (理論・対照研究領域) 教授, 領域代表, 副所長, 国際連携室長, IR 推進室長 (2016–), 東京大学客員教授 (2017–)

【専門領域】 言語学, 日本語学, 音声学, 音韻論, 危機方言

【所属学会】 日本言語学会, 日本音声学会, 日本音韻論学会, 日本語学会, 関西言語学会, 日本音響学会, Association for Laboratory Phonology, International Phonetic Association

【学会等の役員・委員】 日本言語学会 会長, 日本音声学会 評議員, 日本学術会議 連携会員, 理化学研究所脳科学研究センター 客員研究員, 東京言語研究所 運営委員長, Oxford Studies in Phonology and Phonetics Series (OUP) Advisory Editor, International Congress of Phonetic Sciences (ICPhS) Permanent Council Member, *Lingua* Editorial Board Member (–2017.11)

【受賞歴】

- 2018: 2017 年度早稲田大学ティーチングアワード総長賞
- 2017: 国立国語研究所第 15 回特別所長賞
- 2015: 国立国語研究所第 10 回所長賞
- 2013: 国立国語研究所第 6 回所長賞
- 2010: 国立国語研究所第 1 回所長賞
- 1997: 金田一京助博士記念賞 (金田一賞)
- 1995: 市河三喜賞
- 1988: 名古屋大学英文学会 IVY Award
- 1985: イギリス政府 Overseas Research Student Award

【2017 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: 共同研究員
- ・新領域創出型共同研究プロジェクト「語用論的推論に関する比較認知神経科学的研究」: コーディネーター
- ・領域指定型共同研究プロジェクト「日本語から生成文法理論へ: 統語理論と言語獲得」: コーディネーター

【2017 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (A) 「日本語諸方言のプロソディーとプロソディ一体系の類型」, 26244022: 研究代表者
- ・挑戦的研究 (萌芽) 「促音 (重子音) に関する学際的・国際的共同研究のためのネットワーク形成」, 17K18502: 研究代表者
- ・基盤研究 (S) 「乳児音声発達の起源に迫る: アジアの言語から見た発達メカニズムの解明」, 16H06319: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

Haruo Kubozono

The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants, Oxford University Press, 2017.4.27.

窪園晴夫

『オノマトペの謎—ピカチュウからモフモフまで』, 岩波書店, 2017.5.18.

窪園晴夫

『通じない日本語—世代差・地域差からみる言葉の不思議』, 平凡社, 2017.12.15.

Haruo Kubozono and Mikio Giriko

Tonal Change and Neutralization, De Gruyter Mouton, 2018.3.5.

《論文・ブックチャプター》

Junko Ito, Haruo Kubozono, and Armin Mester

“A prosodic account of consonant gemination in Japanese loanwords”, Haruo Kubozono (ed.) *The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants*, pp.283–320, Oxford University Press, 2017.4.27.

窪園晴夫

「日本語にはオノマトペが欠かせない」, 窪園晴夫 (編) 『オノマトペの謎—ピカチュウからモフモフまで』, pp.1–7, 岩波書店, 2017.5.18.

窪園晴夫

「どうして赤ちゃん言葉とオノマトペは似ているの?」, 窪園晴夫 (編) 『オノマトペの謎—ピカチュウからモフモフまで』, pp.121–142, 岩波書店, 2017.5.18.

Haruo Kubozono

“Contour tone avoidance in pitch accent systems”, *Journal of Language Sciences*, 24 (2), pp.195–207, 2017.5.

窪園晴夫

「音韻論の課題—類型論的観点から見た日本語の音韻構造」, 西山佑司・杉岡洋子 (編) 『ことばの科学』, pp.52–73, 開拓社, 2017.9.23.

Haruo Kubozono

“Postlexical tonal neutralizations in Kagoshima Japanese”, Haruo Kubozono and Mikio Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization*, pp.27–57, De Gruyter Mouton, 2018.3.5.

Haruo Kubozono

“Bilingualism and accent changes in Kagoshima Japanese”, Haruo Kubozono and Mikio Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization*, pp.279–329, De Gruyter Mouton, 2018.3.5.

《総説・解説など》

窪園晴夫

「日本語のリズム」, *AJALT*, 40, pp.26–30, 2017.6.10.

【講演・口頭発表】

Haruo Kubozono

“Prosodic evidence for syllable structure in Japanese” (基調講演, 招待講演), The 13th Workshop on Altaic Formal Linguistics, 国際基督教大学, 2017.5.26–28.

Haruo Kubozono

“Secondary High tones in Koshikijima Japanese”, JK Workshop on ‘Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean’, University of Hawaii, Manoa, 2017.10.11.

窪園晴夫

「音韻論と統語論・意味論の接点」(招待講演), 広島大学「言語と情報研究プロジェクト」講演会, 広島大学, 2017.11.15.

窪蘭晴夫

「日本語のアクセントと言語類型論」, Prosody and Grammar Festa 2, 国立国語研究所, 2018.2.17–18.

窪蘭晴夫

「借用語音韻論と促音」, 促音ワークショップ, 早稲田大学, 2018.3.4.

【一般向けの講演・セミナーなど】

窪蘭晴夫

「教師のためのことばワークショップ」, 東京言語研究所, 2017.8.5.

窪蘭晴夫

「甑島方言の特徴と重要性について」, 鹿児島県薩摩川内市長浜地区コミュニティセンター, 2018.1.13.

窪蘭晴夫

「甑島方言の特徴と重要性について」, 鹿児島県薩摩川内市里公民館, 2018.1.14.

【講習・チュートリアル】

窪蘭晴夫

「日本語の音声」, 第 24 回 NIJAL チュートリアル, 東吳大学, 2017.10.28–29.

【研究調査】

- 2017.6: 薩摩川内市 (鹿児島県), 鹿児島方言のプロソディー調査
- 2018.1: 薩摩川内市 (鹿児島県), 甑島方言のプロソディー調査

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- JK Workshop on 'Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean' (主催: 対照言語学プロジェクト), ハワイ大学, 2017.10.11.
- 甑島方言に関する講演会 (主催: 薩摩川内市, 共催: 対照言語学プロジェクト), 薩摩川内市甑島, 2018.1.13–14.
- Prosody and Grammar Festa 2 (主催: 対照言語学プロジェクト), 国立国語研究所, 2018.2.17–18.
- 促音ワークショップ (主催: 科研費・挑戦的研究 (萌芽)「促音 (重子音) に関する学際的・国際的共同研究のためのネットワーク形成」), 早稲田大学, 2018.3.4.

【その他の学術的・社会的活動】

- 取材協力, 朝日新聞デジタル RONZA: 特集「口が気持ちいい言葉」, 2017.11.14 (配信)
- 取材協力, フジテレビ「めざましテレビ」: 特集「絵がない絵本」, 2017.11.21 (放送)
- 取材協力, ABC ラジオ「ドッキリ! ハッキリ!」: 特集「声に出すと口が気持ちいい言葉」, 2017.12.12 (放送)

【大学院教育・若手研究者育成】

- 大学院非常勤講師 (集中講義)
東北大学大学院 (2017.6), 早稲田大学大学院 (2017.7), 南山大学大学院 (2017.8), 東京大学大学院 (2018.1)
- 若手研究者の受入
国立国語研究所 PD フェロー 1 名, 日本学術振興会 PD 1 名

Prashant Vijay Pardeshi (プラシャント ウィジャイ パルデシ)

研究系（理論・対照研究領域）教授，研究情報発信センター長

【学位】博士（学術）（神戸大学，2000）

【学歴】ジャワハルラル・ネル大学文学日本語専攻修士課程修了（1993），神戸大学大学院文化学研究科修了（2000）

【歴歴】神戸大学文学部 講師（2005），同人文学研究科 講師（2007），人間文化研究機構国立国語研究所言語対照研究系 准教授（2009），同教授（2011），同研究系長（2014–2016），同研究系（理論・対照研究領域）教授，研究情報発信センター長（2016–2018.3）

【専門領域】言語学，言語類型論，対照言語学

【所属学会】日本言語学会，日本語文法学会，関西言語学会

【学会等の役員・委員】日本言語学会 評議員（2016.4–2018.3）

【受賞歴】

2016: 国立国語研究所第12回特別所長賞

2010: 国立国語研究所第1回所長賞

2007: 第1回『博報「ことばと文化・教育」研究助成』優秀賞（パルデシ・プラシャント，桐生和幸，石田英明，小磯千尋（編）2007,『日本語-マラーティー語基本動詞用法事典』(428ページ)，財団法人博報児童教育振興会2005年度第1回『博報「ことばと文化・教育」研究助成』の研究助成支援による「日・マラーティー語の対照研究・日本語教育用基本動詞用法事典の作成』プロジェクト報告書）

2000: The Chatterjee-Ramanujan Prize for outstanding student contribution to *The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics 2000*, “The Passive and Related Constructions in Marathi”, Sage Publications, New Delhi, Thousand, Oaks & London

【2017年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」：リーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」：サブリーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」：サブリーダー

【2017年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究（B）「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心」，15H03210：研究代表者
- ・基盤研究（C）「マルチメディアを用いた外国語学習過程のモデル化」，15K01076：研究分担者
- ・挑戦的萌芽研究「大規模コーパスに基づく日本語機能語の基礎研究と機能語検索ツールへの応用」，16K13228：研究代表者

【研究業績】

《著書・編書》

Prashant Pardeshi and Taro Kageyama

Handbook of Japanese Contrastive Linguistics (Handbooks of Japanese Language and Linguistics [HJLL] Series, 6), De Gruyter Mouton, 2018.2.

《論文・ブックチャプター》

長崎郁，アラステアバトラー，スティーブンライトホーン，プラシャントパルデシ，吉本啓
「統語解析情報付きコーパス検索用インターフェースの開発」，『言語処理学会第24回年次大会発表論文集』，pp.1123–1126, 2018.3.12.

Prashant Pardeshi and Taro Kageyama

“Introduction”, *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics* (Handbooks of Japanese Language and Linguistics [HJLL] Series, 6), pp.1–14, De Gruyter Mouton, 2018.2.

Prashant Pardeshi and Taro Kageyama

“Transitivity in Japanese from a typological perspective”, *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics* (Handbooks of Japanese Language and Linguistics [HJLL] Series, 6), pp.15–56, De Gruyter Mouton, 2018.2.

Prashant Pardeshi and Taro Kageyama

“Non-canonical constructions in Japanese: A crosslinguistic perspective”, *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics* (Handbooks of Japanese Language and Linguistics [HJLL] Series, 6), pp.57–107, De Gruyter Mouton, 2018.2.

《データベース類》

鈴木彩香, 窪田悠介, プラシャント・パルデシ

「NPCMJ パターンブラウザ (試行版)」, 2018.3.5.

《教材など》

プラシャント・パルデシ

「世界の言語と日本語」, 「述語と格」, 「名詞修飾(連体修飾)表現」, 「対照研究: 温度表現の普遍性と個別性」, 「コーパスに基づく日本語研究」, 「第二言語習得」, (インド政府的資源開発省管轄の大学認可・助成委員会推進 e 大学院 (e-PGPathshala) 用「日本語学」教材 30 コマ中 6 コマ分のテキスト作成およびビデオ講義を担当), <http://epgp.inflibnet.ac.in/ahl.php?csrno=830>, 2018.2.

【講演・口頭発表】

Prashant Pardeshi

“Japanese Basic Verbs Handbook: A Symbiosis of Linguistic Theory and Language Pedagogy.”, Talk given at Department of East Asian Languages and Literatures, University of Hawaii, Manoa, 2017.10.10.

Hideki Kishimoto and Prashant Pardeshi

“Parsed corpus as a source for testing generalizations in Japanese syntax.”, NINJAL International Symposium “Exploiting Parsed Corpora: Application in Research, Pedagogy and Processing”, 国立国語研究所, 2017.12.9–10.

Prashant Pardeshi and Yasunari Imamura

“A gateway to strengthening linguistic skills of Japanese language teachers and advanced learners: A massive open online course (MOOC) on 日本語学 (Japanese Linguistics) ”, Talk given at the Department of Foreign Languages, Savitribai Phule Pune University, プネー大学, インド, 2018.1.22.

Prashant Pardeshi and Yasunari Imamura

“Japanese Basic Verbs Handbook: what is it and what does it do?”, Talk given at the Department of Foreign Languages, Savitribai Phule Pune University, プネー大学, インド, 2018.1.22.

Prashant Pardeshi and Yasunari Imamura

“A gateway to strengthening linguistic skills of Japanese language teachers and advanced learners: A massive open online course (MOOC) on 日本語学 (Japanese Linguistics) ”, Talk given at the Department of Japanese, Tilak Maharashtra Vidyaapeeth, ティラク・マハラシュトラ大学, インド, 2018.1.23.

Prashant Pardeshi and Yasunari Imamura

“A gateway to strengthening linguistic skills of Japanese language teachers and advanced learners: A massive open online course (MOOC) on 日本語学 (Japanese Linguistics) ”, Talk given ABK-AOTS

Dousoukai and Japan Foundation, チェンナイ, インド, 2018.1.27.

Prashant Pardeshi and Yasunari Imamura

“Japanese Basic Verbs Handbook: what is it and what does it do?”, Talk given ABK-AOTS

Dousoukai and Japan Foundation, チェンナイ, インド, 2018.1.27.

Prashant Pardeshi and Yasunari Imamura

“A gateway to strengthening linguistic skills of Japanese language teachers and advanced learners:

A massive open online course (MOOC) on 日本語学 (Japanese Linguistics) ”, Talk given at Institute of Modern Languages, University of Dhaka, ダッカ大学, バングラデイシュ, 2018.1.31.

Prashant Pardeshi and Yasunari Imamura

“Japanese Basic Verbs Handbook: what is it and what does it do?”, Talk given at Institute of

Modern Languages, University of Dhaka, ダッカ大学, バングラデイシュ, 2018.1.31.

プラシャント・パルデシ, 今村泰也

「基本動詞ハンドブックの取り組み」, Talk given at the Department of Modern Language, Faculty

of Humanities, University of Kelaniya, ケラニア大学, スリランカ, 2018.2.20.

プラシャント・パルデシ, 今村泰也

「基本動詞ハンドブックの取り組み」, Talk given at the Department of Language, Faculty of Social

Sciences and Languages, Sabaragamuwa University of Sri Lanka, スリランカサバラガムワ大学,

スリランカ, 2018.2.23.

Prashant Pardeshi

“Japanese Basic Verbs Handbook: what is it and what does it do?”, Talk given at Department of

East Asian Languages and Cultures, Stanford University, スタンフォード大学, アメリカ合衆国,

2018.3.16.

Peter Hook, and Prashant Pardeshi

“Marathi’s Prenominal Noun-modifying Constructions: Their Protean Functions and Diverse

Morphologies”, International Workshop: “Nominalization and Noun modification”, San Francisco

State University, アメリカ合衆国, 2018.3.17.

Prashant Pardeshi

“Japanese Basic Verbs Handbook: what is it and what does it do?”, Talk given at Department

of Asian Studies, Faculty of Arts, University of Ljubljana, リュブリヤナ大学, スロベニア,

2018.3.26.

Prashant Pardeshi

“A gateway to strengthening linguistic skills of Japanese language teachers and advanced learners:

A massive open online course (MOOC) on 日本語学 (Japanese Linguistics) ”, Talk given at

Department of Asian Studies, Faculty of Arts, University of Ljubljana, リュブリヤナ大学, スロ

ベニア, 2018.3.26.

Prashant Pardeshi

“Japanese Basic Verbs Handbook: what is it and what does it do?”, Talk given at Department of

Asian Studies, Faculty of Arts, University of Ljubljana, ユライ・ドブリラ大学, クロアチア,

2018.3.28.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・ 国立国語研究所共同研究プロジェクト「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」2017年度
第1回研究発表会, 国立国語研究所, 2017.6.4.
- ・ 国立国語研究所共同研究プロジェクト「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」2017年度
第2回研究発表会, 神戸大学, 2017.11.4.
- ・ NINJAL International Symposium “Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing” (主催: 国立国語研究所), 国立国語研究所, 2017.12.9–10.

松本 曜 (まつもと よう) 研究系(理論・対照研究領域)教授 (2017.10.1-)

【学位】 Ph.D. (言語学) (米国スタンフォード大学, 1992)

【学歴】 上智大学外国語学部英語学科卒業 (1983), 上智大学外国語学研究科博士課程前期課程修了 (1985), スタンフォード大学言語学科博士課程修了 (1992)

【職歴】 東京基督教大学神学部専任講師 (1992), 明治学院大学文学部専任講師 (1995), 明治学院大学文学部助教授 (1996), 明治学院大学文学部教授 (2002), 神戸大学文学部教授 (2004), 神戸大学人文学研究科教授 (2007), 国立国語研究所理論・対照研究領域教授 (2017)

【専門領域】 意味論, 認知言語学

【所属学会】 日本言語学会, 日本英語学会, 日本認知言語学会, 関西言語学会, アメリカ言語学会, 国際認知言語学会

【学会等の役員・委員】 日本英語学会理事, 日本言語学会評議員, 関西言語学会運営委員

【2017年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」: サブリーダー

【2017年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (B) 「移動表現による言語類型: 実験的統一課題による通言語的研究」, 15H03206: 研究代表者
- ・基盤研究 (C) 「移動表現に関わる中間言語研究と言語教育への応用: 英語・日本語を対象に」, 15K02753: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

陳奕廷, 松本曜

『日本語語彙的複合動詞の意味と体系—コンストラクション形態論とフレーム意味論—』, ひつじ書房, 2018.2.20.

《論文・ブックチャプター》

Yo Matsumoto

“Motion event descriptions in Japanese from typological perspectives,” Prashant Pardeshi and Taro Kageyama (eds.) *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*, pp.273–289, Mouton de Gruyter, 2018.2.19.

松本曜, 陳奕廷

「「泣く」—複合語を手がかりとしたフレーム意味論的分析—」, 『神戸言語学論叢』, 11, pp.50–57, 2018.3.15.

【講演・口頭発表】

松本曜

「意味論と語用論は近づいたか」(基調講演, 招待講演), 日本語用論学会第20回大会, 京都, 2017.12.16–17.

Yo Matsumoto and Monica Kahumburu

“Motion event descriptions in Kiswahili: Pattern of variations in Path-coding positions,” Linguistic Society of America 2018 Annual Meeting, ソルトレークシティ, アメリカ合衆国, 2018.1.4–7.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・新日本聖書刊行会翻訳編集委員会日本語主任

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・神戸大学人文学研究科教授兼担
 - ・博士論文審査
- 神戸大学大学院（副査）2018.2

木部暢子 (きべ のぶこ) 研究系(言語変異研究領域)教授, 領域代表, 副所長

【学位】博士(文学)(九州大学, 1998)

【学歴】九州大学文学部文学科卒業(1978), 九州大学大学院文学研究科修士課程修了(1980)

【職歴】純真女子短期大学助手(1980), 同講師(1981), 福岡女学院短期大学講師(1985), 鹿児島大学法文学部助教授(1988), 同教授(1999), 同副学部長(2004), 同学部長(2006), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系教授, 副所長(2010), 同研究系長(2010-2016), 同研究系(言語変異研究領域)教授, 領域代表(2016)

【専門領域】日本語学, 方言学, 音声学, 音韻論

【所属学会】日本語学会, 日本言語学会, 日本音声学会, 西日本国語国文学会

【学会等の役員・委員】日本学術会議会員, 日本語学会理事, 日本音声学会理事, 日本言語学会評議員, 文化庁国語課平成29年度危機的な状況にある言語・方言に関する研究協議会委員, 国文学研究資料館古典籍共同研究事業センター運営委員会委員

【受賞歴】

1990: 新村出財団研究助成

【2017年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」:研究代表者
- ・広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」国語研ユニット「方言の記録と継承による地域文化の再構築」:研究代表者
- ・「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」国語研ユニット「消滅危機言語・方言の展示を通した最先端研究の可視化・高度化」:研究代表者
- ・文理融合研究プロジェクト調査研究(FS)「日本列島人の進化とその言語文化の起源」:共同研究員

【2017年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究(A)「日本語諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓」, 15H01933:研究代表者
- ・基盤研究(S)「言語系統樹を用いた琉球語の比較・歴史言語学的研究」, 17H06115:研究分担者
- ・基盤研究(A)「日本語諸方言のプロディーとプロソディ一体系の類型」, 26244022:研究分担者
- ・基盤研究(B)「比較言語学的方法による日本語・琉球諸語諸方言の祖語の再建および系統樹の構築」, 17H02332:研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

木部暢子, 麻生玲子(編)

『新しい地域文化研究の可能性を求めて Vol.3 ことばは文化の源』, 人間文化研究機構, 2018.2.28.
木部暢子(編)

『日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成 島根県隠岐の島方言調査報告書』, 国立国語研究所, 2018.3.31.

《論文・ブックチャプター》

木部暢子

「富山の方言—砺波市方言の引用標識をめぐって—」, 『砺波散村地域研究所研究紀要』, 35, pp.1-11, 2018.3.31.

《データベース類》

木部暢子, 麻生玲子

「危機言語 DB」, <http://kikigengo.ninjal.ac.jp/>, 2018.3.30.

【講演・口頭発表】

Nobuko Kibe

“Outline of ‘Endangered Languages and Dialects in Japan’: NINJAL’s research project”, NINJAL/NMJH/UHM Workshop Underdescribed Languages and Histories: Linguist’s and Historian’s Challenges, University of Hawaii at Mānoa, 2017.5.16–18.

Nobuko Kibe, Kumiko Sato, Taro Nakanishi, and Kohei Nakazawa

“Copus based study of Japanese dialects: Regional differences in case marking system”, Methods XVI, 国立国語研究所, 2017.8.7–11.

木部暢子, 大槻知世, 佐藤久美子

「諸方言の文末イントネーション—日本語諸方言コーパスから—」, 音声資源活用シンポジウム, 国立国語研究所, 2017.8.10.

木部暢子, 佐藤久美子, 大槻知世

「諸方言コーパスに見る男性の言葉・女性の言葉」, コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—話者の属性—」, 国立国語研究所, 2017.9.7.

Nobuko Kibe and Hajime Oshima

“Plural Forms in Yoron-Ryukyuan”, The 25th Japanese/Korean Linguistics Conference, University of Hawaii at Mānoa, 2017.9.9.

【一般向けの講演・セミナーなど】

木部暢子

「日本語諸方言コーパスに見る富山方言」, 富山大学人文学部 第6回言語学・日本語学公開講演会, 富山大学, 2017.6.16.

木部暢子

「ことばが接するところ—富山の方言—」, 研波散村地域研究所例会, 富山県砺波市散村地域研究所, 2017.6.17.

木部暢子

「方言の展示について」, まつえ市民大学自主講座, 松江市市民活動センター, 2017.7.29.

木部暢子

「方言のある暮らし—ことばは文化の源—」, 人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト研究集会「地域文化をはぐくむ」, FUKURASHIA 東京ステーション5K 会議室, 2017.9.8.

木部暢子

「国立国語研究所の取組」, 文化庁国語課 危機的な状況にある言語・方言に関する研究協議会, 文部科学省第2会議室, 2017.9.22.

木部暢子

「え、ほうげん? え、ほうだん?」, ATELIER MUJI, ATELIER MUJI, 2017.11.28.

木部暢子

「危機的な状況にある言語・方言の現状報告（八丈・奄美・琉球）」, 危機的な状況にある言語・方言サミット（北海道）, 北海道大学学術交流会館1階小講堂, 2017.12.3.

木部暢子

「日本の方言の状況と各地の方言保存の取組について」, 甑島の方言に関する講演会, 長浜公民館・里コミュニティーセンター, 2018.1.13–14.

木部暢子

「言語調査における連携・協力～八丈島・岡崎市・鶴岡市などの調査から」, 機構合同シンポジ

ウム：第32回人文機構シンポジウム／情報・システム研究機構シンポジウム「人文知による情報と知の体系化～異分野融合で何を作るか～」，一橋講堂，2018.2.26.

木部暢子

「ことばは文化の源」，国語研・椎葉村合同シンポジウム，椎葉村向山日添公民館，2018.3.25.

【講習・チュートリアル】

木部暢子，原田走一郎

「調査の概要」，木曽川方言調査事前ワークショップ，愛知県名古屋市さかえビル 会議室B室，2017.8.26-27.

【研究調査】

- ・2017.7：鹿児島県大島郡，与論島方言調査
- ・2017.8：愛知県一宮市，木曽川方言調査
- ・2017.9：宮崎県東臼杵郡椎葉村，椎葉方言調査
- ・2017.11：鹿児島県大島郡和泊町，沖永良部畦布方言調査
- ・2018.3：宮崎県東臼杵郡椎葉村，椎葉方言調査

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・NINJAL/NMJH/UHM Workshop Underdescribed Languages and Histories: Linguist's and Historian's Challenges（主催：国立国語研究所，共催：NMJH, UHM），University of Hawaii at Mānoa, 2017.5.16-18.
- ・指示詞・代名詞（主催：危機言語・方言プロジェクト），国立国語研究所，2017.6.11.
- ・愛知県木曽川方言調査事前ワークショップ（主催：危機言語・方言プロジェクト，共催：東京外國語大学アジア・アフリカ言語文化研究所），愛知県名古屋市さかえビル会議室，2017.8.26-27.
- ・平成29年度コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—話者の属性—」（主催：危機言語・方言プロジェクト，通時コーパスプロジェクト，日常会話プロジェクト，学習者の日本語プロジェクト），国立国語研究所，2017.9.8.
- ・危機的な状況にある言語・方言サミット（北海道大会）（主催・共催：文化庁，北海道，北海道教育委員会，国立国語研究所，琉球大学），北海道大学，2017.12.3.
- ・指示詞・代名詞（本土諸方言）（主催：危機言語・方言プロジェクト），国立国語研究所，2018.3.11.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・取材記事（山本友美，木部暢子），「10地区の方言後生に高齢者に聞き発音記録 村と国語研共同調査」宮崎日日新聞，2017.8.27.
- ・取材記事（山田真寛，木部暢子），「方言でかるたや紙芝居制作 消滅危機言語の保存・継承で国立国語研と下川平小」南海日日新聞，2017.11.8.
- ・取材協力，フジテレビ「さま～ずの神ギ問」：「こら」の由来について講義，2017.10.29（放送）
- ・ムートン社 HANDBOOKS OF JAPANESE LANGUAGE AND LINGUISTICS Series, *Handbook of Japanese Dialects*：編集委員
- ・三省堂『三省堂明解方言学辞典』：編集委員
- ・ATELIER MUJI「え，ほん？」展（2017.11.3-12.17）にて，大日本タイポ組合と共同で方言と文字デザインを組み合わせた「なんでももじもじ方言版」，「ひらがなの成り立ち」を展示。
- ・歴博，丹青社と共同で可動型展示ユニット「地図で見る日本の方言」，「沖縄のことばと日本のことば」を作成。

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・大学院非常勤講師（東京大学大学院人文社会系研究科）
- ・連携大学院
東京外国語大学大学院 総合国際学研究科 国際日本専攻 連携教授（クロスマーチント制度）

に基づく連携教員)

- ・愛知県一宮市木曽川方言調査

公募による学生・大学院生4人と愛知県立大学学生9人（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所と共同で企画・実施, 事前ワークショップ：2017.8.26-27, 木曽川調査：2017.8.28-30）

- ・若手研究者の受入

日本学術振興会PD4名

朝日 祥之 (あさひ よしゆき) 研究系 (言語変異研究領域) 准教授

【学位】博士 (文学) (大阪大学, 2004)

【学歴】関西外国語大学外国語学部英米語学科卒業 (1997), エセックス大学大学院言語・言語学研究科社会言語学専攻修士課程修了 (1998), 大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻博士課程後期課程修了 (2004)

【職歴】独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第二領域 研究員 (2004), 同 研究開発部門言語生活グループ 研究員 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (言語変異研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】社会言語学, 言語学, 日本語学

【所属学会】International Congress for Dialectologists and Geolinguists, METHODS, Foundation for Endangered Languages, 関西言語学会, 日本言語政策学会, 日本方言研究会, 日本語学会, 社会言語科学会

【学会等の役員・委員】変異理論研究会 世話人, METHODS, International steering committee member, NAW-AP, Steering committee member, Asia-Pacific Language Variation, Editorial board member, International Journal of the Sociology of Language, Editorial board member, 変異理論研究会 世話人, 北海道方言研究会 副会長

【受賞歴】

2013: 国立国語研究所第6回所長賞

2010: 第9回徳川宗賢優秀賞 (社会言語科学会)

2010: 国立国語研究所第1回所長賞

【2017年度に参画した共同研究】

- ・ネットワーク型 日本関連在外資料調査研究・活用事業「北米における日本関連在外資料調査研究・活用—言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築—」: 研究代表者
- ・領域指定型共同研究プロジェクト「議会会議録を活用したスタイル変異研究」: 共同研究員

【2017年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「北海道北見市常呂町居住者の方言と郷里方言との相関に関する社会言語学的研究」, 15K02586: 研究代表者

【研究業績】

《著書・編書》

見野久幸, 朝日祥之

『北海道方言の地理的・年齢的勢力分布と動態 (1) —若年層 (高校生) と壮年層 (30歳代~50歳代) での男女別使用—調査データグラフ集語彙編』, 2018.3.31.

見野久幸, 朝日祥之

『北海道方言の地理的・年齢的勢力分布と動態 (2) —若年層 (高校生) と壮年層 (30歳代~50歳代) での男女別使用—調査データグラフ集語彙・語法編』, 2018.3.31.

《論文・ブックチャプター》

朝日祥之

「北海道方言の録音資料の資源化と課題—北見市常呂町調査を事例に—」, 『北海道方言研究会会報』, 94, pp.32-38, 2018.2.20.

【講演・口頭発表】

Yoshiyuki Asahi

“Introduction: Workshop Day 3 NINJAL-NMJH-UHM Workshop “Underdescribed languages and

histories: linguist's and historian's approaches”” (基調講演), Underdescribed languages and histories: Linguist's and Historian's challenges, UH Manoa, 2017.5.18.

Yoshiyuki Asahi

“Sociolinguistic approaches to ‘Buried voices’ in Hawai‘i”, Underdescribed languages and histories: Linguist's and Historian's challenges, UH Manoa, 2017.5.18.

Dimitris Papazachariou, and Yoshiyuki Asahi

“Vowel deletion in the dialect of Lesvos (Northern Greece): From an acoustic analysis perspective”, IclavE, University of Malaga, 2017.6.6.

Yoshiyuki Asahi, Rebecca Starr, and Mie Hiramoto

“Innovative Dialects: The Spoken (Social/Regional) Dialects in Media”, Methods in Dialectology, 国立国語研究所, 2017.8.7.

Yoshiyuki Asahi

“Picture brides and their Japanese dialects: Evidence from their life story interviews in Hawai‘i”, Methods in Dialectology, 国立国語研究所, 2017.8.8.

Yoshiyuki Asahi

“Vowel deletion in the dialect of Lesvos (Northern Greece): From an acoustic analysis perspective”, EAJS 2017, New University of Lisbon, 2017.9.1.

Yoshiyuki Asahi

“Detecting and mining biographical data from audio/audio-visual magnetic tapes: A case of the Japanese American collections in the US”, BD 2017, Ars Electronica Center, 2017.11.7.

Yoshiyuki Asahi

“Linguistic features in the Japanese phrase books during WWII” (招待講演, 特別講演), Spies, Prisoners, and Farmers: An origin of the Japanese Studieisat Michigan, University of Michigan, 2017.11.29.

朝日祥之

「名古屋市議会会議録にみる名古屋方言的特徴に関する考察」, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「議会会議録を活用した日本語のスタイル変異研究」研究発表会, 国立国語研究所, 2017.12.10.

朝日祥之

「北海道北見市常呂町における言語変容—土佐地区と岐阜地区居住者を対象として—」, 北海道方言研究会第 222 回例会, 札幌市北区民センター, 2017.8.28.

Yoshiyuki Asahi

“High vowel loss amongst Japanese picture brides in the US”, NWAU-AP5, University of Queensland, 2018.2.1.

朝日祥之

「戦時中の日本語教育と陸軍日本語学校」, ミシガン大学岡山分室と日本・アメリカの人文科学—インテリジェンス・日本語教育・地域研究—, 国立歴史民俗博物館, 2018.2.17.

【一般向けの講演・セミナーなど】

朝日祥之

「標準語のようで標準語でない愛知県のことば」, みんなの知らない方言の世界, 愛知大学, 2018.3.25.

【講習・チュートリアル】

朝日祥之

「日本語教科書に見られる話し言葉の多様性」, NINJAL Tutorial, ミシガン大学, 2017.11.28.

朝日祥之

「文献資料を活用した言語研究」, NINJAL Tutorial, ミシガン大学, 2017.11.28.

【研究調査】

- ・2017.7: アメリカ合衆国 カリフォルニア州 サクラメント市, 在外資料調査
- ・2018.2: 北海道北見市常呂町, 資料調査
- ・2018.3: アメリカ合衆国 カリフォルニア州 サンタマリア市, 在外資料調査
- ・2018.3: アメリカ合衆国 カリフォルニア州 シアトル市, 在外資料調査
- ・2018.3: 北海道北見市常呂町, 資料調査

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・NINJAL-NMJH-UHM Workshop: Underdescribed Languages and Histories: Linguist's and Historian's Challenges (主催: University of Hawaii at Manoa, 共催: 国立国語研究所, 国立歴史民俗博物館), UH Manoa, 2017.5.16-18.
- ・Methods in Dialectology 16 (主催: 国立国語研究所), 国立国語研究所, 2017.8.7-11.
- ・Spies, Prisoners, and Farmers: An origin of the Japanese Studeisat Michigan (主催: Center for Japanese Studies, University of Michigan, 共催: 国立国語研究所), University of Michigan, 2017.11.29.
- ・ミシガン大学岡山分室と日本・アメリカの人文科学—インテリジェンス・日本語教育・地域研究— (主催: 国立国語研究所, 共催: 国立歴史民俗博物館), 国立歴史民俗博物館, 2018.2.17-18.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・取材協力, 札幌テレビ「どさんこワイド」「福永探偵社」追跡! 北海道で「手袋はく」の謎, 2017.12.27 (放送)

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・連携大学院
一橋大学大学院言語社会研究科 非常勤講師

井上 文子 (いのうえ ふみこ) 研究系 (言語変異研究領) 准教授

【学位】修士 (文学) (大阪大学, 1992)

【学歴】高知女子大学文学部国文学科卒業 (1984), 大阪大学大学院文学研究科博士前期課程日本学専攻修了 (1992), 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程日本学専攻中退 (1994)

【職歴】大阪大学文学部 助手 (1994), 国立国語研究所情報資料研究部第二研究室 研究員 (1995), 同主任研究官 (1997), 独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第一領域 主任研究員 (2001), 同情報資料部門資料整備グループ グループ長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (言語変異研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】方言学, 社会言語学

【所属学会】日本方言研究会, 日本語学会, 社会言語科学会, 日本語文法学会

【学会等の役員・委員】日本方言研究会 総務委員会 世話人会委員

【受賞歴】

1993: 第 11 回新村出記念財団研究助成

【2017 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: メンバー

【2017 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・研究成果公開促進費 (データベース) 「日本の危機言語・方言データベース」, 17HP8003: 作成代表者
- ・基盤研究 (C) 「地域的多様性の教材としての参加型方言データベースの構築」, 17K02801: 研究代表者
- ・基盤研究 (A) 「日本語諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓」, 16H01933: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

井上文子

「関西弁の談話類型」, 真田信治 (監修) 『関西弁事典』, ひつじ書房, 2018.3.31.

井上文子

「関西弁の男女差」, 真田信治 (監修) 『関西弁事典』, ひつじ書房, 2018.3.31.

《総説・解説など》

井上文子

「将来の研究のためのデータ作り—何を記録に残しておくべきか—」, 日本語学, 36(9), pp.56–64, 2017.8.1.

《データベース類》

井上文子

「方言ロールプレイ会話データベース」, <http://hougen-db.sakuraweb.com/>, 2018.3.31 (更新)

【研究調査】

- ・2017.4.28: 大東文化大学, 会話収録
- ・2017.9.6: 群馬県立女子大学, 会話収録
- ・2017.9.26: 関西大学, 会話収録
- ・2017.10.3: 関西大学, 会話収録
- ・2017.10.19: 首都大学東京, 会話収録

- ・ 2017.10.20: 國學院大學, 会話収録
- ・ 2017.11.6: フェリス女学院大学, 会話収録
- ・ 2017.12.24: 岩手大学, 会話収録

熊谷 康雄 (くまがい やすお) 研究系 (言語変異研究領域) 准教授

【学位】修士 (文学) (埼玉大学, 1984)

【学歴】埼玉大学教養学部教養学科社会システムコース卒業 (1976), 埼玉大学大学院文化科学研究所修士課程言語文化論専攻修了 (1984)

【職歴】国立国語研究所言語行動研究部第二研究室 研究員 (1988), 同 情報資料研究部第二研究室 研究員 (1989), 同 主任研究官 (1993), 同 室長 (1998), 同 情報資料部門 部門長 (2001), 国立国語研究所時空間変異研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (言語変異研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】言語学, 日本語学

【所属学会】日本語学会, 日本言語学会, 計量国語学会, 社会言語科学会, 日本行動計量学会, 言語処理学会, 情報処理学会, 電子情報通信学会, American Dialect Society, International Society for Dialectology and Geolinguistics

【2017年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: サブリーダー

【2017年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「大規模方言分布データの計量的分析方法の開発」, 26370555 : 研究代表者
- ・基盤研究 (A) 「日本諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓」, 16H01933 : 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

熊谷康雄

「『日本言語地図』と『日本言語地図』データベース：データベース化 (LAJDB) による多角的分析に向けて」, 『方言の研究』, 3, pp.29–51, 2017.9.30.

《データベース類》

熊谷康雄

「『日本言語地図』データベース」, <http://www.lajdb.org/>, 2018.3.28 (追加公開 5 項目)

【講演・口頭発表】

Yasuo Kumagai

“A quantitative observation of the relation among population distributions, road networks, and dialect similarities.”, Methods in Dialectology XVI (the 16th International Conference on Methods in Dialectology), 国立国語研究所, 2017.8.8.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・Methods in Dialectology XVI (the 16th International Conference on Methods in Dialectology) (主催: 国立国語研究所), 国立国語研究所, 2017.8.7–11.

三井 はるみ (みつい はるみ) 研究系(言語変異研究領域) 助教

【学位】修士(文学)(東北大学, 1986)

【学歴】東北大学大学院文学研究科博士課程後期3年の課程単位修得満期退学(1989)

【職歴】昭和女子大学 講師(1989), 国立国語研究所 主任研究官(1997), 人間文化研究機構国立国語研究所助教(2009)

【専門領域】日本語学

【所属学会】日本語学会, 日本方言研究会, 社会言語科学会, 日本音声学会, 日本語文法学会

【学会等の役員・委員】日本方言研究会 世話人, 日本音声学会 会計監査

【2017年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」:共同研究員

【2017年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究(A)「日本語の時空間変異対照研究のための『全国方言文法辞典』の作成と方法論の構築」, 26244024:研究分担者
- ・基盤研究(A)「日本語諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓」, 16H01933:研究分担者
- ・基盤研究(C)「地域的多様性の教材としての参加型方言データベースの構築」, 17K02801:研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

三井はるみ, 鎌水兼貴

「首都圏若年層の言語に地域差をもたらすもの」, 『方言の研究』, 3, pp.103–127, 2017.9.30.

三井はるみ

「九州・四国方言の認識的条件文」, 有田節子(編集)『日本語条件文の諸相』, pp.181–211, くろしお出版, 2017.11.25.

三井はるみ

「『方言文法全国地図』略図集」(図4, 50, 65–72, 75, 78–84, 99, 100), 方言文法研究会(編集代表:小西いづみ・日高水穂)『全国方言文法辞典資料集(4)活用体系(3)』, pp.117–219, 科学研究費26244024研究成果報告書, 2018.3.20.

《その他の出版物・記事》

三井はるみ

「まみえ」, 『朝日新聞』東京版, 2017.4.15.

三井はるみ

「ぜーいん」, 『朝日新聞』東京版, 2017.5.13.

三井はるみ

「ゆわく」, 『朝日新聞』東京版, 2017.6.3.

三井はるみ

「まいまいいつぶろ」, 『朝日新聞』東京版, 2017.6.10.

三井はるみ

「てんぐるま」, 『朝日新聞』東京版, 2017.6.17.

三井はるみ

「えんこ」, 『朝日新聞』東京版, 2017.11.11.

三井はるみ

「おせわさま」, 『朝日新聞』東京版, 2017.11.18.

三井はるみ

「かてる」, 『朝日新聞』東京版, 2017.12.9.

三井はるみ

「くれる」, 『朝日新聞』東京版, 2017.12.16.

三井はるみ

「じゃん」, 『朝日新聞』東京版, 2017.12.23.

三井はるみ

「蔵開き」, 『朝日新聞』東京版, 2018.1.13.

三井はるみ

「～ようだ」, 『朝日新聞』東京版, 2018.2.3.

三井はるみ

「きしゃご」, 『朝日新聞』東京版, 2018.3.3.

三井はるみ

「おしと」, 『朝日新聞』東京版, 2018.3.10.

三井はるみ

「ごむだん」, 『朝日新聞』東京版, 2018.3.17.

三井はるみ

「がっくいき」, 『朝日新聞』東京版, 2018.3.24.

【講演・口頭発表】

Harumi Mitsui, Kanetaka Yarimizu, and Motoei Sawaki

“The structure of diversified language usage in metropolitan Tokyo”, Methods in Dialectology XVI, 国立国語研究所, 2017.8.7-11.

【一般向けの講演・セミナーなど】

三井はるみ

「みずほ弁ちとんべえ～よかんべえ」, 平成 29 年度 瑞穂町地域資料図書館・郷土資料館連携事業公開記念講演会, 瑞穂町郷土資料館けやき館, 2018.3.18.

【研究調査】

- ・ 2017.10.19: 首都大学東京, 会話収録
- ・ 2017.10.20: 國學院大學, 会話収録
- ・ 2018.3.11: 東京都西多摩郡瑞穂町, 方言使用状況調査

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 取材記事, Jcom (ケーブルテレビ) 「長つと散歩立川」, 2017.9.
- ・ 取材記事, 読売新聞 「みずほ弁」 音声記録公開, 2018.3.17.
- ・ 取材記事, 西多摩新聞 「あんちゅうだんべえ, 方言の講演会 瑞穂町図書館」, 2018.3.30.
- ・ 取材記事, weekly news 西の風 「「瑞穂弁・ちとんべえ, よかんべえ」 方言は地域の大切な文化」, 2018.3.30.

青井 隼人 (あおい はやと) 研究系 (言語変異研究領域) 特任助教

【学位】博士 (学術) (東京外国語大学, 2016)

【学歴】東京外国語大学外国語学部日本課程卒業 (2009), 東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士前期課程修了 (2011), 東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士後期課程単位取得満期退学 (2014)

【歴歴】日本学術振興会特別研究員 (DC) (2011–2014), 日本学術振興会特別研究員 (PD) (2014–2017), 東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所 特任研究員 (2017), 人間文化研究機構国立国語研究所言語変異研究領域 特任助教 (2017)

【専門領域】言語音声学, 音韻論, 琉球語学

【所属学会】日本言語学会, 日本音声学会, 日本音韻論学会, 方言研究会

【受賞歴】

2014: 日本言語学会 2014 年度論文賞

2012: 日本音声学会第 26 回全国大会優秀発表賞

2012: 日本言語学会第 144 回大会 (2012 年度春季) 大会発表賞

【2017 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: 共同研究員

【2017 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・研究活動スタート支援「声門化子音の音響特性の記述と音韻論的解釈: 北琉球沖縄語伊江方言の事例研究」, 17H0666: 研究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

青井隼人

「南琉球宮古多良間方言における 2 種類のアクセント型の中和」, 『国立国語研究所論集』, 13, pp.1–23, 2017.7.31.

青井隼人

「南琉球宮古多良間方言におけるピッチ上昇—複数の韻律句が連続する場合のピッチパターンの記述—」, 『国立国語研究所論集』, 14, pp.1–27, 2018.1.31.

【講演・口頭発表】

青井隼人

「声門化子音をめぐる 3 つの課題」, 沖縄言語研究センター定例研究会, 琉球大学, 2017.6.17.

青井隼人

「南琉球宮古語音声学・音韻論の論点」, リンディフォーラム: 特任研究員研究発表会, 東京外国语大学アジアアフリカ言語文化研究所, 2017.7.18.

青井隼人

「多重文法 (Multiple Grammar) モデル概説とその理論的意義」, 文法の動的体系性を探る (1): 文法の多重性と分散性: 2017 年度第 1 回研究会 (通算第 1 回目), 東京外国语大学アジアアフリカ言語文化研究所, 2017.10.7–8.

【一般向けの講演・セミナーなど】

原田走一郎, 青井隼人

「ん!?」, ニホンゴ探検「ことばのミニ講義」, 国立国語研究所, 2017.7.15.

青井隼人

「日本にもある知らない言語—琉球列島のことば—」，東京外国語大学連携講座「知らない世界の知らない言語—フィールド言語調査覚え書き—」，府中市生涯学習センター，2018.2.28.

【講習・チュートリアル】

青井隼人

「よりよい録音を録るために」，木曽川方言調査事前ワークショップ，さかえビル，2017.8.26–27.

【研究調査】

- ・2017.6.13–17：沖縄県宮古郡多良間村，談話テキストの収集
- ・2017.6.19–23：沖縄県国頭郡伊江村，声門化子音の音響資料の収集および基礎語彙調査
- ・2017.8.28–30：愛知県一宮市（旧木曽川町），文法項目の調査
- ・2018.2.12–20：沖縄県国頭郡伊江村，数・代名詞・指示詞・疑問詞の調査
- ・2018.3.1–9：沖縄県宮古郡多良間村，談話テキストの収集

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・フィールドノート（1）：調査目的に応じたノートの工夫（主催：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築（LingDy3）」，東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所，2017.12.6.）
- ・フィールドノート（1）②：調査目的に応じたノートの工夫（主催：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築（LingDy3）」，東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所，2018.3.16.）

【その他の学術的・社会的活動】

- ・東京外国語大学オープンアカデミー講師（担当科目：「音声学」「音声学に基づいた発音教育」「Praat を用いた音響音声学」）
- ・ニホンゴ探検 2017：ことばのミニ講義「ん!?」共同企画
- ・府中市生涯学習センター東京外国語大学連携講座「知らない世界の知らない言葉—フィールド言語調査覚え書き—」講師，2018.2.28.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・木曽川フィールドワーク事前研修：講師，2017.8.26–27.
- ・木曽川フィールドワーク事後研修：講師，2017.11.15.
- ・東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所テクニカルワークショップ「フィールドノート（1）」：企画および進行，2017.12.6, 2018.3.16.

麻生 玲子 (あそう れいこ) 研究系 (言語変異研究領域) 特任助教 (2017.12.1-)

【学位】修士（文学）（東京大学, 2010）

【学歴】東京外国語大学外国語学部学部東アジア課程モンゴル語専攻卒業（2004），東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了（2010），東京外国語大学大学院国際学研究科博士後期課程 単位取得退学（2017）

【職歴】日本学術振興会特別研究員（DC1）（2010–2013），人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員（特任助教）・国立国語研究所言語変異研究領域 特任助教（2017）

【専門領域】言語学

【所属学会】日本言語学会

【受賞歴】

2017：日本言語学会論文賞

【2017年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」：共同研究員

【2017年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・鹿島学術振興財団「宮古語池間方言と八重山語波照間方言における無声鼻音の研究」，研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

木部暢子，麻生玲子（編）

『新しい地域文化研究の可能性を求めて Vol.3 ことばは文化の源』，人間文化研究機構，2018.2.28.

《データベース類》

木部暢子，麻生玲子

「危機言語 DB」，<http://kikigengo.ninjal.ac.jp/>，2018.3.30.

【研究調査】

- ・2017.12：沖縄県八重山郡竹富町波照間

籠宮 隆之 (かごみや たかゆき) 研究系 (言語変異研究領域) 特任助教 (2017.8.1-)

【学位】博士（学術）（神戸大学, 2008）

【学歴】東京都立大学人文学部卒業（1995），東京都立大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1999），神戸大学大学院総合人間科学研究科博士後期課程修了（2008）

【職歴】国立国語研究所 非常勤職員（1999），国立国語研究所 特別奨励研究員（2002），独立行政法人 産業技術総合研究所 特別研究員（2008），人間文化研究機構 国立国語研究所 研究情報資料センター 特任助教（2013），千葉大学フロンティア医工学センター 特任助教（2016），人間文化研究機構 国立国語研究所 言語変異研究領域 特任助教（2017）

【専門領域】音声科学

【所属学会】日本音声学会，日本音響学会，社会言語科学会，International Speech Communication Association

【学会等の役員・委員】日本音声学会 評議員，日本音声学会 庶務委員，日本音声学会 音声学普及委員，社会言語科学会 編集委員

【2017年度に参画した共同研究】

- ・博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業「消滅危機言語・方言の展示を通した最先端研究の可視化・高度化」：共同研究員
- ・コーパスプロジェクト基礎研究「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」：共同研究員

【2017年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「実環境下を想定した聴覚補助器による非言語・パラ言語情報伝達性能評価試験の開発」，15K01495：研究代表者
- ・基盤研究 (C) 「音響的クラスタリングによる骨伝導音の明瞭性改善に関する研究」，15K00245：研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「軟骨伝導の基盤技術の確立と伝音性難聴の補聴機器の開発」，17H02079：研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「リアルタイム MRI および WAVE データによる調音音声学の精緻化」，17H02339：研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Takayuki Kagomiya

“Revisiting Articulatory Positions of Japanese Vowels as a Function of Duration on the Basis of Large-scale Speech Corpora Analysis”，*Proceedings of Oriental COCOSDA 2017*，pp.172–176, 2017.11.1.

【講演・口頭発表】

籠宮 隆之

「ラウドネス校正值を用いた聞こえ度に関する定量的分析の試み」日本音響学会 2018 年春季研究発表会，日本工業大学，2018.3.13–15.

【研究調査】

- ・2017.7：国際電気通信基礎技術研究所，リアルタイム MRI による調音運動測定
- ・2017.8–2018.3：国立国語研究所，聴覚補助器による非言語・パラ言語情報伝達に関する聴取実験
- ・2017.12：国際電気通信基礎技術研究所，リアルタイム MRI による調音運動測定

【その他の学術的・社会的活動】

- ・國學院大學講習会講師，國學院大學，2017.11.7.
- ・NINJAL 職業発見プログラム（開智高校）講師，国立国語研究所，2018.3.16
- ・社会言語科学会事業委員会主催 2017 年度講習会「R を使ったコーパスデータの分析」企画運営
および補助講師，桜美林大学，2018.3.24.
- ・『社会言語科学』編集委員

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・大学院非常勤講師
名古屋外国語大学大学院国際コミュニケーション研究科

新永 悠人 (にいなが ゆうと) 研究系 (言語変異研究領域) 特任助教 (2017.7.1-)

【学位】博士 (文学) (東京大学, 2014)

【学歴】東京大学文学部言語文化学科言語学専修課程卒業 (2006), 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻修士課程修了 (2008), 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻博士課程修了 (2014)

【職歴】日本学術振興会特別研究員 DC2 (2010), 日本学術振興会特別研究員 PD (2012), 成城大学文芸学部非常勤講師 (2015-2018), 大東文化大学国際交流センター非常勤講師 (2015-2016), 東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所非常勤講師 (2016), 神田外国语大学非常勤講師 (2017), 人間文化研究機構国立国語研究所広報室特任助教 (2017), 同研究系 (言語変異研究領域) 特任助教 (2017)

【専門領域】記述言語学, 琉球諸語

【所属学会】日本言語学会, 日本方言研究会, 琉球諸語記述研究会

【学会等の役員・委員】琉球諸語記述研究会・運営委員

【受賞歴】

2015: 第 26 回沖縄言語研究センター仲宗根政善記念研究奨励金

【2017 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: 共同研究員
- ・広領域連携型基幹研究プロジェクト (国語研ユニット) 「方言の記録と継承による地域文化の再構築」: 共同研究員
- ・博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業「消滅危機言語・方言の展示を通じた最先端研究の可視化・高度化」: 共同研究員

【2017 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・AA 研共同利用・共同研究課題, 「通言語的・類型論的観点からみた琉球諸語のケースマーキング」: 共同研究員

【研究業績】

《その他の出版物・記事》

新永悠人

「千年の時を超える！『君の仮名。』」, 『きざし』, 2, 2018.3.

【研究調査】

- ・2017.6.3-5. : 宮崎県椎葉村尾前集落の方言調査
- ・2017.9.11-15. : 宮崎県椎葉村上椎葉集落, 鹿野遊集落, 大河内集落の方言調査
- ・2017.9.19-26. : 鹿児島県奄美大島宇検村湯湾集落, 須古集落, 田検集落の方言調査
- ・2017.10.13-15. : 宮崎県椎葉村尾前集落の方言調査
- ・2017.11.20-24. : 沖縄県久高島の方言調査
- ・2017.12.1-3. : 宮崎県椎葉村尾前集落の方言調査
- ・2018.3.5-9. : 鹿児島県奄美大島宇検村湯湾集落の方言調査
- ・2018.3.24, 26-27. : 宮崎県椎葉村尾八重集落の方言調査

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・「君の仮名。」新しいひらがなを作ろう (主催: 無印良品, 共催: 国立国語研究所), 国立国語研究所, 2017.11.19.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・大学共同利用機関シンポジウム 2017 で発表, 「60 音の世界」, アキバスクエア, 2017.10.8.
- ・厚木市議来訪記念講義, 「方言を研究する理由」, 国立国語研究所, 2017.10.27.
- ・ハワイ大学ヒロ校ハワイ語科教員・学生への発表, “Beginning the language revitalization in Amami”, ハワイ大学ヒロ校, 2018.2.20.
- ・在ハワイ日系沖縄移民の方々への発表, “A problem of labeling the tongues in the Ryukyu islands”, ハワイ大学ヒロ校, 2018.2.21.
- ・第 13 回琉球諸語記述研究会で発表, 「ハワイ語の言語再活性化運動から学び得ること」, 鹿児島県奄美市名瀬公民館, 2018.3.18.
- ・方言調査の現地報告会で発表, 「宮崎県椎葉村尾前方言のカマデとカマサキ」, 宮崎県椎葉村日添公民館, 2018.3.25.
- ・方言風呂敷・方言トートバッグの作成

原田 走一郎 (はらだ そういちろう) 研究系 (言語変異研究領域) 特任助教 (-2017.9.30)

【学位】博士 (文学) (大阪大学, 2016)

【学歴】東京外国語大学外国語学部卒業 (2006), 大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了 (2011), 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学 (2015)

【職歴】与那国町教育員会嘱託員 (2015), 人間文化研究機構国立国語研究所研究系 (言語変異研究領域) 特任助教 (2016)

【専門領域】方言学, 琉球語学, 記述言語学

【所属学会】日本語学会, 日本言語学会

【受賞歴】

2015: 日本語学会秋季大会発表賞

【2017年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: 共同研究員
- ・広領域連携型基幹研究プロジェクト (国語研ユニット) 「方言の記録と継承による地域文化の再構築」: 共同研究員

【2017年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・若手研究 (B) 「消滅の危機に瀕した八重山語諸方言の音声・例文付き辞書作成」, 17K13470: 研究代表者
- ・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「通言語的・類型論的観点からみた琉球諸語のケースマーキング」: 共同研究員

【研究業績】

《著書・編書》

木部暢子, 山本友美, 原田走一郎, 坂井美日

『椎葉村方言語彙集—梅尾・不土野編—』, 国立国語研究所, 2017.5.15.

【講演・口頭発表】

Hiratsuka Yusuke, and Harada Soichiro

“Adjective suffix variation in Kagoshima dialect”, Methods in Dialectology XVI, 国立国語研究所, 2017.8.7-11.

【研究調査】

- ・2017年度: 水納島方言調査, 黒島方言調査, 与論方言調査, 椎葉方言調査, 隠岐の島方言調査, 木曾川方言調査

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・地域文化をはぐくむ (主催: 人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」), FUKURACIA 東京ステーション, 2017.9.9.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ニホンゴ探検講師

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・木曾川方言調査における若手研究者育成

小木曾 智信 (おぎそ としのぶ) 研究系(言語変化研究領域) 教授, 領域代表

【学位】博士(工学)(奈良先端科学技術大学院大学, 2014)

【学歴】東京大学文学部第3類(語学文学)卒業(1995), 東京大学大学院人文社会系研究科修士課程日本文化研究専攻修了(1997), 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学(2001), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程修了(2014)

【職歴】明海大学外国語学部講師(2001), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門研究員(2006), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系准教授(2009), 同研究系(言語変化研究領域)准教授, 領域代表(2016), 同教授, 領域代表(2017), 東京外国语大学大学院国際日本学研究院准教授(クロスアポイントメント)(2016), 同教授(2017)

【専門領域】日本語学, 自然言語処理

【所属学会】日本語学会, 言語処理学会, 情報処理学会, 日本語文法学会, 近代語学会, 東京大学国語国文学会

【学会等の役員・委員】日本語学会編集委員, 言語処理学会編集委員, 情報処理学会論文誌「人文科学とコンピュータ」特集号編集委員

【受賞歴】

2011: 国立国語研究所第2回所長賞

2011: 情報処理学会山下記念研究賞

【2017年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」:リーダー
- ・領域指定型共同研究プロジェクト「文教育に資する, コーパスを用いた教材の開発と学習指導法の研究」:コーディネーター
- ・人間文化研究機構連携研究「異分野融合による総合書物学の構築」サブプロジェクト「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」:共同研究員
- ・フィジビリティースタディー(所長裁量経費)「近代雑誌コーパスの統計的手法による分析と近代文学作品との対照研究」:リーダー
- ・人文学オープンデータ共同利用センター n2i プロジェクト:共同研究員
- ・Oxford Corpus of Old Japanese Project:共同研究員

【2017年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究(A)「日本語歴史コーパスの多層的拡張による精密化とその活用」, 15H01883:研究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

村山実和子, 小木曾智信, 中村壮範

「形態論情報の多重化による洒落本コーパスの質的拡張」, 『情報処理学会研究報告』, 2017-CH-114 (8), pp.1-8, 2017.5.17.

《総説・解説など》

小木曾智信

「電子機器の利用による表記・字体の変化:書き言葉コーパスから」, 『日本語学』, 36 (10), pp.2-12, 2017.9.1.

《データベース類》

鴻野知曉ほか

「日本語歴史コーパス 奈良時代編I 万葉集」, http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/nara.html,

2017.9.29.

Bjarke Frellesvig *et. al.*

“Oxford-NINJAL Corpus of Old Japanese”, <http://oncoj.ninjal.ac.jp>, 2018.3.30.

片山久留美ほか

「日本語歴史コーパス 室町時代編 II キリストン資料」, <http://oncoj.ninjal.ac.jp>, 2018.3.30.

村山実和子ほか

「日本語歴史コーパス 江戸時代編 I 酒落本」, http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/edo.html,

2018.3.30.

【講演・口頭発表】

村山実和子, 小木曾智信, 中村壮範

「形態論情報の多重化による酒落本コーパスの質的拡張」情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会, 龍谷大学アバンティ響都ホール, 2017.5.13.

鴻野知曉, 渡辺由貴, 片山久留美, 小木曾智信

「『日本語歴史コーパス 鎌倉時代編 II 日記・紀行』の公開」日本語学会 2017 年度春季大会, 関西大学, 2017.5.14.

Toshinobu Ogiso

“NINJAL Demonstration: Introduction to the Corpus of Historical Japanese”, NINJAL-NMJH-UHM Workshop: Underdescribed Languages and Histories: Linguist’s and Historian’s Challenges, ハワイ大学マノア校, 2017.5.18.

Toshinobu Ogiso, Asuko Kondo, Yoko Mabuchi, and Noriko Hattori

“Construction of the “Corpus of Historical Japanese: Meiji-Taishō Series I—Magazines””, Digital Humanities 2017, マギル大学, 2017.8.9.

Toshinobu Ogiso

“Construction and utilisation of the corpus of historical Japanese: Man'yōshū and Christian materials”, The 15th EAJS International Conference, リスボン新大学, 2017.8.31.

Tomoaki Tsutsumi and Toshinobu Ogiso

““Web Chamame”: a morphological analysis support software using UniDic for historical Japanese documents”, The 15th EAJS International Conference, リスボン新大学, 2017.9.1.

小木曾智信, 岡照晃, 中村壮範, 八木豊

「『日本語歴史コーパス』における原文 KWIC 表示機能の実装」, 言語資源活用ワークショップ 2017, 国立国語研究所, 2017.9.6.

小木曾智信

「歴史コーパスにおける話者属性アノテーションとその可能性」, 平成 29 年度コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—話者の属性—」, 国立国語研究所, 2017.9.8.

小木曾智信

「日本語コーパスの利用方法—コーパス検索アプリケーション「中納言」入門—」, 韓国日本語学会 第 36 回学術発表会, 白石芸術大学校 (韓国), 2017.9.23.

鴻野知曉, 小木曾智信

「『日本語歴史コーパス 奈良時代編 I 万葉集』デモンストレーション」, 第 70 回萬葉学会全国大会, 山陽新聞社本社ビル「さん太ホール」, 2017.10.15.

鴻野知曉, 岡照晃, 小木曾智信

「『日本語歴史コーパス 奈良時代編 I 万葉集』の公開」, 日本語学会 2017 年度秋季大会, 金沢大学, 2017.11.12.

小木曾智信

「国語研コーパスにおける TEI の利用」, 総合書物学 TEI 検討会, 国立歴史民俗博物館, 2018.3.5.

小木曾智信

「『日本語歴史コーパス』ver.2018.3 通時コーパス構築進捗報告」, 「通時コーパス」シンポジウム 2018, 国立国語研究所, 2018.3.10.

白井良介, 松村雪桜, 小木曾智信, 小町守

「近代の歴史的資料を対象とした機械学習による文境界推定」, 言語処理学会第 24 回年次大会, 岡山コンベンションセンター, 2018.3.15.

小木曾智信

「古文の形態素解析」, 言語処理学会第 24 回年次大会ワークショップ「形態素解析の今とこれから」, 岡山コンベンションセンター, 2018.3.16.

【講習・チュートリアル】

小木曾智信

「日本語歴史コーパス「中納言」講習会」, 国立国語研究所, 2017.7.30.

小木曾智信

「『日本語歴史コーパス』の使い方相談に対する回答」, 通時コーパス活用班合同研究集会, 国立国語研究所, 2017.8.19.

小木曾智信

「日本語歴史コーパス「中納言」講習会」, 東京大学, 2017.9.19.

小木曾智信

「日本語歴史コーパス「中納言」講習会」, 千葉大学, 2017.9.25.

小木曾智信

「通時の観点から見た室町時代語のコーパス」, 東京外国語大学 CAAS & NINJAL ユニット講演会, 東京外国語大学, 2018.3.30.

【研究調査】

- ・ 2017.5.19. : ハワイ大学マノア校ハミルトン図書館, 大正期ハワイ日本語教科書調査
- ・ 2018.2.19-21. : 大英図書館東アジアコレクション, キリストン資料(天草版平家物語・伊曾保物語)原本調査

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・ 通時コーパス活用班合同研究集会, 国立国語研究所, 2017.8.19.
- ・ 平成 29 年度 コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—話者の属性—」, 国立国語研究所, 2017.9.8.
- ・ 「通時コーパス」シンポジウム 2018, 国立国語研究所, 2018.3.10.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 取材協力, TBS ラジオ「明日へのエール」スペシャル企画「今こそ、大人の自由研究」, 2017.8.26 (放送)
- ・ 取材記事, 「プロジェクトリーダーが語る日本語の個性②」, 『国語研ことばの波止場』, 2018.3.30.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・ 連携大学院
東京外国語大学大学院総合国際学研究科(「Japan Studies 1 (コーパス日本語学入門)」, 「Japan Studies 2 (日本語コーパスの活用)」), 東京外国語大学大学院総合国際学研究科 CAAS/NINJAL 合同セミナー(II)「言語・表象・歴史」講師
- ・ 博士論文審査
明治大学大学院(副査)(2017.12), 青山学院大学大学院(副査)(2017.12)
- ・ 特別共同利用研究員の受け入れ
オックスフォード大学大学院生 1 名(研究テーマ:「Temporal and Spatial Concepts in Japanese

Language World View」)

- ・講習会講師

日本語歴史コーパス「中納言」講習会（国立国語研究所：2017.7.30, 東京大学：2017.9.19, 千葉大学：2017.9.25.）

相澤 正夫 (あいざわ まさお) 研究系 (言語変化研究領域) 教授

【学位】修士 (言語学) (東京大学, 1980)

【学歴】東京大学文学部第3類 (語学文学) 言語学専修課程卒業 (1977), 東京大学大学院人文科学研究科言語学専門課程修士課程修了 (1980), 東京大学大学院人文科学研究科言語学専門課程第1種博士課程単位取得退学 (1984)

【職歴】国立国語研究所日本語教育センター第一研究室 研究員 (1984), 同主任研究官 (1990), 同室長 (1991), 同言語体系研究部 部長 (1998), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 部門長 (2001), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授 (2009), 同副所長 (2009-2013), 同研究系 (言語変化研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】社会言語学, 音声学, 音韻論, 語彙論, 意味論

【所属学会】日本語学会, 日本言語学会, 社会言語科学会, 日本音声学会

【学会等の役員・委員】日本語学会 評議員, 『NHK 日本語発音アクセント辞典』改訂専門委員, NHK放送文化研究所『放送研究と調査』レビュー委員

【受賞歴】

2016: 国立国語研究所第12回所長賞

2014: 国立国語研究所第8回所長賞

【2017年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: 共同研究員
- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: 共同研究員

【2017年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (B) 「「昭和話し言葉コーパス」の構築による話し言葉の経年変化に関する実証的研究」, 16H03426: 研究分担者
- ・挑戦的研究 (萌芽) 「日本語研究用オントロジーの設計と開発」, 17K18505: 連携研究者
- ・統計数理研究所公募型共同利用 (一般研究2) 「調査方法の異なる大規模言語意識調査データの比較分析」, 29-共研-2024: 研究分担者

【研究業績】

《総説・解説など》

相澤正夫

「新刊・寸感」, 『日本語学』, 36 (5), pp.96-97, 2017.5.10.

相澤正夫

「新刊・寸感」, 『日本語学』, 36 (12), pp.202-203, 2017.11.10.

相澤正夫

「林直樹著『首都圏東部域音調の研究』」, 『語文』, 159, pp.79-80, 2017.12.25.

【講演・口頭発表】

山崎誠, 相澤正夫, 大西拓一郎, 柏野和佳子, 高田智和, 新野直哉, 藤本灯

「語誌データベースの設計とその活用 (2)」, 「通時コーパス」シンポジウム 2018, 国立国語研究所, 2018.3.10.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・NHK放送文化研究所『放送研究と調査』掲載論文4件のレビュー (2017年4月号, 7月号, 8月号, 12月号)

- ・取材協力、「政策も家事も小顔も…「革命」のインフレ（ニュース Q3）」、朝日新聞、2017.9.13.
- ・新宿日本語学校日本語教師養成科（求職者支援訓練校）の「言語」科目「音声・音韻体系」（計8回）の講師、2018.2.1-3.22.
- ・『例解新国語辞典』（三省堂）の編集委員

大西 拓一郎 (おおにしたくいちらう) 研究系 (言語変化研究領域) 教授

【学位】修士 (文学) (東北大学, 1987)

【学歴】東北大学文学部卒業 (1985), 東北大学大学院文学研究科博士課程前期 2 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻修了 (1987), 東北大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻単位取得退学 (1989)

【職歴】東北大学文学部 助手 (1991), 国立国語研究所言語変化研究部第一研究室 研究員 (1993), 同主任研究官 (1996), 同室長 (1999), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授 (2009), 同研究系 (言語変化研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】方言学, 言語地理学, 日本語学

【所属学会】日本方言研究会, 日本語学会, International Society for Dialectology and Geolinguistics (SIDG), 変異理論研究会, 日本言語学会, 日本音声学会, 日本語文法学会, 中日理論言語学研究会, 九州方言研究会, 日本文芸研究会

【学会等の役員・委員】日本方言研究会 世話人, 日本語学会 評議員, SIDG committee of accountants

【受賞歴】

2016: 国立国語研究所第 13 回所長賞

【2017 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: 共同研究員

【2017 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・挑戦的萌芽研究「方言周圈論と方言区画論の統合による新しい言語地理学の創生」, 16K13232 : 研究代表者
- ・基盤研究 (B) 「語史再構における言語地理学的解釈の再検討—類型的定式化の試み—」, 16H03415 : 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「無敬語地帯の地域特性と敬語行動—日本語敬語研究の再起動を目指して—」, 15H03204 : 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「『瀬戸内海言語図巻』の追跡調査による音声言語地図の作成と言語変容の研究」, 17H02340 : 研究分担者
- ・挑戦的研究 (萌芽) 「日本語研究オントロジーの設計と開発」, 17K18505 : 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

大西拓一郎 (編)

『空間と時間の中の方言—ことばの変化は方言地図にどう現れるか—』, 朝倉書店, 2017.5.15.

《論文・ブックチャプター》

大西拓一郎

「言語変化と方言分布—方言分布形成の理論と経年比較に基づく検証—」, 大西拓一郎 (編)

『空間と時間の中の方言—ことばの変化は方言地図にどう現れるか—』, pp.1–20, 朝倉書店, 2017.5.15.

大西拓一郎

「蛇の目と波紋—野草や小動物の方言を例に—」, 大西拓一郎 (編) 『空間と時間の中の方言—ことばの変化は方言地図にどう現れるか—』, pp.252–259, 朝倉書店, 2017.5.15.

大西拓一郎

「言語変化と中心性—経年比較に基づく中心性の検証—」, 大西拓一郎 (編) 『空間と時間の中の方言—ことばの変化は方言地図にどう現れるか—』, pp.323–341, 朝倉書店, 2017.5.15.

大西拓一郎

「方言は生きている—混ざることによる変化」, 『学鑑』, 114 (2), pp.18–21, 2017.6.5.

大西拓一郎

「新しい方言の形成—行カンカッタ・飲マンカッタの生まれるところ」, 『CEL』, 116, pp.48–51, 2017.7.1.

大西拓一郎

「方言形成論序説—言語地理学の再興—」, 『方言の研究』, 3, pp.5–28, 2017.9.30.

Takuichiro Onishi

“The Relationship between Area and Human Lives in Dialect Formation”, *dialekt| dialect 2.0: Long papers from 7th Congress of the International Society for Dialectology and Geolinguistics (SIDG)*, pp.274–289, 2017.10.

大西拓一郎

「方言分布が見せる「坂」「崖」「峰」」, 『CEL』, 117, pp.48–51, 2017.11.1.

Takuichiro Onishi

“Dialects of Japanese”, Charles Boberg, John Nerbonne, Dominic Watt (eds.) *The Handbook of Dialectology*, pp.559–570, Wiley Blackwell, 2018.1.

大西拓一郎

「方言変化の自律と介入—革新ダラと保守ズラ」, 『CEL』, 118, pp.48–51, 2018.3.1.

大西拓一郎

「方言分布・言語地図データベース—時空間情報を持つ言語データ—」, 『第23回公開シンポジウム 人文科学とデータベース』, pp.43–50, 2018.3.3.

《データベース等》

大西拓一郎

「全国方言分布調査 (FPJD)・新日本言語地図 (NLJ)」,

http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/fpjdfpjdfpj_index.html, 2016.3.15公開, 隨時更新

大西拓一郎

「国立国語研究所 言語地図データベース」,

http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/ladb_index.html, 2017.3.28公開, 隨時更新

【講演・口頭発表】

大西拓一郎

「方言地図データベースについて」, 「通時コーパス」シンポジウム, 国立国語研究所, 2018.3.10.

【一般向けの講演・セミナーなど】

大西拓一郎

「言語地理学から見た諏訪—方言、社会、教育文化—」, 教育を語る会, 諏訪市教育会館, 2017.9.17.

大西拓一郎

「方言分布今昔マップ！—方言でたどる空間と時間の旅—」, 八王子市民自由講座, 八王子市生涯学習センター, 2018.1.21.

大西拓一郎

「方言の生まれるところ」, 国立国語研究所第12回NINJALフォーラム「ことばの多様性とコミュニケーション」, 東京証券会館, 2018.2.3.

大西拓一郎

「日本の方言から学ぶ地理歴史」, 平成29年度歴史文化セミナー, 昭島市公民館, 2018.2.18–3.11.

大西拓一郎

「方言を地図で見よう」, 平成29年度特別授業, 茅野市立玉川小学校, 2018.2.23.

【研究調査】

- ・ 2017.4, 2017.12-2018.3: 長野県茅野市, 方言記述調査

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 八王子市民自由講座「方言分布今昔マップ！ —方言でたどる空間と時間の旅—」, 八王子市生涯学習センター, 2018.1.21.
- ・ 平成 29 年度 歴史文化セミナー「日本の方言から学ぶ地理歴史」, 昭島市公民館, 2018.2.18, 2018.3.4, 2018.3.11.
- ・ 日本語学会常任査読委員

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・ 大学非常勤講師
中央大学文学部, 放送大学教養学部, 獨協大学国際教養学部

山崎 誠 (やまさき まこと) 研究系 (言語変化研究領域) 教授

【学位】博士 (学術) (東京学芸大学, 2015)

【学歴】埼玉大学教養学部教養学科卒業 (1980), 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科言語学専攻
第5学年中退 (1984), 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科修了 (2015)

【職歴】国立国語研究所言語計量研究部 研究員 (1984), 同 言語体系研究部第一研究室 研究員 (1988),
同 主任研究官 (1993), 同 室長 (1995), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 第一領域 主任
研究員 (2001), 同 第一領域長 (2003), 同 グループ長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所
言語資源研究系 准教授 (2009), 同 教授 (2015), 同 研究系 (言語変化研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】日本語学, 計量日本語学, 計量語彙論, コーパス, シソーラス

【所属学会】日本語学会, 計量国語学会, 言語処理学会, 語彙研究会, 日本語教育学会, 社会言語科学
会, 情報知識学会, 日本語文法学会, 日本行動計量学会, 情報処理学会, 表現学会

【学会等の役員・委員】計量国語学会 理事, 言語処理学会 代議員

【受賞歴】

2007: 言語処理学会第12回年次大会優秀発表賞

【2017年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: 班長 (語誌データベース班)
- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: 班長 (レジスター班)
- ・基礎研究「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」: 共同研究員

【2017年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・挑戦的研究 (萌芽) 「日本語研究用オントロジーの設計と開発」, 17K18505: 研究代表者
- ・基盤研究 (B) 「会話文への発話者情報の付与によるコーパスの拡張」, 15H03212: 研究代表者
- ・基盤研究 (B) 「「昭和話し言葉コーパス」の構築による話し言葉の経年変化に関する実証的研究」, 16H03426: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「日本語教師支援のための学習者コーパス文法項目データベースの構築と公開」, 15K02654: 研究分担者

【研究業績】

《その他の出版物・記事》

山崎誠

「人工的にテキストを生み出すための研究という新たな方向性」, 『図書新聞』, 2018.1.27.

【講演・口頭発表】

堀恵子, 江田すみれ, 山崎誠

「機能語用例文データベース「はごろも」に付与する文法カテゴリー情報について」, The 21st
Japanese Language Education Symposium in Europe, リスボン新大学, 2017.8.30-9.2.

山崎誠

「レジスター・位相の違いによる会話文の語彙的多様性」, 言語資源活用ワークショップ 2017,
国立国語研究所, 2017.9.5-6.

山崎誠

「外国語翻訳小説と日本語小説の会話文の計量語彙論的比較」2017 語彙研究会大会, 愛知学院
大学大学院栄サテライト, 2017.9.16.

山崎誠

「辞書における自動詞他動詞」日本語の自動詞・他動詞を考える, 日本女子大学, 2017.10.7.
山崎誠

「言語資源を利用した日本語研究の新展開」(招待講演), 2nd International Conference of the Center of the Global Area Studies, 全北大学校, 2017.11.15-17.

相良かおる, 山崎誠, 中島直樹, 山下貴範, 小野正子

「医療記録における語彙の月別出現分布」人文科学とコンピュータシンポジウム 2017, 大阪市立大学学術情報センター, 2017.12.9-10.

山崎誠, 相澤正夫, 大西拓一郎, 柏野和佳子, 高田智和, 新野直哉, 藤本灯

「語誌データベースの設計とその活用 (2)」通時コーパスシンポジウム 2018, 国立国語研究所, 2018.3.10.

宇佐美まゆみ, 山崎誠

「『BTSJ 日本語自然会話コーパス (2018年版)』構築の趣旨と特徴」通時コーパスシンポジウム 2018, 岡山コンベンションセンター, 2018.3.13-15.

【講習・チュートリアル】

柏野和佳子, 山崎誠

「第3回コーパス利用講習会」, 国立国語研究所, 2017.9.7.

柏野和佳子, 山崎誠

「第4回コーパス利用講習会」, 国立国語研究所, 2018.3.19.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・NINJAL 職業発見プログラム (渋谷教育学園渋谷中学) 講師, 国立国語研究所, 2017.04.28.
- ・NINJAL 職業発見プログラム (群馬県立中央中等教育学校) 講師, 国立国語研究所, 2018.03.16.
- ・『三省堂国語辞典』編集委員
- ・日本語文法学会 学会誌委員会委員
- ・日本語教育学会 審査・運営協力員
- ・科学研究費委員会専門委員

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・大学院非常勤講師
拓殖大学大学院言語教育研究科, 筑波大学大学院人文社会科学研究科
- ・連携大学院
一橋大学大学院言語社会研究科 連携教授
- ・特別共同利用研究員の受入
北京日本学研究センター
- ・オンライン検索システム「中納言」講習会 (2017.9.7, 2018.3.19)

横山 詔一 (よこやま しょういち) 研究系 (言語変化研究領域) 教授

【学位】博士 (心理学) (筑波大学, 1991)

【学歴】横浜国立大学教育学部卒業 (1981), 筑波大学大学院博士課程心理学研究科修士号取得 (1983), 筑波大学大学院博士課程心理学研究科退学 (1985)

【職歴】上越教育大学学校教育学部助手 (1985), 国立国語研究所情報資料研究部・電子計算機システム開発研究室 研究員 (1991), 同情報資料研究部 主任研究官 (1995), 独立行政法人国立国語研究所情報資料部門 領域長 (2001), 同研究開発部門 グループ長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 教授 (2009), 同研究情報資料センター長 (2009 – 2013), 同研究系 (言語変化研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】認知科学, 心理統計, 日本語学

【所属学会】日本心理学会, 社会言語科学会, 計量国語学会, 日本語学会, 日本教育工学会, 行動計量学会

【学会等の役員・委員】計量国語学会 理事, 社会言語科学会 監事, 日本語学会 会計監査

【受賞歴】

2010: 社会言語科学会第9回徳川宗賢賞 (優秀賞)

2010: 国立国語研究所第1回所長賞

1997: 日本教育工学会第11回日本教育工学会論文賞

【2017年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: 共同研究員
- ・機構間連携・文理融合プロジェクト調査研究 (Feasibility Study) 「語における系統・変異・多様性とその数理」 (情報・システム研究機構) : 共同研究員
- ・国語研フィージビリティスタディ 「言語の生涯変化理論構築に向けた準備研究」: 共同研究員

【2017年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・挑戦的研究 (萌芽) 「疫学的統計手法と人工知能学の融合活用による敬語の変化予測研究」, 17K18501: 研究代表者
- ・基盤研究 (B) 「海外日本語教育指導者との協働による学術論文執筆支援プログラムの開発とその評価」, 17H01994: 研究分担者

【研究業績】

《総説・解説など》

横山詔一

「新刊・寸感」, 日本語学, 36 (6), pp.100–101, 2017.6.

横山詔一

「新刊・寸感」, 日本語学, 36 (13), pp.84–85, 2017.12.

《データベース等》

高田智和, 鎌水兼貴, 横山詔一, 前川喜久雄

「鶴岡調査データベース ver.1.0」, <http://www2.ninjal.ac.jp/longitudinal/tsuruoka.html>, 2017.4.26.

高田智和, 鎌水兼貴, 横山詔一, 前川喜久雄

「鶴岡調査データベース ver.2.0」, <http://www2.ninjal.ac.jp/longitudinal/tsuruoka.html>, 2017.10.10.

高田智和, 鎌水兼貴, 横山詔一, 前川喜久雄

「鶴岡調査データベース ver.2.0 解説 (改訂版)」,

【講演・口頭発表】

横山詔一

「言語変化と社会環境」（シンポジウム・ワークショップパネル, 指名), 日本語学会 2017 年度秋季大会シンポジウム「ルールを逸脱した表現の産出と許容」, 金沢大学, 2017.11.12.

横山詔一

「異体字選好の生態学的モデル」（シンポジウム・ワークショップパネル, 指名), 機構間連携・文理融合プロジェクト「言語における系統・変異・多様性とその数理」シンポジウム, TKP 東京駅大手町カンファレンスセンター・ホール 22E, 2018.2.2.

【一般向けの講演・セミナーなど】

高田智和, 横山詔一, 前川喜久雄, 鎌水兼貴, 前田忠彦, 中村隆, 吉野諒三

「地域社会の共通語化を追う：国立国語研究所と統計数理研究所の 60 年間以上にわたる連携研究」, 第 32 回人文機構シンポジウム「人文知による情報と知の体系化～異分野融合で何をつくるか～」（機構合同シンポジウム）一橋講堂, 2018.2.26.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・日本語学会 2017 年度秋季大会シンポジウム「ルールを逸脱した表現の産出と許容」（主催：日本語学会), 金沢大学, 2017.11.12.
- ・機構間連携・文理融合プロジェクト「言語における系統・変異・多様性とその数理」シンポジウム（主催：国立国語研究所・国立民族学博物館・統計数理研究所), TKP 東京駅大手町カンファレンスセンター・ホール 22E, 2018.2.2.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・NINJAL 職業発見プログラム（兵庫県立兵庫高校）講師, 国立国語研究所, 2017.8.1.
- ・大学共同利用機関法人情報・システム研究機構統計数理研究所, 運営会議委員
- ・筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター, 日本語・日本事情遠隔教育拠点事業運営協議会委員
- ・博報財団「児童教育実践についての研究助成」, 審査委員

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・東京大学大学院総合文化研究科博士論文執筆資格審査（副査), 2017.6.23.

新野 直哉 (にいの なおや) 研究系 (言語変化研究領域) 准教授

【学位】博士 (文学) (東北大学, 2010)

【学歴】東北大学文学部文学科卒業 (1984), 東北大学大学院文学研究科博士課程前期 2 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻修了 (1986), 東北大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻中退 (1988)

【職歴】宮崎大学教育学部 助手 (1988), 同 講師 (1989), 同 助教授 (1992), 国立国語研究所情報資料研究部 主任研究官 (1996), 独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第一領域 主任研究員 (2001), 同 文献情報グループ 主任研究員 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 助教 (2009), 同 准教授 (2011), 同 研究系 (言語変化研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】言語学, 日本語学

【所属学会】日本近代語研究会, 表現学会, 日本語学会

【学会等の役員・委員】日本近代語研究会 運営委員, 日本語学会 大会企画運営委員

【受賞歴】

2011: 国立国語研究所第 2 回所長賞

【2017 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: 共同研究員

【2017 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「近現代の新語・新用法及び言語規範意識の研究」, 16K02751: 研究代表者
- ・挑戦的萌芽研究「日本語研究用オントロジーの設計と開発」, 17K18505: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

新野直哉

「大正期『文藝春秋』の記事に見られる言語規範意識」, 『近代語研究 第二十集』, 近代語研究会 (編) pp.155–175, 武蔵野書院, 2018.3.30.

新野直哉

「平成期『朝日新聞』の記事に見られる副詞“全然”に関する言語規範意識—『読売新聞』と比較して—」, 『国語学研究』, 57, pp.14–26, 2018.3.31.

【講演・口頭発表】

新野直哉

「「新聞記事データベース」について—概要と活用例—」, 「通時コーパス」シンポジウム 2018, 国立国語研究所, 2018.3.10.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・第 343 回日本近代語研究会春季研究発表大会, 関西大学千里山キャンパス, 2017.5.12.
- ・日本語学会 2017 年度春季大会 (主催: 日本語学会), 関西大学千里山キャンパス, 2017.5.13–14.
- ・近現代の新語・新用法および言語規範意識の研究, 京都府立大学, 2017.8.31.
- ・第 348 回日本近代語研究会秋季研究発表大会 (主催: 日本近代語研究会), 金沢歌劇座, 2017.11.10.
- ・日本語学会 2017 年度秋季大会 (主催: 日本語学会), 金沢大学角間キャンパス, 2017.11.11–12.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・NINJAL 職業発見プログラム (仙台第一高校) 講師, 国立国語研究所, 2017.7.7.
- ・取材協力, テレビ朝日「グッド! モーニング」, 2017.4–

【大学院教育・若手研究者育成】

・大学院非常勤講師

目白大学大学院

高田 智和 (たかだともかず) 研究系(言語変化研究領域)准教授

【学位】博士(文学)(北海道大学, 1988)

【学歴】北海道大学文学部卒業(1999), 北海道大学大学院文学研究科国文学専攻修士課程修了(2001), 北海道大学大学院文学研究科言語文学専攻博士後期課程修了(2004)

【職歴】独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員(2005), 同言語資源グループ 研究員(2006), 同言語生活グループ 研究員(2007), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 准教授(2009), 同研究系(言語変化研究領域)准教授(2016)

【専門領域】日本語学, 国語学, 文献学, 文字・表記, 漢字情報処理

【所属学会】日本語学会, 訓点語学会, 計量国語学会, 情報処理学会, 日本言語学会

【学会等の役員・委員】計量国語学会 理事, 訓点語学会 委員, 情報処理学会情報規格調査会SC2専門委員会 委員

【受賞歴】

2016: 日本語学会大会発表賞

2013: 北海道大学文学部同窓会榆文賞

2010: 情報処理学会情報規格調査会標準化貢献賞

2010: 国立国語研究所第1回所長賞

2007: 日本規格協会標準化貢献賞

【2017年度に参画した共同研究】

- ・広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による「総合書物学」の構築」(国語研ユニット): 研究代表者
- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: 共同研究員
- ・ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査・研究活用—言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築」: 共同研究員

【2017年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究(B)「字体記述のデジタル化に基づく文字規範史の定位」, 26284066: 研究代表者
- ・挑戦的研究(萌芽)「漢文訓点資料の国際文書構造記述による共有化と書き下し文自動生成のための基礎研究」, 17K18506: 研究代表者
- ・基盤研究(S)「木簡など出土文字資料の資源化のための機能的情報集約と知の結集」, 25220401: 研究分担者
- ・基盤研究(A)「歴史的文字に関する経験知の共有資源化と多元的分析のための人文・情報学融合研究」, 26244041: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

堤智昭, 田島孝治, 小助川貞次, 高田智和

「訓点資料の構造化記述方式と計算機を用いた基礎計量」, 『情報処理学会論文誌』, 59(2), pp.278-287, 2017.2.16.

《データベース等》

高田智和, 鎌水兼貴, 横山詔一, 前川喜久雄

「鶴岡調査データベース ver.2.0」, <http://www2.ninjal.ac.jp/longitudinal/tsuruoka.html>, 2017.10.11(公開)

藤本灯, 高田智和, 岡部嘉幸, 小木曾智信, 市村太郎, 銭谷真人, 北崎勇帆, 福山雅深

「ひまわり版「人情本コーパス」Ver. 0.2(『江戸時代編 II 人情本』試行版)」,

http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/edo.html.

《その他の出版物・記事》

高田智和

「新刊・寸感」, 『日本語学』, 36 (10), 2017.9.10.

高田智和

「新刊・寸感」, 『日本語学』, 37 (3), 2018.3.10.

【講演・口頭発表】

山口亮, 高田智和

「国立国語研究所研究資料室における資料整備の実践と課題—音源資料の取り扱いを中心に—」, 日本アーカイブズ学会 2017 年度大会, 学習院大学, 2017.4.22–23.

高田智和, 福山雅深, 堤智昭, 小助川貞次

「資料画像公開・利用の国際化と高度化の取り組み」, 日本語学会 2017 年度春季大会, 関西大学, 2017.5.13–14.

Tomokazu Takada

“Hentaigana database for education and coded character set” (招待講演), NINJAL-NMJH-UHM Workshop: Underdescribed Languages and histories: Linguists' and Historians' Challenges, ハワイ大学マノア校, 2017.5.16–18.

高田智和

「国語学と情報技術」(招待講演), 第 115 回人文科学とコンピュータ研究会, 東京大学史料編纂所, 2017.8.4.

高田智和

「『哲学字彙』掲出語に対する語彙素 ID 付けの試み」(招待講演), 通時コーパス活用班合同研究集会, 国立国語研究所, 2017.8.19.

高田智和

「変体仮名と Unicode」(招待講演), シンポジウム「日本語の歴史的典籍研究の近未来」, 新リスボン大学, 2017.8.30.

高田智和, 早田美智子

「「日本語研究・日本語教育文献データベース」の国際展開」, 韓国日本語学会第 36 回国際学術発表大会, 白石芸術大学, 2017.9.23.

藤本灯, 韓一, 高田智和

「古辞書構造化記述の試み—和名類聚抄を例に—」, 日本語学会 2017 年度秋季大会, 金沢大学, 2017.11.11–12.

高田智和

「ISO/IEC 10646 の変体仮名セット」(招待講演), シンポジウム「変体仮名のこれまでとこれから」, 国立国語研究所, 2017.11.25.

Tomokazu Takada

“The Chinese-character Textbook at MISLS” (招待講演), Spies, Prisoners, and Farmers: The Origins of Japanese Studies at Michigan, ミシガン大学日本研究センター, 2017.11.29.

林昌哉, 田島孝治, 堤智昭, 高田智和, 小助川貞次

「訓点資料の加点情報計量のためのデータ構造—国立国語研究所蔵「尚書（古活字版）」を対象として—」, 人文科学とコンピュータシンポジウム, 大阪市立大学, 2017.12.9–10.

堤智昭, 土井裕絵, 田島孝治, 高田智和, 小助川貞次

「ヨコト点データベースと検索システムの試作」, 人文科学とコンピュータシンポジウム, 大阪市立大学, 2017.12.9–10.

高田智和, 石本祐一

「国立国語研究所収蔵音源資料と所蔵音源データベース構築」, 人文科学とコンピュータシンポ

ジウム, 大阪市立大学, 2017.12.9–10.

高田智和

「陸軍日本語学校の漢字教育—Philip M. Foisie paper から—」, ミシガン大学岡山分室と日本・アメリカの人文科学—インテリジェンス・日本語教育・地域研究—, 国立歴史民俗博物館, 2018.2.17.

高田智和

「米陸軍日本語学校 (MIJLS) の漢字学習教材」, 東洋学へのコンピュータ利用第 29 回研究セミナー, 京都大学人文科学研究所, 2018.3.9.

【講習・チュートリアル】

高田智和

「漢文訓点資料を読み解く」, 第 25 回 NINJAL チュートリアル「文献資料を活用した日本語研究」, ミシガン大学日本研究センター, 2017.11.28.

【研究調査】

- ・ 2017.5.19. : ハワイ大学マノア校図書館, ハワイ日本語教科書調査
- ・ 2017.11.30. : ミシガン大学図書館, 古地図調査
- ・ 2018.2.19–20. : 大英図書館, キリストン資料調査

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・ ニホンゴ探検 2017 (主催: 国立国語研究所), 国立国語研究所, 2017.7.15.
- ・ シンポジウム「変体仮名のこれまでとこれから」(主催: 歴史コーパス精緻化, 共催: 情報処理推進機構国際標準推進センター, 国文学研究資料館古典籍共同研究事業センター), 国立国語研究所, 2018.11.25.
- ・ 第 25 回 NINJAL チュートリアル「文献資料を活用した日本語研究」(主催: 国立国語研究所), ミシガン大学日本研究センター, 2017.11.28.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ ニホンゴ探検 2017, 国立国語研究所, 2017.7.15.
- ・ 国立国語研究所ワークショップ「君の仮名。」新しいひらがなを作ろう, 国立国語研究所, 2017.11.19.
- ・ NINJAL チュートリアル「文献資料を活用した日本語研究」, ミシガン大学日本研究センター, 2017.11.28.
- ・ 人文科学とコンピュータシンポジウム (じんもんこん 2017) プログラム委員

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・ 大学院非常勤講師
政策研究大学院大学

藤本 灯 (ふじもと あかり) 研究系 (言語変化研究領域) 特任助教

【学位】博士 (文学) (東京大学, 2014)

【学歴】東京大学文学部言語文化学科日本語日本文学専修課程卒業 (2005), 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野修士課程修了 (2007), 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野博士課程単位取得退学 (2011)

【職歴】日本学術振興会特別研究員 (PD) (2011), 東京大学大学院人文社会系研究科研究員 (2014), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 特任助教 (2015), 同 言語変化研究領域 特任助教 (2016), 人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員 [併任] (2016)

【専門領域】国語学, 文献学, 古辞書

【所属学会】日本語学会, 訓点語学会, 東京大学国語国文学会, 近代語学会, 国語語彙史研究会

【受賞歴】

2016: 国立国語研究所第 12 回国立国語研究所所長賞 (若手研究者奨励賞)

2016: 漢検漢字文化研究奨励賞優秀賞

2015: 新村出記念財団刊行助成

2014: 日本語学会大会発表賞

【2017 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・若手研究 (B) 「『色葉字類抄』を中心とする本邦国語辞書収録語彙の通時的研究」, 16K16849 : 研究代表者
- ・挑戦的研究 (萌芽) 「日本語研究用オントロジーの設計と開発」, 17K18505 : 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「平安時代漢字字書総合データベースによる研究基盤の確立」, 16H03422 : 連携研究者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

藤本灯

「『色葉字類抄』『雜物部』の研究」, 『国語語彙史の研究』, 37, pp.183–202, 和泉書院, 2018.3.

《データベース等》

藤本灯

翻字テキスト公開 : 『浦里時次郎明鳥後の正夢』, 『浮世新形恋の花染』, 『春色連理の梅』,

<http://textdb01.ninjal.ac.jp/dataset/>, 2017.7.

藤本灯

翻字テキスト公開 : 『二十巻本和名類聚抄 [古活字版]』,

<http://textdb01.ninjal.ac.jp/dataset/kwrs/>, 2017.11.

【講演・口頭発表】

藤本灯, 岡照晃, 銭谷真人, 村山実和子, 北崎勇帆

「近世版本の振り仮名情報を用いた形態素解析実験—洒落本・人情本コーパスの事例—」, 第 114 回 CH 研究発表会, 龍谷大学, 2017.5.13.

藤本灯, 銭谷真人

「人情本コーパスの現状—翻字本文テキストの公開〈8作品〉—」, 通時コーパス活用班合同研究会, 国立国語研究所, 2017.8.19.

Akari Fujimoto and Sota Tanaka

“The Validity of Using Iroha-Jiruishō to Interpret Ancient Japanese Diaries of the Male Nobility”, 15th International Conference of the European Association for Japanese Studies, 新リスボン大学,

2017.9.1.

藤本灯, 韓一, 高田智和

「古辞書の構造化記述の試み—和名類聚抄を例に—」, 日本語学会 2017 年度秋季大会, 金沢大学, 2017.11.12.

山崎誠, 相澤正夫, 大西拓一郎, 柏野和佳子, 高田智和, 新野直哉, 藤本灯

「語誌データベースの設計とその活用 (2)」, 「通時コーパス」シンポジウム 2018, 国立国語研究所, 2018.3.10.

藤本灯, 銭谷真人

「ひまわり版『人情本コーパス』公開に向けて」, 「通時コーパス」シンポジウム 2018, 国立国語研究所, 2018.3.10.

【研究調査】

- ・ 2017.7: 岩瀬文庫, 「伊呂波字類抄」写本調査

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 『『色葉字類抄』の研究』に対する書評, 高橋久子 (執筆) 「藤本灯著『『色葉字類抄』の研究』」, 2017.4.1.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・ 非常勤講師
成蹊大学, 早稲田大学
- ・ 集中講義
清泉女子大学, 岩手大学
- ・ リレー講義
千葉大学

小磯 花絵 (こいそ はなえ) 研究系 (音声言語研究領域) 准教授, 領域代表

【学位】博士 (理学) (奈良先端科学技術大学院大学, 1998)

【学歴】千葉大学文学部卒業 (1994), 千葉大学大学院文学研究科修士過程修了 (1996), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程修了 (1998)

【職歴】ATR 知能映像通信研究所研修研究員 (1996), 国立国語研究所言語行動研究部 研究員 (1998), 同主任研究員 (2009), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 准教授 (2009), 同研究系 (音声言語研究領域) 准教授, 領域代表 (2016)

【専門領域】コーパス言語学, 談話分析, 認知科学

【所属学会】社会言語科学会, 言語処理学会, 日本音声学会, 人工知能学会, 日本認知科学会

【学会等の役員・委員】社会言語科学会 監事, 言語処理学会代議員,

【受賞歴】

2002: 情報処理学会山下記念研究賞

1996: 人工知能学会大会論文賞

1996: 人工知能学会研究奨励賞

【2017年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: リーダー

【2017年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (B) 「コーパス言語学的手法に基づく会話音声の韻律特徴の体系化」, 16H03421: 研究代表者
- ・基盤研究 (A) 「日常場面と特定場面の日本語会話コーパスの構築と言語・相互行為研究の新展開」, 17H00914: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

田中弥生, 柏野和佳子, 角田ゆかり, 伝康晴, 小磯花絵

『国立国語研究所「日常会話コーパス」プロジェクト報告書2『日本語日常会話コーパス』の構築—個人密着法に基づく会話の収録—』

《論文・ブックチャプター》

小磯花絵

「対話分析」, 人工知能学会 (編) 『人工知能学大事典』, pp.656–658, 共立出版, 2017.7.8.

田中弥生, 柏野和佳子, 角田ゆかり, 伝康晴, 小磯花絵

「『日本語日常会話コーパス』の構築: 会話収録法に着目して」, 『国立国語研究所論集』, 14, pp.275–292, 2018.1.31.

《データベース等》

小磯花絵, 天谷晴香, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川賢哉
「『日常会話コーパス』50時間プロジェクト内限定公開版」(非公開)

小磯花絵, 西川賢哉

「『日本語話し言葉コーパス』中納言版(発音情報拡張)」, <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>, 2018.3.5.

小磯花絵, 柏野和佳子, 西川賢哉

「『名会話コーパス』中納言版(メタ情報拡張)」, <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>, 2018.3.16.

小磯花絵, 柏野和佳子, 西川賢哉

「『現日研・職場談話コーパス』中納言版」(非公開)

小磯花絵, 渡部涼子, 土屋智行, 横森大輔, 相澤正夫, 伝康晴

「会話行動調査データ」,

<https://pj.ninjal.ac.jp/conversation/survey.html#surveyDL>, 2018.3.22.

《その他の出版物・記事》

小磯花絵

「会話から日本語を見る」, 『国語研 ことばの波止場 3』, 2018.3.30.

【講演・口頭発表】

小磯花絵, 伝康晴

「『日本語日常会話コーパス』のデータ公開方針—法的・倫理的な観点から—」, 言語資源活用ワークショップ 2017, 国立国語研究所, 2017.9.6.

小磯花絵

「話し言葉コーパスに見る言葉の年齢差」, コーパス合同シンポジウム コーパスに見る日本語のバリエーション—話者の属性—, 国立国語研究所, 2017.9.8.

小磯花絵

「国語研究所の言語データ—コーパスを中心に—」, I-URIC フロンティアコロキウム運営委員会分科会 2, 国立情報学研究所, 2017.10.5.

小磯花絵

「『日本語日常会話コーパス』の設計と構築」, 人工知能学会第 8 回対話システムシンポジウム (SLUD-81), 早稲田大学, 2017.10.12.

小磯花絵, 天谷晴香, 居闇友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴

「『日本語日常会話コーパス』構築状況と予備的分析」, 言語処理学会第 24 回年次大会発表論文集, 岡山コンベンションセンター, 2018.3.14.

【講習・チュートリアル】

小磯花絵

「コーパスに基づく話し言葉の研究」, 第 26 回 NINJAL チュートリアル, 広島大学, 2017.11.30.

小磯花絵, 柏野和佳子

「コーパスに基づく話し言葉の研究」, 第 27 回 NINJAL チュートリアル, 国立国語研究所, 2018.3.8.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・ 第 3 回コーパス利用講習会 (主催: 国語研共同研究プロジェクト「日常会話コーパス」), 国立国語研究所, 2017.9.1.
- ・ コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—話者の属性—」(主催: 国立国語研究所 言語変異研究領域, 言語変化研究領域, 音声言語研究領域、日本語教育研究領域, 共催: 科研 16H01933, 15H01883, 16H01934, 16H03421), 国立国語研究所, 2017.9.8.
- ・ I-URIC フロンティアコロキウム 2017 (主催: I-URIC フロンティアコロキウム運営委員会), つま恋リゾート彩の郷, 2017.12.12.
- ・ シンポジウム「ことば・認知・インタラクション 6」(主催: 科研費「特定場面」, 国語研共同研究プロジェクト「日常会話コーパス」, 共催: 国語研共同研究プロジェクト「創発参与構造」), 東京工科大学, 2018.3.18.
- ・ シンポジウム「日常会話コーパス III」(主催: 国語研共同研究プロジェクト「日常会話コーパス」, 「創発参与構造」), 国立国語研究所, 2018.3.19.
- ・ 第 4 回コーパス利用講習会 (主催: 国語研共同研究プロジェクト「日常会話コーパス」), 国立国語研究所, 2018.3.19.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・人工知能学会第 82 回 SLUD 研究会における『日常会話コーパス』デモンストレーション (2018.3.2)
- ・シンポジウム「日常会話コーパス」III における『日常会話コーパス』モニター公開データデモンストレーション (2018.3.19)
- ・LREC2018 Workshop 'Language and Body in Real Life' Organizing Committee

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・連携大学院
一橋大学大学院言語社会研究科 連携教授
- ・修士論文審査
一橋大学大学院（主査）1 件（2018.2），一橋大学大学院（副査）3 件（2018.2），

前川 喜久雄 (まえかわ きくお)

研究系（音声言語研究領域）教授，コーパス開発センター長

【学位】博士（学術）（東京工業大学，2011）

【学歴】上智大学外国語学部フランス語学科卒業（1980），上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻博士前期課程修了（1982），上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻博士後期課程中退（1984）

【歴歴】鳥取大学教育学部 助手（1984），同 講師（1987），国立国語研究所言語行動研究部第二研究室研究員（1989），同 主任研究官（1992），同 室長（1994），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第二領域 領域長（2001），同 言語資源グループ長（2006），人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 教授，コーパス開発センター長（2009），同 研究系長（2009–2016），同 副所長（2013–2016），同 研究系（音声言語研究領域）教授（2016），一橋大学 連携教授（2005–2014）

【専門領域】音声学，言語資源

【所属学会】ISCA, IPA, 日本言語学会, 日本音響学会, 日本語学会, 日本音声学会

【学会等の役員・委員】日本音声学会 オープンサイエンス担当理事

【受賞歴】

2012: 日本音声学会優秀論文集「PNLP の音声的形状と言語的機能」，『音声研究』15 (1)

2012: 国立国語研究所第4回所長賞

2011: 日本音声学会優秀論文賞「日本語有声破裂音における閉鎖調音の弱化」，『音声研究』14 (2)

2010: 国立国語研究所第1回所長賞

【2017年度に参画した共同研究】

- ・コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究（コーパス開発センター）
- ・大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究（音声言語研究領域）

【2017年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究(B)「リアルタイム MRI および WAVE データによる調音音声学の精緻化」，17H02339：研究代表者
- ・情報システム研究機構，機構間連携・文理融合プロジェクト「言語における系統・変異・多様性とその数理」，研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

松本裕治，奥村学

『コーパスと自然言語処理（講座日本語コーパス第8巻）』，前川喜久雄（監修），朝倉書店，2017.12.10.

《論文・ブックチャプター》

Kikuo Maekawa

“A new model of final lowering in spontaneous monologue”，*Proc. INTERSPEECH 2017*, pp.1233–1237, 2017.8.18.

Kikuo Maekawa, Ken'ya Nishikawa, and Shu-Chuan Tseng

“Phonetic characteristics of filled pauses: a preliminary comparison between Japanese and Chinese”，*Proc. DiSS 2017*, pp.41–1244, 2017.8.

Kikuo Maekawa and Hiroki Mori

“Comparison of voice quality between the vowels in filled pauses and ordinary lexical items”，『音声研究』, 21 (3), pp.41–1244, 2017.8.

浅原正幸，河原一哉，大場寧子，前川喜久雄

「『国語研日本語ウェブコーパス』とその検索系『梵天』」, 『情報処理学会論文誌』, 59 (2), pp.299–305, 2018.2.

《総説・解説など》

前川喜久雄

「物理学が言語に出会った話：千葉と梶山の母音研究（前編）」, 『窮理』, 6, pp.26–32, 2017.3.31.

前川喜久雄

「物理学が言語に出会った話：千葉と梶山の母音研究（後編）」, 『窮理』, 7, pp.32–39, 2017.7.21.

《データベース等》

高田智和, 鎌水兼貴, 横山詔一, 前川喜久雄

「鶴岡調査データベース」, <http://www2.ninjal.ac.jp/longitudinal/tsuruoka.html>,

2017.4.26.

【講演・口頭発表】

前川喜久雄

「鶴岡市共通語化調査データの確率論的再検討」, 言語資源活用ワークショップ 2017, 国立国語研究所, 2017.9.5–6.

前川喜久雄

「L1 音声研究の課題管見」(招待講演), 日本音響学会 2017 年秋季大会, 愛媛大学, 2017.9.25–27.

前川喜久雄

「方言音声共通語化プロセスの確率モデル」(招待講演), 情報・システム研究機構 機構間連携・文理融合プロジェクト「言語における系統・変異・多様性とその数理」シンポジウム, TKP 東京駅大手町カンファレンスセンター, 2018.2.2.

前川喜久雄, 能田由紀子, 北村達也, 竹本浩典, 石本祐一

「日本語撥音の調音音声学的記述の精緻化：rtMRI データによる試み」, 日本音響学会 2018 年春季大会, 日本工業大学, 2018.3.12–15.

【一般向けの講演・セミナーなど】

前川喜久雄

「“正しい”日本語は変化する？言葉の海を探索する最新技術」, 先端研究機関からの招待状, 東京商工会議所北支部, 2017.11.20.

【研究調査】

- ・ 2017 年度: 『日本語話し言葉コーパス』コアの声質情報アノテーション
- ・ 2017 年度: モンゴル語アクセントデータベースの設計

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・ 言語における系統・変異・多様性とその数理（主催：統計数理研究所, 国立民族学博物館, 国立国語研究所), TKP 東京駅大手町カンファレンスセンター, 2018.2.2.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ Institute of Linguistics, Academia Sinica (中央研究院語言学研究所), Advisory committee member
- ・ *Speech Communication* (Elsevier), Editorial board member
- ・ *Language and Linguistics* (Sage Publishing), Editorial board member

柏野 和佳子 (かしの わかこ) 研究系 (音声言語研究領域) 准教授

【学位】博士 (学術) (東京工業大学, 2016)

【学歴】東京女子大学文理学部日本文学科卒業 (1991), 東京工業大学大学院総合理工学研究科博士後期課程単位取得満期退学 (2015)

【職歴】富士通株式会社システムエンジニア (1991–1998), 情報処理振興事業協会 (IPA) 技術センター研究員 (1991–1997), 国立国語研究所言語体系研究部第二研究室 研究員 (1998), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員 (2001), 同言語資源グループ主任研究員 (2009), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授 (2009), 同研究系 (音声言語研究領域) 准教授 (2017)

【専門領域】日本語学

【所属学会】計量国語学会, 言語処理学会, 情報処理学会, 人工知能学会, 日本語学会

【学会等の役員・委員】情報処理学会情報規格調査会 学会試行標準 WG3 小委員会主査・学会試行標準専門委員会委員・学会試行標準 WG9 小委員会委員, 日本特許情報機構 産業日本語研究世話人, 言語処理学会 編集委員

【2017年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: 共同研究員
- ・新領域創出型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: 共同研究員

【2017年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「学術的文書作成のための文体差のある語の計量的分析」, 17K02800 : 研究代表者
- ・基盤研究 (B) 「ソーシャルメディアにおける市民意見を活用したシティプロモーション」, 16H02913 : 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「会話文への発話者情報の付与によるコーパスの拡張」, 15H03212 : 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

田中弥生, 柏野和佳子, 角田ゆかり, 伝康晴, 小磯花絵

『国立国語研究所「日常会話コーパス」プロジェクト報告書2『日本語日常会話コーパス』の構築—個人密着法に基づく会話の収録—』

《論文・ブックチャプター》

田中弥生, 柏野和佳子, 角田ゆかり, 伝康晴, 小磯花絵

「『日本語日常会話コーパス』の構築: 会話収録法に着目して」, 『国立国語研究所論集』, 14, pp.275–292, 2018.1.31.

柏野和佳子ほか

新村出 (編) 『広辞苑 第七版』, 岩波書店, 2018.12.1.

《データベース等》

小磯花絵, 天谷晴香, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川賢哉
「『日常会話コーパス』50時間プロジェクト内限定公開版」(非公開)

小磯花絵, 柏野和佳子, 西川賢哉

「『名大会話コーパス』中納言版(メタ情報拡張)」, <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>, 2018.3.16.

小磯花絵, 柏野和佳子, 西川賢哉

「『現日研・職場談話コーパス』中納言版」(非公開)

【講演・口頭発表】

柏野和佳子

「辞書記述の精緻化とシソーラス・コーパスの活用」(招待講演), 産業日本語研究会・ワークショップ, 東京大学, 2017.12.19.

柏野和佳子, 平本智弥, 関洋平

「市民意見の収集システムで得られたツイートからの「道路」「渋滞」に関する意見抽出」, 第 57 回ことば工学研究会, 千葉大学, 2018.2.23.

山崎誠, 相澤正夫, 大西拓一郎, 柏野和佳子, 高田智和, 新野直哉, 藤本灯

「語誌データベースの設計とその活用 (2)」通時コーパスシンポジウム 2018, 国立国語研究所, 2018.3.10.

小磯花絵, 天谷晴香, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴

「『日本語日常会話コーパス』構築状況と予備的分析」, 言語処理学会第 24 回年次大会発表論文集, 岡山コンベンションセンター, 2018.3.14.

柏野和佳子

「フォーマルな話し言葉に現れやすい書き言葉的な語」, シンポジウム「日常会話コーパス」III, 国立国語研究所, 2018.3.19.

宮崎由美, 柏野和佳子, 山崎誠

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』収録の小説における発話箇所認定について」, シンポジウム「日常会話コーパス」III, 国立国語研究所, 2018.3.19.

【一般向けの講演・セミナーなど】

柏野和佳子

「作ってあそんで辞書カルタ ことば博士になろう」, 江戸川区子ども未来館, 2017.8.1.

【講習・チュートリアル】

柏野和佳子, 山崎誠

「第 3 回コーパス利用講習会」, 国立国語研究所, 2017.9.7.

小磯花絵, 柏野和佳子

「コーパスに基づく話し言葉の研究」, 第 27 回 NINJAL チュートリアル, 国立国語研究所, 2018.3.8.

柏野和佳子, 山崎誠

「第 4 回コーパス利用講習会」, 国立国語研究所, 2018.3.19.

【その他の学術的・社会的活動】

・国語研「ニホンゴ探検」: 辞書引きコーナー担当 (2017.7)

・ジュニアプログラム: 江戸川区子ども未来館での出前授業 (2017.8)

・職業発見プログラム: 中学生への質問対応 (2017.8)

山口 昌也 (やまぐち まさや) 研究系 (音声言語研究領域) 准教授

【学位】博士 (工学) (東京農工大学, 1998)

【学歴】東京農工大学工学部数理情報工学科卒業 (1992), 東京農工大学大学院工学研究科博士前期課程電子情報工学専攻修了 (1994), 東京農工大学大学院工学研究科博士後期課程電子情報工学専攻修了 (1998)

【職歴】東京農工大学工学部 助手 (1998), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員 (2001), 同言語資源グループ 研究員 (2006), 同主任研究員 (2008), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 助教 (2009), 同准教授 (2011), 同研究系 (音声言語研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】情報学, 知能情報学, 科学教育・教育工学, 言語学, 日本語学

【所属学会】日本教育工学会, 日本語学会, 言語処理学会, 情報処理学会

【受賞歴】

2007: 財団法人博報児童教育振興会第1回博報「ことばと教育」研究助成「優秀賞」

【2017年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: 共同研究員

【2017年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「ビデオアノテーションを利用した協同型実習活動支援システムに関する研究」, 17K01105 : 研究代表者
- ・基盤研究 (B) 「「昭和話し言葉コーパス」の構築による話し言葉の経年変化に関する実証的研究」, 16H03426 : 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「日本語教師の内省過程に関する研究—研修における授業データ活用の可能性を探る—」, 17K02862 : 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

北村雅則, 山口昌也

「知識量の変化に着目した協同学習の学習効果の分析」, 『南山大学短期大学部紀要』, 39, pp.161-174, 2018.3.19.

《データベース等》

山口昌也

「全文検索システム『ひまわり』用『国会会議録』パッケージ (本文認定, 著者情報などのアノテーション改善)」, <http://www2.ninjal.ac.jp/lrc> (『ひまわり』⇒『国会会議録』パッケージ), 2017.6.12.

山口昌也

「全文検索システム『ひまわり』用『名大会話コーパス』パッケージ (アノテーション内容修正後の『ひまわり』パッケージ化, パッケージの機能改善・不具合修正)」,

<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc> (『ひまわり』⇒『名大会話コーパス』パッケージ), 2017.8.10.

山口昌也

「全文検索システム『ひまわり』用『青空文庫』パッケージ (536作品追加・機能改善などの更新)」, <http://www2.ninjal.ac.jp/lrc> (『ひまわり』⇒『青空文庫』パッケージ), 2017.10.3.

山口昌也

「観察支援ツール FishWatchr Mini (ver.1.1)」, <https://csd.ninjal.ac.jp/f/m.html>, 2018.1.4.

山口昌也

「観察支援ツール FishWatchr (ver.0.9.8.3–0.9.11.1)」, <http://www2.ninjal.ac.jp/lrc> (FishWatchr), 2018.1.17.

山口昌也

「全文検索システム『ひまわり』用『青空文庫TOP100』パッケージ」,
<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc> (『ひまわり』⇒『青空文庫TOP100』パッケージ), 2018.1.30.

山口昌也

「全文解析システム『ひまわり』(ver.1.5.7, ver.1.6b01–06)」, <http://www2.ninjal.ac.jp/lrc> (『ひまわり』), 2018.3.19.

【講演・口頭発表】

山口昌也

「国会会議録における言語表現の時間的変化の予備的分析」, 言語資源活用ワークショップ 2017,
国立国語研究所, 2017.9.5–6.

北村雅則, 山口昌也

「リアルタイムアノテーションによるプレゼンテーション相互評価の実践」, 日本教育工学会第
33回全国大会予稿集, 島根大学, 2017.9.15–18.

山口昌也, 柳田直美, 北村雅則, 森 篤嗣

「学習者用モバイル観察支援ツール FishWatchr Mini における振り返り支援機能の開発」, 日本
教育工学会第33回全国大会予稿集, 島根大学, 2017.9.15–18.

森 篤嗣, 山口昌也

「リアルタイムアノテーションによる小学校におけるプレゼンテーション相互評価」, 第41回社
会言語科学会研究大会予稿集, 東洋大学, 2018.3.10–11.

山口昌也

「国会会議録における言語表現の時間的変化の予備的分析—衆議院本会議を対象に—」, シンポ
ジウム「日常会話コーパス」III, 国立国語研究所, 2018.3.19.

【講習・チュートリアル】

山口昌也

「『ひまわり』講習会」, 国立国語研究所, 2017.5.8.

山口昌也

「『ひまわり』講習会」, 大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究 第3回コーパ
ス利用講習会, 国立国語研究所, 2017.9.7.

山口昌也

「『ひまわり』講習会」, 大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究 第4回コーパ
ス利用講習会, 国立国語研究所, 2018.3.19.

石黒 圭 (いしぐろ けい) 研究系 (日本語教育研究領域) 教授, 領域代表

【学位】博士 (文学) (早稲田大学, 2008)

【学歴】一橋大学社会学部卒業 (1993), 早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了 (1995), 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導修了 (1999)

【職歴】一橋大学留学生センター 講師 (1999), 同 助教授 (2004), 一橋大学国際教育センター 准教授 (2010), 同 教授 (2013), 人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 准教授 (2015), 同 教授 (2015), 同 研究系 (日本語教育研究領域) 教授, 領域代表 (2016)

【専門領域】日本語学, 日本語教育学

【所属学会】専門日本語教育学会, 日本語学会, 日本語教育学会, 日本語文法学会, 日本文体論学会, 表現学会, 早稲田日本語学会

【学会等の役員・委員】表現学会 理事, 日本語学会 評議員, 日本語文法学会 評議員, 専門日本語教育学会 編集幹事, 日本語教育学会 社会啓発委員

【受賞歴】

2009: 第7回日本語教育学会奨励賞

【2017年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」:リーダー

【2017年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (B) 「文脈情報を用いた日本語学習者の文章理解過程の実証的研究」, 16H03438 : 研究代表者
- ・挑戦的研究 (萌芽) 「クラウドソーシングを用いたビジネス文書のわかりやすさの言語学的研究」, 17K18504 : 研究代表者
- ・基盤研究 (A) 「読解コーパスの構築による日本語学習者の読解過程の実証的研究」, 15H01884 : 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「大学・大学院でのキャリア形成に資する在学段階別日本語ライティング教育の開発と評価」, 26284072 : 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「講義理解における要約力に関する研究」, 16K02825 : 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「アカデミック・ライティング技術の習得を目指したピア・レスポンスの実証的研究」, 17K02878 : 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「ノートの筆記過程の分析に基づく日本語学習者の講義理解過程の実証的研究」, 17K02879 : 研究分担者
- ・挑戦的研究 (萌芽) 「日本語聴解用辞書の開発を目的とした日本語学習者の聴解実態の実証的研究」, 17K18503 : 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

石黒圭

『文章予測—読解力の鍛え方—』, KADOKAWA, 2017.9.

石黒圭

『形容詞を使わない大人の文章表現力』, 日本実業出版社, 2017.11.

石黒圭

『大人のための言い換え力』, NHK出版新書, 2017.12.

庵功雄, 石黒圭, 丸山岳彦 (編)

『時間の流れと文章の組み立て 林言語学の再解釈』, ひつじ書房, 2017.12.

石黒圭（編）

『わかりやすく書ける作文シラバス』、くろしお出版、2017.12.

《論文・ブックチャプター》

石黒圭

「日本語学習者の作文における文章構成と説得力の関係」、『一橋大学国際教育センター紀要』、8, pp.3–14, 2017.7.

田中啓行、布施悠子、胡方方、石黒圭

「学習者の情意面の評価に基づくピア・リーディングの授業改善の可能性—学術的文章を読む読解授業の談話データから—」、『国立国語研究所論集』、13, pp.187–208, 2017.7.

石黒圭

「第9章 自然な日本語の話し方の習得」、江田すみれ、堀恵子（編）『習ったはずなのに使えない文法』、ひつじ書房、2017.10.

石黒圭

「第2章 文章とは何か—日本語の表現面から見たよい文章—」、李在鎬（編）『文章を科学する』、くろしお出版、2017.10.

石黒圭

「読解研究から見た『文の姿勢の研究』」、庵功雄、石黒圭、丸山岳彦（編）『時間の流れと文章の組み立て 林言語学の再解釈』、ひつじ書房、2017.12.

石黒圭

「第12章 説得力のある全体構造の作り方」、石黒圭（編）『わかりやすく書ける作文シラバス』、くろしお出版、2017.12.

田中啓行、石黒圭

「日本語学習者の作文執筆修正過程—中国人学習者と韓国人学習者の修正の位置と種類の分析から—」、『国立国語研究所論集』、14, pp.255–274, 2018.1.

田中啓行、石黒圭

「人文学系講義の談話の「話段」の構造—言語形態的指標とスライドの切り替えを中心に—」、『早稲田日本語研究』、27, 2018.3.

《その他の出版物・記事》

石黒圭

「日本語表現力を左右するのは言葉の量ではなく“選び方”」、『通訳翻訳ジャーナル』、28 (2), 2017.4.

石黒圭

「目的別に学ぶ文章術—読み手の気持ちを考える—（第1回）【説明】専門語を避け、やさしい言葉を使おう」、『コミュニティケア』、238, 2017.4.

石黒圭

「目的別に学ぶ文章術—読み手の気持ちを考える—（第2回）【報告】正確さだけでなく、具体性も取り入れよう」、『コミュニティケア』、239, 2017.5.

石黒圭

「目的別に学ぶ文章術—読み手の気持ちを考える—（第3回）【感謝】ありきたりの言葉を避け、ひと手間加えよう」、『コミュニティケア』、240, 2017.6.

石黒圭

「目的別に学ぶ文章術—読み手の気持ちを考える—（第4回）【謝罪】謝罪の事実を深く受けとめ、心からお詫びしよう」、『コミュニティケア』、242, 2017.7.

石黒圭

「目的別に学ぶ文章術—読み手の気持ちを考える—（第5回）【案内】5W1Hを意識して、相手が必要としている情報を示そう」、『コミュニティケア』、243, 2017.8.

石黒圭

「目的別に学ぶ文章術—読み手の気持ちを考える—（第6回）【伝達】敬語を適切に使って、相手に不快なく情報を伝えよう」, 『コミュニティケア』, 244, 2017.9.

石黒圭

「目的別に学ぶ文章術—読み手の気持ちを考える—（第7回）【整理】わかりやすい順序で読み手に提示しよう」, 『コミュニティケア』, 245, 2017.10.

石黒圭

「目的別に学ぶ文章術—読み手の気持ちを考える—（第8回）【語感】政治的公正性に配慮しよう」, 『コミュニティケア』, 246, 2017.11.

石黒圭

「目的別に学ぶ文章術—読み手の気持ちを考える—（第9回）【指示】「指示」の気持ちを「依頼」に変えて」, 『コミュニティケア』, 248, 2017.12.

石黒圭

「目的別に学ぶ文章術—読み手の気持ちを考える—（第10回）【忠告】アドバイスは寄り添つて」, 『コミュニティケア』, 249, 2018.1.

石黒圭

「目的別に学ぶ文章術—読み手の気持ちを考える—（第11回）【断り】断りには穏やかな理由を添えて」, 『コミュニティケア』, 250, 2018.2.

石黒圭

「私の広告観（vol.230）ツールとともに言葉も変わる現代における、相手に届く言葉とは」, 『宣传会議』, 916, 2018.2.

石黒圭

「目的別に学ぶ文章術—読み手の気持ちを考える—（第12回）【往復】次のやりとりを想定する」, 『コミュニティケア』, 251, 2018.3.

【講演・口頭発表】

石黒圭

「中国人学習者の日本語に見る思考・表現の特徴—独話のフィラーを中心に—」（基調講演）, 外語学習与研究出版社・中国西南民族大学共催「思考力・表現力・異文化コミュニケーション能力の養成」, 西南民族大学（四川省成都市）, 2017.4.22.

石黒圭

「読解授業でのピア・リーディングの導入と活用」（招待講演）, 第32回国立大学日本語教育研究協議会ワークショップ, お茶の水女子大学, 2017.5.19.

石黒圭

「どうすれば読解授業がうまくいくのか—学術日本語を学ぶ留学生のピア・リーディング授業を対象に—」（招待講演）, ICU 日本語教育研究センター主催 連続講演会, 国際基督教大学, 2017.6.28.

石黒圭

「日本語学習者の講義理解に見られる話段の諸相」NINJAL 国際シンポジウム第10回日本語実用言語学国際会議（ICPLJ）, 国立国語研究所, 2017.7.8-9.

石黒圭

「読解における多義語理解のストラテジー—中国語母語話者を対象に—」（招待講演）, 長春師範大学講演, 長春師範大学, 2017.10.16.

石黒圭

「作文能力を伸ばす方法を考える」（招待講演）, 東海大学ヨーロッパ学術センター主催 日本語教育ワークショップ 2017秋, 東海大学ヨーロッパ学術センター, 2017.11.4-5.

石黒圭, 烏日哲, 劉金鳳, 布施悠子

「文章理解過程における日本語学習者の多義語の意味把握—文脈的手がかりを用いて—」, 日本語教育学会 2017 年度秋季大会, 朱鷺メッセ, 2017.11.25-26.

石黒圭

「学習者コーパスによる日本語の世界」(招待講演), 東京外国语大学大学院国際日本学研究院主催・留学生日本語教育センター共催連続講演会・国際シンポジウム「国際日本研究へのまなざし—ことば・文化・教育」第 4 回, 東京外国语大学, 2017.12.8.

石黒圭

「接続詞の選択に垣間見えるジャンルの違い—社会科学の専門文献を例に—」(招待講演), 国立国語研究所 対照言語学プロジェクトシンポジウム「日本語文法研究のフロンティア—談話研究・対照研究・習得研究を中心に—」, 国立国語研究所, 2018.1.27.

石黒圭

「日本語学習者の文章理解の過程を知る」(招待講演), 第 24 回ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウム, ハンブルク大学, 2018.2.23-25.

石黒圭

「どうすれば読解授業がうまくいくのか—学術日本語を学ぶ留学生のピア・リーディング授業を対象に—」(招待講演), 第 24 回ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウム, ハンブルク大学, 2018.2.23-25.

石黒圭

「日本語学習者の読解過程の解明」(基調講演), 国立国語研究所 学習者のコミュニケーションプロジェクトシンポジウム「日本語学習者はどのように文章を理解しているのか—目の動きから見えてくるもの—」, 国立国語研究所, 2018.3.3.

【一般向けの講演・セミナーなど】

石黒圭

「読解における文脈情報を生かした語の理解—中国語母語話者を対象にしたケーススタディ—」, AJALT 講演会, 公益社団法人国際日本語普及協会, 2017.7.13.

石黒圭

「人称と親族呼称を考える—社会言語学の考え方—」, すぎなみ大人塾総合コース, セシオン杉並, 2017.10.4.

石黒圭

「日本語学習者のお国柄」, NINJAL フォーラム第 12 回「ことばの多様性とコミュニケーション」, 東京証券会館ホール, 2018.2.3.

石黒圭

「日本語学習者の読解における語彙理解の困難点と推測ストラテジー」, 平成 29 年度国立国語研究所日本語教師セミナー「学習者は日本語をどう理解しているか—聴解・読解の困難点とその指導—」, ハンブルク大学, 2018.2.25.

【研究調査】

- ・ 2017.4: 北京師範大学 (中国), 北京日本語学習者縦断コーパス調査
- ・ 2017.9: 北京師範大学 (中国), 北京日本語学習者縦断コーパス調査
- ・ 2018.2: ミュンヘン大学 (ドイツ), ノートテイキング調査

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・ 新たな作文研究のアプローチ—わかりやすく書ける作文シラバス構築を目指して— (主催: 国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」), 国立国語研究所, 2018.1.14.
- ・ 日本語学習者はどのように文章を理解しているのか—目の動きから見えてくるもの— (主催: 国

立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」), 国立国語研究所, 2018.3.3.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・中国長春師範大学 MOOCs プロジェクト, 「日本語能力試験 N2 に合格するための読解ストラテジー」, 講師
- ・取材記事, 「文章力=読む力 読み手として理解する能力を育もう」, 『2017 栄冠めざして Family』, 2017.4.
- ・取材記事, 「相手を怒らせる失礼なメール集」, 『PRESIDENT』, 55 (14), 2017.7.
- ・取材記事, 「プロジェクトリーダーが語る日本語の個性」, 『国語研ことばの波止場』, 2, 2017.9.
- ・取材記事, 「接続詞はないのが『普通』」, 『週刊 東洋経済』, 6753, 2017.10.
- ・取材記事, 「相手に伝わる『言い換え力』を身につける」, 『ガバナンス』, 226, 2018.2.
- ・取材記事, 「教養は言葉選びに表れる 大人の『言い換え力』 クイズ」, 『週刊現代』, 60 (10), 2018.3.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・連携大学院
一橋大学大学院言語社会研究科 連携教授
- ・大学院非常勤講師
早稲田大学大学院, 国際基督教大学大学院,
- ・博士論文審査
一橋大学大学院 (副査) 1 件 (2017.7)
- ・外来研究員の受入 (2 名)

宇佐美 まゆみ (うさみ まゆみ) 研究系 (日本語教育研究領域) 教授

【学位】博士 (教育学 (Ed.D)) (ハーバード大学, 1999)

【学歴】千葉大学教育学部教育心理学科 (1, 2 年次在籍), 立教大学文学部心理学科に 3 年次編入後卒業 (1981), 慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程修了 (1984), ハーバード大学教育学部大学院人間発達・心理学科修士課程修了 (1991), ハーバード大学教育学部大学院人間発達・心理学科博士課程単位取得修了 (1992)

【職歴】財団法人交流協会台北事務所 日本語教育専門家 (1984), コルビー大学現代外国語学部 客員講師 (1987), シカゴ大学東アジア言語・文化学部 専任講師 (1988), 昭和女子大学文学部 専任講師 (1993), 東京外国語大学外国語学部 助教授 (1997), 同教授 (2002), 東京外国語大学大学院地域文化研究科言語教育学講座 教授 (大学院改組に伴う配置換え) (2005), 東京外国語大学総合国際学研究院 教授 (大学院改組に伴う配置換え) (2009) 人間文化研究機構国立国語研究所研究系 (日本語教育研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】言語社会心理学, 談話研究, 語用論, 日本語教育学

【所属学会】社会言語科学会, 日本語教育学会, 日本語用論学会, 日本語学会, 日本心理学会, 日本社会心理学会, ヨーロッパ日本語教師会, 言語処理学会, 大学英語教育学会, 日本語プロフィシェンシー研究学会, 計量国語学会, 大学日本語教員養成課程研究協議会, International Association of Applied Linguistics (IAAL/AILA), International Pragmatics Association (IPrA)

【学会等の役員・委員】社会言語科学会 理事・発表賞選考委員会委員長, 日本語ジェンダー学会 評議員

【2017 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」: リーダー
- ・新領域創出型共同研究プロジェクト「日本語の間接発話理解: 第一言語, 第二言語, 人工知能における習得メカニズムの認知科学的比較研究」: コーディネーター

【2017 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (A) 「海外連携による日本語学習者コーパスの構築および言語習得と教育への応用研究」, 16H01934: 研究分担者
- ・基盤研究 (A) 「つかえタイプの非流ちょう性に関する通言語的調査研究」, 15H02605: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「公用語の地域差・時代差に関する社会言語学的総合研究」, 16H03420: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「観光接触場面におけるホスピタリティと日本語の役割: 日本のオモテナシとポライトネス」, 15K02653: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

宇佐美まゆみ

「ディスコース・ポライトネス理論の新展開—「時間」「フェイス充足度」「フェイス均衡原理」という概念を中心に—」, 『漢日言語対比研究論叢』, 8, pp.125-139, 2017.8.

《データベース等》

宇佐美まゆみ

「BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2016 年先行リリース版」, 関係者限定公開, 2017.7.24.

宇佐美まゆみ

「BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2017 年先行リリース版」, 国立国

語研究所内限定公開, 2017.12.26.

宇佐美まゆみ

「自然会話リソースバンク (NCRB)」, 関係者限定公開, 2018.2.6.

《その他の出版物・記事》

宇佐美まゆみ

「『なぜか仲良くなれない…』丁寧語・敬語の“盲点”, 『深読みチャンネル』(読売オンライン), 2017.4.24.

【講演・口頭発表】

宇佐美まゆみ

「『ディスコース・ポライトネス理論』の新展開—「時間」, 「フェイス充足度」, 「フェイス均衡原理」という概念を中心に—」, 第 159 回 NINJAL サロン, 国立国語研究所, 2017.5.30.

宇佐美まゆみ

「『やさしい言語』が生み出す観光接触場面における『ふれあい』と『おもてなし』—ポライトネス理論の観点から—」(招待講演), 日本言語政策学会 (JALP) 第 19 回研究大会「社会構造の変化と言語政策—多様な参画者による持続可能な社会のアクションプランに向けて—」第 5 分科会「観光接触場面におけるツーリスト・トーク—『やさしい英語』と『やさしい日本語』—」, 関西大学, 2017.6.17-18.

宇佐美まゆみ

「『ディスコース・ポライトネス理論』の新展開—『時間』、『フェイス充足度』、『フェイス均衡原理』という概念を中心に—」(招待講演), ポライトネス理論に関するシンポジウム, 西安外国语大学, 2017.6.24.

宇佐美まゆみ

「『ディスコース・ポライトネス理論』の新展開—時間経過とポライトネス—」(招待講演), 湖南大学, 2017.6.28.

宇佐美まゆみ

「日本語教育なぜ談話研究が必要なのか?」(講演), 第 1 回会話・談話研究シンポジウム「日本語教育の新展開—談話研究の可能性 (1) —」, 国立国語研究所, 2017.7.10.

Mayumi Usami

“New development of DPT as an interpersonal communication theory”, 10th International Symposium on Politeness, York St John University, 2017.7.12-14.

宇佐美まゆみ

「NCRB (Natural Conversation Resource Bank) 開発の趣旨と活用方法—自然会話教材の録画方法と教材作成支援機能を中心として—」(特別講演), リオデジヤネイロ日系協会, 2017.7.22.

宇佐美まゆみ

「共同構築型自然会話リソースバンク (NCRB : Natural Conversation Resource Bank) の教材作成支援機能及び、作成した自然会話 WEB 教材の使い方」, 7th International Conference on Computer Assisted Systems For Teaching & Learning Japanese, 早稲田大学, 2017.8.4-6.

宇佐美まゆみ

「NCRB (Natural Conversation Resource Bank) 開発の趣旨と活用方法—自然会話教材の録画方法と教材作成支援機能を中心として—」(特別講演), ポルト大学, 2017.8.24.

宇佐美まゆみ

「『ディスコース・ポライトネス理論』の新展開—時間経過とポライトネス—」(特別講演), ポルト大学, 2017.8.24.

宇佐美まゆみ

「『BTSJ 日本語会話コーパス』の分析とその教材化の意義—NCRB で教える『中途終了型発話』と『共同発話文』を中心に」, 第 21 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム「ヨーロッパ

で日本語を教えることと学ぶことの意味を考える—それぞれの現場で—」, リスボン新大学, 2017.8.30–9.2.

宇佐美まゆみ

(パネル) 「『BTSJ 日本語会話コーパス』を活用した教材作成への提案—ヨーロッパにおける自然なコミュニケーション教育のために」, 第 21 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム「ヨーロッパで日本語を教えることと学ぶことの意味を考える—それぞれの現場で—」, リスボン新大学, 2017.8.30–9.2.

宇佐美まゆみ

「BTSJ と自然会話データ分析の意義について」(講演), 第 2 回 BTSJ 日本語会話コーパス活用シンポジウム, 国立国語研究所, 2017.9.9.

宇佐美まゆみ

「学習者の自然なコミュニケーション能力の育成のための「自然会話を素材とする共同構築型 WEB 教材 (NCRB)」の意義—NCRB による教材作成方法の紹介とともに—」(特別講演), 久留米大学, 2018.2.27.

宇佐美まゆみ, 山崎誠

「『BTSJ 日本語自然会話コーパス (2018 年版)』構築の趣旨と特徴」, 言語処理学会第 45 回年次大会 (NLP2018), 岡山コンベンションセンター (ママカリフォーラム), 2018.3.12–16.

宇佐美まゆみ

「自然会話リソースバンク (NCRB) 開発の趣旨と意義」(講演), 第 2 回 会話・談話研究シンポジウム「日本語教育の新展開 (2) —自然会話を素材とする WEB 教材の可能性—」, 国立国語研究所, 2018.3.29.

張洋子, 宇佐美まゆみ

「自然会話リソースバンク (NCRB) で教材を作成するための準備」, 第 2 回 会話・談話研究シンポジウム「日本語教育の新展開 (2) —自然会話を素材とする WEB 教材の可能性—」, 国立国語研究所, 2018.3.29.

折田知之, 宇佐美まゆみ

「自然会話データを用いた教材ユニットの作成について」, 第 2 回 会話・談話研究シンポジウム「日本語教育の新展開 (2) —自然会話を素材とする WEB 教材の可能性—」, 国立国語研究所, 2018.3.29.

【一般向けの講演・セミナーなど】

宇佐美まゆみ

「ディスコース・ポライトネス理論とは? —誤解と円滑なコミュニケーションの観点から—」, 職業発見プログラム, 国立国語研究所, 2017.10.13.

宇佐美まゆみ

「ていねいさは世界共通か?」, 国立国語研究所第 12 回 NINJAL フォーラム「ことばの多様性とコミュニケーション」, 東京証券会館ホール, 2018.2.3.

【講習・チュートリアル】

宇佐美まゆみ

「第 4 回 BTSJ 活用方法講習会」, 国立国語研究所 日本語教育研究領域, コーパス開発センター, 国立国語研究所, 2017.5.16.

宇佐美まゆみ

「第 5 回 BTSJ 活用方法講習会」, 国立国語研究所 日本語教育研究領域, コーパス開発センター, 国立国語研究所, 2017.6.10.

宇佐美まゆみ

「第 6 回 BTSJ 活用方法講習会」, 国立国語研究所 日本語教育研究領域, コーパス開発センター,

西安外国语大学, 2017.6.24.

宇佐美まゆみ

「第7回 BTSJ 活用方法講習会」, 国立国語研究所 日本語教育研究領域, コーパス開発センター, 国立国語研究所, 2017.9.9.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・第1回 会話・談話研究シンポジウム「日本語教育の新展開(1) —談話研究の可能性—」(主催: 国立国語研究所 日本語教育研究領域, 共催: 言語社会心理学研究会), 国立国語研究所, 2017.7.10.
- ・第2回 BTSJ 日本語会話コーパス活用シンポジウム(主催: 国立国語研究所 日本語教育研究領域, 共催: 国立国語研究所 コーパス開発センター), 国立国語研究所, 2017.9.9.
- ・第2回 会話・談話研究シンポジウム「日本語教育の新展開(2) —自然会話を素材とするWEB教材の可能性—」(主催: 国立国語研究所 日本語教育研究領域, 共催: 言語社会心理学研究会), 国立国語研究所, 2018.3.29.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・国立国語研究所 外来研究員の受け入れ
- ・第10回 日本語実用言語学国際会議 (ICPLJ) 査読協力
- ・2018年日本語教育国際研究大会 査読協力
- ・社会言語科学会 査読協力
- ・*Journal of Cross-Cultural Psychology* 査読協力
- ・*AGLOS* 査読協力

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・博士論文審査
東京外国语大学大学院 (外部審査委員), 2017.3.

野田 尚史 (のだ ひさし) 研究系 (日本語教育研究領域) 教授, 研究主幹

【学位】博士 (言語学) (筑波大学, 1999)

【学歴】大阪外国語大学外国語学部イスパニア語学科卒業 (1979), 大阪外国語大学大学院外国語学研究科日本語学専攻修士課程修了 (1981), 大阪大学文学研究科日本学専攻博士後期課程中退 (1981)

【職歴】大阪外国語大学国語学部 助手 (1981), 筑波大学文芸・言語学系 講師 (1985), 大阪府立大学総合科学部 講師 (1991), 同 助教授 (1993), 同 教授 (1999), 大阪府立大学人間社会学部 教授 (2005), 人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 教授 (2012), 同 センター長 (2015–2016), 同 研究系 (日本語教育研究領域) 教授, 研究主幹 (2016)

【専門領域】日本語学, 日本語教育学

【所属学会】日本語学会, 日本語教育学会, 日本言語学会, 日本語文法学会, 社会言語科学会, 言語処理学会, 計量国語学会, 日本語用論学会, 関西言語学会, 専門日本語教育学会, ヨーロッパ日本語教師会, American Association of Teachers of Japanese, Canadian Association for Japanese Language Education

【学会等の役員・委員】日本語学会 理事・評議員, 日本語教育学会 審査・運営協力員, 日本言語学会 事務局長・評議員, 日本語文法学会 評議員, 社会言語科学会 理事・徳川宗賢賞選考委員, 言語系学会連合事務局長, 文化審議会 臨時委員 (国語分科会)

【受賞歴】

2006: 第4回日本語教育学会奨励賞

【2017年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」: サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」リーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」: 文法研究班「とりたて表現」リーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」: 共同研究員

【2017年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (A) 「読解コーパスの構築による日本語学習者の読解過程の実証的研究」, 15H01884: 研究代表者
- ・挑戦的研究 (萌芽) 「日本語聽解用辞書の開発を目的とした日本語学習者の聽解実態の実証的研究」, 17K18503: 研究代表者
- ・基盤研究 (A) 「海外連携による日本語学習者コーパスの構築および言語習得と教育への応用研究」, 16H01934: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「文脈情報を用いた日本語学習者の文章理解過程の実証的研究」, 16H03438: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究: 複文を中心に」, 15H03210: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「日本語学習者の小説読解困難点に関する実証的研究と読解支援教材開発のための研究」, 17K02880: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

野田尚史, 野田春美

『〈アクティブラーニング対応〉日本語を分析するレッスン』, 大修館書店, 2017.4.

Masayoshi Shibatani, Shigeru Miyagawa, and Hisashi Noda (eds.)

- Handbook of Japanese Syntax*, De Gruyter Mouton, 2017.10.
- 《論文・ブックチャプター》
- 野田尚史
「中国語話者の日本語読解—調査方法と調査結果—」, 『中国語話者のための日本語教育研究』, 8, pp.1-5, 2017.7.
- 野田尚史, 花田敦子, 藤原未雪
「上級日本語学習者は学術論文をどのように読み誤るか—中国語を母語とする大学院生の調査から—」, 『日本語教育』, 167, pp.15-30, 2017.8.
- 野田尚史
「特化型の日本語教育とユニバーサルな国語教育—外国人労働者受け入れのために—」, 田尻英三 (編) 『外国人労働者受け入れと日本語教育』, pp.211-230, ひつじ書房, 2017.8.
- 野田尚史
「日本語学習者のコミュニケーションに必要な多様な能力」, 『日中言語研究と日本語教育』, 10, pp.25-36, 2017.10.
- 野田尚史
「学習者の習得困難点調査に基づく日本語教育文法の拡張」, 『日語教育与日本学』, 10, pp.1-10, 2017.10.
- 野田尚史
「「基本文型」の再構築」, 庵功雄, 石黒圭, 丸山岳彦 (編) 『時間の流れと文章の組み立て—林言語学の再解釈—』, pp.49-69, ひつじ書房, 2017.12.26.
- 野田尚史, 穴井宰子, 中島晶子, 白石実, 村田裕美子
「ヨーロッパの日本語学習者に有益な読解教育」, 『ヨーロッパ日本語教育』, 22, 2018.3.
- 《総説・解説など》
- 野田尚史
「リーディングのためのスペイン語の主語・主題・語順—日本語との対照から—」, *Imágenes de Iberoamérica*, 7, pp.18-22, 2018.2.
- 《データベース等》
- 野田尚史, 島津浩美, 阪上彩子, 中山英治, 太原ゆか, 萩原章子, 中尾有岐
「日本語を聞きたい! (「自宅のインターホン」シリーズ3レッスン, 「コーヒーショップ」シリーズ4レッスン, 「カラオケ店」シリーズ5レッスン, 「コンビニ」シリーズ6レッスン)」, <http://www.nihongo-tai.com/japanese/kiku/index.php>, 2017.4 (公開)
- 野田尚史, 桑原陽子, 加藤陽子, 北浦百代, 小西円, 松岡洋子, 岡部悦子
「日本語を読みたい! (「薬の袋」シリーズ4レッスン, 「バイキングレストランのクチコミ」シリーズ3レッスン, 「スタンプカード」シリーズ3レッスン)」, <http://www.nihongo-tai.com/japanese/yomu/index.php>, 2017.4 (公開)
- 野田尚史, 任ジェヒ, 賈黎黎, 桑原陽子, 近藤めぐみ, 邵艶紅, 白石実, 中島晶子, 花田敦子, 藤原未雪, 向井裕樹, 村田裕美子, 守時なぎさ
「日本語非母語話者の読解コーパス」, <http://www2.ninjal.ac.jp/jsl-rikai/dokkai/> (データ45件追加)
- 野田尚史
「M-09. 文の基本的な構造 (Basic Sentence Structure)」, 「P-02. 日本語学 (Japanese Linguistics)」, “e-PG Pathshala: A Gateway to all Post Graduate Courses”, <https://www.youtube.com/watch?v=2axzt9BC0tw>, 2018.2.
- 野田尚史
「M-18. とりたて (Toritare: Focusing and Defocusing Words, Phrases and Clauses)」, 「P-02. 日本語学 (Japanese Linguistics)」, “e-PG Pathshala: A Gateway to all Post Graduate Courses”,

<https://www.youtube.com/watch?v=zU8f-BnP8tw>, 2018.2.

野田尚史

「M-19. 主題 (Topic of the Sentence)」, 「P-02. 日本語学 (Japanese Linguistics)」, “e-PG Pathshala: A Gateway to all Post Graduate Courses”,
<https://www.youtube.com/watch?v=m200TNGthDI>, 2018.2.

《その他の出版物・記事》

野田尚史

「外国人が使う日本語」, 『国語研 ことばの波止場』, 2, 2017.7.

【講演・口頭発表】

野田尚史

「日本語コミュニケーション教育に必要な文法」(招待講演), 南京農業大学人文社会科学学部外國語学院日語系講演会(教員向け), 南京農業大学, 2017.4.8.

野田尚史, 阪上彩子, 中尾有岐, 太原ゆか

「実生活に役立つ初級聴解ウェブ教材の作成」(シンポジウム・ワークショップパネル), The 7th International Conference on Computer Assisted Systems for Teaching & Learning Japanese (CASTEL/J 2017), 早稲田大学, 2017.8.4-6.

野田尚史

「学習者は現実の日本語をどのように聞きとっているか?」(基調講演), 英国日本語教育学会 第20回 BATJ 年次大会, ヨーク・セント・ジョン大学, 2017.8.25-26.

野田尚史

「現実の日本語を聞きとるための教材作成」(シンポジウム), 英国日本語教育学会 第20回 BATJ 年次大会, ヨーク・セント・ジョン大学, 2017.8.25-26.

野田尚史, 穴井宰子, 中島晶子, 白石実, 村田裕美子

「ヨーロッパの日本語学習者に有益な読解教育」(シンポジウム・ワークショップパネル), EAJS2017 15th International Conference of the European Association for Japanese Studies, リスボン新大学, 2017.8.30-9.2.

野田尚史

「日本語コミュニケーション教育のための文法」(招待講演), オランダ日本語教師会 講演会, ライデン大学, 2017.9.3.

野田尚史

「日本語教育はどのように新しい日本語文法研究を創出するか—「聞く」「話す」「読む」「書く」ための文法の開拓—」(シンポジウムパネル), 日本語文法学会第18回大会シンポジウム「日本語文法研究と教育との接点」, 筑波大学, 2017.12.2-3.

野田尚史

「非母語話者が日本語を「聞く」「読む」ための文法」(シンポジウムパネル), 国立国語研究所シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア—談話研究・対照研究・習得研究を中心に—」, 国立国語研究所, 2018.1.27.

野田尚史

「日本語のとりたて表現と言語類型論」(シンポジウム・ワークショップパネル), 国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」第2回合同研究発表会 (Prosody and Grammar Festa 2), 国立国語研究所, 2018.2.17.

野田尚史

「日本語学習者の聴解・読解における日本語のバリエーションの難しさ」(招待講演), 日本語・日本語教育研究会「日本語のバリエーションと日本語教育」, パリ・ディドロ大学, 2018.3.2.

【一般向けの講演・セミナーなど】

野田尚史

「実践的な日本語読解—ウェブサイトの読解を例にして—」，南京農業大学人文社会科学学部外國語学院日語系講演会（学生向け），南京農業大学，2017.4.7.

野田尚史

「リーディングのためのスペイン語の主語・主題・語順—日本語との対照から—」，第10回スペイン語教授法研究会，関西外国語大学，2017.7.22.

野田尚史

「コミュニケーションのために文法を見直そう」，福岡県地域日本語教室ボランティアスキルアップ講座，八幡西生涯学習総合センター，こくさいひろば，えーるピア久留米，2017.10.14-16.

野田尚史

「外国人の人たちに日本語でどう接するか？—やさしい日本語の使用と相手の立場に立った理解—」，「やさしい日本語」研修会，岡山国際交流センター，2018.2.10.

野田尚史

「日本語学習者の聴解困難点と聴解技術」，平成29年度国立国語研究所日本語教師セミナー「学習者は日本語をどう理解しているか—聴解・読解の困難点とその指導—」，ハングルク大学，2018.2.25.

野田尚史

「実生活に役立つ初級聴解教材—「文型」からではなく「状況」から出発する教材—」，朝日カルチャーセンター 朝日 JTB・交流文化塾 新宿教室 日本語教育公開講座，朝日カルチャーセンター 朝日 JTB・交流文化塾 新宿教室，2018.3.31.

【講習・チュートリアル】

野田尚史

「日本語の文法」，第24回 NINJAL チュートリアル「日本語の音声と文法」，東吳大学，2017.10.28-29.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」研究発表会（主催：国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」），国立国語研究所，2017.9.23.
- ・言語系学会連合シンポジウム「ことばのプロフェッショナル」（主催：言語系学会連合，共催：国立国語研究所），東京証券会館ホール，2018.1.20.
- ・第12回 NINJAL フォーラム「ことばの多様性とコミュニケーション」（主催：国立国語研究所），東京証券会館ホール，2018.2.3.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・『〈アクティブ・ラーニング対応〉日本語を分析するレッスン』に対する書評，塚本秀樹（執筆）「大修館の一冊」，『英語教育』，66（4），p.93，大修館書店，2017.7.
- ・『〈アクティブ・ラーニング対応〉日本語を分析するレッスン』に対する書評，朝日祥之（執筆）「新刊・寸感」，『日本語学』，36（7），pp.88-89，明治書院，2017.7.
- ・『〈アクティブ・ラーニング対応〉日本語を分析するレッスン』に対する書評，茂木俊伸（執筆）「Book Review 著書紹介」，『国語研 ことばの波止場』，2，p.15，国立国語研究所，2017.9.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・博士論文審査

大阪府立大学大学院，副査，2件，（2018.2）

野山 広 (のやま ひろし) 研究系 (日本語教育研究領域) 准教授

【学位】 修士 (文学) (早稲田大学, 1988), 修士 (日本語応用言語学) (モナシュ大学, 1995), 修士 (教育学) (早稲田大学, 1996)

【学歴】 早稲田大学卒業 (1985), 早稲田大学大学院文学研究科教育学専攻修士課程修了 (1988), 豪州モナシュ大学大学院日本研究科日本語応用言語学専攻修了 (1995), 早稲田大学大学院教育学研究科国語教育専攻修士課程修了 (1996), 早稲田大学大学院文学研究科日本語・日本文化専攻博士後期課程単位取得退学 (2001)

【職歴】 文化庁文化部国語課 専門職員 (日本語教育調査官) (1997), 独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第二領域 主任研究員 (2004), 同 領域長 (2005), 同 整備普及グループ長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 上級研究員 (2009), 同 准教授 (2010), 同 研究系 (日本語教育研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】 応用言語学, 日本語教育学, 基礎教育保障学, 社会言語学, 多文化・異文化間教育, 言語政策・計画研究

【所属学会】 日本語教育学会, 基礎教育保障学会, 異文化間教育学会, 移民政策学会, 社会言語科学会, ヨーロッパ日本語教師会

【学会等の役員・委員】 基礎教育保障学会 常任理事・副会長, 日本語教育学会 多文化系学会連携協議会部会長・編集委員会委員, 移民政策学会 理事・企画委員, 異文化間教育学会 常任理事・若手交流委員会委員長, 多文化社会専門職機構 代表理事, 日本語プロフィシェンシー研究会 監事, 港区国際化推進アドバイザーミーティング 委員長 (座長)

【2017年度に参画した共同研究】

- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」: メンバー

【2017年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・ 挑戦的萌芽研究「基礎教育保障学の構築に向けた萌芽研究」, 16K13454: 研究代表者
- ・ 基盤研究 (A) 「海外連携による日本語学習者コーパスの構築および言語習得と教育への応用研究」, 16H01934: 研究分担者
- ・ 基盤研究 (C) 「夜間中学校の有用性と存在意義に関する学際的研究」, 17K04860: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

野山広, 嶋田和子, 村田晶子

「在住外国人の日本語会話能力と言語生活に関する縦断研究—Welfare Linguistics という観点から—」, 『ヨーロッパ日本語教育』, 21, pp.85–102, 2017.6.

野山広

「基礎教育保障の基盤となる人材確保等の課題と展望—夜間中学における日本語の教育を支える人材に必要な資質・能力という観点から—」, 『基礎教育保障学研究』, 創刊号, pp.22–135, 2017.7.

野山広

「今後の夜間中学の新設に向けた展望—基礎教育保障学会の設立と教育機会確保法案の成立を踏まえながら—」, 埼玉に夜間中学を作る会・川口自主夜間中学 (編) 『夜間中学と日本の教育の未来』, pp.91–101, 東京シェーレ出版, 2018.3.30.

野山広

「日本語習得支援」, 移民政策学会設立 10 周年記念論集刊行委員会 (編) 『移民政策のフロン

ティア』, pp.147–153, 明石書店, 2018.3.31.

【講演・口頭発表】

野山広, 常盤木祐一, 関本保孝, 岩槻知也, 高橋済, 新矢麻紀子

「基礎教育を保障する共生社会の構築に向けた課題と展望～多様な教育機会確保法の成立、施行を踏まえて～」(シンポジウムパネル), 移民政策学会ミニシンポジウム, 成城大学, 2017.5.27–28.

野山広, 具美善, 藤田美佳

「日韓における国際結婚移住女性の日常生活に関する比較考察—女性たちの日常「実践」や「言語生活」に注目して—」(シンポジウム・ワークショップパネル), 異文化間教育学会, 東北大大学, 2017.6.17–18.

野山広, 山本絵美, 松尾馨

「ヨーロッパで継承語としての日本語を教えることと学ぶことの意味を考える—それぞれの現場から—」(シンポジウム・ワークショップパネル), 第21回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム, リスボン新大学, 2017.8.31–9.3.

【一般向けの講演・セミナーなど】

野山広

「人の移動と地域の日本語教育～日本の事例：移動する子どもとその家族をめぐって～」, 国際交流基金サンパウロ日本文化センター／サンパウロ大学日本語・日本文学・日本文化大学院プログラム：I講演会 & ラウンドテーブル「人の移動と地域の日本語教育—帰国生, 帰国・海外子女, 移動する子どもとその家族をめぐって—」, ジャパンハウス(サンパウロ), 2017.12.21.

野山広, 北川裕子, 福永由佳, 新矢麻紀子, 村田晶子, 石崎雅人

「地域に定住する外国人の日本語使用と言語生活について考える—縦断調査の結果や多言語社会としての日本の現在を踏まえながら—」, 国立国語研究所日本語教育研究領域日本語教師セミナー, 国立国語研究所, 2018.1.20.

野山広

「立川の歴史における多文化共生」, 多摩郷土誌フェア関連講演会(立川市と国立国語研究所共同企画), 立川市女性総合センターAim, 2018.1.21.

【研究調査】

- ・ 2017.10: 中国・北京師範大学, 北京日本学研究センターとの協働による縦断調査
- ・ 2018.3: 秋田県能代市, OPI (Oral Proficiency Interview) の枠組みを活用した, 日本語学習者の会話力, 言語生活等に関する縦断調査のフォローアップ調査等

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 「多文化共生社会と地域日本語教育」, 西東京市日本語ボランティア入門講座, 西東京市役所田無庁舎, 2017.5.
- ・ 「多文化共生社会と地域日本語教育～その醍醐味と可能性」, 足立区日本語ボランティア支援講座, 足立区エルソフィア(梅田地域学習センター), 2017.6.
- ・ 「外国人児童・生徒教育の今日的な課題—バイリンガル教育の観点から—」, 東京都専門性向上研修：日本語指導の基礎・基本(初期指導), 東京都教職員研修センター, 2017.8.
- ・ 「複言語環境で生活する子どもの可能性とネットワーク拡充の重要性—CLD児の学びを日本語の位置付けとバイリンガル教育の観点から考える—」(特別講演), ドイツ・ハンブルク, 2017.12.
- ・ 「複言語環境における学習者の日本語と読み書き〈リテラシー〉—基礎教育の現場で必要な381字の生活基本漢字から考える—」(研修会でのワークショップ), ブラジル・ブラジリア, 2017.12.
- ・ 「多様性を意識した地域日本語教育の展開と日系南米人の存在の重要性～日本の人口減少と多言語・多文化化の現状を踏まえつつ～」(研修会での講演), ブラジル・ブラジリア, 2017.12.
- ・ 「人の移動と地域の日本語教育～日本の事例：移動する子どもとその家族をめぐって～」(フォーラムでの講演), ブラジル・サンパウロ(ジャパンハウス), 2017.12.

- ・「複言語家族における親子の対話の重要性と日本語リテラシー」(特別講演), ドイツ・デュースブルク, 2018.1.
- ・「複言語家族における対話の重要性と日本語リテラシーの可能性」(特別講演), ドイツ・ベルリン, 2018.1.
- ・「立川の歴史における多文化共生」多摩郷土誌フェア関連講演会(立川市と国立国語研究所共同企画), 2018.1.21.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・大学院非常勤講師
政策研究大学院大学, 東海大学大学院

福永由佳 (ふくなが ゆか) 研究系 (日本語教育研究領域) 研究員

【学位】修士 (日本語教育) (ウィスコンシン大学, 1993)

【学歴】金沢女子大学文学部英米文学科卒業 (1991), ウィスコンシン大学東アジア語学文学学科修士課程修了 (1993)

【職歴】国立国語研究所日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室 研究員 (1998), 独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第一領域 研究員 (2001), 同日本語教育基盤情報センター学習項目グループ 研究員 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 研究員 (2009), 研究系 (日本語教育研究領域) 研究員 (2016)

【専門領域】日本語教育学, 社会言語学, 複数言語使用, 識字

【所属学会】日本語教育学会, 社会言語科学会, 日本言語政策学会, 日本質的心理学会, 言語管理研究会

【学会等の役員・委員】日本質的心理学会 研究交流委員, 言語管理研究会 接触場面分科会 運営委員

【2017年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」: 共同研究員
- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: 共同研究員

【2017年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「多言語環境にある外国人の日本語観と言語選択に関する研究—在日パキスタン人を中心」, 26370522: 研究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

福永由佳

「日本語教育における複数言語使用の研究の意義と展望」, 『早稲田日本語教育学』, 22, pp.61-80, 2017.6.16.

【講演・口頭発表】

福永由佳

「日本語学習リソースとしての家族についての一考察—在日パキスタン人の事例から」, 第10回日本語実用言語学国際会議, 国立国語研究所, 2017.7.8.

福永由佳

「パキスタン人コミュニティの多言語使用—移民コミュニティの成員としてのパキスタン人と日本人に着目して—」, シンポジウム「顕在化する多言語社会日本」, 国立国語研究所, 2018.3.17.

【一般向けの講演・セミナーなど】

福永由佳

「フィールドワークの経験から学ぶこと—研究する「私」の問い合わせ—」, 国立国語研究所日本語教育研究領域日本語教師セミナー, 国立国語研究所, 2018.1.20.

【研究調査】

- ・2017.6: 射水市, 外国人の多言語使用意識調査
- ・2018.1: 富山市, 地域の日本語教育に関するインタビュー調査

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・NINJAL国際シンポジウム: 第10回日本語実用言語学国際会議 (主催: 国立国語研究所), 国立国語研究所, 2017.7.8-9.
- ・シンポジウム「顕在化する多言語社会日本」 (主催: 福永由佳), 国立国語研究所, 2018.3.17.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・学術誌『言語文化教育研究』 査読協力
- ・ワールドカフェ「質的研究にたいするとまどいを語ろう」企画・運営（日本質的心理学会第14回全国大会プレ企画、首都大学東京荒川キャンパス、2017.9.8）
- ・2017年度言語管理研究会接触場面分科会 企画・運営（神田外語学院、2018.3.3）

浅原 正幸 (あさはら まさゆき) コーパス開発センター 准教授

【学位】博士（工学）（奈良先端科学技術大学院大学, 2003）

【学歴】京都大学総合人間学部基礎科学科卒業（1998），奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究所
博士前期課程修了（2001），奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究所博士後期課程短期修了
(2003)

【歴歴】奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究所 助手・助教（2004），国立国語研究所コーパス開
発センター 特任准教授（2012），同 言語資源研究系 准教授（2014），同 コーパス開発センター 准
教授（2016）

【専門領域】自然言語処理

【所属学会】情報処理学会，言語処理学会，言語学会，日本語学会

【学会等の役員・委員】情報処理学会自然言語処理研究会 運営委員，言語処理学会 編集委員

【受賞歴】

2014: 言語処理学会論文誌『自然言語処理』2014年論文賞

2011: Best paper award of the 7th International Conference on Natural Language Processing and
Knowledge Engineering

2010: The Best Paper Award of the SMBM2010 (the Fourth International Symposium on Semantic
Mining in Biomedicine)

2008: 言語処理学会第14回年次大会 優秀発表賞

2003: 平成15年度情報処理学会 山下記念研究賞

【2017年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」：共同研究員
- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」：共同
研究員
- ・新領域創出型共同研究プロジェクト「all-words WSD システムの構築及び分類語彙表と岩波国語
辞典の対応表作成への利用」：コーディネーター
- ・基礎研究「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」：リーダー
- ・情報・システム研究機構：機構間連携・文理融合プロジェクト調査研究（FS）「わかりやすい情
報伝達の実現に向けた言語認知機構の解明とその工学的応用」：共同研究員
- ・情報・システム研究機構：機構間連携・文理融合プロジェクト調査研究（FS）「言語における系
統・変異・多様性とその数理」：共同研究員

【2017年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究（A）「日本語歴史コーパスに対する統語・意味情報アノテーション」，17H00917：研
究代表者
- ・基盤研究（C）「「修辞機能」と「脱文脈化程度」の観点からのテキスト分析手法確立と自動化の
検討」，15K02535：研究分担者
- ・博報財団 児童教育実践についての研究助成 第11回継続助成（アドバンストステージ）「現場と
の協働による児童・生徒作文能力の経年変化に関する発展的研究」：研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Masayuki Asahara

“Word Familiarity Rate Estimation for ‘Word List by Semantic Principles’—a Case Study of
Adjective—”, *Mental Architecture for Processing and Learning of Language (MAPLL) and Tokyo*

Conference on Psycholinguistics (TCP) 2017, 2017.7.

Takuya Miyauchi, Masayuki Asahara, Natsuko Nakagawa, and Sachi Kato

“Annotation of Information Structure on “The Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese””, *Proceedings of PACLING 2017, the 15th International Conference of the Pacific Association for Computational Linguistics*, pp.166–175, 2017.8.

Masayuki Asahara, Nao Ikegami, Yutaka Hara, Sachi Kato, and Tai Suzuki

“Annotation of ‘Word List by Semantic Principles’ Labels for ‘Corpus of Historical Japanese’ Heian Period Series—Trial Annotation on Tosa Nikki and Takatori Monogatari—”, *JADH 2017, The Japanese Association for Digital Humanities Conference 2017*, 2017.9.

Mai Omura, Yuta Takahashi, and Masayuki Asahara

“Universal Dependency for Japanese Modern Languages”, *JADH 2017, The Japanese Association for Digital Humanities Conference 2017*, 2017.9.

Masayuki Asahara

“Between Reading Time and Information Structure”, *Proceedings of The 31st Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation PACLIC 31 (2017)*, 2017.11.

Masayuki Asahara, and Sachi Kato

“Between Reading Time and Syntactic/Semantic Categories”, *Proceedings of the The 8th International Joint Conference on Natural Language Processing*, pp.404–412, 2017.11.

浅原正幸

「第3章 形態素解析・品詞タグ付与・固有表現解析」, 松本裕治, 奥村学 (編) 『コーパスと自然言語処理』, 朝倉書店, 2017.12.

浅原正幸, 河原一哉, 大場寧子, 前川喜久雄

「『国語研日本語ウェブコーパス』とその検索系『梵天』」, 『情報処理学会論文誌』, **59** (2), pp.299–305, 2018.2.15.

Masayuki Asahara

“NWJC2Vec: Word embedding dataset from ‘NINJAL Web Japanese Corpus’”, *Terminology: International Journal of Theoretical and Applied Issues in Specialized Communication*, **24** (1), pp.7–25, 2018.2.

新納浩幸, 浅原正幸, 古宮嘉那子, 佐々木稔

「nwjc2vec: 国語研日本語ウェブコーパスから構築した単語の分散表現データ」, 『自然言語処理』, **24** (5), pp.705–720, 2018.2.

Takuya Miyauchi, Masayuki Asahara, Natsuko Nakagawa, and Sachi Kato

“Annotation of Information Structure on “The Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese””, Koichi Hashida, and Win Pa Pa (eds) *Computational Linguistics, 15th International Conference of the Pacific Association for Computational Linguistics, PACLING 2017*, pp.155–165, Springer Nature Singapore, 2018.3.

浅原正幸

「『国語研日本語ウェブコーパス』とその検索系『梵天』」, 『JSL 漢字学習研究会誌』, **10**, 2018.3. 『データベース等』

Mai Omura, and Masayuki Asahara

“UD Japanese-BCCWJ”, 2018.3.30.

Mai Omura, Yuta Takahashi, and Masayuki Asahara

“UD Japanese-Modern”, 2018.3.30.

【講演・口頭発表】

浅原正幸

「読み時間と節境界について」, 日本言語学会第 154 回大会, 首都大学東京南大沢キャンパス,

2017.6.24-25.

浅原正幸, 田中弥生

「修辞ユニット分析における脱文脈化指数の妥当性の検証」, 言語資源活用ワークショップ 2017, 国立国語研究所, 2017.9.5-6.

加藤祥, 浅原正幸

「分類語彙表番号を用いた比喩表現収集の試み」, 言語資源活用ワークショップ 2017, 国立国語研究所, 2017.9.5-6.

大村舞, 浅原正幸

「現代日本語書き言葉均衡コーパスの Universal Dependencies」, 言語資源活用ワークショップ 2017, 国立国語研究所, 2017.9.5-6.

浅原正幸, 加藤祥

「読み時間と統語・意味分類」, 日本認知科学会第 34 回大会, 金沢大学角間キャンパス, 2017.9.13-15.

加藤祥, 浅原正幸

「意味分野の結合類型を用いてコーパスから隠喩用例収集を試みる」, 日本認知言語学会第 18 回全国大会, 大阪大学豊中キャンパス, 2017.9.16-17.

浅原正幸

「Universal Dependencies プロジェクトと日本語チームの活動」, 「言語における系統・変異・多様性とその数理」シンポジウム, TKP 東京駅大手町カンファレンスセンター, 2018.2.2.

浅原正幸

「『国語研日本語ウェブコーパス』とその検索系『梵天』」(招待講演), 韓国日本学会, 淑明女子大学校, 2018.2.10.

浅原正幸

「読み時間と節境界について」(招待講演), シンポジウム「日本語学習者はどのように文章を理解しているのか—目の動きから見えてくるもの—」, 国立国語研究所, 2018.3.3.

加藤祥, 浅原正幸

「読み手が共通の認識を得るための情報とその表現—小説のタイトルと帯から読み手が取得する情報—」, 第 41 回社会言語科学会研究大会, 東洋大学白山キャンパス, 2018.3.10-11.

平林照雄, 鈴木類, 古宮嘉那子, 浅原正幸, 佐々木稔, 新納浩幸

「『岩波国語辞典』の語義タグを用いた all-words の語義曖昧性解消」, 言語処理学会第 24 回年次大会, 岡山コンベンションセンター (ママカリフォーラム), 2018.3.13-15.

大村舞, 浅原正幸

「UD Japanese BCCWJ: 現代日本語書き言葉均衡コーパスの Universal Dependencies」, 言語処理学会第 24 回年次大会, 岡山コンベンションセンター (ママカリフォーラム), 2018.3.13-15.

田中弥生, 浅原正幸

「児童による作文の修辞ユニット分析における中核要素認定」, 言語処理学会第 24 回年次大会, 岡山コンベンションセンター (ママカリフォーラム), 2018.3.13-15.

浅原正幸, 近藤明日子, 加藤祥

「国語研で開発している語義タグ付きデータと辞書」, 「all-words WSD システムの構築及び分類語彙表と岩波国語辞典の対応表作成への利用」研究発表会, 国立国語研究所, 2018.3.25.

菊地礼, 加藤祥, 浅原正幸

「「感じる」を指標とするメタファー用例の収集とその分析」, 日本語用論学会 メタファー研究会 2018 年 3 月 18・19 日 2-Day シンポジウム「身体性」, 関西大学千里山キャンパス, 2018.3.18-19.

【講習・チュートリアル】

浅原正幸

「梵天講習会」, Yahoo! Japan 本社, 2017.4.3.

浅原正幸

「梵天講習会」, お茶の水女子大学, 2017.4.27.

浅原正幸

「梵天講習会」, 大阪大学豊中キャンパス, 2017.5.12.

浅原正幸

「梵天講習会」, 京都大学吉田キャンパス, 2017.5.15.

浅原正幸

「梵天講習会」, 国立国語研究所, 2017.7.11.

浅原正幸

「梵天講習会」, Youtube Live, 2017.7.24, 2017.8.1.

浅原正幸

「梵天講習会」, 金城学院大学, 2017.9.3.

浅原正幸

「梵天講習会」, 筑波大学, 2017.9.27.

浅原正幸

「梵天講習会」, 東京外国語大学, 2017.11.2.

浅原正幸

「中納言講習会・梵天講習会」, 比治山大学, 2017.12.10.

浅原正幸

「梵天講習会」, ことわざ学会, 杏林大学井の頭キャンパス, 2018.2.24.

浅原正幸

「視線走査装置講習会」, 国立国語研究所, 2018.3.2.

浅原正幸

「梵天講習会・ChaKi.NET 講習会」, 国立国語研究所, 2018.3.20.

浅原正幸

「梵天講習会」, ジャストシステム本社, 2018.3.29.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・言語資源活用ワークショップ 2017 (主催: 国立国語研究所コーパス開発センター, 民族学博物館), 国立国語研究所, 2017.9.5-6.
- ・「言語における系統・変異・多様性とその数理」シンポジウム (主催: 統計数理研究所, 共催: コーパス開発センター・民族学博物館), TKP 東京駅大手町カンファレンスセンター, 2018.2.2.
- ・シンポジウム「日本語学習者はどのように文章を理解しているのか—目の動きから見えてくるもの—」 (主催: 研究系・日本語教育研究領域, 共催: コーパス開発センター), 国立国語研究所, 2018.3.3.
- ・「all-words WSD システムの構築及び分類語彙表と岩波国語辞典の対応表作成への利用」研究発表会, 国立国語研究所, 2018.3.25.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・日本言語学会第 154 回大会発表賞審査員
- ・The 11th edition of the Language Resources and Evaluation Conference (LREC 2018) Scientific Committee Member
- ・The 13th Workshop on Asian Language Resources (ALR13) Program Committee Member
- ・The 16th Annual Conference of the North American Chapter of the Association for Computational Linguistics: Human Language Technologies (NAACL HLT-2018) Program Committee Member
- ・言語処理学会第 24 回年次大会発表賞選考委員
- ・The 56th annual meeting of the Association for Computational Linguistics (ACL-2018) Program

Committee Member

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・博士論文学外審査委員
総合研究大学院大学

石本 祐一 (いしもと ゆういち) コーパス開発センター 特任助教

【学位】博士（情報科学）（北陸先端科学技術大学院大学, 2004）

【学歴】宇都宮大学工学部卒業（1997），北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科情報処理学専攻
博士前期課程修了（2000），北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科情報処理学専攻博士後期
課程修了（2004）

【職歴】東京工科大学メディア学部 助手（2007），同 助教（2009），人間文化研究機構国立国語研究所
プロジェクト非常勤研究員（2010），情報システム研究機構国立情報学研究所 特任研究員（2010），
人間文化研究機構国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員（2013），同 研究情報資料センター
特任助教（2013），同 コーパス開発センター 特任助教（2017）

【専門領域】音声工学，音響音声学

【所属学会】日本音響学会，電子情報通信学会

【受賞歴】

2016: Oriental COCOSDA 2016 ITN Best Paper Award

【2017年度に参画した共同研究】

- ・基礎研究「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」：共同研究員
- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」：共同
研究員

【2017年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究（C）「音声アシスタントとの円滑な話者交替を実現する音声言語特徴の解明」，
15K00390：研究代表者
- ・基盤研究（A）「日常場面と特定場面の日本語会話コーパスの構築と言語・相互行為研究の新展
開」，17H00914：研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Yuichi Ishimoto, Takehiro Teraoka, and Mika Enomoto

“End-of-Utterance Prediction by Prosodic Features and Phrase-Dependency Structure in Sponta-
neous Japanese Speech”, *Proceedings of Interspeech 2017*, pp.1681–1685, 2017.8.

【講演・口頭発表】

石本祐一，河原英紀

「日本語話し言葉コーパスの F0 値再抽出に関する検討」，言語資源活用ワークショップ 2017，
国立国語研究所，2017.9.5–6.

石本祐一，榎本美香

「話者移行適格場の到来を予測させる発話中の韻律変化の解明」，日本認知科学会第 34 回大会，
金沢大学，2017.9.13–15.

石本祐一，寺岡丈博，榎本美香

「統語情報と韻律情報を用いた発話頭からの漸進的発話末予測の検討」，日本音響学会 2017 年秋
季研究発表会，愛媛大学，2017.9.25–27.

高田智和，大石恵輔，山口亮，石本祐一

「国立国語研究所収蔵音源資料と所蔵音源データベース構築」，人文科学とコンピュータシンポ
ジウム 2017，大阪市立大学，2017.12.9–10.

大須賀智子，石本祐一，梶山朋子，小澤俊介，内元清貴，板橋秀一

「大規模メタデータを用いた音声コーパス類似性の対話的可視化・検索システムの改良」，日本

音響学会 2018 年春季研究発表会, 日本工業大学, 2018.3.13–15.

石本祐一, 寺岡丈博, 榎本美香

「言語情報と韻律情報に基づく自発発話終了位置の統計的予測モデルの構築」, 日本音響学会

2018 年春季研究発表会, 日本工業大学, 2018.3.13–15.

前川喜久雄, 能田由紀子, 北村達也, 竹本浩典, 石本祐一

「日本語撥音の調音音声学的記述の精緻化: rtMRI データによる試み」, 日本音響学会 2018 年春

季研究発表会, 日本工業大学, 2018.3.13–15.

岡 照晃 (おか てるあき) コーパス開発センター 特任助教

【学位】博士（工学）（奈良先端科学技術大学院大学, 2015）

【学歴】 豊橋技術科学大学工学部卒業（2010），奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士前期課程修了（2012），奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程短期修了（2015），

【職歴】 京都大学大学院情報学研究科 特定研究員（2015），人間文化研究機構国立国語研究所言語変化研究領域 プロジェクト非常勤研究員（2016），同 コーパス開発センター 特任助教（2016）

【専門領域】 計算言語学，自然言語処理

【所属学会】 言語処理学会

【受賞歴】

2011：情報処理学会第 201 回自然言語処理研究会学生奨励賞

2009：豊橋技術科学大学平成 21 年度後期「卓越した技術科学者養成プログラム」

2009：豊橋技術科学大学平成 21 年度前期「卓越した技術科学者養成プログラム」

2008：舞鶴工業高等専門学校学業成績優秀賞

【2017 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」：メンバー

【研究業績】

《データベース等》

岡照晃

「UniDic 公開用新サイト作成・公開」，<http://unidic.ninjal.ac.jp/>，2017.8.3.

岡照晃

“unidic-cwj-2.2.0”，<http://unidic.ninjal.ac.jp/>，2017.9.5.

岡照晃

“unidic-csj-2.2.0”，<http://unidic.ninjal.ac.jp/>，2017.9.5.

【講演・口頭発表】

岡照晃

「CRF 素性テンプレートの見直しによるモデルサイズを軽量化した解析用 UniDic—unidic-cwj-2.2.0 と unidic-csj-2.2.0—」，言語資源活用ワークショップ 2017 (LRW2017)，国立国語研究所，2017.9.5-6.

岡照晃

「乱択アルゴリズムを使った『国語研日本語ウェブコーパス』からの UniDic 新語彙素候補の自動抽出」，第 168 回 NINJAL サロン，国立国語研究所，2017.12.26.

岡照晃

「新しい UniDic について (UniDic 四方山話)」，第 9 回入力メソッドワークショップ (IM2017)，京都大学，2017.12.29.

岡照晃

「電子化辞書『UniDic』を中心に見たリレーションル・データベースによる統合的言語資源管理環境」(招待講演)，言語処理学会第 24 回年次大会ワークショップ，岡山コンベンションセンター，2018.3.16.

【一般向けの講演・セミナーなど】

岡照晃

「1 時間で日本語研究体験」，国立国語研究所，2017.10.20.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・言語処理学会第24回年次大会ワークショップ「形態素解析の今とこれから」「形態素解析だヨ!全員集合」, 岡山コンベンションセンター, 2018.3.16.

山田 真寛 (やまだ まさひろ) IR 推進室 特任助教

【学位】 Ph.D. (言語学) (デラウェア大学, 2010)

【学歴】 国際基督教大学教養学部語学科卒業 (2005), 米国デラウェア大学大学院言語学・認知科学研究科博士課程修了 (2010)

【職歴】 日本学術振興会特別研究員 (PD) ／京都大学 (2010), 広島大学教育学研究科言語と認知の脳科学プロジェクトセンター ポスドク研究員 (2013), 京都大学学際融合教育研究推進センターアジア研究教育ユニット 特定助教 (2014), 立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員 (2016), 人間文化研究機構国立国語研究所 IR 推進室 特任助教 (2016)

【専門領域】 言語学, 形式意味論, 言語復興

【学会等の役員・委員】 琉球継承言語研究会 事務局

【受賞歴】

2014: 京都大学学際研究着想コンテスト奨励賞

【2017年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: 共同研究員

【2017年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・若手研究 (B) 「琉球諸語の記述と復興研究のためのプラットフォーム基盤構築研究」, 16K16824: 研究代表者
- ・基盤研究 (B) 「言語使用と非言語的認知操作における空間指示枠の相関についての実験的研究」, 17H02333: 研究分担者
- ・トヨタ財団 研究助成プログラム「多文化・多言語社会としての日本の理解—消滅危機言語の相互理解性と世代間継承度のための客観的尺度の創出」: 研究代表者
- ・DNP 文化振興財団 グラフィック文化に関する学術研究「絵とともに語ることばの未来 多言語表記民話絵本のブックデザイン」: 共同研究者
- ・電気通信普及財団 研究調査助成「「何もしなければ」消滅してしまう琉球のことばを、記録、共有して、継承するために」: 共同研究者
- ・トヨタ財団 社会コミュニケーションプログラム「琉球諸語統一的表記法フォント開発と電子的な理由の普及」: 共同研究者

【研究業績】

《著書・編書》

ハラセイコ, 山田真寛

『くい んだし あんびんだんぎ』, 沖縄時事出版, 2018.2.

山田真寛, 森澤ケン

『与那国の人とことば 2017』, 言語復興の港, 2018.3.

《論文・ブックチャプター》

中川奈津子, 山田真寛

「竹富島『星砂の話』の絵本作成と一般読者向け文法概説の執筆」, 『国立国語研究所論集』, 14, pp.145–167, 2018.1.31.

山田真寛

「地域言語コミュニティと協働する消滅危機言語研究、専門家と協働する言語と文化の継承活動」, 木部暢子, 麻生玲子 (編) 『新しい地域文化研究の可能性を求めて Vol.3』, pp.76–91, 人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害か

らの地域文化の再構築」, 2018.2.28.

【講演・口頭発表】

Masahiro Yamada

“Creating Contents for Language Learning: Collaboration with Language Communities” (招待講演), NINJAL-NMJH-UHM Workshop “Underdescribed Languages and Histories: Linguist’s and Historian’s Challenges”, ハワイ大学マノア校, 2017.5.16–18.

Yukinori Takubo, and Masahiro Yamada

“Modal Questions and Point-of-View Shift in Korean and Japanese” (シンポジウム・パネル), 日本言語学会第 155 回大会公開シンポジウム, 立命館大学, 2017.11.25–26.

山田真寛

「地域言語間・世代間の相互理解性を測定する」, 第 13 回琉球諸語研究会, 名瀬公民館, 2018.3.18. 山本史, 山田真寛

「琉球諸語による表現活動：島ことば絵本・プロダクトの制作とコンテンツの活用」, 第 10 回琉球継承言語研究会, 琉球大学, 2018.3.24–25.

【一般向けの講演・セミナーなど】

山田真寛

「言語復興の港—「いま何もしなければ」なくなってしまう言語のこと」, 東長寺仏教文化講座, 東長寺, 2017.6.1.

山田真寛

「ゆしきやプロジェクトと言語復興のお話」, 下平川小学校 PTA 総会, 下平川小学校, 2017.7.4.

山田真寛

「しまむにがどこでも聞こえる世界を」, 上平川公民館, 2017.7.7.

山田真寛

「しまむにと言語の多様性—じぶんたちでバイリンガル社会をつくる。」, えらぶ郷土研究会, 国頭公民館, 2017.11.11.

山田真寛

「ミニ講義：えらぶむに（琉球沖永良部語）ってどんなことば？」, ワークショップ「えらぶむに（琉球沖永良部語）ってどんなことば？」, 国立国語研究所, 2018.2.25.

【講習・チュートリアル】

山田真寛

「与那国語の形容詞の活用—複雑な動詞活用習得のそなえ」, よなぐにほーげんクラブ, 与那国町複合型公共施設, 2018.2.4.

【研究調査】

- 2017.4.27–5.8.: 鹿児島県大島郡知名町, 和泊町, 沖永良部語フィールドワーク
- 2017.7.3–12.: 鹿児島県大島郡知名町, 和泊町, 沖永良部語フィールドワーク
- 2018.2.27–3.10.: 沖縄県八重山郡与那国町, 与那国語フィールドワーク
- 2018.3.17–21.: 鹿児島県大島郡名瀬市, 龍郷町, 奄美語フィールドワーク

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- 『ましゅ いっしゅーぬ くれー』製本ワークショップ (主催: しらゆり保育園, 共催: 言語復興の港), しらゆり保育園, 2017.11.11.
- ワークショップ「えらぶむに（琉球沖永良部語）ってどんなことば？」 (主催: 国立国語研究所, 共催: 知名町立下平川小学校, 言語復興の港), 国立国語研究所, 2018.2.25.

【その他の学術的・社会的活動】

- 学会要旨査読, The 25th Japanese/Korean Linguistics, University of Hawai'i at Mānoa

- ・取材記事, 「与那国ことば多彩な教材 児童が親しむ環境づくり カルタ・会話カード・辞典 教委が作製」, 沖縄タイムス「うちなあタイムス」, 2017.7.23.
- ・取材記事, 「方言でかるたや紙芝居制作 国立国語研究所と下平川小」, 南海日日新聞, 2017.11.8.
- ・『みちやぬ ふい』に対する書評, 雪田倫代 (執筆) 「ことば生き生き「土の声」「みちやぬ ふい」」, 南海日日新聞, 2017.12.28.
- ・『くい んだし あんびんだんぎ』読み聞かせ, 久部良小学校 (高学年), 2018.3.8.
- ・『くい んだし あんびんだんぎ』読み聞かせ, 久部良小学校 (低学年), 2018.3.9.
- ・取材記事, 「「与那国語」継承を 絵本、児童に大人気」, 八重山日報, 2018.3.15.
- ・取材記事, 「合唱曲の方言バージョンも 東京でワークショップ 4家族が「えらぶむに」紹介」, 南海日日新聞, 2018.3.27.
- ・取材記事, 「与那国ことばで校内放送4年・和泉さん提案「皆で練習しよう」久部良小」, 琉球新報, 2018.3.31.

VII

資 料

1 運営会議

運営会議規程

- 委員は 20 名以内、内過半数は所外の学識経験者。
- 所内委員は、副所長、研究系長、センター長、その他所長の指名する教授又は客員教授、若干名。
- 会議は所長の求めに応じ、議長がこれを招集する。
- 委員の過半数の出席がなければ議事を開き、議決することができない。
- 会議の議事は出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- 専門的事項について審議を行うための専門委員会（所長候補者選考委員会、人事委員会、名誉教授候補者選考委員会）を置くことができる。
- 議長は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

2017 年度の開催状況

- 第 1 回 [2017 年 7 月 10 日 13:30–15:30 (AP 東京丸の内)]
 - 議事概要確認
 - 前回議事概要（案）について
 - 審議事項
 - 准教授（言語変異研究領域）の公募について
 - 特任助教（博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業）の選考について
 - 名誉教授の選考について
 - 名誉教授称号授与規程の改正について
 - 運営会議規程の改正及び書面審議に係る申合せについて
 - 報告事項
 - 人間文化研究機構 人文知コミュニケーションの配置について
 - 第 2 期中期目標・中期計画期間に係る評価結果について
 - 平成 28 事業年度に係る業務の実績に関する報告書について
 - 平成 28 年度業務の実績に関する外部評価報告書
 - 平成 29 年度計画について
 - 平成 30 年度概算要求について
 - 広報機能の強化について
 - その他
 - 国立国語研究所の活動状況について
- 第 2 回 [2017 年 10 月 23 日 13:00–15:00 (AP 東京丸の内)]
 - 議事概要確認
 - 議長及び副議長の選出について
 - 前回議事概要（案）について
 - 審議事項
 - 研究教育職員候補者選考（外部公募）内規に関する申合せの改正について
 - 准教授（研究系（言語変異研究領域））の選考について
 - 人事委員会委員の選出について
 - 名誉教授の選考について
 - 特任助教（研究情報発信センター）の公募手続きについて
 - 報告事項
 - 国立国語研究所の活動状況について

- ・第3回 [2017年11月2日 (書面審議)]
 - 審議事項
 1. 前回議事概要 (案) について
 2. 特任助教 (研究情報発信センター) の公募について
- ・第4回 [2018年2月22日 13:30-15:30 (フクラシア東京ステーション)]
 - 議事概要確認
 1. 前回議事概要 (案) について
 - 報告事項
 1. 特任助教 (研究情報発信センター) の選考結果について
 2. 平成30年度客員教員について
 3. 平成29事業年度に係る業務の実績に関する報告書 (案) について
 4. 平成30年度計画 (案) について
 5. 平成30年度運営費交付金について
 6. 国立国語研究所の活動状況について
 7. その他

運営会議の下に置かれる専門委員会

(1) 所長候補者選考委員会

- ・所長候補者選考委員会規程
 - 委員会の任務は、被推薦者名簿の作成、適任者名簿の作成、その他所長選考に必要な予備的事項に関するを行う。
 - 委員会は運営会議委員のうち運営会議議長が指名する研究所内の者及び研究所外の者若干名で組織する (研究所内の委員を過半数とする)。
 - 委員の任期は1年とし再任を妨げない。欠員の後任者の任期は前任者の残任期間とする。
 - 委員の過半数の出席がなければ議事を開き、議決することができない。
 - 委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
 - 委員長は必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

(2) 人事委員会

・人事委員会規程

- 委員会は研究所の研究教育職員の採用及び昇任人事に係る候補者の選考に関する事項の審議を行う。
- 委員会は運営会議委員のうち運営会議議長が指名する、研究所外の者及び研究所内の者若干名で組織する。
- 委員の任期は1年とし、再任を妨げない。欠員の後任者の任期は前任者の残任期間とする。
- 委員会は委員の過半数の出席で議事を開催する。
- 委員会の議事は出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは委員長の決するところによる。
- 委員長は必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

・人事委員会審議状況

- 2017年6月19日 (第1回)

可視化・高度化事業特任助教として籠宮隆之氏を運営会議に推薦。

(2017年7月10日開催の運営会議 (第1回) で採用決定)

- 2017年7月10日 (第2回), 2017年9月29日 (第3回)

研究系 (言語変異研究領域) 准教授として山田真寛氏を運営会議に推薦。

(2017年10月23日開催の運営会議 (第2回) で採用決定)

- 2017年11月14日 (第5回 [メール審議])

研究情報発信センター特任助教の公募を決定し実施したが、応募がなかった。

2 評価体制

国立国語研究所では、効率的かつ効果的な自己点検・評価を実施し、その評価結果を適切に業務運営に反映させるため、自己点検・評価委員会を設置している。この自己点検・評価を第三者評価に適切に関連づけるため、外部評価委員会を設置している。外部評価委員会では、2017年度の「機関拠点型基幹研究プロジェクト・センターの研究活動」、「組織・運営」、「管理業務」について、研究所がまとめた自己点検・評価に対し、外部評価委員がその専門的立場から検証をおこなった。

(1) 自己点検・評価委員会

この委員会では、自己点検・評価の基本的な考え方の作成、自己点検・評価の実施、評価結果の公表及び活用に関する事、外部評価委員会の評価結果に関する事などを担当する。2017年度は8回開催した。

(2) 外部評価委員会

外部評価委員会規程

- ・委員会は、自己点検・評価の結果に基づく評価に関する事、研究所の中期計画及び年度計画の評価に関する事、共同研究プロジェクト等の評価に関する事、その他評価に関する事について審議する。
- ・委員会は10名以内の委員をもって組織する。委員は研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。
- ・委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は前任者の任期とする。
- ・委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をする事ができない。委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
- ・委員会は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取する事ができる。
- ・外部評価の実施は、研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。委員会は、評価の結果を所長に報告するものとする。

平成29年度業務の実績に関する評価の実施について

・評価の実施の趣旨

年度当初に文部科学省に提出した「大学共同利用機関法人人間文化研究機構平成29年度計画」に記載した計画の実施状況について自己点検評価をおこない、その妥当性を検証するため外部評価委員会による評価を実施する。

・評価の実施方法

評価は書面審査でおこなう。研究所が作成した、平成29年度の計画及びその実施状況が記入された「29年度業務の実績報告書」（「機関拠点型基幹研究プロジェクト・センターの研究活動」、「組織・運営」、「管理業務」）の内容を検証する。

平成29年度業務の実績にかかる外部評価委員会開催状況

・外部評価委員会【平成29年度実績評価】（第1回）

[2018年3月6日 15:00-17:00 (TKP 東京駅前カンファレンスセンター)]

・議事

1. 前回議事概要（案）確認
2. 機関拠点型基幹研究プロジェクト 平成29年度点検・評価報告書について
3. 機関拠点型基幹研究プロジェクト 平成30年度年次計画について
4. その他

・外部評価委員会【平成29年度実績評価】（第2回）

[2018年6月29日 14:00-16:00 (TKP 東京駅前カンファレンスセンター)]

・議事

1. 前回議事概要（案）確認

2. 平成 29 年度共同研究プロジェクト評価について
3. 機関拠点型基幹研究プロジェクト評価について
4. 平成 29 年度「コーパス開発センター」及び「研究情報発信センター」の評価について
5. 平成 29 年度「組織・運営」、「管理業務」の評価について
6. 次年度評価におけるヒアリングについて
7. 委員長の選出方法について
8. その他

(3) 基幹研究プロジェクトの評価

機関拠点型基幹研究プロジェクトについて、各プロジェクトリーダーが作成した「自己点検報告書」に基づき、外部評価委員会委員による書面審査をおこなった。

3 所長賞

功績顕著な職員に対し、所長からその功績をたたえ表彰をおこない、研究所の活性化に資することを目的とするもので、学術上の功績および研究支援業務等で優れた功績があったと認められる者を対象とし、原則として年 2 回おこなう。

第 15 回所長賞：2017 年度前期（2017 年 4 月 1 日–2017 年 9 月 30 日）

・特別所長賞

- 窪園晴夫（研究系（理論・対照研究領域）教授）
 - 業績：Kubozono Haruo (ed.) *The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants*, Oxford University Press, 2017.4.
 - 理由：世界的に定評のある学術出版社による著書・編書の国際出版

・若手研究者奨励賞

- 川端良子（研究系（音声言語研究領域）プロジェクト非常勤研究員）
 - 業績：川端良子「地図課題対話における共有信念更新のメカニズム」, 『認知科学』（日本認知学会）, 24 (2), 2017.6.
 - 理由：日本を代表するピアレビュー誌に掲載された学術論文
- 村山実和子（研究系（言語変化研究領域）プロジェクト非常勤研究員）
 - 業績：情報処理学会 人文科学とコンピュータ研究会奨励賞 受賞, 2017.5.
 - 理由：学会レベルでの受賞

第 16 回所長賞：2017 年度後期（2017 年 10 月 1 日–2018 年 3 月 31 日）

・特別所長賞

- Prashant Pardeshi（研究系（理論・対照研究領域）教授）
 - 業績：Prashant Pardeshi and Taro Kageyama (eds.) *Handbook of Contrastive Linguistics*, De Gruyter Mouton, 2018.2.
 - 理由：世界的に定評のある学術出版社による著書・編書の国際出版

・所長賞

- 石黒圭（研究系（日本語教育研究領域）教授）
 - 業績：石黒圭（編）『わかりやすく書ける作文シラバス』, くろしお出版, 271 頁, 2017.12.
石黒圭『大人のための言い換え力』, NHK 出版新書, 250 頁, 2017.12.
石黒圭『形容詞を使わない大人の文章表現力』, 日本実業出版社, 237 頁, 2017.11.
 - 理由：全国的に定評のある学術出版社による著書・編書の国内出版

・若手研究者奨励賞

・陳奕廷（研究系（理論・対照研究領域）元プロジェクト PD フェロー）

◦業績：陳奕廷, 松本曜『日本語語彙的複合動詞の意味と体系—フレーム意味論とコンストラクション形態論—』, ひつじ書房, 2018.2.

◦理由：その他、博士論文等や単著の出版と同等と所長が判断する学術的な業績又は社会的な貢献

・熊谷学而（研究系（理論・対照研究領域）プロジェクト PD フェロー）

◦業績：Gakuji Kumagai and Shigeto Kawahara, “Stochastic Phonological knowledge and word formation in Japanese”, *Gengo Kenkyu (Journal of the Linguistic Society of Japan)* , 153, 2018.3.25.

◦理由：日本を代表するピアレビュー誌に掲載された学術論文

・宮内拓也（コーパス開発センター 元プロジェクト非常勤研究員）

◦業績：Takuya Miyauchi, Masayuki Asahara, Natsuko Nakagawa, and Sachi Kato, “Information-Structure Annotation of the “Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese””, *Computational Linguistics (Communications in Computer and Information Science*, 781, Koiti Hasida and Win Pa Pa (eds.), Springer), pp.155–165.

◦理由：評価の高い国際的ジャーナルに掲載された論文

・麻生玲子（研究系（言語変異研究領域）特任助教）

◦業績：日本言語学会論文賞 受賞 [麻生玲子（共著者：小川晋史）「南琉球八重山語波照間方言の三型アクセント」『言語研究』150号（2016.9）に対する表彰】

◦理由：学会レベルでの受賞

4

研究教育職員の異動（2017年度中の異動者）

2017.4.1	特任助教	青井隼人	採用
2017.7.1	特任助教	新永悠人	採用
2017.8.1	特任助教	籠宮隆之	採用
2017.9.30	所長	影山太郎	任期満了
2017.9.30	特任助教	原田走一郎	退職
2017.10.1	所長	田窪行則	就任
2017.10.1	教授	松本曜	採用
2017.12.1	特任助教	麻生玲子	採用
2018.3.31	特任助教	藤本灯	任期満了
2018.3.31	特任助教	山田真寛	任期満了

VIII

外部評価報告書

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

平成 29 年度業務の実績に関する外部評価報告書

国立国語研究所 外部評価委員会

平成 30 年 6 月 29 日

はじめに

平成29年度の外部評価書をお届けします。国立国語研究所は昭和23年に現代日本語の総合的研究を行う唯一の機関として創設以来、今年度で創立70周年を迎えます。2009年10月に大学共同利用機関法人人間文化研究機構に移管され、内外の大学、研究機関との協力しながら一般言語学的な見地から日本語研究、日本語教育研究を行ってきてからも来年度で10年になります。国語研はこの間日本語の科学的研究に資すべく、日本語研究の新たな方法論を開発し、社会言語学、方言地理学、言語生活の定点観測、話し言葉コーパスに基づく日本語文法研究など、世界の最先端の研究をリードしてきたといえるかと思います。また、人間文化機構移管以降は最新の理論言語学の成果を取り入れ、対照研究も視野に入れて、日本語をさまざまな外国語と比較することで、日本語の特徴をあぶりだす研究を多く行っています。

平成29年度は第3期2年目を迎えて、機関拠点型の基幹研究「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」というこれまで国語研が蓄積したさまざまな言語資源に加え、現代語以外の時代別のコーパス、方言コーパス、日本語非母語話者のコーパス、方言コーパス、日常会話コーパスを作成しています。さらには、これらの言語資源を横断的に検索できるようなシステムを開発しています。国語研ではこれらの言語資源を活用した研究方法を数多く提言しており、日本語の理論的・実証的研究を飛躍的に向上させ、一般言語学理論に貢献し、かつ実用的な応用も大きく前進させてきています。

ディープラーニング技術が開発され、空前のAIのブームを迎えている現在、国語研が提供するさまざまな大規模日本語データはますますその重要性を増しつつあります。しかし、それと同時にさまざまな基礎的な言語現象を記録し、その原理を解明していく作業を並行して行って初めて現象の理解が進み、本当の意味の進歩が望めると思います。国語研では最新の言語解析技術や大規模データ蓄積技術を開発していくとともに、言語学研究の基礎、言語構造・言語使用の原理の追求をしていくために研究を行っています。29年度の研究成果もそのような国語研の研究の方向性を外部評価委員会の先生方に精査していただき、評価していただきました。

ここで、門倉委員長をはじめとする外部評価委員会の委員の皆さまの労を多としたいと思います。さまざまな事情で評価のための資料の作成が遅くなり、評価書作成のための時間が限られてしまっていたなか、正当な評価をするために最大限の努力を傾けて、フェアな評価をしてくださったこと、また、時には厳しくも建設的な提言をしてくださったことに関して、いくら感謝しても感謝したりない気持ちです。

所員一同この評価と提言にこたえるべく誠心誠意、国語研のより一層の発展のために努力を重ねていきたいと存じます。

平成30年6月
国立国語研究所長
田窪 行則

目 次

1. 評価結果報告書	1
1. 平成 29 年度「機関拠点型基幹研究プロジェクト・センターの研究活動」に関する評価結果	2
2. 平成 29 年度「管理業務」に関する評価結果	85
2. 資料	92
1. 国立国語研究所外部評価委員名簿	93
2. 国立国語研究所平成 29 年度業務の実績に関する評価の実施について	94
3. 機関拠点型基幹研究プロジェクト一覧	95
4. 国立国語研究所外部評価委員会規程	96
5. 国立国語研究所外部評価委員会【平成 29 年度実績評価】(第 1 回)	98
国立国語研究所外部評価委員会【平成 29 年度実績評価】(第 2 回)	99

1. 評価結果報告書

平成 29 年度の国立国語研究所の外部評価を次のように実施しました。

平成 30 年 3 月 6 日 国立国語研究所外部評価委員会【平成 29 年度実績評価】(第 1 回)

平成 30 年 6 月 29 日 国立国語研究所外部評価委員会【平成 29 年度実績評価】(第 2 回)

その結果を以下の通り報告します。

外部評価委員会
委員長 門倉 正美

国立国語研究所平成29年度外部評価にあたって

本報告書は、外部評価委員会において、平成29年度における機関拠点型基幹研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」の総合評価と、各共同研究プロジェクトへの評価、コーパス開発センター、研究情報発信センターへの評価、「組織・運営」「管理業務」への評価を行った結果をまとめたものである。

平成29年度の基幹研究プロジェクトへの評価結果は「A：計画を上回って実施している」である。本評価委員会における「A」評価は、単に量的に「計画を上回って実施した」だけでなく、達成された成果が質的に高いことを意味している。6つの共同プロジェクト評価の内3つが「A」評価をつけているところに表れているように、平成29年度は基幹研究内の多数の研究が収穫期を迎えた観があり、研究成果が量的にも質的にもきわめて優れていたことを高く評価する。また、社会貢献や国際発信、および言語資源の充実においても着実に有意義な成果を蓄積している点も評価に値する。

今後は、基幹研究のタイトルに掲げられた「総合的日本語研究」の「総合性」の内実を具体的に明らかにしていく努力が求められる。また、「総合的日本語研究」がどのような教育形態をとるのかについては、期待をもって見届けたい。

当研究所が大学共同利用機関であるという点からは、充実した言語資源（各種コーパスやデータベース）を活用するための方法やスキルをより広範に、より効率的に普及する必要がある。また、国立の研究所であるという点からは、ホームページをさらに見やすく使い勝手のよい、魅力的なレイアウトと構成にして、広く国民に成果をアピールするとともに、その関心に応えるようにする必要がある。これらの点での一層の努力を期待したい。

なお、当研究所が所属する人間文化研究機構内の事柄ではあるが、基幹研究プロジェクトの総合評価の評点に関して、一言付記しておきたい。機構に本年3月に提出した基幹研究プロジェクト評価においては、「総合評価」の評価結果（評点）の記入は求められていなかった。しかし、機構の外部評価委員会では、機構内の各基幹研究に対して「S, A, B, C」の4段階の評価がなされている。とすると、平成30年度以降の基幹研究プロジェクト評価では、「S, A, B, C」の4段階評価を当外部評価委員会にも求めるべきであろう。その際、当然、「S, A, B, C」の4段階評価の評価基準とともに示されるべきである。

平成30年6月
外部評価委員会
委員長 門倉 正美

機関拠点型基幹研究プロジェクト総合評価

平成29年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

1. 平成29年度の点検・評価に関する総括

今年度は、多数の研究が収穫期を迎えた観があり、研究成果の書籍・報告書・シンポジウム等での公開が量的にも、質的にもきわめて豊かであったことを高く評価する。特に、「対照言語学」の研究所スタッフが、以前からの *Handbooks of Japanese Language and Linguistics* のシリーズを2冊刊行したのに加えて、さらに3冊の英文論文集を権威ある出版社から刊行し、その内の窪田（編）の促音に関する英文論文集が専門誌の書評で高い評価を得ている点は、本研究所の研究水準の高さを表す一例として評価できる。

「危機言語・方言」が当初の計画を大幅に上回る40地点で危機言語・方言の現地調査・資料収集を実施し着実にデータベースを充実させているのをはじめとして、「統語コーパス」、「通時コーパス」、「日常会話コーパス」、「学習者コーパス」も順調にコーパス構築を進展させている。

また、すべての基幹研究プロジェクト班が国際学会や国際シンポジウムの企画・運営を行い、国際学会のパネルセッション、シンポジウム、ワークショップを開催したことは、上述の英文論文集の刊行とともに、国際的発信を一層進めたものとして評価に値する。

「危機言語・方言」は「危機言語・方言サミット」が創設されて以来、地方自治体などと連携して支援してきたのに加えて、今年度は宮崎県椎葉村と交流協定を結んで、方言保全を通じた地域創生のモデル事業をめざしている。こうした点は、重要な社会連携・社会貢献として高く評価する。

本基幹研究プロジェクトの「基本計画」では、中期計画の3年目、5年目に「言語資源と言語分析（仮称）」と題された基幹研究の合同研究成果発表会を行うことになっている。大規模コーパスという言語資源をいかに有機的に言語分析と結びつけることができるかが、本基幹研究のテーマである「総合的日本語研究」の「総合性」の実質の豊かさを表す中心的な課題となるだろう。

この点を踏まえて、各基幹研究プロジェクト班の間の連携・協働をいっそう進めるとともに、「総合的日本語研究」がめざす「総合性」の性質について実践的に考察するワーキンググループが組織されることを期待したい。

2. 平成29年度のプロジェクト全体の連携活動に関する点検・評価

（1）研究成果について

今年度は研究成果の書籍・報告書・シンポジウム等での公開が活発になされた。特に、「対照言語学」で研究所スタッフが国内外の出版社から10冊の書籍を刊行し、研究所全体で国内シンポジウム16件、国際シンポジウム・ワークショップを10件、企画・開催した点を高く評価する。危機言語・方言の現地調査・資料収集が当初の計画を大幅に上回る40地点で実施された点も評価できる。

権威ある出版社から刊行された5冊の英文論文集や、各分野で重要な課題をとりあげた国際シンポジウムは、日本語研究の国際発信力を高めるものと言えよう。

また、「通時コーパス」「統語コーパス」「日常会話コーパス」「学習者コーパス」のデータ整備・蓄積も順調に進んでおり、それらのコーパスを活用する今後の研究の進展が期待される。そのためにも、コーパス利用のための講習会をウェブなども使って効率的に行うことに加えて、コーパスを活用した研究のモデルを提示する努力が必要である。各プロジェクト班内の研究会においては、研究発表などの形で、当該コーパスを活用した研究も出てきているようなので、完成した論文に至っていないプロジェクト班のニュースレターや報告書の形式でもよいので、このコーパスを使ってこのような研究ができるというモデルが盛んに示されることを期待したい。

（2）研究水準について

「対照言語学」の成果書籍の5冊の英文論文集が権威ある出版社から刊行されている点、また、窪菌（編）の促音に関する英文論文集と野田・野田『日本語を分析するレッスン』が国内外の専門誌の書評で高い評価を得ている点は、これらの研究の学術的意義が高いことを表していると評価できる。

窪菌（編）『オノマトペの謎』は一般紙書評で好評を得ているように、オノマトペという一般的関心の高いテーマを多様な角度から分析しており、本基幹研究プロジェクトの言う「総合的日本語研究」の「総合性」に迫る成果をあげていると思える。さらに学際性を広げて、日本語研究の「総合性」を追究してほしい。

「危機言語・方言」による『椎葉村方言語彙集』などの地道なデータベース蓄積は、今年度の椎葉村との地域連携締結や、創設以来深く関与してきた「危機言語・方言サミット」の共催と合わせて、学術的・社会的意義が高い研究活動である。

その他の各プロジェクトも、それぞれに学術的水準の高い活動を展開している。

研究水準を高めるとともに、学術的・社会的ニーズに深く呼応する基盤づくりの方策として、研究会、シンポジウム、講演会参加者からのフィードバックをさらに積極的に得ていく努力が望まれる。2つのプロジェクトがすでにつくっているアドバイザリーボードを、他のプロジェクトもさまざまな形（Zoomなどのウェブ会議ソフトを活用すると、容易に海外在住者もメンバーに加えられる）で構成することも考えられるし、ウェブサイトでコメントを得るシステムも工夫できるだろう。

（3）研究体制について

6つの基幹研究プロジェクト班に440人という多数の共同研究員を組織し、その内、若手研究者が32人、在外研究者が63人という構成は、共同利用機関という国語研の役割と、若手研究者育成、国際性という目標の両者とも十分に満たしている。

「共同研究プロジェクト推進会議」が各プロジェクト班の間の調整を行っており、コーパス合同シンポジウムなどを共同で実施している点は、「総合的日本語研究」への布石としては評価できる。さらにプロジェクト班の間の連携の実質を高め、単なる「融合」や「言語資源構築を共通基盤としていること」にとどまらない「総合的日本語研究」の探究の展開を期待する。

アドバイザリーボードは、国際シンポジウムや研究成果公表についてアドバイスするだけでなく、そのプロジェクトの研究活動を部外者の目で客観的・社会的・全体的に見る役割を果たすことが望ましい。

(4) 教育について

連携大学院で、言語のフィールドワークに関する授業やコーパスを使った授業を行った点は、国語研ならではの授業内容として評価できる。東京外国語大学 AA 研と共同での、木曽川方言調査における学生へのフィールドワーク指導の成果とあわせて、言語のフィールドワークに関する教材・教育プログラムの開発が、「総合的日本語研究」の教育プログラムの一端として結実していくことを期待したい。

「学習者のコミュニケーション」は日本語教師セミナーだけでなく、作文研究や文章理解のシンポジウムなどにおいても教師研修的役割を果たしていると評価する。

「統語コーパス」がインドの大学の依頼をうけて日本語学教材を開発して、ウェブで公開している点は評価できる。

(5) 人材育成について

博士学位を取得した若手研究者をプロジェクト研究員として 6 人、非常勤研究員として 36 人雇用して、専門的研究指導を行っている点、学振特別研究員 PD 32 人を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、シンポジウムや研究会において研究発表の機会を与えていた点は、若手研究者のアカデミック・キャリアの向上につながる貴重な努力として評価する。

コーパスの利用法を主なテーマとしたチュートリアル、講習会を国内で 12 回、海外で 4 回開催している点も、若手研究者育成に貢献していると評価できる。

ただし、昨年度の外部評価でも指摘したように、講習をより効果的なものとするために、ウェブでの講習映像公開もあわせて推進されるべきであろう。

(6) 社会連携について

「危機言語・方言」の、椎葉村との正式な交流協定の締結と、本年度で 4 回目となる「日本の消滅危機言語・方言サミット」共催の継続的努力は、意義深い社会連携として高く評価できる。地域創生という実践的課題と、危機言語・方言の保存を有機的に結びつける活動は、言語の力を「総合的」にとらえ直す活動であり、この意味で「総合的」日本語研究の一つのあり方を示しているとも言える。

コーパス検索アプリケーション「中納言」とジャパンナレッジ「新編日本古典文学全集」本文とのリンクはきわめて興味深い。これがうまく稼働すれば、通時コーパスが一般の読書人にとって身近なものとなり得るだろう。この点を考慮すると、さらなる社会連携をふまえたコーパス利用法に関する一般向け講習ビデオのウェブ公開にも取り組んでほしいところである。

(7) 社会貢献について

一般向けに研究成果を分かりやすく伝えるための NINJAL フォーラムや講演会の開催、広報誌『国語研 ことばの波止場』の発行は、社会貢献として評価できる。子ども向けの「ことば探検」はいろいろと工夫されていて興味深い。第 11 回 NINJAL フォーラムがビデオ録画され、ネット配信されている点は、外部評価委員会の提言を汲み入れた措置として共感する。

ただし、同じく評価委員会の提言を入れた、コーパス利用講習会のビデオ録画については、現在のものはアクセスしにくいという問題点が残っている。また、より一般向けのコーパス利用の手引も、

ビデオとテキスト両方の形で公開することが望まれる。

「消滅危機言語・方言」が共催した「え、ほん？」展は、文字テキストと視覚表現が結びついたマルチモーダルな展示の試みとして斬新であり、社会貢献としても高く評価したい。方言の可搬型コンテンツの作成と使用も同様に評価できる。

国語研のHPでは、多様で大量の言語資源がコーパスとして提示・公開されている。このこと自体は多大な社会貢献の可能性をもっている。しかし、博物館などと違って、国語研の展示については「ウェブ上で展示・展開する」（基本計画p.4）ものであると述べているわりには、国語研のHPでのコーパスなどの見せ方はあまり親切で魅力的とは言えない。ウェブサイトの整備が行われたが、この点ではまだ不十分であると思える。一般の人が国語研のサイトにどのような期待とニーズをもってアクセスするかを踏まえて、ウェブサイト訪問者の関心別の入門的サイト・ツアーようなHPガイドをHPに載せることが必要なのではないか。

（8）国際連携について

今年度は、アメリカ2件、インド、台湾各1件の計4件の国際交流協定を締結した。これまでの交流協定がヨーロッパに偏っていたのに対して、外部評価委員会ではアジア諸国やロシアとの協定の方向を助言した。2件はそれに適っていると言える。アメリカの2大学との協定も内容的に有意義である。特に、危機言語の研究拠点であるハワイ大学との交流協定には期待したい。

もちろん協定を結ぶだけでなく、実質的な交流を行うことが重要であり、その意味で「統語コーパス」が海外の諸大学と積極的に研究交流を行っている点は評価できる。海外の優秀な若手日本語学研究者を受け入れるような方策も、可能なら、有意義な試みとなろう。

（9）国際発信について

今年度は、研究成果の書籍・報告書・シンポジウム等での国際発信が質量ともに豊富に行われたことを高く評価する。特に「対照言語学」で、研究所スタッフが言語学分野で定評のある海外の出版社から英語による書籍を5冊刊行したことは優れた成果である。

また、すべてのプロジェクト班が国際学会や国際シンポジウムの企画・運営を行い、国際学会のパネルセッション、シンポジウム、ワークショップを開催したことも評価できる。とりわけ、認知言語学国際学会やヨーロッパ日本学会でのセッションの開催は、当該領域での影響力が大きい学会におけるものとして重要である。

大学院生を主な対象としたチュートリアル・講習会の海外での実施、ホームページでの英語による発信への注力も評価に値する。

昨年度の外部評価で注目した寺村秀夫の名詞修飾表現に関する一連の研究の英語訳の試みが今年度公開にいたったが、残念なのは、その後、日本における画期的な日本語研究を英語訳する作業が一切進展していない点である。

画期的な日本語研究の英語訳の公開は、日本語研究の国際発信に大いに貢献する作業であろう。

また、「総合的な日本語研究」に日本語研究史の観点は欠かせない。日本語研究史の目によって精選された画期的な日本語研究の英語訳のさらなる展開を期待したい。

(10) その他特記事項

以下に箇条書きする。

- 1) 本点検・評価報告書は3月中旬に人間文化研究機構に提出しなくてはならない。しかし、その時期までに提出するためには評価者にとって非常な労力が必要な上に、3月期の活動状況を確認し得ない等、厳密に見て、適切な評価がなしにくい状況があるので、本点検・評価報告書の機構への提出時期に関して再考していただきたい。
- 2) 「実績報告書」の「今後の研究の推進方策および課題等」において、昨年度の外部評価委員会による改善点の提起に応えて、事項ごとに対応の結果を示している点は高く評価する。また、各プロジェクトの自己点検評価報告書の書き方が、本外部評価委員会の提言に従って、計画事項と実施事項を併記する形になり、格段と評価しやすくなつた点も評価に値する。
- 3) 精選した主要業績については、「実績報告書 p.8」におけるように、1、2行程度の簡潔な内容紹介を加えていただくと、その業績の学術的・社会的意義を理解しやすいので、他の主要業績についてもそのような紹介文を付加していただきたい。
- 4) 外部評価をより的確に行うために、当該年度における主要業績を、予算等で可能な限り、少なくとも各プロジェクト班担当の評価委員には資料として送付していただきたい。
- 5) 今期中期計画3年目および5年目の中間総括年度においては、外部評価委員による各プロジェクトリーダーへのヒアリングを設定していただきたい。

3. 次年度の研究推進に向けた意見

昨年度の「点検・評価報告書」で要望した点への「実績報告書」最終ページにおける応答を踏まえ、さらに今年度の「実績報告書」からあらたに考慮させられた点について、以下に箇条書きする。

- (1) 英語圏だけでなく、中国、韓国、ロシアなどの近隣諸国や他のアジア諸国との当該学界との連携も重要であろう。その点で、今年度、インドのネルー大学言語学科、台湾の東吳大学文学系と交流協定を締結したことは評価できる。
- (2) 「総合的日本語研究」を志向する点からすると、6つのプロジェクト班相互の対話と協働をより促進するとともに、テーマと関連する隣接領域や異分野の広義の言語研究者を共同研究者として積極的に迎える努力もあってよい。また、研究所内に、本報告書の1で指摘した意味での「総合性のあり方を探究するワーキンググループ」を組織することも考えられる。
- (3) 日本語学における過去の優れた業績を精選して、英語訳の紹介を行う。
- (4) 各プロジェクトで、研究目的と必要に応じたアドバイザリーボードについて検討する。
- (5) コーパスの利用法についての講習会のビデオを、HPで分かりやすい形で公開する。
- (6) 一般向けのコーパス利用法のビデオないしテキストを公開する。
- (7) 国語研のHPのレイアウトと使い勝手をさらによくして、美術館・博物館の「展示」のように、分かりやすく、魅力的なものにする。一般の人向けの「HPガイド」がある方がよい。

対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法

プロジェクトリーダー：窪薙 晴夫

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

日本語の研究は日本国内に長い伝統と優れた成果を有している一方で、他の言語と相対化させる努力が十分ではなく、(i)世界諸言語の中で日本語がどのような言語であるのか、(ii)一般言語学・言語類型論の観点から見ると、日本語の分析にどのような知見が得られるのか、(iii)日本語の研究が世界諸言語の研究や一般言語学・言語類型論にどのように貢献するのか、いまだ十分に明らかにされたとは言えない。現代の日本語研究に求められているのは、日本語の研究が世界諸言語の研究、とりわけ一般言語学や言語類型論研究にどのように貢献できるのかという「内から外を見る」観点と、一般言語学や言語類型論研究が日本語の分析にどのような知見をもたらすかという「外から内を見る」観点である。

本プロジェクトは、この両観点から日本語の言語事実を分析することにより、日本語（諸方言を含む）を世界の諸言語と対照させて日本語の特質を明らかにし、それにより日本語研究の国際化を図ることを主たる目的とする。日本語の音声・音韻、語彙・形態、文法、意味の構造を、言語獲得（第一言語獲得、第二言語習得）はもとより、言語に関する他の学問分野（心理学、認知科学他）との接点・連携をも視野に入れて、対照言語学・言語類型論の観点から分析することにより、諸言語間に見られる類似性（普遍性）と相違点（個別性・多様性）を明らかにする。このような対照研究を通じて得られた研究成果を国内外に向けて発信する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトは音声・音韻特徴を分析する音声研究班と、形態・文法・意味構造を分析する文法研究班の2つの研究班（サブプロジェクト）を組織する。音声研究班は「語のプロソディーと文のプロソディー」を主テーマに、文法研究班は「名詞修飾表現」「とりたて表現」「動詞の意味構造」の3つをテーマに研究を進める。ともに海外の研究者との国際共同研究と国際シンポジウムの開催・誘致を軸に、論文集（英文、和文）の刊行や、アジアを中心とする諸言語の構造の異同を可視化する言語地図（電子媒体）の刊行を目指す。

2. 年次計画（ロードマップ）

平成28年度（研究プロジェクトの始動）

1. 日英語によるプロジェクトHPを開設し、以後、随時更新する。
2. 若手研究者をプロジェクトPDフェローとして合計2名雇用し、研究指導を行う。また日本学術振興会外国人特別研究員(PD)2名に対して研究指導を行う。
3. 国内外の主要研究者から成るアドバイザリーボードを設置し、プロジェクトの運営や成果発信について随時アドバイスを求める。
4. 研究班、研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
5. NINJAL国際シンポジウムとしてThe 24th Japanese Korean Linguistics Conference (JK 24)

(10月14～16日)とオノマトペ国際シンポジウム(12月17～18日)の2つを開催する。またその成果の取りまとめ(論文集の編集)に着手する。

6. オノマトペをテーマに一般社会向けのNINJALフォーラムを開催する(平成29年1月21日)。
7. 第二期中期計画期間に着手した『日本語版連濁事典』, Mouton Handbook (Contrastive Linguisticsの巻), The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants, Tonal Change and Neutralizationの編集作業を完了する。
8. 言語地図の立案を開始する(項目・言語の選択, 刊行方法等)。
9. 大学院生向けのチュートリアル(第1回)を開催する。
10. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し, 客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

平成29年度(研究プロジェクトの展開)

1. 引き続き若手研究者をプロジェクトPDフェローとして合計2名雇用し, 研究指導を行う。また日本学術振興会外国人特別研究員(PD)1名に対して研究指導を行う。
2. 研究班, 研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
3. 「プロソディー」と「名詞修飾」をテーマにそれぞれ国際シンポジウムを開催する。
4. 国際認知言語学会を他機関と共同誘致する。
5. 前年度に開催したNINJAL国際シンポジウム2件とNINJALフォーラム1件の成果を取りまとめ, それぞれ論文集, 啓蒙書として編集を行う。
6. 言語地図の作成を開始する。
7. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し, 客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

平成30年度(研究成果の中間とりまとめ)

1. 引き続き若手研究者をプロジェクトPDフェローとして合計2名雇用し, 研究指導を行う。またPDフェローの任期終了に伴い, 年度末に平成31～33年度のPDフェロー2名を募集する。
2. 研究班, 研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
3. 平成28年度に開催したNINJAL国際シンポジウム2件とNINJALフォーラム1件の成果物(論文集・啓蒙書)の編集を完了し, 刊行する。
4. 前年度に開催した「プロソディー」に関する国際シンポジウムの成果を研究論文集として取りまとめる(公刊は1～2年後)。
5. 「動詞の意味構造」に関する国際シンポジウムを開催する。
6. 引き続き言語地図の作成を行う。
7. 音声関係の啓蒙書に着手する(1冊目)。
8. 大学院生向けのチュートリアル(第2回)を開催する。
9. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し, 客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

平成 31 年度（研究プロジェクトの拡充）

1. 若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。
2. 研究班、研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
3. 「プロソディー」に関する国際シンポジウム（2 回目）を開催する。
4. 前年度に開催した「動詞の意味構造」に関する国際シンポジウムの成果を研究論文集として取りまとめる（公刊は 1～2 年後）。
5. 「プロソディー」と「名詞修飾（和文）」に関する研究論文集の編集を終え、刊行する。
6. 引き続き言語地図の作成を行う。
7. 音声関係の啓蒙書を出版する（1 冊目）。
8. 文法関係の啓蒙書に着手する（2 冊目）。
9. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

平成 32 年度（研究成果のとりまとめ）

1. 引き続き若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。
2. 研究班、研究テーマごとに成果取りまとめのための研究発表会と打合せ会議を年数回開催する。
3. 前年度に開催した「プロソディー」に関する国際シンポジウムの成果を研究論文集として取りまとめる（公刊は 1～2 年後）。
4. 言語地図の取りまとめを行う。
5. 文法関係の啓蒙書を出版する（2 冊目）。
6. 大学院生向けのチュートリアル（第 3 回）を開催する。
7. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

平成 33 年度（研究成果の公刊）

1. 引き続き若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。
2. 一般社会向けの NINJAL フォーラム（第 2 回）を開催する。
3. 「動詞の意味構造」に関する研究論文集の編集を終え、刊行する。
4. 言語地図を公刊（公開）する。
5. 大学院生向けのチュートリアル（第 4 回）を開催する。
6. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

【3 年目までの成果物】〔編者〕

1. Sequential Voicing in Japanese Compounds (John Benjamins). 2016 年 6 月. [バンス]
2. 赤瀬川 史朗、プラシャント・パルデシ、今井 新悟（著）『日本語コーパス活用入門：NINJAL-LWP 実践ガイド』（大修館）. 2016 年 7 月. [パルデシ]
3. Mouton Handbook of Japanese Contrastive Linguistics (De Gruyter Mouton). 2018 年 2 月 [パルデシ]

4. The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants (Oxford University Press). 2017年4月〔著〕
 5. Tonal Change and Neutralization (De Gruyter Mouton). 2018年3月. 〔著〕
 6. Japanese Korean Linguistics 24 (CSLI). 2018年 〔船越・著〕
 7. 『オノマトペの謎』 2017年5月 〔著〕
 8. 音声関係の啓蒙書『通じない日本語』 2017年12月 〔著〕
- 【5年までの成果物】上記に加え次のものを刊行する。
1. 『日本語と世界の言語のとりたて表現』 くろしお出版, 2019年 〔野田〕
 2. プロソディー関係の英文論文集 (The Linguistic Review 特集号), 2019年 〔著〕
 3. 名詞修飾関係の和文論文集, 2019年 〔パルデシ〕
 4. 『移動表現の類型論と第二言語習得』 2019年 〔松本〕
 5. 『動詞の意味と百科事典的知識（仮題）』 2021年 〔松本〕
 6. Typology of Motion Event Descriptions 2021年 〔松本〕

II. 29年度活動概要

29年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

対照言語学研究を推進するために、国内外の研究者32人を共同研究員として追加し、合計123人の組織で事業を遂行した。4つの研究班ごとの公開研究発表会を計9回、4班合同の発表会(Prosody and Grammar Festa 2)を1回、国際ワークショップ・シンポジウムを2回開催した。これらの企画において計76件の研究発表が行われ（うち学生が筆頭発表者のもの8件）、計610名（延べ）の参加者が得られた（うち海外機関研究者68人、大学院生を含む学生74人）。またプロジェクトの所内メンバーが合計7冊の研究論文集を刊行、3冊の研究論文集の編集を行い、さらに3冊の一般書・啓蒙書を刊行した。これらの図書は国内外の専門誌の書評欄において好意的な評価を受け、また一般書・啓蒙書は複数の新聞の書評欄等で取り上げられた。

プロジェクト共同研究員の研究成果も含めると、プロジェクト全体で論文19件、図書10冊、発表・講演43件を公開・刊行した（いずれもプロジェクトへの謝辞を記したもののみ）。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

複数の基幹型プロジェクトにまたがる企画としてNINJALシンポジウム「日本語の名詞周辺の文法現象—名詞修飾表現ととりたて表現—」を開催し、56人の参加者を得た（発表6件、基調講演1件）。

国際ワークショップ Workshop on Prosody and Prosodic Interfaces と Nominalization and Noun modificationを開催するにあたってアドバイザリーボードのメンバーに意見を求め、その意見をテーマや招待講演（発表）者の選定と成果の刊行計画立案に活用した。

また立命館大学大学院言語教育情報研究科と連携して第11回NINJALフォーラム「オノマトペの魅力と不思議」を大阪で開催し、一般市民と大学生を中心に215人の参加を得た。NINJALフォーラムとしては東京以外での初めての開催であった。

3. 教育に関する計画

NINJAL チュートリアル「日本語の音声と文法」を台湾東吳大学で開催し、対照言語学的観点から見た日本語の音声と文法について各 4 コマの講義を行った。大学院生 67 人を含む合計 99 人の参加を得た。

若手育成として新規に PD フェローを 2 人雇用し、また学振 PD1 人を外来研究員として受け入れ指導を行った。またプロジェクト全体で 6 人の非常勤研究員を雇用し、対照言語学の事業を推進した。

さらに大学院生 6 人、学振 PD1 人を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、このうち 3 人（延べ）にプロジェクト主催の発表会等で研究発表の機会を与えた。また共同研究員以外に、各班の研究発表会や国際ワークショップ等において延べ 5 人の大学院生（筆頭発表者）に発表の機会を与えた。上記の発表を含め、若手研究者 28 人に対して旅費を支援し、加えて計 2 名の若手研究者に対して方言調査の旅費を援助した。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

社会との連携として鹿児島県薩摩川内市と甑島方言の保存・調査・啓蒙活動について協議を行い、甑島の 2ヶ所で島民向けの講演会を行った。研究成果を社会へ還元するために、立命館大学大学院言語教育情報研究科と共に第 11 回 NINJAL フォーラム「オノマトペの魅力と不思議」を開催し、その内容をネット配信した。またオノマトペに関する啓蒙書『オノマトペの謎』と、日本語の多様性に関する啓蒙書『通じない日本語一世代差・地域差からみる言葉の不思議』をそれぞれ刊行した。

社会人の学び直しとして、台湾東吳大学で開催された NINJAL チュートリアルにおいて、32 人の社会人（現地日本語教師）に対して「日本語の音声と文法」の講義を行った。また東京言語研究所が小中高の教員向けに開催した「教師のためのことばワークショップ」と、関西外国語大学イベロアメリカ研究センターがスペイン語教員向けに開催した第 10 回スペイン語教授法研究会において、それぞれ講演をそれぞれ行った。

5. グローバル化に関する計画

プロジェクトの所内メンバーが合計 5 冊の英文研究論文集を刊行した（Haruo Kubozono (ed.) *The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants* (Oxford University Press, 計 408 頁), Haruo Kubozono and Mikio Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization* (De Gruyter Mouton, 計 383 頁), Masayoshi Shibatani, Shigeru Miyagawa and Hisashi Noda (eds.) *Handbook of Japanese Syntax* (De Gruyter Mouton, 計 852 頁), Prashant Pardeshi and Taro Kageyama (eds.) *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics* (De Gruyter Mouton, 計 722 頁), Kenshi Funakoshi et al. (eds.) *Japanese/Korean Linguistics 24* (CSLI, 計 400 頁)）。

また寺村秀夫の名詞修飾表現に関する一連の研究の英語訳をホームページ公開した。

さらに国際イベントとして、JK Workshop on Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean (ハワイ大学), The 14th International Cognitive Linguistics Conference のテーマセッション「Diversity of Path Coding in Languages」, NINJAL チュートリアル「日本語の音声と文法」（台湾東吳大学）の 3 つのイベントを開催した。

国際会議 WAFL 13 における基調講演 ‘Prosodic evidence for syllable structure in Japanese’ をはじめ、プロジェクト全体では 20 件、国際会議で成果発表を行った。

6. その他

特になし

III. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画	
1. 対照言語学研究を推進するために、4つの研究班（下記）ごとの <u>公開研究発表会を計9回、4班合同の発表会(Prosody and Grammar Festa 2)</u> を1回、国際ワークショップ・シンポジウムを2回開催した。これらの企画において計76件の研究発表が行われ（うち学生が筆頭発表者のもの8件）、計610名（延べ）の参加者が得られた（うち海外機関研究者68人、大学院生を含む学生74人）。	
①このうち、班ごとの研究発表会9回の内訳は音声研究班3回（平成29年6月18日、10月1日、平成30年3月5日）、とりたて班1回（平成30年1月27日）、名詞修飾班3回（平成29年7月29日、10月29日、平成30年3月17日）、動詞の意味構造班（以下「意味構造班」）が2回（平成29年10月14日、平成30年2月20日）であった。これらの発表会に合計392人の参加が得られた（うち海外機関研究者39人、大学院生を含む学生49人）。発表数は合計38件であった（うち学生が筆頭発表者の発表6件）。	
②プロジェクト全体の統合を図るために、平成30年2月17-18日に、2つの公募型共同研究プロジェクト（「日本語から生成文法理論へ：統語理論と言語獲得」「語用論的推論に関する比較認知神経科学的研究」）も加わった <u>合同の研究発表会(Prosody and Grammar Festa 2)</u> を開催し、125人の参加者を得た（うち海外機関研究者3人、大学院生を含む学生25人）。この合同発表会では合計13件の発表（2~3件x4班+公募班各1件）と「日本語と言語類型論」と題するシンポジウム（発表4件）により、対照言語学および言語類型論に関する研究成果を報告した。	
③国際シンポジウム等	
• The 25 th Japanese/Korean Linguistics Conference (JK 25)のサテライトワークショップとして、 <u>JK Workshop on Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean</u> （ハワイ大学、平成29年10月11日）を開催した。参加者は63人（うち海外機関研究者26人）、発表件数は12件（口頭5件、ポスター発表7件；うち海外機関研究者による発表6件、学生が筆頭発表者の発表2件）であった。〔音声研究班〕	
• The 14th International Cognitive Linguistics Conference（エストニア・タルトゥ大学、平成29年7月10-14日）において、 <u>Diversity of Path Coding in Languages</u> と題するテーマセッションを開催した（スペイン・サラゴサ大学を中心とする研究チームと共同）。発表件数は9件（うち海外機関研究者（筆頭発表者）による発表は3件であった。参加者は30人であった。〔意味構造班〕	

2. 方言調査

プロソディーの研究を推進するために 2017 年 6 月に「薩摩川内市（鹿児島県）鹿児島方言のプロソディー調査」、2018 年 1 月に「薩摩川内市（鹿児島県）甑島方言のプロソディー調査」を実施し、プロジェクト主催の国際ワークショップ Workshop on Prosody and Prosodic Interfaces (2017 年 10 月、ハワイ大学) 等でその成果を報告した。

3. プロジェクトの所内メンバーが合計 7 冊の研究論文集を刊行し、さらに 3 冊の研究論文集の編集を行った。

- ① 音声研究班は平成 29 年 4 月に Oxford University Press より Haruo Kubozono (ed.) *The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants* (計 408 頁) を、30 年 3 月に De Gruyter Mouton より Haruo Kubozono and Mikio Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization* (計 383 頁) をそれぞれ刊行した。さらに、平成 29 年 10 月に開催した国際ワークショップ JK Workshop on Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean の成果を論文集としてまとめるべく、国際誌 *The Linguistic Review* (De Gruyter Mouton) と交渉を行い、編集作業を始めた (平成 30 年 8 月入稿、平成 31 年前半刊行予定)。
- ②とりたて班は平成 29 年 10 月に De Gruyter Mouton より Masayoshi Shibatani, Shigeru Miyagawa and Hisashi Noda (eds.) *Handbook of Japanese Syntax* の巻(計 852 頁) を刊行した。また、研究論文集『日本語と世界の言語のとりたて表現』の編集作業を進めた。
- ③名詞修飾班は平成 30 年 2 月に De Gruyter Mouton より Prashant Pardeshi and Taro Kageyama (eds.) *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics* の巻(計 722 頁) を刊行した。
- ④意味構造班は、班長の松本と前プロジェクト PD フェローの陳奕廷 (現三重大学特任教員) が共著の研究書『日本語語彙的複合動詞の意味と体系』を平成 30 年 2 月に刊行した (計 364 頁、ひつじ書房)。また『移動表現の類型論と第二言語習得』(吉成祐子・眞野美穂・江口清子・松本曜編、くろしお出版) の刊行準備を行った。
- ⑤昨年度プロジェクトが主催した NINJAL 国際シンポジウム The 24th Japanese/Korean Linguistics Conference (JK 24) の成果を CSLI 社(Stanford) から *Japanese/Korean Linguistics 24* として刊行した (Kenshi Funakoshi et al. eds., 400 頁、平成 30 年 1 月刊)。また第二期中期計画中の音声研究班の成果として Timothy Vance 名誉教授が『連濁の研究—国立国語研究所プロジェクト論文選集』を筆頭編者として刊行した (開拓社、249 頁、平成 29 年 11 月刊)。

4. プロジェクトの所内メンバーが 3 冊の一般書、啓蒙書を刊行した。

- ① 音声研究班では昨年度実施した一般向け NINJAL フォーラム「オノマトペの魅力と不思議」の成果を窪菌晴夫 (編) 『オノマトペの謎』として刊行した (岩波科学ライブラリー 261、岩波書店、166 頁、平成 29 年 5 月刊)。この本は、日本語のオノマトペを対照言語学、日本語史、言語発達、日本語教育等の様々な観点から分析したものである。また、対照言語 (方言) 学の観点から日本語の多様性を分析した啓蒙書、窪菌晴夫 (著) 『通じない日本語—世代差・地域差からみる言葉の不思議』を刊行した (平凡社新書 861、207 頁、平成 29 年 12 月刊)。
- ② とりたて班では、日本語の分析方法を学習するための大学生向けテキスト、野田尚史・野田春美 (著)

『〈アクティブ・ラーニング対応〉日本語を分析するレッスン』を刊行した（大修館書店、174頁、平成29年4月刊）。

5. インド政府人的資源開発省管轄の大学認可・助成委員会（UGC）およびネル大学の依頼により、合計30モジュールの大学院生向け日本語学教材（テキストとビデオ講義）を開発し、ビデオ講義をYouTubeで公開した。これは「日本語学習者」プロジェクトと合同の事業であったが、プロジェクト間の重複を避けるために、「日本語学習者」プロジェクトの成果として位置付けることにした。
6. プロジェクト共同研究員の研究成果も含めると、プロジェクト全体で論文19件、図書10冊、発表・講演43件を公開・刊行した（いずれもプロジェクトへの謝辞を記したもののみ。別添の「研究成果一覧」参照）。
7. 音声研究班が刊行した *The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants* (Haruo Kubozono ed., Oxford University Press) は、Abigail Cohn 氏（コーネル大学教授）と Carlos Gussenhoven 氏（オランダネイマヘン大学教授）からそれぞれ “this book provides new insights into geminates in languages across the globe” , “This first single volume devoted exclusively to the topic of geminates engages in revealing ways with a range of key questions…Recommended!” という評価を受けた（裏表紙）。またアメリカ音響学会の機関誌 *JASA* の書評欄(online 2017.10.3)では Donna Erickson 氏 (Haskins Lab) から “This book stands out in terms of the range of languages and perspectives covered. … this book is a fascinating read, and a definite must for phoneticians and phonologists exploring the linguistic nature of gemination.” と評された。
8. とりたて班が刊行した『〈アクティブ・ラーニング対応〉日本語を分析するレッスン』は、『英語教育』第66巻第4号（平成29年7月）で塚本秀樹氏から「現在の日本語研究は、日本語を国語として見るのではなく、英語などと同様に、いわば外国語として見て分析し考察するアプローチが定着しており、これまで多大な成果を上げてきた。本書はまさに日本語に対するこういう見方の基礎を養うものであり、英語にかかる方々にもぜひ、本書によって日本語ということばの世界を存分に楽しんでいただきたい」と評された。
9. 『オノマトペの謎』（窪田晴夫編、岩波書店）は複数の新聞（産経新聞7月2日、朝日新聞7月23日、東京新聞8月3日、日刊ゲンダイ10月7日）やNHKラジオ（10月12日）等で紹介された。このうち朝日新聞の書評欄では「本書は最新の学説やデータでオノマトペという現象を総合的に捉える。オノマトペ研究日本代表とも言つていい研究者たちがオノマトペの謎に挑み解明していくので、サクサク読めてウトウトする暇もない。」と評された。また『通じない日本語』（窪田晴夫著、平凡社新書）は読売新聞全国版（12月28日）の「編集手帳」欄で紹介された。

（2）研究実施体制等に関する計画

10. コーネル大学言語学科との連携協定に関する協議を続けた。こちらから協定案を送り、先方からの返事を待っているところである。
11. 大学院生を対象にした講習会である NINJAL チュートリアルを国語研が国際展開するにあたり、プロジェクトとして台湾東吳大学でチュートリアルを行ったが（詳細については「3. 教育に関する計画（1）

参考」), この交流を通して, 国語研と東吳大学との学術交流協定作りに尽力した (平成 30 年 1 月に締結)。

12. 対照言語学研究を実施するために, 国内外の研究者 32 人を共同研究員として追加し, 合計 123 人の組織でプロジェクトの事業を遂行した (うち大学院生 6 人, 海外研究機関に属する研究者 15 人)。また国内外から 3 人の研究者 (国内 2 人, 海外 1 人) を外来研究員として受け入れ, 共同研究を行った。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 共同利用・共同研究に関する計画	
1. 言語地図の作成のためのデータ収集用のアンケートを作成し, データ収集を開始した。データベース設計について検討を開始した。〔名詞修飾班〕	
2. 諸言語の移動動詞に関する文献目録の改訂を行った。〔動詞意味班〕	
3. 音声研究班が平成 28 年度に公開した甑島アクセントデータベースは, 方言アクセントの研究に使用されており, 年間約 270 件のアクセスがあった。	
(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画	
4. <u>複数の基幹型プロジェクトにまたがる NINJAL シンポジウム「日本語の名詞周辺の文法現象 一名詞修飾表現ととりたて表現一」</u> を平成 29 年 12 月 23 日に開催し, 56 人の参加者を得た (うち海外機関研究者 1 人, 大学院生 9 人)。この合同発表会では合計 6 件の発表と 1 件の基調講演を行い, 対照言語学および言語類型論に関する研究成果を報告した。〔とりたて班, 名詞修飾班〕	
音声研究班は国際ワークショップ Workshop on Prosody and Prosodic Interfaces を開催するにあたり, 名詞修飾班は国際ワークショップ Nominalization and Noun modification を開催するにあたり, <u>アドバイザリーボードのメンバーに, テーマ・招待講演(発表)者の選定や成果の刊行計画等について意見を求め, それを活用した。</u>	

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 大学院等への教育協力に関する計画	
研究過程および研究成果の教育的普及	
大学の機能強化に貢献しているか	
1. 国内の 5 つの大学院 (東京大学, 南山大学, 早稲田大学, 東北大学, 神戸大学) において日本語学・言語学の授業を担当した。ただし「個人的な非常勤講師や研究指導は含まない」という自己点検評価委員会の方針に従い, プロジェクトの実績外とすることにした。	
(2) 人材育成に関する計画	
若手研究者の育成	
2. <u>NINJAL チュートリアル「日本語の音声と文法」</u> を平成 29 年 10 月 28-29 日に台湾東吳大学で開催し, 対照言語学的観点から見た日本語の音声と文法について窪塙と野田が各 4 コマ (90 分 x 4 コマ) の講	

義を行った。大学院生 67 人を含む合計 99 人の参加を得た。

3. 前年度の PD フェロー 2 人が常勤職（三重大学、学術振興会特別研究員 PD）に就いて退職したのに伴い、新規に PD フェローを 2 人雇用し（音声研究班、文法研究班各 1 人）、また学振 PD1 人を外来研究員として受け入れ、若手育成を行った。このうち PD フェロー 1 人は、平成 30 年 4 月に私立大学の専任教員として採用されることが内定した。またプロジェクト全体で 6 人の非常勤研究員を雇用し、対照言語学の事業を推進した。
 4. 大学院生 6 人、学振 PD1 人を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、このうち 3 人（延べ）にプロジェクト主催の発表会等で研究発表の機会を与えた。
 5. 上記の共同研究員以外に、各班の研究発表会や国際ワークショップ等において延べ 5 人の大学院生（筆頭発表者）に発表の機会を与えた（音声研究班）。
- 上記の発表を含め、若手研究者 28 人に対して旅費を支援した。また若手研究者に対して方言調査の旅費を援助した（合計 2 件）。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
（1）産業界や地域社会との連携に関する計画	
1. 音声研究班では <u>鹿児島県薩摩川内市と甑島方言の保存・調査・啓蒙活動について平成 29 年 11 月に協議を行い、平成 30 年 1 月 13-14 日に甑島の 2 ヶ所で島民向けの講演会を行った</u> （参加者計 120 人）。また 30 年度に甑島の中学校（全 4 校）において中学生と教員向けの講義（啓蒙活動）を行うことで合意した。	
（2）研究成果の社会への普及に関する計画	
2. <u>立命館大学大学院言語教育情報研究科と共に第 11 回 NINJAL フォーラム「オノマトペの魅力と不思議」（平成 29 年 9 月 10 日、大阪）を開催し、大学生・大学院生、教員（小学校～大学）、一般市民の合計 215 人に対して、オノマトペの謎と面白さを伝えた。この一般向けイベントはビデオ録画され、ネット配信されている。</u> 〔音声研究班〕	
3. <u>オノマトペに関する啓蒙書『オノマトペの謎』（窪塙晴夫編、岩波科学ライブラリー 261）を平成 29 年 5 月に、日本語の多様性に関する啓蒙書『通じない日本語－世代差・地域差からみる言葉の不思議』（窪塙晴夫著、平凡社新書 861）を平成 29 年 12 月にそれぞれ刊行した。</u> 〔音声研究班〕	
4. NINJAL チュートリアル「日本語の音声と文法」を台湾東吳大学で開催した（詳細については「3. 教育に関する計画」（1）参照）。99 人の参加者のうち、32 人が現地の学校（高校、大学）で日本語を教える日本語教師であった。〔音声研究班、とりたて班〕	
5. 東京言語研究所が <u>小中高の教員向けに開催した「教師のためのことばワークショップ」（平成 29 年 8 月 5-6 日）において「母語から始めることばの教育」と題する講演を行った</u> （音声研究班：窪塙）。また、関西外国語大学イバロアメリカ研究センターが主催した <u>第 10 回スペイン語教授法研究会（平成 29 年 7 月 22 日、関西外国語大学）においてスペイン語教員向けに「リーディングのためのスペイン語の主語・主題・語順－日本語との対照から－」と題する講演を行った</u> （とりたて班：野田）。	

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 国際的協業に関する計画	
1. 海外の研究者 1 人を共同研究員に加えた（合計 15 人）。また海外の研究者 2 人を外来研究員として受け入れた。	
(2) 国際的発信に関する計画	
2. 下記の <u>3 件の国際イベントを開催した</u> 。	
① 音声研究班は <u>JK Workshop on Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean</u> (ハワイ大学) を開催した（詳細については「1. 研究に関する計画」参照）。	
② 意味構造班は The 14th International Cognitive Linguistics Conference において, <u>Diversity of Path Coding in Languages</u> と題するテーマセッションを開催した（詳細については詳細については「1. 研究に関する計画」参照）。	
③ NINJAL チュートリアル「日本語の音声と文法」を台湾東吳大学で開催し, <u>NINJAL チュートリアルの国際展開</u> を図った（詳細については「3. 教育に関する計画」（1）参照））。〔音声研究班, とりたて班〕	
3. <u>プロジェクトの所内メンバーが合計 5 冊の英文研究論文集を刊行し, さらに 2 冊の英文研究論文集の編集を行った</u> （詳しくは「1. 研究に関する計画」参照）。	
① 音声研究班は <u>Haruo Kubozono (ed.) The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants</u> (Oxford University Press, 計 408 頁) と <u>Haruo Kubozono and Mikio Giriko (eds.) Tonal Change and Neutralization</u> (De Gruyter Mouton, 計 383 頁) をそれぞれ刊行した。さらに, 国際誌 <u>The Linguistic Review</u> (De Gruyter Mouton) の特集号の編集に着手した。	
② とりたて班は <u>Masayoshi Shibatani, Shigeru Miyagawa and Hisashi Noda (eds.) Handbook of Japanese Syntax</u> (De Gruyter Mouton, 計 852 頁) を刊行した。	
③ 名詞修飾班は Mouton Handbooks の <u>Handbook of Japanese Contrastive Linguistics</u> の巻 (Prashant Pardeshi and Taro Kageyama (eds.)) を刊行した。	
④ 意味構造班は <u>Yo Matsumoto & Kazuhiro Kawachi (eds.) Broader Perspectives on Motion Event Descriptions</u> の編集を行い, John Benjamins 社に提出した。	
⑤ 前年度にプロジェクトが主催した国際シンポジウム <u>The 24th Japanese/Korean Linguistics Conference (JK 24)</u> の成果を <u>CSLI (Stanford)</u> から <u>Japanese/Korean Linguistics 24</u> として刊行した）。	
4. 国際会議 WAFL 13 (The 13 th Workshop on Altaic Formal Linguistics, ICU, 平成 29 年 5 月 25~28 日) において音声研究班の窪塙が ‘ <u>Prosodic evidence for syllable structure in Japanese</u> ’ と題する基調講演を行った。これを含め, プロジェクト全体では 20 件, 国際会議で成果発表を行った（「研究成果一覧」参照）。	
5. <u>寺村秀夫の名詞修飾表現に関する一連の研究の英語訳をホームページ公開した</u> 。寺村秀夫の名詞修飾表現に関する一連の研究の英語訳をウェブ公開した（平成 29 年 7 月）。公開日の平成 29 年 7 月 1 日から平成 30 年 3 月 21 日現在で累計ユーザー数 714, ページビュー数 1,541。	

6. その他

特になし。

平成29年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施した

本プロジェクトは、対照言語学的観点から日本語の音声・文法を分析することで、国際的な視点からの評価に堪えうる高い水準の研究を行い、言語データベース作成、人材育成、研究成果の社会への還元、社会との連携など、順調に計画を実施している。特に音声研究班の活動は顕著であり、成果刊行、啓蒙活動など目を見張らせるものがあり、計画を上回る成果を上げていると評価できる。

《評価項目》

1. 研究について

研究発表会開催、研究発表および成果刊行は当初の計画を上回り、きわめて高い評価に値する。今後もこの活動水準を維持して研究を継続することが望まれる。(1)2 の方言調査や(1)5 の教材作成も順調に進んでおり理想的な計画実施状況である。また海外の研究機関との連携やチュートリアルの開催など活発に研究実施体制を作る努力をしているのも高く評価してよい。研究については、平成29年度の研究実施状況は自己評価Aに十分値するものである。

2. 共同利用・共同研究について

当初の計画通り、言語地図作成のためデータ収集が開始され、データベース設計の検討が始まることは評価できる。またNINJALシンポジウムの開催と研究成果発表、ワークショップ開催にあたり国内外の研究者から成るアドバイザリーボードの積極的活用も当初の計画通りである。全体として、平成29年度の共同利用・共同研究は順調に実施されたと評価できる。

3. 教育について

当研究グループの国内大学院の授業担当が計画通り実施されていることは、国内の大学の使用できる資源が限定されているだけに、国内の大学の機能強化に対する大きな貢献であり、非常に望ましい状況である。人材育成に積極的に取り組み、着実に成果を上げていることが窺われ、高い評価が与えられる。教育に関する実施状況は積極的な評価に値する。

4. 社会との連携及び社会貢献について

国内の4つの大学院において日本語学・言語学の授業を担当したことなど、また、アクティブ・ラーニングに対応した日本語学の教材『日本語を分析するレッスン』(大修館書店)の刊行に漕ぎつけたことなど、大学院等の教育協力に関する今年度の計画を予定通り実行に移し、研究成果の教育的普及に貢献できた点が評価できる。

5. グローバル化について

国際的協業は、共同研究員としての海外研究者や外来研究員の受け入れを通じて順調に進んでいく。研究成果の国際的発信については、海外でのワークショップ、テーマセッション、チュートリアルの開催、5冊の英文研究論文集の刊行や2冊の英文論文集の編集など申し分のない成果を上げている。寺村秀夫の論文の英訳など日本語に関する重要文献の海外発信にも積極的に取り組んでいく。グローバル化に関する実施状況はきわめて高い評価に値する。

6. その他特記事項

なし

統語・意味解析コーパスの開発とそれに基づく言語研究

プロジェクトリーダー：プラシャント・パルデシ

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

現在世界の主要言語について Penn Historical Treebank 方式の統語解析情報付きコーパス（ツリーバンク）が作られ、言語学および言語処理の研究に目覚ましい成果を挙げている。しかし日本語については十分な規模の公開されたツリーバンクは存在しない。

本プロジェクトでは、上記のような日本語研究の遅れを挽回し、多様な日本語の機能語、句、節および複雑な構文を大量の言語データから検索・抽出して研究することを可能とする統語・意味解析情報タグ付き日本語構造体コーパス NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) を開発するための基礎研究を行い、十分な規模のコーパスを構築し、公開する。さらに、このコーパスを利用して、日本語の研究を行い、その成果を国内外に向けて発信する。コーパスの共同利用の推進の一環として、最終年度までに5～6万文規模のコーパスを完成させる予定であり、言語処理の技術を持たない人でも簡単に利用できるインターフェースとともに、国立国語研究所のホームページから一般公開する。また、日本語に堪能でない海外の研究者にも本コーパスを利用できるようにローマ字版も用意する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトでは、日本国内外の研究者から構成される研究班に加えて国立国語研究所、東北大学、神戸大学にコーパス開発班を設け、それらの班が相互に連携しながら開発と研究を進める。また、日本語研究の国際化を目指して、世界のコーパス言語学研究の最前線で活躍している海外の研究者および日本国内の中堅研究者で Advisory Board を構成し、このメンバーのアドバイスを中心に諸企画の方針・方向を決定し、国際的研究ネットワークの構築を図る。また、国際シンポジウムなどを開催し、その成果を海外の定評のある出版社・研究雑誌を通じて発信する。

2. 年次計画（ロードマップ）

平成28年度：研究プロジェクトの始動

1. プロジェクトHP（日英版）を開設・公開し、随時更新する。
2. 若手研究者の育成の一環としてPDフェローを雇用し、研究指導を行う。
3. 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
5. 国内外の学会で研究発表を行う。
6. 国内外の主要研究者から成るアドバイザリーボードを設置し、プロジェクトの運営や成果発信について随時アドバイスを求める。
7. ネットを通じてアノテーション作業が円滑に行える環境を海外の研究者と連携しながら構築する。
8. 海外の大学と研究交流協定を結ぶ。
9. 日英版のユーザフレンドリインターフェースを構築し、NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスと合わせて公開する（1万文）。

平成 29 年度：研究プロジェクトの推進

1. 平成 28 年度の 1.～5. を引き続き実施する。
2. 国際シンポジウム (Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing) を企画し、実施する。研究成果の編集を開始する。
3. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに 1 万文を追加し、合計 2 万文のデータを公開する。

平成 30 年度：研究成果の中間とりまとめ

1. 平成 28 年度の 1.～5. を引き続き実施する。
2. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに 1 万文を追加し、合計 3 万文のデータを公開する。
3. 大学院生向けの統語コーパス利用講習会（チュートリアル）を 2 回開催する（内一回は NINJAL チュートリアル）。
4. アノテーションマニュアル試作版作成・ウェブ公開する。
5. インターフェースの開発・改良を続行する。
6. 国際シンポジウム (Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing) の研究成果をとりまとめ、プロジェクトの内部と外部の査読者によるレビューを経て、海外の定評のある研究雑誌 LILT (LINGUISTIC ISSUES IN LANGUAGE TECHNOLOGY) に提出する。
7. 日本語の統語論の教育に特化した Exploring Japanese Syntax (仮題) を執筆し、この教材の練習問題を NPCMJ コーパスで解くための仕組みを模索する。
8. 幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のための研究（宮田 Susanne 教授との共同研究）を開始する。
9. 述語と機能語に対する詳細な形態論情報付与のための研究（宮田 Susanne 教授との共同研究）を開始する。
10. 日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ），科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進める。
11. 2013 年 12 月に開催して NINJAL 国際シンポジウムの MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果の編集を続行する。

平成 31 年度：研究プロジェクトの拡充

1. 平成 28 年度の 1.～5. を引き続き実施する。
2. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに 1 万文を追加し、合計 4 万文のデータを公開する。
3. 大学院生向けの統語コーパス利用講習会（チュートリアル）を開催。
4. 啓蒙書・普及書を執筆する。
5. 日本語の統語論の教育に特化した Exploring Japanese Syntax (仮題) を刊行し、併せて、この教材の

- 練習問題をNPCMJ コーパスで解くための仕組みも公開する。
6. アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開。
 7. 幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のための研究（宮田 Susanne 教授との共同研究）を継続する。
 8. 述語と機能語に対する詳細な形態論情報付与のための研究（宮田 Susanne 教授との共同研究）を継続する。
 9. インターフェースの開発・改良を続行する。
 10. 日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ），科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進める。
 11. 2013 年 12 月に開催して NINJAL 国際シンポジウムの MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果の編集を完了・出版社に入稿する。

平成 32 年度：研究成果のとりまとめ

1. 平成 28 年度の 1.～5. を引き続き実施する。
2. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに 1 万文を追加し、合計 5 万文のデータを公開する。
3. 大学院生向けの統語コーパス利用講習会（チュートリアル）を開催する。
4. アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開。
5. インターフェースの開発・改良を続行する。
6. 統語意味解析情報を付与した幼児の発話データの公開（宮田 Susanne 教授との共同研究）。
7. 述語と機能語に対して詳細な形態論情報の付与されたデータを公開（宮田 Susanne 教授との共同研究）
8. 啓蒙書・普及書を刊行する。
9. 日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ），科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進める。
10. 2013 年 12 月に開催して NINJAL 国際シンポジウムの MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果の刊行予定（刊行時期は出版社の都合によるもの）。

平成 33 年度：研究成果の公開

1. 平成 28 年度の 1.～5. を引き続き実施する。
2. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに 1 万文を追加し、合計 6 万文のデータを公開する。
3. 大学院生向けの統語コーパス利用講習会（チュートリアル）を開催する。
4. アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開。
5. 日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ），科研プロ

ジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科
研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」
の開発・公開を進める。

【3年までの成果物】

- ・海外の定評のある研究雑誌の特集号または論文集：(NINJAL 国際シンポジウム Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing) の研究成果 (LILT (LINGUISTIC ISSUES IN LANGUAGE TECHNOLOGY))。
- ・NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパス (3 万文) をユーザーフレンドリーなインターフェースと共に公開。

【5年までの成果物】

- ・海外の定評のある研究雑誌の特集号または論文集：(NINJAL 国際シンポジウム Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing) の研究成果 (LILT (LINGUISTIC ISSUES IN LANGUAGE TECHNOLOGY))。
- ・NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパス (5 万文) をユーザーフレンドリーなインターフェースと共に公開。
- ・啓蒙書・普及書 (1 冊)
- ・日本語の統語論の教育に特化した入門書 Exploring Japanese Syntax (仮題) の刊行。
- ・日本語学習者のコミュニケーション (リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ) , 科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科
研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し開発した「文型バ
ンク」 (ウェブ版)。
- ・NINJAL 国際シンポジウムの MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果(論文集)の刊行。

II. 29年度活動概要

29年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

本プロジェクトは、統語・意味解析コーパスの開発とそれを用いた日本語研究を推進するために、国内外の研究者をアドバイザーや共同研究員として新たに迎え、合計 32 名（うち、海外の研究機関所属の研究者 7 名）の組織でプロジェクトを遂行した。コーパス構築班と言語研究班は次のような活動を行った。言語研究班は、公開研究発表会・講演会を 2 回、国際シンポジウムを 1 回、ワークショップを 1 回開催した。これらのイベントにおいて計 26 件の研究発表（学生が筆頭著者の研究発表 2 件を含む）が行われ、計 93 名（延べ）が参加した（うち、海外の研究機関所属の研究者 19 名、大学院生を含む学生 12 名）。

プロジェクト全体で、学術論文・国際学会プロシードィングス論文・著作分担章等 3 件、コーパス・データベース・ソフトウェア（インターフェース開発）等 2 件、発表・講演 10 件、講習会・チュートリアル 3 件があった。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

コーパス構築班は、アノテーション情報の充実と新たなデータ 1 万文のタグ付けを進め、前年度公開した 1 万文と合わせた 2 万文を、アノテーターによるチェック作業を経て NINJAL Parsed Corpus of Modern Japanese (NPCMJ) として公開した。また、コーパス検索の利便性の向上のために、インターフェースに 5 種類の機能（データのローマ字化、フレームグラフ、依存関係・意味役割の表示、文中・文間の照応関係、結合値のプロフィール）を加え、インターフェースの使用法に関する日英語のオンラインドキュメンテーションを作成・公開した。さらに、櫻ツリーバンク方式のアノテーションマニュアルの第 1 版を日英語で作成・公開した。

NPCMJ コーパスは、日本語の記述的研究・理論的研究に利用されており、2017 年 4 月 1 日～2018 年 3 月 31 日間のページビュー数は、82,724 件であった。

国内の大学・研究機関と様々な形で連携・交流を進めた。筑波大学・お茶の水女子大学とは、テキスト含意認識システムに統語・意味解析コーパスとその処理ツールを提供するための共同研究を行なった。慶應義塾大学とは、FrameNet と統語・意味情報コーパスとの連携に関する研究交流を進めた。神戸大学の協力を得て、コーパスの新たなインターフェースの開発を進めている。東北大学とは、アノテーション方式の中国語への適用を進めている。また、NTT コミュニケーション科学基礎研究所および大阪大学大学院情報科学研究科と連携し、機械翻訳および対話システムに統語・意味解析コーパスとその処理ツールを提供するための共同研究について検討し、研究計画を作成した。本プロジェクトのコーパス構築の技術が他のコーパスに利用されている。NPCMJ コーパスのために開発されたアノテーション方式とインターフェースは Man' yoshu97 Parsed Corpus (MYS97) で使用され、2017 年 5 月に公開された (<http://www.compling.jp/mys97/>)。このプロジェクトは NPCMJ の方針をそのまま上代語に適用する試みである。また、NPCMJ コーパスのインターフェースは Oxford-NINJAL Corpus of Old Japanese (ONCOJ) で使用され、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」の傘下で、2018 年 3 月に公開された (<http://oncoj.ninjal.ac.jp/>)。データ形式だけでなく、今後は NPCMJ コーパスのより高度な分析法も取り入れる予定である。

アドバイザリーボードからの意見を受けながら、国際シンポジウム “Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing” を企画・開催した。また、コーパスの機能に関する有益な助言を受けており、今後のコーパス開発に取り入れてゆく予定である。

3. 教育に関する計画

NPCMJ コーパスに関する講習会を国内の大学（慶應義塾大学、お茶の水女子大学、神戸大学）において 3 回開催した（参加者は合計 41 名、うち大学院生を含む学生 12 名）。

若手研究者育成のため、非常勤研究員 3 名、技術補佐員 2 名を雇用し、また、大学院生 5 名に共同研究員としてプロジェクトに参画してもらい、コーパス開発およびコーパスに基づく言語研究を推進した。

本プロジェクト共同研究発表会（神戸大学）および東海意味論研究会（名古屋学院大学）における研究発表を行うため、若手研究者 2 名に対して旅費を支援した。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

NTT コミュニケーション科学基礎研究所による機械翻訳の精度向上に関する研究をサポートするための機能を NPCMJ コーパスに加えた。また、新たな連携研究の計画を検討・作成した。株式会社アスコエパートナーズと、行政サービスに関する情報提供システムと統語・意味解析コーパス研究の連携を議論し、本プロジェクトの開発する統語解析機で解析を行った文書、およびコーパス開発ツールを提供した。

5. グローバル化に関する計画

NPCMJ コーパスのインターフェース、オンラインドキュメンテーション、アノテーションマニュアルはすべて日英両言語で作成してある。また、NPCMJ コーパスのデータのローマ字化を進め、日本語の仮名・漢字表記に不慣れな研究者でもコーパスが利用できるような環境を整えた。

6. その他

特になし。

III. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画	
1. 本プロジェクトは、統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するためにコーパス構築班と言語研究班の二つの班で活動をした。 研究班は、研究発表会・講演会を計3回、国際シンポジウムを1回開催した。	
【研究発表会・講演会】 ①第1回研究発表会・講演会（平成29年6月9日、国語研（参加者数8人、うち大学院生を含む学生0人）。 ②第2回研究発表会・講演会（平成29年11月4日、神戸大学（参加者数22人、うち大学院生を含む学生3人）。 ③第3回研究発表会・講演会をワークショップ：Research Methods for the Penn Parsed Corpora of Historical English (PPCHE)、12月12日、早稲田大学（参加者数18人、大学院生を含む学生3人） 【国際シンポジウム】 ④前年度に協定を締結したペンシルバニア大学、コロラド大学、ヨーク大学、ブランドイス大学およびNTT コミュニケーション科学基礎研究所と連携し、平成29年12月9日—10日の2日間にわたり、国際シンポジウム “Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing” を開催した。口頭発表9件（うち海外からの参加者による発表5件、プロジェクト共同研究員による発表4件）、ポスター発表11件（うち海外からの参加者による発表4件、プロジェクト共同研究員・非常勤研究員による発表5件、その他国内の研究者による発表2件）であった（参加者数45人、うち外国人研究者19人、大学院生を含む学生6人）。この国際シンポジウムにおいて、プロジェクトで雇用している大学院生1名にポスター発表の機会を提供した。	
このシンポジウムで協定を締結したペンシルバニア大学、ヨーク大学、ブランドイス大学の研究者が研	

究成果を発表し、日本語、英語、中国語、オランダ語のコーパス開発に関する知見と課題が共有できた。また、ペンシルバニア大学のクロック教授、サントリーニ上級研究員から NPCMJ コーパスに付与されている意味情報システムを英語のコーパスに応用することを検討したいという申し出があり、その可能性について、今後共同研究を進めることになった。本プロジェクトの成果は英語など他の言語のコーパス開発に応用されることは学術的な意義が深い。

2. 日本語文法学会第 18 回大会でパネルセッション「統語・意味解析情報をタグ付けした日本語コーパスの開発—アノテーションの方法と文法研究への応用—」を企画し、プロジェクトの成果を発表した（@筑波大学、2017 年 12 月 3 日、プロジェクト共同研究員による発表 3 件）。

上記プロジェクト共同研究員による研究活動の成果は口頭発表 8 件、ポスター発表 2 件である。

3. 上記 NINJAL 国際シンポジウムの口頭発表をとりまとめ、proposal を作成し、スタンフォード大学の CSLI Publications から刊行される国際雑誌 *Linguistic Issues in Language Technology* (LiLT) の編集者に提出した。当 proposal が採択され、国際シンポジウムの研究成果が *Linguistic Issues in Language Technology* (LiLT) の特集号として出版することが決まった。現在、各発表者から投稿原稿を集めている。

4. MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果の編集作業を進めた（公刊は 2~3 年後）。

（2）研究実施体制等に関する計画

5. 統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するために、今年度新規として 3 名を追加し、19 名のプロジェクト共同研究員、12 名のアドバイザ体制で共同研究を進めた。
6. 統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するために、今年度新規として 3 名を追加し、19 名のプロジェクト共同研究員体制で共同研究を進めた。また、業務委託に基づき、東北大学と連携してアノテーションの研究・アノテーション作業およびデータのローマ字を進めた。同じく、業務委託に基づき、神戸大学と連携して、インターフェースの改良に関する研究を行い、パターンブラウザの試作版を開発した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<h3>（1）共同利用・共同研究に関する計画</h3>	
<p>1. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパス構築に関連して、次のような活動を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none">• NPCMJ コーパスに、追加する 1 万文の新たなデータを用意している（平成 29 年 3 月に追加し、現時点で合計 2 万文を公開となっている）。• 年度公開したデータの質的な改善を図った。• コーパス検索のために、インターフェースに 5 種類の機能（データのローマ字化、フレームグラフ、依存関係と意味役割の表示、談話レベルの表示、結合値のプロフィール）を追加した。• インターフェースの日英両言語によるオンラインドキュメンテーションを充実させた。• インターフェースの利用ガイド（英語版）を作成した（平成 30 年度中に一般公開する予定）。	

- ・特定の構文パターンを検索できる初心者向けの新たなインターフェースの開発に着手し、その試行版をプロジェクト共同研究員に向けて内部公開した（平成30年度中に一般公開する予定）。
 - ・日英両言語の櫻ツリーバンク方式のアノテーションマニュアルの第1版を公開した。
2. 本プロジェクトのコーパス構築の技術が他のコーパスに利用されている。
- ・NPCMJ コーパスのために開発されたアノテーション方式とインターフェースは *Man' yoshu97 Parsed Corpus (MYS97)* で使用され、2017年5月に公開された。このプロジェクトは NPCMJ コーパスの方針をそのまま上代語に適用する試みである。
 - ・NPCMJ コーパスのインターフェースは *Oxford-NINJAL Corpus of Old Japanese (ONCOJ)* で使用され、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」の傘下で、2018年3月に公開された。データ形式だけでなく、今後は NPCMJ のより高度な分析法も取り入れる予定である。
3. NPCMJ コーパスは、日本語の記述的研究・理論的研究に利用されており、2017年4月1日～2018年3月31日間のページビュー数82,724件であった。

（2）共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

4. 国際シンポジウム “Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing” の立案・実施に際し、国内外のアドバイザーにテーマの設定、招待発表者の選定、研究成果の刊行計画について意見を求め、それを活用した。
5. 国内の大学・研究機関と次のような連携・交流を進めた。
 - ・業務委託に基づき、神戸大学の協力を得て、統語・意味解析コーパスの新たなインターフェースの開発を進めている。
 - ・業務委託に基づき、東北大学と連携し、アノテーション方式の中国語への適用を進めている。
 - ・交流協定を結んでいる NTT コミュニケーション科学基礎研究所および大阪大学大学院情報科学研究科と連携し、機械翻訳および対話システムに、統語・意味解析コーパスとその処理ツールを提供するための共同研究について検討し、研究計画を作成した。

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
（1）大学院等への教育協力に関する計画	
特になし。	
（2）人材育成に関する計画	
1. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに関する講習会を国内の大学と連携して3回開催した。 <ul style="list-style-type: none"> ・統語・意味解析コーパス (NPCMJ) チュートリアル、7月6日、慶應義塾大学（参加者数7人、うち学生3人） ・統語・意味解析コーパス (NPCMJ) 11月1日、お茶の水女子大学（参加者数13人、うち学生8人） ・統語・意味解析コーパス (NPCMJ) 11月4日、神戸大学（参加者数21人、うち学生1人） 	

2. 若手研究者を育成するために、非常勤研究員を3人、技術補佐員2人を雇用し、プロジェクトの事業を推進した。
3. 大学院生5人を共同研究員としてプロジェクトに参画させた。
4. 東海意味論研究会（名古屋学院大学）および本プロジェクト共同研究発表会（神戸大学）における若手研究者2名の発表の経費を援助した。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画	
1. ①NTTコミュニケーション科学基礎研究所による機械翻訳の精度向上に関する研究をサポートするための機能をコーパスに加えた。また、新たな連携研究の計画を策定した。 ②株式会社アスコエパートナーズと2度の会合の機会を得て、行政サービスに関する情報提供システムと統語・意味解析コーパス研究の連携に関する議論を進めた。また、本プロジェクトの開発する統語解析機で解析をおこなった文書、およびコーパス開発ツールを提供した。	
(2) 研究成果の社会への普及に関する計画	
2. NPCMJコーパスをオンラインで公開し、研究に目的を絞らない、幅広い層の人々からの利用促進に務めた。インターフェースの開発だけでなく、オンラインドキュメンテーション、ユーザーズマニュアル、アノテーションマニュアルを充実させ、コーパスにより容易にアクセスができるようにした。	

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 国際的協業に関する計画	
特になし。	
(2) 国際的発信に関する計画	
1. NPCMJコーパスのインターフェース、オンラインドキュメンテーション、アノテーションマニュアルはすべて日英両言語で作成してある。また、NPCMJコーパスのデータのローマ字化を進めた。 2. ①第3回研究発表会・講演会として、本プロジェクトのアドバイザーであるAnthony Kroch教授（ペンシルベニア大学）、Beatrice Santorini教授（ペンシルベニア大学）が平成29年12月12日に早稲田大学にてワークショップ：Research Methods for the Penn Parsed Corpora of Historical English (PPCHE)を行った（参加者数18人、うち、大学院生を含む学生3人）。 3. ②平成29年12月9日—10日の2日間にわたり、国際シンポジウム“Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing”を開催した（詳細は1. 研究に関する計画、（1）研究水準及び研究の成果に関する計画を参照）。	

6. その他

1. 以下の大学と連携して共同研究を行った。
 - ・筑波大学・お茶の水女子大学と連携し、テキスト含意認識システムに、統語・意味解析コーパスとその処理ツールを提供するための共同研究を行った。
 - ・慶應義塾大学と、FrameNet と統語・意味情報コーパスとの連携に関する研究交流を進めた。

平成29年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施した

NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスのデータ拡充は予定通り進行しており、統語・意味解析コーパス開発は順調に進行している。コーパスに基づく言語研究は、国内外のアドバイザリーボードメンバーの助言に基づいて、前年度に協定締結の国内外の大学・研究機関との協力、国内大学との連携の下にコーパスのインターフェース・アノテーションを中心として進められた。国内での研究集会、学会、講習会などに加えて、NINJAL 国際シンポジウムを開催し、その成果の国際学術雑誌での刊行を進めるなど研究プロジェクトの国際的発信に努めている。NPCMJ コーパスのネット公開、各種ドキュメントの日英版の整備を進めると共に民間研究機関、企業でのコーパス活用を目指した活動も着実に進めている。計画通りに順調に実施していると判断する。今後は、国語研開発の統語・意味論コーパスを用いることによって初めて可能となる特色ある言語研究の潮流創出、広範な社会人・一般人へのコーパス利用拡大を目指した取り組みを期待する。

《評価項目》

1. 研究について

統語・意味論コーパスを用いた言語研究推進では、研究発表会3回を開催し、また国際シンポジウム1回を海外の協定大学と協力して企画開催している。さらに国際シンポジウムの発表成果は国際雑誌での刊行が進行中である。これらの研究実施のために研究者を増員し、12名のアドバイザーを含む共同研究体制を構築している。研究については概ね計画通り順調に進行していると判断できる。今後は国語研開発の統語・意味論コーパスを用いることによって初めて可能となる特色ある言語研究の潮流創出を目指して引き続き研究活動を推進されることを期待する。

2. 共同利用・共同研究について

統語・意味論コーパスの開発においては、予定通り NPCMJ コーパスの一万文データ追加に加えて、国内大学との連携および業務委託に基づいてコーパス検索のインターフェースおよびアノテーション機能高度化、初心者を対象としたインターフェース開発、英語によるマニュアル作成を行っている。

また、NPCMJ コーパス作成に伴って開発されたインターフェースおよびアノテーション技術は万葉集や日本語通詞コーパス開発にも利用された。NPCMJ コーパスの年間アクセスは8万件あまりにのぼり、日本語の記述的・理論的研究利用普及が進んでいる。さらに NTT コミュニケーション科学

基礎研究所・大阪大学との連携による自然言語処理分野でのコーパス活用を目指した共同研究の検討が進められている。コーパス開発のための共同利用・共同研究については概ね計画通り順調に進行していると判断できる。今後は引き続き NPCMJ コーパスの拡充に努めると共に、自然言語分野との有益な共同の実現を期待する。コーパス開発のアピールにはアクセス数だけでなく、コーパスを利用した研究成果の量的な把握も検討を期待する。

3. 教育について

人材育成に関しては、プロジェクト推進のために非常勤研究員 3 名、技術補佐員 2 名を雇用している。また大学院生 5 名を共同研究員としてプロジェクトに参画させている。NPCMJ コーパスに関するチュートリアルを国内大学において 3 回開催し若手研究者育成を図っている。このように教育については計画通り順調に進行していると判断できる。

4. 社会との連携及び社会貢献について

産業界や地域社会との連携に関しては、NTT コミュニケーション科学基礎研究所における機械翻訳研究へのサポート、株式会社アスコエパートナーズへのコーパス開発ツール提供を行っている。研究成果の社会への普及に関しては、NPCMJ コーパスのオンライン公開によって一般に発信すると共に、コーパスの広範な利用のためのインターフェース開発、各種マニュアル作成を行っている。計画通り順調に進行していると判断できる。今後は研究者に止まらず、より広い範囲の社会人を含む多様な人々を対象としたコーパス活用促進の施策検討を期待する。

5. グローバル化について

国際的発信については、NPCMJ コーパスに関する英語版ドキュメントに加えてコーパスのローマ字化を進めている。また NINJAL 国際シンポジウムを企画開催して NPCMJ コーパスおよびコーパス言語学研究の発信を行っており、グローバル化に関しては計画通り順調に進行していると判断できる。国際シンポジウム開催などを通じて継続的に研究の国際発信に努められることを期待する。

6. その他特記事項

筑波大学・お茶の水女子大学、慶應義塾大学との連携・交流があり、国内大学との連携・共同研究の拡大進展が見られる。

日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成

プロジェクトリーダー：木部暢子

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトは、日本の消滅危機言語・方言の記録・分析・継承を目的として、各地の言語・方言の調査を実施し、言語資源の整備・分析を行うとともに、言語・方言の継承活動を支援して地域の活性化に貢献することを目的とする。

近年、世界的な規模でマイナー言語が消滅の危機に瀕している。2009年のユネスコの危機言語リストには、日本で話されている8つの言語—アイヌ語、与那国語、八重山語、宮古語、沖縄語、国頭語、八丈語—が含まれている。特に、アイヌ語は危機の度合いが高く、系統関係も不明で、その解明のためのデータの整備と分析が急がれる。それだけでなく、日本各地の伝統的な方言もまた、消滅の危機にさらされている。これらの言語・方言が消滅する前にその包括的な記録を作成し言語分析を行うこと、また、これらの言語・方言の継承活動を支援することは、言語学上の重要課題であるばかりでなく、日本社会においても重要な課題である。

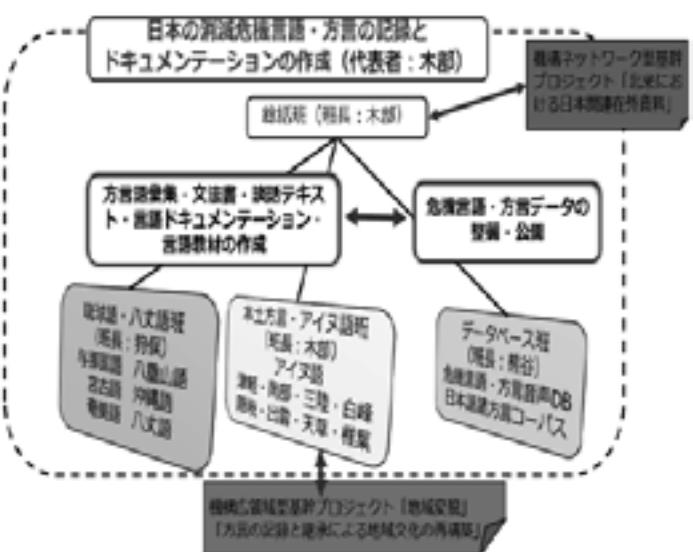
本プロジェクトの実施内容は、以下のとおりである。(1) 語彙集、文法書、談話テキストの作成と言語分析、(2) 音声・映像資料（ドキュメンテーション付き）、「日本語諸方言コーパス」をはじめとする言語資源の整備、(3) 地域と連携した講演会・セミナーの開催、(4) 若手育成のためのフィールド調査の手引き書の作成。

なお、実施にあたっては、機構の広領域型基幹プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」の「方言の記録と継承による地域文化の再構築」、ネットワーク型基幹プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査研究・活用」と連携する。

2. 年次計画（ロードマップ）

本プロジェクトの実施にあたっては、図のような研究班を組織する。

- ・琉球語・八丈語班、アイヌ語班、本土方言班は6年間で、琉球8地点、八丈語、アイヌ語、本土12地点（東北3地点、関東2地点、中部・関西2地点、中国・四国2地点、九州3地点）の語彙集・文法書・談話テキスト、言語ドキュメンテーション、言語教材を作成する。
- ・データベース班は「日本の危機言語・方言の音声データベース」、『アイヌ語口承文化コーパス』、『日本語諸方言コーパス』、『日本言語地図』データベースの整備・公開を行う。
- ・研究成果として、以下のものを目指す。



3年目まで：ムートン社 *Handbook of Japanese Dialects, Handbook of the Ainu Language*, 論文集『日本語の格』(仮題), 『沖縄県久米島方言調査報告書』, 『宮崎県椎葉村方言語彙集』, 『島根県隠岐の島方言語彙集』, 『日本語諸方言コーパス・モニター版』(47 地点のデータによる方言横断コーパス), 「日本の危機言語・方言の音声データ」(8 地点), 『アイヌ語口承文芸コーパス』。フィールド調査の手引き書。

5年目まで：論文集 *Endangered languages and dialects in Japan*, 『方言の名詞句』(仮題), 『方言の動詞句』(仮題)。各地の語彙集・文法書・談話テキスト・言語ドキュメンテーション・言語教材。

◆年次計画

平成 28~29 年度 (1~2 年目)

- ①調査：琉球語, 八丈語, アイヌ語, 本土方言の調査。
- ②研究会：「方言の音韻・音声」「方言語彙集の作成」「名詞句」「動詞句」「グロス」に関する研究会を開催。コーパスに関する合同シンポジウムを開催。
- ③言語資源：『日本語諸方言コーパス』, 「危機言語・方言音声データ」「アイヌ語口承文芸データ」等を整備。
- ④地域との連携：「日本の危機言語・方言サミット」(年 1 回), 「方言セミナー」(年 1 回) を開催。
- ⑤若手育成：大学院生, PD 等の調査への参加。フィールド調査の手引き書の作成。
- ⑥成果：ムートン社 *Handbook of Japanese Dialects*, *Handbook of the Ainu Language*, 『日本語の格』(仮題) の出版。『沖縄県久米島方言調査報告書』, 『島根県隠岐の島方言語彙集』の刊行。

平成 30 年度 (3 年目)

- ①調査：琉球語, 八丈語, アイヌ語, 本土方言の調査。
- ②研究会：国際シンポジウム “*Endangered languages and dialects in Japan*” を開催。
- ③言語資源：『日本語諸方言コーパス・モニター版』(47 地点のデータによる方言横断コーパス) の公開。「危機言語・方言音声データ」, 『アイヌ語口承文芸コーパス』, 『日本言語地図』データベース」のデータを補充・公開。
- ④地域との連携：「方言セミナー」(1 回) を開催。
- ⑤若手育成：大学院生, PD 等の調査への参加。フィールド調査の手引き書の試用。
- ⑥成果：『椎葉村方言語彙集』(音声 CD 付), 『フィールド調査の手引き書』を出版。各地点の語彙集・文法書・談話テキスト・言語ドキュメンテーション・言語教材の中間公開。

平成 31~32 年度 (4~5 年目)

- ①調査：琉球語, 八丈語, アイヌ語, 本土方言の調査。
- ②研究会：「方言語彙集」, 「文法記述」に関する研究会を開催。コーパス合同シンポジウムを開催。
- ③言語資源：『日本語諸方言コーパス』, 「危機言語・方言音声データ」, 「アイヌ語口承文芸データ」等を整備。
- ④地域との連携：「日本の危機言語・方言サミット」(年 1 回), 「方言セミナー」(年 1 回) を開催。
- ⑤若手育成：大学院生, PD 等の調査への参加。
- ⑥成果：英文論文集 *Endangered languages and dialects in Japan*, 論文集『方言の名詞句』(仮題), 『方

言の動詞句』(仮題)を出版。『石川県白峰方言語彙集』,『鹿児島県穎娃方言語彙集』,『津軽方言語彙集』,『三陸方言語彙集』を刊行。

平成33年度(6年目)

- ①調査: 次期準備調査を実施。
- ②研究会: 研究成果報告会, コーパス合同シンポジウムを開催。
- ③言語資源: 『日本語諸方言コーパス』を一般公開。「危機言語・方言音声データ」,『アイヌ語口承文芸コーパス』,『日本言語地図』データベースのデータを補充・公開。
- ④地域との連携: 「日本の危機言語・方言サミット」(年1回),「方言セミナー」(年1回)を開催。
- ⑤若手育成: 大学院生, PD等の調査への参加。
- ⑥成果: 各地点の語彙集・文法書・談話テキスト・言語ドキュメンテーション・言語教材の公開。

II. 29年度活動概要

29年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

- ・日本の消滅危機言語・方言の記録・継承のために, 琉球25地点, 八丈1地点, 本土14地点の計40地点で各地点担当者が語彙集・文法書・談話テキスト, 言語教材の作成のための調査を行なった。29年度のテーマは, 「指示詞・代名詞」である。共通の調査票をもとに, 各地点で「指示詞・代名詞」の調査を行った。
- ・40地点調査のほか, 1地点の方言を集中的に調査・記録する合同調査を29年8月に愛知県一宮市木曽川町で実施した。調査には, 国語研スタッフ・共同研究員, 公募による学生・大學生, および愛知県立大学学生が参加した。また, 宮崎県椎葉村と共同で実施している『椎葉村方言語彙集』の作成のための調査は, 今年度で4年目を迎える, 29年9月と30年3月に3地域の調査を実施した。
- ・40地点調査と連動させて, 「指示詞・代名詞」に関する研究発表会を29年6月と30年3月に開催した。また, 5月にハワイ大学マノア校で危機言語に関するワークショップを歴博, ハワイ大学と共同で開催した。
- ・成果の公開に関しては, 『島根県隠岐の島方言調査報告書』(27・28年度に合同調査実施), 『石川県白峰方言調査報告書』(28年度に合同調査実施)を刊行した。これらを含め, 29年度は論文10件, 図書・報告書4件, データベース等3件, 発表・講演39件の研究成果を公表した(プロジェクトの企画によるもの, および謝辞のあるものに限る)。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

- ・鹿児島県沖永良部方言の基礎語彙データ(音声付), 沖縄県石垣島・鹿児島県徳之島の自然談話データ(音声付)を新規公開, アイヌ語口承文芸コーパスデータ(音声付)を増補公開した。また, 『日本言語地図データベース』(『日本言語地図』(LAJ)の原資料カードの画像の電子化とデータベース化)に5項目分のデータを追加し公開した。
- ・方言の談話資料を使った『日本語諸方言コーパス』の構築のため, 全国47地点, 24時間分のデータの整備を行なった。30年度に方言コーパス・モニター版を公開する予定である。また, このデータを使つ

た研究発表を 5 件（国際学会 1 件、国内シンポジウム 2 件、国内講演 2 件）行なった。

- ・日本語言語資源の包括的検索システムの構築に向けて、「日常会話コーパス」、「通時コーパス」、「学習者のコミュニケーション」のプロジェクトと合同で、29 年 9 月にコーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—話者の属性—」を開催した。

3. 教育に関する計画

- ・愛知県一宮市木曽川町における合同調査を愛知県立大学と連携して実施し、フィールドワークを通して大学支援と学生指導を行った。指導にあたっては、調査前に事前ワークショップを開催し、フィールドワークの概要を理解した上で調査に参加させ、調査後には事後指導を実施し、調査報告書の作成の仕方について指導を行なった。なお、事前ワークショップ、事後指導は、東京外大 AA 研 LingDy3 との共同実施である。
- ・また、椎葉村方言調査に九州大学の学生を参加させ、フィールドワークを通して学生指導を行なった。
- ・若手研究者の育成のために、プロジェクト PD フェローと非常勤研究員と共同で調査データや諸方言コーパスデータの分析を行い、ハワイ大ワークショップ、Methods XVI、コーパス合同シンポジウム、JK25 で共同発表を行なった。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

- ・文化庁や北海道教育委員会、北海道大学等と共同で、29 年 12 月 3 日に北海道大学で「日本の消滅危機言語・方言サミット（北海道大会）」を開催した。サミットは今年が 4 回目で、各地の状況やアイヌ語の継承活動に関する報告等が行われた。
- ・平成 26 年から宮崎県椎葉村と共同で『椎葉村方言語彙集』の作成のための調査を行なっている。29 年度は椎葉村と正式に交流協定を締結し、方言語彙集を出版するための基盤を整えた。また、30 年 3 月 25 日に椎葉民俗芸能博物館と共同で市民向け講演会「暮らしをうつす椎葉の方言」（椎葉村向山日添公民館）を開催し、調査の中間報告を行なった。
- ・まつえ市民大学と共同で、自主企画講座「出雲弁は消えてしまうのか」（29 年 7 月 29 日、市民活動センター）を開催し、出雲方言の特徴と継承について意見交換を行なった。また、鹿児島県沖永良部知名町下平川小学校の方言継承学習を支援し、子どもたちの方言学習の成果発表会（29 年 11 月・下平川小学校、30 年 2 月・国語研）を開催し、これらをとおして、地域の社会人の学び直しに貢献した。
- ・企業との連携として、今年から始まった「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」において、歴博、および博物館や科学館などの展示を手がける丹青社と共同で方言の可搬型展示コンテンツを 2 台作成した。

5. グローバル化に関する計画

- ・海外の大学と連携して危機言語・方言の研究を進めるために、30 年 2 月に危機言語の研究拠点であるハワイ大学と交流協定を締結した。その準備として、29 年 5 月 16-18 日にハワイ大学マノア校で「NINJAL/NMJH/UHM Workshop Underdescribed Languages and Histories: Linguists' and Historians' Challenges」を開催し、研究紹介と研究発表を行なった（機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査研究・活用」と共同開催）。30 年 8 月に開催する国際シンポジウム

‘Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization’の中で、国際交流協定締結記念の講演を行う予定である。

- ・「日本の危機言語・方言」データ公開のページの英訳を作成し、各地基礎語彙の英語検索、沖縄県瀬底方言、首里方言の自然談話の英訳、喜界島方言調査報告書の英訳を公開した。今後、隨時、データや研究成果を英語で発信する予定である。

6. その他

- ・今年度から、機構の「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」が始まり、国語研として「消滅危機言語・方言の展示を通した最先端研究の可視化・高度化」プロジェクトを設置し、参加することとなった。その一環として、タイポグラフィのデザイナーである大日本タイポ組合と共同で方言を動物等の形に図案化した「なんでももじもじ 方言版」と、標準語にない方言の音に対して新しい文字を創作する「ひらがなの成り立ち」を作成し、29年11月3日～12月17日に開催されたATELIER MUJI「え、ほん？」展で展示を行なった。また、歴博や丹青社と共同で、可搬型の方言展示コンテンツを2台作成した。30年度に神奈川大学、弘前大学、まつえ市市民活動フェスタ、富山大学で可搬型展示コンテンツを使った展示を開催する予定である。

III. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画	
1. 日本の消滅危機言語・方言をできるだけ多く記録し、次の世代に言語・方言を継承するために、6年間で各地の語彙集・文法書・談話テキスト、言語教材を作成する。今年度は、「指示詞・代名詞」をテーマとして、琉球25地点、八丈1地点、本土14地点の計40地点において各地点担当者が共通の調査票をもとに調査を行なった。	
2. 40地点調査の他、毎年、1地点の合同調査を実施している。今年度は <u>愛知県木曽川町方言の調査</u> （29年8月28-30日）を行なった。木曽川町は東部方言と西部方言の接触地域で、言語的に重要な地域である。参加者は国語研スタッフ・共同研究員7人、AA研スタッフ2人、公募による学生・大学院生4人、愛知県立大学の学生9人の計23人で、調査項目は動詞活用等の文法項目、基礎語彙500単語とその例文である。調査報告書は30年度に刊行する。	
3. 平成26年度から、宮崎県椎葉村と共同で『椎葉村方言語彙集』作成事業を行なっている。今年度は4年目にあたり、29年9月11-15日に椎葉村鹿野遊、大河内で、3月26日に尾八重で調査を実施した。参加者は9月が国語研スタッフ・共同研究員9人、椎葉村学芸員1人、3月が国語研スタッフ・共同研究員5人、椎葉村学芸員1人である。なお、木曽川町方言調査と椎葉村方言調査は、機構広領域連携型プロジェクト「地域文化の再構築」との共同実施である。	
4. 上記1の調査を計画的に進めるために、今年度のテーマ「指示詞・代名詞」に関する公開研究会「 <u>指示詞・代名詞</u> 」（29年6月11日、国語研）を開催し、問題点の共有化を図った。発表内容は、招待講演1件（林徹）、発表件数2件（林由華、下地理則）、参加者は54人（うち学生5人）である。また、30年3月11日に第2回研究発表会「 <u>指示詞・代名詞（本土諸方言）</u> 」を開催した。内容は、青森、山形、福島、	

千葉、八丈、島根の各方言の指示詞・代名詞に関する調査報告6件と、基調報告1件である。参加者は56人、そのうち、学生が10人、高校生1人であった。

5. データベース班では、『日本語諸方言コーパス』の構築のためのデータ整備を進めた。また、29年9月8日にコーパス合同シンポジウムを開催した（詳細は「2. 共同利用・共同研究に関する計画」を参照）。
6. 海外の大学と連携して危機言語・方言の研究を進めるために、29年5月16-18日にハワイ大学マノア校で危機言語に関するワークショップを開催した（詳細については「5. グローバル化に関する計画」を参照）。
7. 研究成果の公開については、『隱岐の島方言調査報告書』（154頁、27・28年度合同調査実施）、『白峰方言調査報告書』（85頁、28年度合同調査実施）を30年3月に刊行した。
8. 『日本語の格表現』（くろしお出版）、『かたりの中の方言』（勉誠出版）を刊行する予定であったが、今年度から始まった機構事業「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」（詳細については「6. その他」参照）に時間を取られ、実施することができなかった。出版は30年度に持ち越すことになった。
9. 教材・教育プログラムの開発に関しては、東京外国語大学AA研（以下AA研）と共同で木曽川町方言調査のための事前ワークショップを開催し（29年8月26-27日）、言語のフィールドワークに関する教材・教育プログラムの準備を進めた。
10. その他、30年7月2日に「成城学園創立100周年記念・大学院文学研究科創設50周年記念シンポジウム『私たちの知らない日本語—琉球・九州・本州の方言と格標識—』」を共同開催した。客員教員の下地理則、共同研究員の坂井美日、新永悠人が発表を、代表者の木部がコメントを行なった。
11. 以上の研究成果を、プロジェクト共同研究員の研究成果も含めて、論文10件、解説・概説1件、図書・報告書4件、コーパス・データベース等3件、発表・講演39件として公開した（プロジェクトの企画によるもの、プロジェクトに対する謝辞を含むもののみ）。「研究成果一覧」参照）

（2）研究実施体制等に関する計画

12. プロジェクトの推進にあたって、危機言語・方言のフィールドワークの経験を有する国内外の研究者69人をプロジェクト共同研究員として組織した（国内66人、海外3人）。
13. 東京外大AA研LingDy3との交流協定に基づき、クロスアポイントメント制度による特任助教1人を雇用し、木曽川町方言調査のための事前ワークショップ（8月26-27日）を共同で開催した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
（1）共同利用・共同研究に関する計画	
1. 危機言語・方言の音声データを増補し公開した。今年度は、 <u>鹿児島県沖永良部方言の基礎語彙</u> 、 <u>沖縄県石垣島、鹿児島県徳之島の自然談話のデータ</u> を新規公開した。また、 <u>アイヌ語口承文芸コーパスのデータ</u> （音声付）、『 <u>日本言語地図データベース</u> 』（『 <u>日本言語地図</u> 』（LAJ）の原資料カードの画像の電子化とデータベース化）を3月に追加公開した。	
2. データベース班では、方言の談話資料を使った『日本語諸方言コーパス』の構築のためのデータ整備を	

進めた。今年度は48地点約24時間分の方言テキスト・標準語テキストの整備、音声との紐付け作業、及びタグ付けを終えた。30年度にモニター版を公開する予定である。

3. 方言コーパスのデータを使った研究発表を以下のとおり行なった。(研究成果一覧参照)
①「諸方言コーパスに見る男性の言葉・女性の言葉」(コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—話者の属性—」, 29年9月8日, 国語研講堂)
②「諸方言の文末イントネーション—日本語諸方言コーパスから—」(音声資源活用シンポジウム, 29年9月7日, 国語研講堂)
③'Copus based study of Japanese dialects: Regional differences in case marking system' (Methods XVI, 29年8月10日, 国語研)
④「日本語諸方言コーパスに見る富山方言」(富山大学人文学部 第6回言語学・日本語学公開講演会, 29年6月16日)
⑤「ことばが接するところ—富山の方言—」(砺波散村地域研究所例会, 29年6月17日, 砺波散村地域研究所)。
4. 『日本語諸方言コーパス』は現在のところ未公開のため、これを使用した研究は関係者のみが行なっているが、30年度にモニター公開の予定である。近年は発表を聞いた研究者からデータ公開を希望する声が増えている。

(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

5. 東京外国語大学AA研のプロジェクトLingDy3との連携に関しては、「1. 研究に関する計画13」のとおり。
6. 琉球大学との交流協定に基づき、琉球大学に「沖縄における消滅危機言語・方言の調査・保存に関する研究を」事業委託し、琉球語の記録を行なった。
7. 日本言語資源の包括的検索システムの構築に向けて、「日常会話コーパス」、「通時コーパス」、「学習者のコミュニケーション」のプロジェクトと合同で、29年9月8日にコーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—話者の属性—」を開催した(国語研講堂)。合同シンポジウムは今年が4回目で、内容は招待講演1件(蒲谷宏)、発表4件(迫田他、木部他、小磯、小木曾)、参加者は、82人(うち学生9人、国外機関所属者1人)であった。
8. プロジェクトの内容を充実させるために、客員教授の岩崎勝一氏(UCLA)にアドバイザーを依頼し、その意見を30年の国際シンポジウムの計画に反映させた。

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 大学院等への教育協力に関する計画	
1. 国語研と東京外国語大学との協定に基づき、クロスアポイントメント教員として1名(木部)が東京外国語大学連携大学院(国際日本学研究科)においてJapanese Studies I, IIの授業を担当した。	
2. 愛知県一宮市木曽川町方言調査(29年8月28-30日)を <u>愛知県立大学と共同で行い</u> 、愛知県立大学の教育に貢献した。調査には愛知県立大学学生9人が参加した。この9人に対しては、 <u>事前ワークショップ</u> (29年8月26-27日)と <u>事後指導</u> (29年11月18日)を実施することにより、フィールドワークの一連の過程について指導した。	

(2) 人材育成に関する計画

3. 若手研究者を育成するためにプロジェクトPDを1人、非常勤研究員を3人雇用し、プロジェクトの調査データを共同で分析し、ハワイ大ワークショップ(29.5.16-18)、Methods XVI(29.8.10)、コーパス合同シンポジウム(29.9.8)、JK25(ポスター発表)において共同発表を行なった。
4. また、大学院生3人、学振PD7人をプロジェクト共同研究員として参画させ、研究発表会への参加や研究発表会「指示詞・代名詞」等で発表の機会を与える等の支援を行なった。
5. さらに、上記の若手共同研究員に対して語彙集・文法書・談話テキスト、言語教材の作成のための調査旅費を援助した。調査データは30年度にデータ集としてまとめる予定である。
6. 若手研究者にフィールドワークの場を提供するために、木曽川町方言調査に参加する学生・大学院生を全国公募した。5人が応募し、そのうち4人を調査に参加させ、指導を行なった。また、椎葉村方言調査に九州大学の学生を参加させ、フィールドワークを通して指導を行なった。数人が方言で卒業論文を作成することを希望している。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画	
1. 平成26年から宮崎県椎葉村と共同で『椎葉村方言語彙集』の作成事業（平成26～30年度）を実施している。 <u>今年度は正式に村と交流協定を締結した</u> 。この事業について、宮崎日日新聞（2017年8月27日）に「10地区の方言後世に 高齢者に聞き発音記録 村と国語研共同調査」として取り上げられた。	
(2) 研究成果の社会への普及に関する計画	
2. 本プロジェクトのメンバーの三井と鎧水が朝日新聞東京版に地域の方言に関する連載記事「東京方言のほお一言」を執筆した。	
3. 方言の継承活動の一環として、29年11月6日に <u>鹿児島県沖永良部島下平川小学校の方言継承学習の発表会</u> を開催した。内容は上川平小学校の生徒が夏休みに行なった、家庭での方言学習の報告である。11月6日の発表会については、南海日日新聞（29年11月8日）に「方言でかるたや紙芝居制作 消滅危機言語の保存・継承で 国語研と下平川小」として取り上げられた。また、下平川小学校の取り組みを他地域の人にも知ってもらうために、30年2月25日に国語研で「ミニ講義：えらぶむに（琉球沖永良部語）ってどんなことば？」を開催した。	
4. 文化庁等と共に、29年12月3日に北海道大学で「 <u>日本の消滅危機言語・方言サミット（北海道大会）</u> 」を開催した。サミットは今年が4回目で、各地の状況の報告とアイヌ語の継承活動に関する発表が行われた。来場者は240人で、アンケート結果によると、95%の人が「とても満足」「まあ満足」と答えている。	
5. そのほか、29年7月29日にまつえ市民大学と共同で、 <u>まつえ市民大学自主企画講座「出雲弁は消えてしまうのか」</u> を企画・運営した（松江市市民活動センター）。プロジェクトから島根大学の野間が「出雲弁は消えてしまうのかー方言の記録・保存のための取り組みー」を、木部が「方言の展示について」を発表し、友定がコメントーターを努めた。来場者は67人。アンケート結果では、「とても良かった」「良かった」が87%であった。	
6. 椎葉民俗芸能博物館と共同で椎葉村の市民向け講演会「暮らしをうつす椎葉の方言」を30年3月25日	

に椎葉村向山日添公民館で開催した。内容は、これまでの調査の中間報告で、本プロジェクトのメンバー4人が調査の概要、椎葉の方言の特色について発表した。地元の参加者は23人であった。

7. 日本の危機言語・方言のデータのデータを使いやすくするために、「日本の危機言語・方言」データ公開のページをリニューアルした（データ移行の関係で公開は30年5月）。また「2 共同利用・共同研究に関する計画 1」で述べたように、『アイヌ語口承文芸コーパス』、「『日本言語地図』データベース」を追加公開した。
8. 企業との連携として、今年から始まった展示プロジェクトにおいて、歴博、および丹青社と共同で可搬型方言展示コンテンツを作成した。（「6 その他」参照）
9. まつえ市民大学自主企画講座、椎葉村の市民向け講演会、鹿児島県沖永良部島下平川小学校の方言継承学習等を通じて、社会人の学び直しに貢献した。

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 国際的協業に関する計画	
1. 日本の方言、琉球の方言の調査経験を持つ海外の研究者3人を共同研究員に加えた。そのうち1人が椎葉村方言調査に参加した。	
2. <u>30年2月にハワイ大学と交流協定を結んだ</u> 。ハワイ大学はハワイ語復興の拠点であり、危機言語の研究拠点でもある。また、言語学、日本語研究、東アジア研究、日系移民研究等が盛んであり、危機言語だけでなく、研究所全体として多方面にわたる連携研究が可能である。	
(2) 国際的発信に関する計画	
3. 海外の大学と連携して危機言語・方言の研究を進めるために、29年5月16-18日にハワイ大学マノア校で「 <u>NINJAL/NMJH/UHM Workshop Underdescribed Languages and Histories: Linguists' and Historians' Challenges</u> 」を開催した（機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査研究・活用」と共同開催）。本プロジェクトからは、田窪、木部、原田、佐藤、朝日が発表を行なった。参加者は合計68人であった（Faculty 29, Retired faculty 6, PhD student 17, MA student 7, unclassified graduate student 1, visiting graduate student 1, undergraduate 4, staff 1, unknown 2）。30年8月の国際シンポジウム‘ <u>Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization</u> ’の1セッションで、交流協定締結記念の講演会を行う予定である。	
4. ムートン社 <i>Handbook of Japanese Dialects</i> , <i>Handbook of the Ainu Language</i> の編集作業については、新たに始まった展示プロジェクトに時間をとられ、計画どおりに進まなかった。刊行は31年度になる予定である。	
5. 「 <u>日本の危機言語・方言</u> 」データ公開のページの英訳を作成した。今年度は、基礎語彙の英語訳、自然談話の英訳、喜界島方言調査報告書の英訳を作成した（データ移行の関係で公開は30年5月）。	

6. その他

1. 今年度から、機構の「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」が始まり、国語研として「消滅危機言語・方言の展示を通した最先端研究の可視化・高度化」プロジェクトが参加することとなった。その一環として、タイポグラフィのデザイナーである大日本タイポ組合と共同で29年11月3日～12月17日に開催されたATELIER MUJI「え、ほん？」展において展示を行なった。内容は、方言を動物等の形に図案化した「なんでももじもじ 方言版」と、標準語にない方言の音に対して新しい文字を創作する「ひらがなの成り立ち」を作成したもの。また、展示期間中の11月19日にワークショップ「君の仮名。」(国語研)を開催、11月28日の対談「え、ほうげん？　え、ほうだん？」(ATELIER MUJI)で木部が講演した。
2. 歴博、および丹青社と共同で、可搬型の方言展示コンテンツを2台作成した。30年度に神奈川大学、弘前大学、まつえ市市民活動フェスタ、富山大学で可搬型展示コンテンツを使った展示を開催する予定である。

平成29年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施した

評価項目のいずれにおいても、それぞれ十分な成果をあげており、A評価が妥当であると考えられる。特に評価される点は、研究的には『日本語諸方言コーパス』構築のためのデータ整備が進展していることである。次年度の公開に向けて、基盤となる研究作業が継続していることは、重要である。また、最先端研究の可視化を実現する方言の可搬型コンテンツの作成と使用も、これまでにない発想の社会発信となった。さらに、若手研究者の国際的視野を広げる教育活動が評価できる。これは、危機言語研究に実績のあるハワイ大学と締結した国際交流協定の実質化にも寄与した。

今後、課題となる点は、(1) 各データベースの構築目的と設計に関する情報を、明示的に公開していくこと、(2) 危機言語・方言に関する多様なデータベースの関係性を整理し、位置づけを与えること、(3) 英語世界だけではなく、韓国、中国、ロシア等、近隣諸国との研究情報の交換を少しでも進める努力をすること、以上3点にあると思われる。

《評価項目》

1. 研究について

当初の計画として、研究水準及び研究の成果等について9項目、また、研究実施体制等に関しては2項目、合計11項目の目標が立てられていたが、いずれの項目についても漏れなく計画どおりに実施され、十分な成果をあげていることは評価に値する。ちなみに、本年度出版予定の図書2冊の刊行(『日本語の格表現』『かたりの中の方言』)が次年度への持ち越しとなったが、刊行準備自体は進められていること、刊行遅延の理由が明確であり、他の機構事業の優先的実施の必要性からであったことが明記されているため、大きな問題とはならない。

ただし、研究成果の量については、次年度以降、さらに論文化の努力が望まれる。謝辞記載のあるものだけで解説・概説1件、図書・報告書4件、コーパス・データベース等3件、発表・講演39件であることについては十分な成果であるといえようが、謝辞付論文数10件については、いささ

か量的に少ない。今後は、関係論文の謝辞の記載について徹底されたい。

2. 共同利用・共同研究について

データベースの構築・公開及び講習会・講演会の開催について、また、共同利用・共同研究を推進するための大学との組織的な連携、プロジェクト合同の研究集会について、どちらも十分な成果をあげている。特記すべき点は、第1に、海外研究者を含むアドバイザリーボードの導入について検討が始まられ、次年度実施予定の国際シンポジウムの立案に客員教授の意見を反映させたことである。第2に、『日本語諸方言コーパス』が、関係者の研究発表を通して斯界からの反響を得たことがあげられる。本研究業績の学術的意義、社会的意義は大きい。『日本語諸方言コーパス』公開にかかる期待については、エビデンス資料の添付がなくとも容易に納得がいく。

改善点として望まれることは、公開後の『日本語諸方言コーパス』を用いた研究論文の産出量を、プロジェクト員、一般利用者ともに増やすことにある。そのためにも、当該コーパス構築の目的と設計理念について、十分な説明を施すことが重要となろう。

3. 教育について

研究過程及び研究成果の教育的普及は十分に行われ、大学院等への教育協力及び人材育成に関して、十分な成果をあげている。東京外国語大学との協定に基づく授業担当のみならず、方言調査の実施に際して、事前事後指導も含め、諸大学の学生に懇切な教育機会を設けた。人文系学問への支援が薄くなり、大学の方言学講座が減少した現在では、フィールドワークの希望があっても実地訓練の機会を持つことは容易ではない。これに対して、国立国語研究所が積極的な努力を見せたことは貴重である。

さらに、若手研究者に研究発表の機会を積極的に与えたことも評価される。特に、今年度は、プロジェクトPD1人、非常勤研究員3人を雇用して研究経験を積ませたばかりではなく、ハワイ大のワークショップ、合同シンポジウム等において発表の場を与えたことは、若手方言研究者に対する国際的視野の涵養という点で、高く評価される。

4. 社会との連携及び社会貢献について

地域社会との連携及び研究成果の社会への普及について、十分に成果をあげている。長年の共同研究事業を承けて、本年度は、宮崎県椎葉村と正式に交流協定が締結された。また、新聞の連載記事及びインターネットを通じた日本の危機言語・方言のデータ公開を行っているほか、鹿児島県沖永良部島、北海道、島根県松江、宮崎県椎葉村に出向き、地元への成果の還元を行った。

特筆すべき点の第1は、鹿児島県沖永良部島下平小学校において方言継承学習の発表会を開催したうえで、国立国語研究所において沖永良部島のことばのミニ講義を公開したことである。方言の継承には、地元の人々の意思とともに、言語の多様性についての知識を広め、他地域の取り組みへの理解を促す活動も重要であろう。小学生への啓蒙とともに、相互理解を促進する活動観点を評価したい。第2に、企業と合同で可搬型方言展示コンテンツを開発し、展示に用いたことがあげられる。最先端研究の可視化を助ける試みとして、評価したい。

5. グローバル化について

海外の組織との連携及び研究成果の国際的発信において、十分に成果をあげている。海外の研究者3人を共同研究員に迎え、うち1名は、椎葉村方言調査へ参加した。また、ハワイ大学と交流協定を締結した。ハワイ大学は、危機言語研究に実績があり、今後の多方面の研究連携の道を開いた。協定を結んだだけではなく、次のように、実質的な研究交流が促進されている点が、高く評価される。今年度は、ハワイ大学においてワークショップを開催し、プロジェクト研究員の研究発表が行われている。複数のプロジェクト若手研究員にも、国際的成果発信の機会が用意されたことは、すでに「3」で述べた。また、ホームページ「日本の危機言語・方言」データ公開頁の一部に英訳が添えられた。英文のみで構成される頁の必要性については、今後、検討を加えられたい。なお、本年度中に予定されていた、ムートン社からの英語による研究文献の上梓が次年度になったが、編集作業自体は進捗をみているため、問題はない。

6. その他特記事項

特になし。

通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開

プロジェクトリーダー：小木曾 智信

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

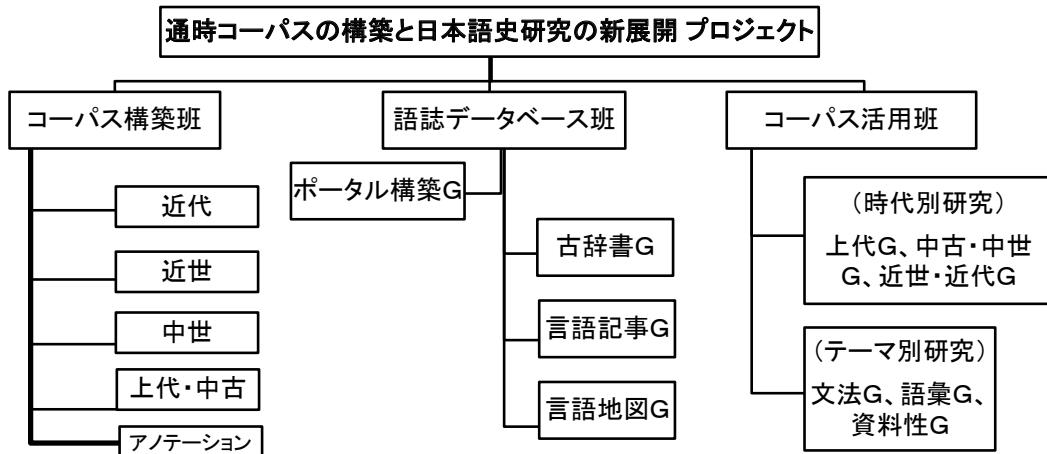
本プロジェクトは、上代（奈良時代）から近代までの日本語資料をコーパス化し、日本語の歴史研究が可能な通時コーパスと語誌のデータベースを構築する。そして、このコーパス・データベースを活用することで新たな観点から日本語史研究を展開する。従来の日本語史研究は、専門知識を必要とするさまざまな文献を取り扱う必要から、研究が特定の資料や形式に偏ったものになりがちであった。通時コーパスを構築し活用することによって個別の資料だけでなく日本語史全体をマクロな視点から見た研究を展開することを可能にする。さらにコーパス言語学で培われてきた新しい研究手法を導入し、従来行えなかった視点からの研究を展開する。

既に国語研究所では『日本語歴史コーパス』の構築に着手しているが、本プロジェクトではこのコーパスを通時コーパスとして利用可能にするために大幅に拡張する。第2期中期計画で構築済みの「平安時代編」（平安仮名文学作品）、「室町時代編」（狂言）等に加え、上代の万葉集・宣命、中古以降の和歌集、中世のキリスト教資料・軍記物・抄物、近世の洒落本・人情本、近代の雑誌・教科書・文学作品等をサブコーパスとして追加する。このほかにも、日本語史研究に資する資料を選定してコーパスに追加し、上代から近代までの日本語を一本に繋ぐ通時コーパスとして完成させる。また、コーパスと関連付けた語誌データベースを構築し、語誌情報のポータルページを公開し、研究者のみならず日本語の歴史に興味を持つ人々に役立つ情報を提供する。コーパスを活用する研究班には、上代、中古・中世、近世・近代の各時代別の研究グループの他、文法・語彙、資料性・アノテーションの検討の研究グループを設け、コーパス構築に携わるメンバーも全員が参加して研究活動を展開する。

なお、プロジェクトの実施にあたっては、オックスフォード大学東洋学部日本語研究センター、および人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」（代表者・高田智和）と連携して行う。また、実践女子大学との提携に基づきデジタル化された所蔵資料の活用を図る。

2. 年次計画（ロードマップ）

本プロジェクト実施のために下図の研究班・グループを組織する。



「コーパス構築班」は6年間で奈良時代から明治・大正時代までをカバーする通時コーパスを構築する。上代・中古、中世、近世、近代の時代ごとにグループを置き、プロジェクト非常勤研究員を配置してコーパス開発にあたる。また、アノテーション班を置き、追加情報のアノテーションに関する研究を行う。「語誌データベース班」は、コーパスと連携した語誌データベースを開発するために古辞書、言語記事、言語地図のグループを置き、各々専任教員が中心となってデータベースを開発する。またポータル構築のグループを置き、コーパスと語誌データベースの情報を統合した語誌情報ポータルサイトの設計・構築にあたる。「コーパス活用班」は、時代別に上代、中古・中世、近世・近代の研究グループを置き、コーパス構築班と連携しつつ各時代の日本語の研究にあたる。また分野別に、文法、語彙の研究グループを置き各分野の研究にあたるほか、文体・資料性のグループを置き、コーパスに追加する資料に関する研究を行う。このほか、人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築・表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」の研究組織と連携して表記の研究を行う。コーパス活用班にはコーパス構築班のメンバー、PD・大学院生を含む若手研究者を参加させる。

■年次計画

※各年、研究発表会（シンポジウムを含む）・講習会を1回以上開催する。サブコーパスの名称は仮称。

平成28年度（1年目）

- ・「鎌倉時代編II日記・紀行」、「明治・大正編I雑誌」（太陽・女性雑誌非コアデータ）を公開。
- ・日本語学会でワークショップを開催。

平成29年度（2年目）

- ・「奈良時代編I万葉集」、「室町時代編IIキリスト教資料」、「江戸時代編I洒落本」を公開。

平成30年度（3年目）

- ・「江戸時代編II人情本」、「明治・大正編II教科書」を公開。
- ・古辞書データベースの試作版を公開。

●3年目までの成果物

コーパス構築班は『日本語歴史コーパス』を拡張し下記のサブコーパスを公開する。

「鎌倉時代編II日記・紀行」「室町時代編IIキリスト教資料」「奈良時代編I万葉集」「明治・大正編I雑誌」「明治・大正編II教科書」、「江戸時代編I洒落本」「江戸時代編II人情本」

語誌データベース班は、語誌データベースの一部として古辞書データベースの試行版を公開する。コーパス活用班は、ワークショップ・公開研究会を2回以上、国際シンポジウムを1回開催し、書籍1冊を刊行する。また、プロジェクト全体として一般向けのNINJALフォーラムを1回開催する。

平成31年度（4年目）

- ・「和歌集編（八代集）」、「奈良時代編II宣命」を公開。

平成32年度（5年目）

- ・「明治・大正編III文学作品」、「鎌倉時代編III軍記」、「江戸時代編III近松」を公開。

- ・語誌情報ポータルサイトの公開。

- ・研究論文集の出版。

● 5年目までの成果物

コーパス構築班は、奈良時代から明治・大正時代までの通時的な研究ができるコーパスとして『日本語歴史コーパス』を拡張し公開する。語誌データベース班は、各種語誌データベースを構築し、語誌情報のポータルサイトを公開する。コーパス活用班は、国際シンポジウムを1回開催し、研究論文集を1冊以上出版する。

平成33年度（6年目）

- ・『日本語歴史コーパス』（奈良時代～明治・大正時代）の拡張完了。
- ・語誌情報ポータルサイトの完成。

II. 29年度活動概要

29年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

『日本語歴史コーパス』を通時コーパスとして拡充するため、キリストン資料と洒落本のコーパス化のための調査・研究を行った。またコーパスと連携した語誌研究のため、古辞書データベース・言語地図データベース・言語記事データベースを整備した。さらに、コーパスを活用した研究を行うため、研究グループを設けて計8回の研究発表会を開催した。8月には、各グループ合同の研究会として、「通時コーパス活用班合同研究集会」を開催した。3月にはプロジェクト成果の発表会として「通時コーパス」シンポジウム2018を開催した。以上の研究成果は、プロジェクトに対する謝辞を含むものだけで論文・ブックチャプター等8件、研究発表・講演45件、コーパス・データベース等5件であった。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

『日本語歴史コーパス』に新たに「奈良時代編I万葉集」「室町時代編IIキリストン資料」「江戸時代編I洒落本」を追加、公開した。万葉集とキリストン資料は、漢字かな交じり校訂本文と万葉仮名やローマ字の原文とを対照して利用できるようにし、洒落本は国内研究機関がインターネット上で公開している原本画像データの当該ページとのリンクを整備し、原資料の確認を容易にした。語誌データベースの一部として、古辞書データベースと言語地図データベースの一部を公開した。また、オックスフォード大学東洋学部日本語研究センターとの共同研究により『オックスフォード上代日本語コーパス』を整備し、『オックスフォードNINJAL上代日本語コーパス』として国語研究所のWebサイトから公開した。

3. 教育に関する計画

東京外国語大学・一橋大学との連携協定に基づき、クロスアポイントメント教員、連携教員として各1名が大学院の授業・学生指導を行った。プロジェクトで雇用したプロジェクト非常勤研究員や、共同研究員として参加させた大学院生・若手研究者らに研究発表の機会を与えるとともに国際学会を含む研究発表のための旅費を援助した。大学院生・若手研究者らを対象に『日本語歴史コーパス』中納言講習会を4回開催した。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

(株)小学館・(株)ネットアドバンスと連携して新規公開した『日本語歴史コーパス』「奈良時代編 I 万葉集」のデータについても、検索アプリケーション「中納言」とジャパンナレッジ「新編日本古典文学全集」本文とのリンクを行った。また、情報システム研究機構・人文学オーブンデータ共同利用センター(CODH)と共に、八木書店・日本近代文学館と覚書を交わし、近代文献のOCRに関する研究のためのデータ利用環境を整備した。中学校・高等学校の国語科教員及び教職課程の学生院生向けに『日本語歴史コーパス』活用の講習会を2回開催した。

『日本語歴史コーパス』をコーパス検索アプリケーション「中納言」を通してインターネット上で無償にて一般公開し、新規の申し込みユーザー数が3507、検索件数が112467あった。

5. グローバル化に関する計画

国際発信のためヨーロッパ日本研究協会(EAJS2017・リスボン)において通時コーパスのパネル発表“Construction and utilization of the Corpus of Historical Japanese: Man'yoshu and Christian materials”を開催した。このほか、ハワイ大学マノア校で開催された研究集会、ソウルで開催された韓国日本語学会、モントリオールで開催されたDigital Humanities 2018などで研究発表を行った。

また、オックスフォード大学と共同で「NINJAL オックスフォード上代日本語コーパス」を公開するための英語Webサイトの作成を行ったほか、『日本語歴史コーパス』の新規公開データ(万葉集・キリスト教資料・洒落本)について、英文のWebページを作成し情報の発信をおこなった。

6. その他

特になし

III. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画どおり実施した
(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画	
1. コーパスと連携した語誌研究を展開するために、 <u>古辞書データベース・言語地図データベース・言語記事データベースの整備</u> を行った。	
2. <u>通時コーパス活用班の各グループの研究発表会を8回開催</u> した(下記参照)。	
<ul style="list-style-type: none">・近世・近代グループ研究会、明治大学、2017年6月11日、17名参加・国語教育グループ研究会、国語研、2017年7月30日、20名参加・中古・中世グループ+語彙グループ合同研究会、国語研、2017年8月8日、20名参加・文法グループ研究会、国語研、2017年8月20日、9名参加・近世・近代グループ+文体・資料性グループ合同研究会、国語研、2017年8月20日、20名参加・近世・近代グループ研究会、明治大学、2017年12月16日、21名参加・国語教育グループ研究会、国語研、2017年12月27日、10名参加・国語教育グループ研究会、群馬大学、2018年3月15日、21名参加	
2' 通時コーパス各グループ合同の研究会として、「 <u>通時コーパス活用班合同研究集会</u> 」を開催し、15件の	

研究発表（うち8件はポスター発表）を行った。60人（うち海外3人、大学院生9人）の参加があった（8月19日・国語研）。

3. プロジェクト全体の研究発表会として2018年3月10日に「通時コーパスシンポジウム2018」を開催し、84人（うち海外2人、大学院生10人）の参加があった。
4. EAJS（ヨーロッパ日本研究協会）において日本語通時コーパスのパネルセッションを開催した。詳細は、
5. グローバル化に関する計画（2）。
5. 以上の研究成果は、プロジェクト共同研究員の研究成果も含めて論文・ブックチャプター等8件、発表・講演45件、コーパス・データベース等5件として公開した。（プロジェクトに対する謝辞を含むものに限った。「研究成果一覧」参照）
6. コーパス構築のため、大英図書館においてキリストン資料の原本調査、ハワイ大学マノア校において大正期日本語教科書の予備調査を行った。
7. 上記の研究成果のうち、共同研究員の村山実和子プロジェクト非常勤研究員が情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会において奨励賞を受賞した。

（2）研究実施体制等に関する計画

8. 『日本語歴史コーパス』を活用した研究を実施するために、国内外の研究者71人をプロジェクト共同研究員として組織した（国内67人、海外4人）。
9. 『日本語歴史コーパス』の構築を実施するためプロジェクト非常勤研究員4名を雇用し、関連するプロジェクト・科研費による2名とあわせ、合計6名でコーパス構築を行った。
10. 人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」の研究組織と連携して研究を実施した。
11. 情報システム研究機構・人文学オープンデータ共同利用センター（CODH）との共同で、近代語のコーパスの整備と活用に関する研究を行い、深層学習による文字認識のための学習データとして国語研が開発した「太陽コーパス」のテキストと画像を整備して提供した。
12. 万葉集のコーパスを活用した研究を推進するために、英国オックスフォード大学との連携協定のもとで共同研究を推進し、成果を元に『オックスフォード上代日本語コーパス』を改訂し『NINJAL オックスフォード上代日本語コーパス』として公開した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
（1）共同利用・共同研究に関する計画	
<ol style="list-style-type: none">1. 『日本語歴史コーパス』「奈良時代I万葉集」（全20巻）を整備し、9月29日に万葉仮名の原文情報を付けて公開した。2. 『日本語歴史コーパス』「室町時代編IIキリストン資料」を整備し、3月30日にローマ字の原文情報を付けて公開した。3. 『日本語歴史コーパス』「江戸時代編I洒落本」として30作品を整備し、その大部分の作品を本文画像（国語研蔵本、早稲田大学中央図書館、大阪大学（忍頂寺文庫洒落本データベース）、東京大学国語研究	

室, 国文学研究資料館) とリンクしたうえで 3 月 30 日に公開した。
4. 『日本語歴史コーパス』「江戸時代編Ⅱ人情本」, 「明治・大正編Ⅱ教科書」, 「奈良時代編Ⅱ宣命」, 「江戸時代編Ⅲ近松」を整備し, 平成 30 年度以降に公開するための準備を行った。 ・語誌データベースのうち「古辞書データベース」の一部データの公開を行った。 ・語誌データベースのうち「言語地図データベース」の画像データ 187 枚の公開を行った。
5. プロジェクト全体の研究発表会「通時コーパス」シンポジウム 2018 を開催した (詳細は 1. 研究に関する計画 (1) 3,)。
6. <u>日本語学会 2017 年度秋季大会シンポジウム「ルールを逸脱した表現の産出と許容」において通時コーパスを活用した研究発表を行った (11 月 12 日)。</u>
(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画
7. コーパス関係のプロジェクトや科研と合同で 29 年 9 月 8 日に合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—話者の属性—」を国語研講堂で開催した。招待講演 1 件 (蒲谷宏), 発表 4 件 (追田, 木部, 小磯, 小木曾), 参加者は, 82 人 (うち学生 9 人, 国外機関所属者 1 人) であった。
8. 万葉集のコーパスを活用した研究を推進するために, 英国オックスフォード大学との連携協定のもとで共同研究を推進した。
9. 人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」の研究組織と連携して研究を実施した。
10. 情報システム研究機構・人文学オープンデータ共同利用センター (CODH) との共同で, 近代語のコーパスの整備と活用に関する研究を実施した。

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 大学院等への教育協力に関する計画	
1. オックスフォード大学から 1 名 (Maria Telegina 氏), 北京外国语大学から 1 名 (徐天成氏) の計 2 名の特別共同利用研究員を受け入れた。	
2. 東京外国语大学との連携協定に基づき, クロスアポイントメント教員として 1 名が「Japan Studies I コーパス日本語学入門」「Japan Studies II 日本語コーパスの活用」の授業の授業を担当した。	
3. 一橋大学との連携協定に基づき, 連携教員として 1 名が演習授業を行った。	
(2) 人材育成に関する計画	
4. 若手研究者を育成するために関連科研費とあわせて非常勤研究員を 5 人雇用した。(有資格者の応募がなく, 今年度は PD フェローの雇用は行えなかった。)	
5. 大学院生 5 人・学振 PD1 名を共同研究員としてプロジェクトに参画させ共同研究を行った。	
6. コーパス活用班研究会, 「通時コーパス」シンポジウムにおいて, 大学院生に発表の機会の提供と旅費の援助を行い, 大学院生による 4 件の研究発表があった。	
7. 共同研究員の大学院生 2 名, 若手研究者 2 名に対して国際学会での研究発表の機会を与え, 経費の援助	

<p>を行った (EAJS2017・リスボン=5 (2) 3), Digital Humanities 2017・モントリオール=5 (2) 6)。8. 『日本語歴史コーパス』利用の講習会 (チュートリアル) を国内で 4 回実施した (国語研・7 月 30 日・24 名参加, 東京大学・9 月 19 日・25 名参加, 千葉大学・9 月 25 日・13 名参加, 群馬大学・3 月 15 日・20 名参加)。</p>	
--	--

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</p>	
<p>1. (株)小学館・(株)ネットアドバンスと連携して新規公開した『日本語歴史コーパス』「奈良時代編 I 万葉集」のデータについても、検索アプリケーション「中納言」とジャパンナレッジ「新編日本古典文学全集」本文とのリンクを行った。</p> <p>2. 情報システム研究機構・人文学オープンデータ共同利用センター (CODH) との共同で、八木書店・日本近代文学館と覚書を交わし、近代文献の OCR に関する研究のためのデータ利用環境を整備した。</p>	
<p>(2) 研究成果の社会への普及に関する計画</p>	
<p>3. 『日本語歴史コーパス』に「万葉集」「キリストン資料」「洒落本」を追加して拡充し、コーパス検索アプリケーション「中納言」を通してインターネット上で無償にて公開した。新規の申し込みユーザー数は 3507、検索件数は 112467 であった。</p> <p>4. 歴史的資料を対象とした形態素解析のための辞書整備をコーパス開発センターと協力して行い、インターネット上で無償にて公開した。</p> <p>5. 中学校・高等学校の国語科教員及び教職課程の学生院生向けに『日本語歴史コーパス』活用の講習会を 2 回開催した (7 月 30 日・国語研・24 名参加 (うち一般参加 14 名), 3 月 15 日・群馬大学・20 名参加 (うち一般参加 20 名))。</p>	

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>(1) 国際的協業に関する計画</p>	
<p>1. オックスフォード大学東洋学部日本語研究センターと共同で万葉集のコーパス構築、統語情報アノテーションに関する研究を行った。さらに、『オックスフォード上代日本語コーパス』を改訂して新たに『オックスフォード NINJAL 上代日本語コーパス』(ONCOJ) として国語研究所で公開した (3 月 30 日)。</p> <p>2. 海外の研究者 4 人を共同研究員に加え、『日本語歴史コーパス』活用に関する共同研究を推進した。このうち、シカゴ大学の Hoyt Long 准教授を外来研究員として迎え、近代語の語彙研究について共同研究を行った (11 月 13~17 日滞在)。</p>	
<p>(2) 国際的発信に関する計画</p>	
<p>3. ヨーロッパ日本研究協会 (EAJS2017) において通時コーパスのパネルセッション "Construction and utilization of the Corpus of Historical Japanese: Man'yoshu and Christian materials" を開催し、プロジェクト成果を発信した (8 月 28 日、リスボン)。</p>	

4. ハワイ大学マノア校 (UHM) で NINJAL/NMJH/UHM Workshop Underdescribed Languages and Histories: Linguists' and Historians' Challenges に参加し『日本語歴史コーパス』の紹介を行った (5月 11 日, ホノルル)。
5. 韓国日本語学会の特別企画として『日本語歴史コーパス』『現代日本語書き言葉コーパス』利用の講習会を行った (9月 23 日, ソウル)。
6. Digital Humanities 2017 に若手共同研究員を派遣し, 通時コーパスの成果発表を行った。 (8月 9 日, モントリオール)。
7. 『日本語歴史コーパス』の新規公開データ (万葉集・キリスト教資料・洒落本) について, 英文 Web ページを作成し情報の発信をおこなった。
8. 『オックスフォード上代日本語コーパス』を改訂し『NINJAL オックスフォード上代日本語コーパス』として公開するための英語 (および日本語) Web サイトの作成を行った。

6. その他

特になし。

平成 29 年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施した

個別の項目で見れば, B 判定に当たるものがありはするものの, 総合的に見れば, 計画を上回った実施の功を挙げていると評価できる。特に, 1 「研究」, 5 「グローバル化」に関して, 目覚ましい成果を挙げていると判断される。3 「教育」, 4 「社会との連携及び社会貢献」に関しては, 評価そのものは B 判定となるものの, 計画との比較から見ると若干上回った面が観察される。また, 2 「共同利用・共同研究」の面でも, 海外の大学との連携協定を見ることができ, 好印象である。通時コーパスは, やはり, 利用されてこそ, さらなる価値を發揮するものであり, また, そこに日本語史研究の新展開も生まれるものであるから, 実際の研究のケーススタディなども (簡単な見本でよいので) 付されたチュートリアルな講習会をさかんにしながら, 海外への発信もさらに行ってほしい。

《評価項目》

1. 研究について

29 年度の都合 11 件の当初計画に照らして, 計画以上の実施を見ていると判断される。この項目の自己評価 B は, やや辛めではないか。すなわち, 当初計画の 5 「コーパス合同シンポジウム」, 6 「書き言葉コーパスを活用した教育プログラム」については記述がないので, 実施はなかつたものと判断されるところは, 評価から差し引かれるべきかとも思われるものの, 1 「古辞書データベース試作版の構築準備」の当初計画に加えて「言語地図データベース」「言語記事データベース」の整備を行っている点, 2 「コーパスを活用した日本語史研究の研究発表会」を 5 回以上行うという当初計画に対して 8 回の開催を見ている点, 3 「通時コーパスシンポジウム」に海外からの参加

者3人を組む84人の参加を見ている点、7「日本語歴史コーパスを活用した研究実施のための研究員組織」当初の50人以上という計画に対して71人の組織が達成できている点等、それを補って余りある。また、村山実和子共同研究員が情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会で奨励賞を得ていることは特筆に値し、研究の水準も外的な高い評価に叶うものであることを証する。ただし、研究成果として、45件の発表・講演を数えるのに対して論文等は8本であるというところは、なお一層の論文化への努力が望まれる。

2. 共同利用・共同研究について

29年度の都合9件の当初計画に照らして、計画通りの実施を見ていると判断される。自己評価はAとなっていて、どのような点で計画以上だったのかという点が主張されているが、それはむしろ、1「研究について」で主張されるべき点であって（上記1の評価参照）、2「共同利用・共同研究」には必ずしも当たらないのではないか。また、当初計画の5「日本語歴史コーパス利用の講習会」に対して、実施の5のシンポジウムは、性格が異なるものなのではないか。ただし、それ以外のところでは、当初計画通りに進んでいたことが確認できる。なかでも、英國オックスフォード大学との連携協定は、海外との共同研究という点で、5「グローバル化」とも関わって、特筆に値する。コーパスは、構築した後にどれだけ利用してもらえるかがカギになるものであるから、シンポジウムのような研究者・大学院生向けのものだけでなく、場合によっては学部学生にまで裾野を広げた、利用のための啓蒙的な講習会となるべく多く広く開催することを考えはどうか。また、それはWebを利用したもの（動画を含め）であってもよいのではないか。

3. 教育について

29年度の都合6件の当初計画に照らして、やや計画を上回る実施を見ていると判断される。ただし、A判定とまではいかないと思われる所以、自己評価Bは妥当と考えられる。オックスフォード大学、北京外国语大学のような海外の教育研究機関との連携も評価に値し、東京外国语大学ならびに一橋大学における授業担当も、教育の実を挙げていると判断できる。さらに、若手研究者・大学院生への育成事業も順当なものと評価できる。P Dフェローの雇用については、そもそも有資格者の応募がなかったのであるから、雇用が叶わなかったとしても問題はない。とはいえ、そのような公募をしていることをさらに広く報せる方途も、今後検討の余地があるのではないかとも思われる。

4. 社会との連携及び社会貢献について

29年度の都合6件の当初計画に照らして、やや計画を上回る実施を見たと判定される。自己評価Bは妥当と考えられる。とはいえ、日本語歴史コーパスをWeb上で無償公開しているということは、貴重かつ極めて意義深い、計画以上の貢献と効果なのであって、当初計画通りに行えていることそのものが、高い評価に値する。また、4「歴史的資料を対象とした形態素解析のための辞書」は、それ自体、高度な言語分析の結晶とも言うべきものであって、それが無償で公開されることの社会貢献上の意義は、一般に科学的成果が広く社会に伝えられる姿を示しているという観点からも、計り知れない。また、中学校・高等学校の国語科教員向け及び教職課程の学生院生向けに、講習会

を開催していることも、社会貢献という点で意義深い。なお、一点、「一般参加」という意味が分かりづらい。教員以外の一般の人ということか、学生院生以外ということか。

5. グローバル化について

29年度の都合5件の当初計画に照らして、はるかに計画を上回る実施を見たと判定できる。自己評価のAは妥当と言える。たとえば、オックスフォード大学東洋学部日本語研究センターと共同で万葉集のコーパス構築、統語情報アノテーションに関する研究を行ったうえに、『オックスフォード上代日本語コーパス』を改訂して新たに『オックスフォードNINJAL上代日本語コーパス』(ONCOJ)として国語研究所で公開したこと、ヨーロッパ日本研究協会(EAJS2017)において通時コーパスのパネルセッションを開催したこと、ハワイ大学マノア校(UHM)で『日本語歴史コーパス』の紹介を行ったことなど、Digital Humanities 2017に若手共同研究員を派遣し、通時コーパスの成果発表を行ったことなど、よくグローバル化の実を挙げることに貢献していると評価できる。また、『日本語歴史コーパス』の新規公開データ(万葉集・キリストン資料・洒落本)について、英文Webページを作成し情報の発信を行ったことも、Web上のグローバルな情報発信の一環と認められる。

6. その他特記事項

特になし。

大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究

プロジェクトリーダー：小磯 花絵

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトの目的は、均衡性を考慮した大規模な日本語日常会話コーパスを構築し、それに基づく分析を通して、日常会話を含む話し言葉の特性を、レジスター・相互行為・経年変化の観点から多角的に解明することである。そのために、（1）多様な日常場面の会話 200 時間を収めた規模コーパスの構築を目指す会話コーパス構築班、及び、構築したコーパスを用いて、（2）語彙・文法・音声などに着目してレジスター的多様性や仕組みを研究するレジスター班、（3）会話相互行為の中で文法が果たす役割や構造を研究する相互行為班、（4）語彙・文法・音声などに着目して話し言葉の経年変化を研究する経年変化班の四つの班を組織して研究を進める。

会話コーパス構築班では、日常の会話行動に関する調査にもとづき、自宅・職場・店舗・屋外での家族・友人・同僚・店員との会話など、多様な日常場面での会話を網羅するようコーパスを設計するものであり、世界的に見ても新しい試みである。また、従来の多くの会話コーパスのように収録のために人を集めて会話をもらうのではなく、生活の中で生じる会話を会話者自身に収録してもらうことにより、日常の会話を自然な形で記録する点にも特色がある。会話の音声・映像を収録し、文字化した上で、形態論情報や統語情報、談話情報などのアノテーションを施し、一般に公開する。これにより、話し言葉に関する高度なコーパスベースの研究基盤の確立を目指す。こうしたコーパスは、話し言葉や会話行動に関する基礎研究だけでなく、日本語教育や辞書編纂、音声情報処理、ロボット工学などの応用研究にも資するものである。また、後世の人々が 21 世紀初頭の日本人の生活や文化を知るための貴重な記録となる。

コーパスに基づく話し言葉研究では、現代の日常会話に加え、講演などの独話や発話を前提に書き言葉で記されたシナリオ、発話を前提としない小説などの会話文、50 年前の話し言葉など、多様なデータを対象に、高度な統計的分析や緻密な微視的分析を通して、話し言葉の語彙・文法・音声・相互行為上の特性や仕組み、その経年変化の実態を、実証的に解明する。こうした研究を支えるものとして、昔の話し言葉のデータや BCCWJ の小説などの会話文、国会会議録などを対象にデータを整備し一般に公開する。

このように本プロジェクトでは、大規模日常会話を含む様々なコーパスやデータベースを整備・構築し一般に公開することによって、共同利用・共同研究の基盤強化をはかる。

2. 年次計画（ロードマップ）

28 年度	会話コーパス整備	会話収録・データ整備の開始 アノテーション仕様策定・自動付与システム整備 [昭和話し言葉コーパス] 転記テキスト作成開始 [国会会議録検索システム] 構築開始 [BCCWJ 発話者情報] アノテーション仕様策定・付与開始 [名大会話コーパス] 形態論情報付与 班ごとに研究会合を持ち研究を始動 シンポジウム 1 回、班合同研究発表会 1 回開催
	その他のデータ整備	
	研究	
	成果発表	

	若手育成 成果物公開	コーパス利用講習会 2 回開催 <u>『名大会話コーパス』一般公開 (形態論情報付きテキスト検索版)</u>
29 年度	会話コーパス整備 その他のデータ整備 研究 成果発表 若手育成 成果物公開	会話収録・データ整備の継続 コアデータ・アノテーション人手修正開始 プロジェクト内部のデータ公開 [昭和話し言葉コーパス] 転記テキスト作成継続 [BCCWJ 発話者情報] アノテーション継続 既存データを中心とする予備研究を推進 シンポジウム 1 回, 班合同公開研究発表会 1 回開催 コーパス講習会 2 回開催 <u>『国会会議録検索システム』一般公開</u>
30 年度	会話コーパス整備 その他のデータ整備 研究 成果発表 若手育成 成果物公開	会話収録・データ整備の継続 コアデータ・アノテーション人手修正継続 [昭和話し言葉データ] アノテーション開始, モニター公開準備 [BCCWJ 発話者情報] 検索システム整備開始 既存データにプロジェクト整備データを加えて研究を展開 シンポジウム 1 回, 班合同公開研究発表会 1 回 フォーラム (話し言葉の経年変化) 1 回開催 コーパス講習会 2 回開催 <u>『日本語日常会話コーパス』50 時間モニター公開</u> <u>『昭和話し言葉コーパス』25 時間モニター公開</u>
31 年度	会話コーパス整備 その他のデータ整備 研究 成果発表 若手育成 成果物公開	会話収録・データ整備の継続 コアデータ・アノテーション人手修正継続 <u>『昭和話し言葉コーパス』アノテーション継続</u> 既存データにモニター公開データを加えて本研究を開始・コーパス評価 シンポジウム 1 回, 班合同公開研究発表会 1 回開催 コーパス講習会 2 回開催 <u>『BCCWJ 発話者情報』一般公開 (中納言版)</u>
32 年度	会話コーパス整備 研究 成果発表 若手育成 成果物公開	会話収録・データ整備の継続 コアデータ・アノテーション人手修正継続 既存データにモニター公開データを加えて本研究を推進・コーパス評価 シンポジウム 1 回, 班合同公開研究発表会 1 回開催 コーパス講習会 2 回開催 <u>『昭和話し言葉コーパス』本公開</u>

33年度	会話コーパス整備	公開準備（データ統合・検証、個人情報処理など）
	研究	研究成果のとりまとめ
	成果発表	シンポジウム1回開催
	成果物公開	『日本語日常会話コーパス』本公開

II. 29年度活動概要

29年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

- ・築中の『日本語日常会話コーパス』のうち20時間のデータを、10月に本プロジェクトおよび領域指定型プロジェクト「創発参与」のメンバーに公開し、各班で整備を進めた他のコーパスと合わせ、研究を推進した。その成果の報告会としてシンポジウム『日常会話コーパス』IIIを30年3月19日に国語研で開催した。
- ・世界における通時音声コーパスの開発状況や研究の可能性について議論するために、29年9月4日に国際シンポジウム‘International Symposium on Diachronic Speech Corpora’を国語研で開催した。
- ・コーパス関係のプロジェクトや科研と合同で、29年9月8日に合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—話者の属性—」を国語研で、30年3月18日にシンポジウム「ことば・認知・インタラクション」6を東京工科大で開催し、連携を深めた。
- ・以上の研究成果は、プロジェクト共同研究員の研究成果も含めて論文2件、報告書・図書1冊、ブックチャプター1件、発表・講演30件、データベース等6件として公開した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

- ・『日本語日常会話コーパス』のデータとして490時間の会話の収録、94時間の転記1次作業、41時間の形態論情報付与を実施し、公開のための処理を終えた50時間のデータを30年3月にプロジェクトメンバーに限定公開した。
- ・『昭和話し言葉コーパス』については、独話25時間について予定通り音声と同期付けた転記テキストの作成を終了し、29年6月にプロジェクトメンバーに限定公開した。
- ・『BCCWJ』のうち2419サンプル（図書館サブコーパスの小説の76%に相当）の会話文への話者情報の付与を終了し、29年12月にプロジェクトメンバーに限定公開した。
- ・『国会会議録』ひまわり版に対し話者の生年情報を追加、『名大会話コーパス』中納言版に会話メタ情報を追加した上で、それぞれ29年6月、30年3月に再公開した。
- ・『女性のことば・男性のことば-職場編-』（ひつじ書房）収録テキストを形態素解析し、出版社および開発者の許諾を得た上で、コーパス開発センターと共同して中納言で一般公開する準備を進めた。
- ・『日本語日常会話コーパス』設計のために実施した会話行動調査の生データを整理し、30年3月にプロジェクトのホームページで公開した。

3. 教育に関する計画

- ・コーパス言語学分野の人材を育成するために、若手研究者や大学院生を主対象に、第3回コーパス利用講習会（ひまわり・中納言の2コース）を2017年9月7日に、第4回コーパス利用講習会（同2コース）

を 2018 年 3 月 19 日に開催し、それぞれ 23 名、 32 名が参加した。また講習会で用いた資料をプロジェクトのホームページで公開した。

- ・若手研究者を主対象に、 NINJAL チュートリアル「コーパスに基づく話し言葉の研究」を、 29 年 11 月 30 日と 30 年 3 月 8 日に開催し、 それぞれ、 21 名、 24 名が参加した。
- ・一橋大学との協定に基づき、 2 名の連携教授が、 コーパスを活用した計量的研究の演習を担当した。
- ・共同研究員が指導する大学生・大学院生 3 名に『日本語日常会話コーパス』の一部を提供し、 うち 1 名がコーパスを活用した研究で卒業論文を執筆した。また 3 名がシンポジウム『日常会話コーパス』 III (30 年 3 月 19 日) で発表した。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

- ・プロジェクトで整備・公開した『名大会話コーパス』、『国会会議録』を、 インターネットを通して一般に公開した。『名大会話コーパス』は会話研究・日本語教育研究において広く利用されており、 今年度、 中納言版は 485 件、 ひまわりパッケージ版は 266 件の新規利用があった。また『国会会議録』は経年変化・レジスター研究において広く利用されており、 ひまわりパッケージ版について今年度は 340 件の新規利用があった。
- ・「通時コーパス」プロジェクトと共同し、 日本語の変化をテーマとする一般向けのフォーラムを企画し、 30 年 11 月 4 日の開催に向けて準備を進めた。

5. グローバル化に関する計画

- ・29 年 9 月 4 日に国際シンポジウム ‘International Symposium on Diachronic Speech Corpora’ を国語研講堂で開催し、 英語、 フィンランド語、 イタリア語、 フランス語、 日本語を対象とする通時音声コーパスの開発状況や研究の可能性について議論した。
- ・30 年 5 月に開催される言語資源に関する国際会議 LREC (11th Language Resources and Evaluation Conference) でワークショップ ‘Language and Body in Real Life’ を提案し、 採択された。今年度は 30 年 5 月 7 日の開催に向けて準備を進めた。
- ・海外在住の研究者 1 名をプロジェクト共同研究員として加え、『日本語日常会話コーパス』を用いたデータセッションを通して、 コーパスについて評価してもらった。

6. その他

特になし。

III. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画	
1. 構築中の『日本語日常会話コーパス』 200 時間のうち、 公開のための処理（個人情報等のマスキングや映像のボカシ処理など）まで終了した 20 時間分の会話データを、 10 月にプロジェクトの研究班および領域指定型プロジェクト「会話における創発的参与構造の解明と類型化」（以下「創発参与」）のメンバ	

一に限定して公開し、各班で整備を進めた他のコーパスと合わせ、研究を推進した。その成果の報告会として、「創発参与」プロジェクトと合同でシンポジウム『日常会話コーパス』IIIを30年3月19日に国語研講堂で開催した。口頭発表4件、ポスター発表23件、デモンストレーション1件、参加者は144名（うち学生32名）であった。

2. 経年変化班が主導し、29年9月4日に国際シンポジウム「International Symposium on Diachronic Speech Corpora」を国語研講堂で開催した。経年変化班班長の丸山のほか4名（Bas Aarts, Marja-Liisa Helasvuo, Alessandro Panunzi, Marie Skrovec）が登壇し、英語、フィンランド語、イタリア語、フランス語、日本語を対象とする通時音声コーパスの開発状況や研究の可能性について議論した。参加者は49名（うち学生8名）であった。
3. 29年9月8日にコーパス合同シンポジウムを開催した（詳細は「2. 共同利用・共同研究に関する計画」を参照）。また会話コーパスに関する科研プロジェクトと合同で、30年3月18日にシンポジウム「ことば・認知・インタラクション」6を東京工科大学蒲田キャンパスにて開催した。口頭発表4件、パネル討論1件、参加者は80名（うち学生15名）であった。
4. 各班の研究を実質的に推進するため、各班年2回計6回の研究会合を開催した（レジスター班：29年7月20日・30年1月18日、相互行為班：29年8月9日・30年2月2-4日、経年変化班：29年8月10日、29年12月16日）。
5. 自然な日常会話を収録するため、研究者は収録の場に一切介在せず、一般の人に映像・音声の収録や承諾書等の収集を依頼するという、新しい方法を採用した。この収録に向け、調査協力者向けの資料として、各種マニュアルや、調査の目的・意義などを記したビラ・ホームページを作成した。蓄積した収録法の知見を関連分野で共有するため、報告書『日常会話の収録法』としてとりまとめ、3月にプロジェクトのホームページで公開した。
6. 以上の研究成果は、プロジェクト共同研究員の研究成果も含めて論文2件、報告書・図書1冊、ブックチャプター1件、発表・講演30件、データベース等6件として公開した。（「研究成果一覧」参照）
7. 『日本語日常会話コーパス』は、映像を含め多様な日常場面の会話を収録・公開するというものであり、世界的に見て新しい取り組みである。そのため、データの収録法やデータ公開に向けた法的・倫理的観点からの対応方針に関する知見の共有が強く求められている。

（2）研究実施体制等に関する計画

8. コーパスに基づく話し言葉研究を推進するために、国内外の研究者39名をプロジェクト共同研究員として組織した。今年度は、日本語学（音韻・文体・談話）、日本語教育、社会学、自然言語処理の分野の研究者の拡充を図った。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
（1）共同利用・共同研究に関する計画	
1. 『日本語日常会話コーパス』については次の通り整備し、30年度のモニター公開（50時間）および33年度の本公開（200時間）に向けて準備を進めた。モニター公開データ50時間の会話映像について、人工知能学会SLUD研究会およびシンポジウム「日常会話コーパス」IIIでデモンストレーションを行った。 (a)収録：協力者40名のうち、今年度は15名（合計33名、約490時間）の収録が終了した。この中か	

ら、会話行動調査などを参考に会話の種類・場面・話者のバランスを考慮して、コーパスに格納するデータの選定を進めた。現時点でのコーパス格納データのバランスを検証し、学会で報告した。

(b) 転記：コーパス 200 時間のうち、転記 1 次作業を 94 時間分、最終公開作業を 50 時間分、実施した。

(c) アノテーション：形態論（短単位）情報は、41 時間のデータについて 1 次人手修正作業を終えた。

談話行為情報は、ISO24617-2 の基準を日常会話用に整備し、マニュアルを作成した上でラベリングの試行を進めた。韻律情報は、X-JToBI の簡略化基準を整備し、マニュアルを作成した上でラベリングの試行を進めた。照応・共参照などその他のアノテーションについても、実現の方策などについて検討した。公開のための処理を終えた50 時間のデータ（音声・映像・転記テキスト・形態論情報・メタ情報）を 3 月にプロジェクトメンバーに限定して公開した（10 月に先行して共有した 20 時間を含む）。これにより日常会話を対象とする各班の研究を本格的に進めることが可能となった。

2. 『昭和話し言葉コーパス』については、独話 25 時間について、予定通り音声と同期付けた転記テキストの作成を終了した。また講演や話者などに関するメタ情報も整理した。これらの転記テキスト・音声・メタ情報を、6 月にプロジェクトメンバーに限定して公開した。このデータの整備により、平成の講演を多数含む『日本語話し言葉コーパス』と対照させることで、来年度から講演の経年変化を本格的に調査することが可能となった。
3. BCCWJ のうち 2419 サンプル（BCCWJ の図書館サブコーパス中の小説の 76%に相当）に対し、会話文の発話者情報（話者名・性別・年代）の付与を終了し、12 月にプロジェクトメンバーに限定して公開した。これにより、書かれた話し言葉と実際の話し言葉の違いを本格的に調査することが可能となった。
4. 28 年度に一般公開した『国会会議録』ひまわり版に対し、話者の生年情報を追加した上で、29 年 6 月に再公開した。
5. 28 年度に一般公開した『名大会話コーパス』中納言版に対し、会話メタ情報を追加した上で、コーパス開発センターと共同して 30 年 3 月に再公開した。
6. 28 年度に整備した『女性のことば・男性のことば-職場編-』（ひつじ書房）収録テキストを形態素解析し、出版社および開発者の許諾を得た上で、コーパス開発センターと共同して中納言で一般公開する準備を進めた。
7. 『日本語日常会話コーパス』設計のために実施した会話行動調査の生データを整理し、30 年 3 月にプロジェクトのホームページで公開した。
8. プロジェクトで整備公開したコーパスを対象とする講習会（中納言講習会・ひまわり講習会の 2 コース）を、29 年 9 月 7 日と 2018 年 3 月 19 日に開催し、それぞれ、23 名、32 名が参加した。
9. 『国会会議録』は経年変化・レジスター研究において広く利用されており、ひまわりパッケージ版について今年度は 340 件の新規利用があった（3 月 31 日現在）。
10. 『名大会話コーパス』は会話研究・日本語教育研究において広く利用されており、ひまわりパッケージ版について、今年度は 266 件の新規利用があった（3 月 31 日現在）。

（2）共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

コーパス関係のプロジェクトや科研との連携を深めるため、合同で 29 年 9 月 8 日に合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—話者の属性—」を国語研講堂で開催した。招待講演 1 件（蒲谷宏）、発表 4 件（迫田、木部、小磯、小木曾）、参加者は 82 名（うち学生 9 名、国外機関所属者 1 名）であった。

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</p> <p>1. 一橋大学との協定に基づき、2名の連携教授が、コーパスを活用した計量的研究の演習を担当した。</p>	
<p>(2) 人材育成に関する計画</p> <p>2. 若手研究者を育成するために、非常勤研究員 (PD フェロー) を1名、プロジェクト非常勤研究員を5名雇用した。</p> <p>3. 大学院生3名を共同研究員としてプロジェクトに参画させた。</p> <p>4. 若手の非常勤研究員および大学院生の共同研究員に対し、シンポジウム「日常会話コーパス」III (30年3月19日) で発表の機会を提供した。</p> <p>5. 若手研究者を主対象に、コーパス利用に関する講習会を9月7日と3月19日に開催し、それぞれ、23名、32名が参加した。また講習会で用いた資料をプロジェクトのホームページで公開した。</p> <p>6. 若手研究者を主対象に、NINJAL チュートリアル「コーパスに基づく話し言葉の研究」を、29年11月30日と30年3月8日に開催し、それぞれ、21名、24名が参加した。</p> <p>7. 人工知能学会第8回対話システムシンポジウムにて、日常会話コーパスの設計・構築・公開法に関するチュートリアル（招待）を行った。</p> <p>8. 共同研究員が指導する大学生・大学院生3名に『日常会話コーパス』の一部を提供し、うち1名がコーパスを活用した研究で卒業論文を執筆した。また3名がシンポジウム「日常会話コーパス」III (30年3月19日) で発表した。</p>	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</p> <p>特になし。</p>	
<p>(2) 研究成果の社会への普及に関する計画</p> <p>1. プロジェクトで整備・公開した『名大会話コーパス』、『国会会議録』を、インターネットを通して一般に発信した。（共同利用に関する計画参照）</p> <p>・「通時コーパス」プロジェクトと共同し、日本語の変化をテーマとする一般向けのフォーラムを企画し、30年11月4日の開催に向けて準備を進めた。</p>	

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 国際的協業に関する計画</p> <p>1. 海外在住の研究者1名をプロジェクト共同研究員として加え、日常会話コーパスを用いたデータセッションを通して、コーパスについて評価してもらった。</p>	

(2) 国際的発信に関する計画

2. 世界における通時音声コーパスの開発状況や研究の可能性について議論するために、29年9月4日に国際シンポジウム ‘International Symposium on Diachronic Speech Corpora’ を国語研講堂で開催した。
3. 30年5月に開催される言語資源に関する国際会議 LREC (11th Language Resources and Evaluation Conference) でワークショップ ‘Language and Body in Real Life’ を提案し、採択された。今年度は30年5月7日の開催に向けて準備を進めた。

6. その他

自己点検評価	計画どおりに実施した
	特になし。

平成29年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施した

研究については、4班合同の公開研究発表会、国際シンポジウム、報告書のWeb公開等を進め、論文等でその成果を発信しており、計画どおりに実施されている。一般の人がデータ収録や承諾書の収集をすることによって自然な日常会話を収録する、という新しい試みは高く評価できる。法的・倫理的な知見の共有にも期待する。

共同利用・共同研究については、『日本語日常会話コーパス』、『昭和話し言葉コーパス』の作成を進め、既存のコーパスの拡張と公開、会話行動調査の生データの公開、中納言講習会・ひまわり講習会の開催など、順調に計画が実行されている。すでに公開したコーパスが広く研究に役立っていることもわかる。

教育については、一橋大学における教育への協力、若手研究者の雇用と学生のプロジェクトへの参画、彼らへの発表の機会の提供、チュートリアル等の開催、コーパスの提供などを計画通り行なっている。

社会との連携及び社会貢献については、2つのコーパスをインターネットで一般公開した。また、日本語の変化をテーマとする一般向けのフォーラムを企画し、準備中である。

グローバル化については、海外在住の研究者によるコーパスの評価、国際シンポジウムによる通時音声コーパスの議論、国際会議でのワークショップの提案を行なった。

以上すべての項目にわたってプロジェクトが計画通り実施されていると認められる。特に数多く利用されているコーパスに関してその利用状況を調査し利用者のニーズを分析すれば、将来のコーパスの作成に反映させることができるのでないかと思われる。

《評価項目》

1. 研究について

4班合同の公開研究発表会、国際シンポジウム、報告書のWeb公開等を予定通り進め、論文、書籍、

学会発表等でその成果を発信している。シンポジウム等は多数の参加者を得て行なわれている。

研究者が現場に介在せず一般の人に映像・音声の収録や承諾書等の収集を依頼することによって自然な日常会話を収録する、という新しい手法を試みており、翌年度以降その評価がなされることを期待する。データの収録方法や公開に関する法的・倫理的観点からの課題の整理と知見の共有にも期待したい。

2. 共同利用・共同研究について

『日本語日常会話コーパス』については、収録、転記、アノテーションおよびその結果の限定公開がなされている。『昭和話し言葉コーパス』についても、転記と限定公開が予定通り行なわれた。BCCWJ、『国会会議録』ひまわり版、『名大会話コーパス』中納言版、『女性のことば・男性のことば-職場編-』等の拡張作業やその成果の公開、会話行動調査の生データの公開、中納言講習会・ひまわり講習会の開催など、順調に計画が実行されている。また、『国会会議録』と『名大会話コーパス』が特に多く利用され、研究に役立っていることがわかる。これらは新規利用が数百件のことなので、その利用状況を分析して利用者のニーズを把握する必要があるようと思われる。外部機関との合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—話者の属性—」も予定通り開かれた。

3. 教育について

一橋大学における教育への協力、非常勤研究員とプロジェクト非常勤研究員の雇用、大学院生のプロジェクトへの参画、それら若手研究者への学術発表の機会の提供、若手研究者向けの講習会とチュートリアルの開催、学会でのチュートリアル、学生の研究のためのコーパスの提供などを通じて、計画通り若手研究者の育成に務めている。

4. 社会との連携及び社会貢献について

『名大会話コーパス』と『国会会議録』をインターネットで一般に発信した。また、日本語の変化をテーマとする一般向けのフォーラムを企画し、平成30年11月4日の開催に向けて準備を進めている。

5. グローバル化について

海外在住の研究者に、共同研究員として、日常会話コーパスを用いたデータセッションを通して、コーパスを評価してもらった。また、国際シンポジウム‘International Symposium on Diachronic Speech Corpora’を国語研講堂で開催し、世界における通時音声コーパスの開発状況や研究の可能性について議論した。さらに、平成30年5月に開催される言語資源に関する国際会議 LREC (11th Language Resources and Evaluation Conference) でワークショップ‘Language and Body in Real Life’を提案して採択された。

6. その他特記事項

特になし。

日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明

プロジェクトリーダー：石黒 圭

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトの目的は、日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するとともに、その成果を日本語教育に応用する方法を明らかにすることである。具体的には、日本語教育やその関連領域の研究者や教育者、そして日本語学習者に有益なコーパスを構築すること、論文集や教師指導書を刊行すること、シンポジウムや研修会を開催することである。

本プロジェクトでは日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するために、3つのサブプロジェクトを設ける。「日本語学習者の日本語使用の解明」、「日本語学習者の日本語理解の解明」、「日本語学習のためのリソース開発」である。

サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」では、「学習者の会話能力の解明」と「学習者の日本語習得過程の解明」を行う。「学習者の会話能力の解明」としては、母語話者と学習者の自然会話コーパスを構築し、それをもとにして学習者の会話能力を解明する。この研究は、自然な日常会話をデータとした研究であることに特色がある。「学習者の日本語習得過程の解明」としては、さまざまな言語を母語とする学習者の対話や作文のコーパスを構築し、それをもとにして異なる言語を母語とする日本語学習者の日本語の習得過程を解明する。この研究は、日本を含む世界のさまざまな地域において統制された条件で収集したデータを用いることにより、母語による違いを重視することに特色がある。

サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」では、「学習者の読解過程の解明」と「学習者の聴解過程の解明」を行う。これまでの研究は学習者の言語産出活動である発話や作文に焦点を当てたものが中心であったが、この研究は学習者の言語理解活動である読解や聴解に焦点を当てたものである。学習者に理解した内容を母語で語ってもらったデータや教室での学習者の談話を通して、外からは見えない読解や聴解の過程を可視化する研究である点に特色がある。

サブプロジェクト「日本語学習のためのリソース開発」では、「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」と「読解教材・聴解教材の開発」を行う。「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」としては、日本語の基本動詞が持つさまざまな意味を図解なども用いてわかりやすく解説する音声付オンライン辞典を作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、大規模コーパスを活用して作成した辞典である点に特色がある。「読解教材・聴解教材の開発」では、日本語学習者用の読解教材・聴解教材を作成するための共同研究を行った上で、ウェブ版教材サンプルを作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」で得られた調査結果に基づいて教材を作成する点に特色がある。

2. 年次計画（ロードマップ）

【平成 28（2016）年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築に着手する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築に着手する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築に着手する。

- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成に着手する。
- ・ウェブ版読解教材の開発に着手する。

【平成 29（2017）年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、その一部を試験公開する。
- ・ウェブ版読解教材の開発を継続する。ウェブ版聴解教材の開発に着手する。
- ・NINJAL 国際シンポジウム（ICPLJ）を開催する。

【平成 30（2018）年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・ウェブ版読解教材の開発を継続し、サンプルを試験公開する。ウェブ版聴解教材の開発を継続する。
- ・学習者の会話能力に関する論文集を刊行する。
- ・学習者の読解過程に関する教師指導書を刊行する。

【平成 31（2019）年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・ウェブ版読解教材の開発を継続し、試験公開の範囲を拡大する。ウェブ版聴解教材のサンプルを試験公開する。
- ・学習者の読解過程に関する論文集を刊行する。

【平成 32（2020）年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・ウェブ版読解教材とウェブ版聴解教材の開発を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・学習者の読解過程に関する論文集を刊行する。
- ・読解教材開発に関する研究書を刊行する。
- ・日本語学習者のコミュニケーションに関する国際シンポジウムを開催する。

【平成 33（2021）年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスを本格公開する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスを本格公開する。
- ・日本語学習者の読解コーパスを本格公開する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典を本格公開する。
- ・ウェブ版読解教材とウェブ版聴解教材を本格公開する。
- ・学習者の日本語習得過程に関する論文集を刊行する。
- ・学習者の聴解過程に関する論文集を刊行する。

II. 29年度活動概要

29年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

- ・2017年7月8, 9日に、本プロジェクトの研究成果を日本語教育の分野における実際的な応用に役立てるため、NINJAL国際シンポジウム「第10回日本語実用言語学国際会議（ICPLJ）」を開催し、本プロジェクトの成果に関する研究発表を7件行った。シンポジウム全体としては、42件の研究発表が行われ、参加者は207名（うち国外機関所属者38名、学生65名）であった。
- ・学習者の作文コーパスを分析した成果として研究論文集『わかりやすく書ける作文シラバス』（石黒圭編、くろしお出版）を刊行した（2017年12月）。また、2018年1月14日に、シンポジウム「新たな作文研究のアプローチ—わかりやすく書ける作文シラバス構築を目指して—」を開催し、141名（うち国外機関所属者7名、学生28名）の参加者を得た。
- ・プロジェクト共同研究員の研究成果も含めて、プロジェクト全体で、論文25件、図書1冊、発表・講演85件、データベース等7件、その他23件を公開・刊行した。
- ・プロジェクト全体として、83機関（うち外国の大学・研究所は35機関）、105名の共同研究員（うち大学院生4名）を組織し（当初の計画では約100名）、プロジェクト非常勤研究員（PDフェロー）3名、非常勤研究員14名、技術補佐員5名を雇用した（当初の計画では順に3名、約13名、約3名）。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスである『BTSJ（Basic Transcription System for Japanese）日本語自然会話コーパス』の構築を前年度から継続して行い、『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2017年版』（333会話）を所内に先行公開するとともに、『自然会話リソースバンク（Natural Conversation Resource Bank: NCRB）』のプラットフォームを構築・改良した。また、BTSJに関して、活用方法講習会を国内3回、海外1回の計4回（参加者合計79名、うち国外機関所属者21名、学生37名）、シンポジウム2件を行った（参加者合計57名、うち国外機関所属者3名、学生35名）。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスである『I-JAS（International corpus of Japanese As a Second language）多言語母語の日本語学習者横断コーパス』の構築を前年度から継続して行い、2017年5月20日に、検索システムであるI-JAS中納言とともに、第二次公開として225名分の発話データおよび158名分の作文データを公開した。また、「第三回学習者コーパス・ワークショップ」を開催した（参加者81名、うち国外機関所属者2名、学生16名）。

- ・日本語学習者の読解コーパスとして、『日本語非母語話者の読解コーパス』と『文脈情報を用いた日本語学習者の読解過程コーパス』を前年度から継続して構築した。構築のためのデータ収集を行うとともに、前者は45件のコーパスデータ、後者は3名分のコーパスデータを公開した。また、後者に関して、シンポジウム1件を開催し（参加者116名、うち国外機関所属者2名、学生29名）、日本語教育学会2017年度秋季大会におけるパネル発表1件を行った。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典である『基本動詞ハンドブック』の作成を継続し、15見出しと視聴覚コンテンツのショートアニメ31点を追加公開した。また、5件の講演を行った。
- ・日本語学習者用のウェブ版教材について、読解教材の作成を継続するとともに、聴解教材の作成を開始し、読解教材3シリーズ10レッスン、聴解教材4シリーズ18レッスンを公開した。
- ・連携協定を結んでいる北京日本学研究センターと共同で、日本語習得過程に関するデータ収集を3回（国内1回、海外2回）行った。
- ・連携協定を結んでいる国際交流基金日本語国際センターと共同で、日本語学習者の聴解および読解に関する研究とウェブ版聴解教材の開発を行った。

3. 教育に関する計画

- ・一橋大学との連携協定に基づき、修士2名、博士10名の指導教員として研究論文の指導に当たった。
- ・コーパス構築作業に13名の大学院生を参加させるとともに、コーパスを用いた研究の指導を行った。
- ・プロジェクト非常勤研究員（PDフェロー）を3名雇用し、日本語教育研究に関する研究指導を行った。
- ・大学院生4名を共同研究員としてプロジェクトに参画させた。
- ・日本語教師セミナーを当初の計画のとおりに国内・海外で1回ずつ開催し（参加者合計67名、うち国外機関所属者28名、学生11名）、日本語教師の研修に努めた。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

- ・クラウドワークス社と研究データ提供に関する契約を締結し、日本テレワーク学会Job Casting部会との協力のもと、研究に着手した。
- ・『基本動詞ハンドブック』の例文音声の収録を立川市の朗読ボランティアグループや近隣の大学の学生の協力を得て行った。
- ・日本語教師セミナーを国内・海外で1回ずつ開催し（参加者合計67名、うち国外機関所属者28名、学生11名）、研究成果の社会への普及に努めたほか、日本語教師、ボランティア、高校生などを対象とした講演を各地で行った。

5. グローバル化に関する計画

- ・海外在住の研究者38名を共同研究員として、日本語学習者のコミュニケーションに関する研究を推進しているほか、連携協定を結んでいる北京日本学研究センターと共同で、学習者の日本語習得過程に関するデータ収集を継続している。
- ・NINJAL国際シンポジウム「第10回日本語実用言語学国際会議（ICPLJ）」を開催した。
- ・日本語教師セミナー（海外）をドイツのハンブルク大学で実施した。
- ・EAJS2017（ポルトガル・リスボン新大学）で、共同研究員とともに3件のパネル発表を行った。

- ・プロジェクト全体で、海外の学会や研究会における講演・発表を 37 件行った。
- ・インド人的資源開発省管轄の大学認可・助成委員会 (UGC) およびネルー大学の依頼により、大学院生向け日本語学教材を開発した。

6. その他

- ・『基本動詞ハンドブック』の用例を利用して「文型」をキーにして用例を検索・抽出できるウェブ版のリソースのプロトタイプを開発した。

III. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画どおり実施した
(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画	
1. <u>NINJAL 国際シンポジウム「第 10 回 日本語実用言語学国際会議 (ICPLJ)」</u> (29 年 7 月 8, 9 日, 国立国語研究所) を開催し, 本プロジェクトの成果に関する研究発表 7 件 (発表者: 石黒圭, 福永由佳, 小西円 (2 件), 蒙轆, 布施悠子, 田中啓行) を行った。シンポジウム全体の発表件数は 42 件, 参加者は, 207 名 (うち国外機関所属者 38 名, 学生 65 名) であった。	
2. 学習者の作文コーパスを分析した成果として, <u>研究論文集, 石黒圭編『わかりやすく書ける作文シラバス』</u> (くろしお出版) を刊行した (29 年 12 月)。	
3. 29 年 11 月 4 日・5 日に, 東海大学ヨーロッパ学術センター主催の <u>日本語教育ワークショップ「作文能力を伸ばす方法を考える」</u> (東海大学ヨーロッパ学術センター) で講師を務めた (石黒圭)。	
4. 30 年 1 月 14 日に, <u>シンポジウム「新たな作文研究のアプローチ 一わかりやすく書ける作文シラバス構築を目指して一</u> (国立国語研究所) を開催した。シンポジウム全体の発表件数は 5 件, 参加者は, 141 名 (うち国外機関所属者 7 名, 学生 28 名) であった。	
5. プロジェクト共同研究員の研究成果も含め, プロジェクト全体で論文 25 件, 図書 1 冊, 発表・講演 85 件, データベース等 7 件, その他 23 件を公開・刊行した (「研究成果一覧」参照のこと)。	
(2) 研究実施体制等に関する計画	
6. プロジェクトを推進するために, 国内外の日本語教育研究者 105 名で 3 つのサブプロジェクトによる共同研究体制を組織した。	
7. 本プロジェクトの研究遂行のために, PD フェローを 3 名, プロジェクト非常勤研究員を 14 名, 技術補佐員を 5 名雇用した。	

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 共同利用・共同研究に関する計画	
1. 29 年 12 月 26 日に <u>「BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2017 年版」</u> (333 会話) を所内に先行公開した。また, <u>「自然会話リソースバンク (Natural Conversation Resource Bank: NCRB)」</u> のプラットフォームを構築・改良した。	
2. 29 年 9 月 9 日に <u>「第 2 回 BTSJ 日本語会話コーパス活用シンポジウム」</u> (国立国語研究所) を行った。シ	

ンポジウム全体の発表件数は2件、参加者は21名（うち、学生11名）であった。

3. 会話・談話研究シンポジウム「日本語教育の新展開 一談話研究の可能性（1）」（29年7月10日、国立国語研究所）において、研究発表「日本語教育になぜ談話研究が必要なのか？」を行った。シンポジウム全体の発表件数は3件、参加者は、36名（うち国外機関所属者3名、学生24名）であった。
4. 「自然会話リソースバンク（Natural Conversation Resource Bank: NCRB）」を使って、3件の発表を行った（①「NCRB（Natural Conversation Resource Bank）開発の趣旨と活用方法—自然会話教材の録画方法と教材作成支援機能を中心として—」（29年7月22日、リオデジャネイロ日系協会）、②「共同構築型自然会話リソースバンク（NCRB: Natural Conversation Resource Bank）の教材作成支援機能及び、作成した自然会話WEB教材の使い方」（CASTEL-J2017（29年8月6日、早稲田大学））、③「NCRB（Natural Conversation Resource Bank）開発の趣旨と活用方法—自然会話教材の収集と教材作成支援機能を中心として—」（29年8月24日、ポルト大学）。
5. 多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築の2年目に着手し、29年5月20日に、I-JASの第二次データを検索システムであるI-JAS中納言とともに公開した。
本コーパスは日本語学習者の発話と作文のデータからなり、第二次公開では日本語学習者190名分（中国語母語話者35名、韓国語母語話者35名、英語母語話者35名、トルコ語母語話者35名、国内教室環境学習者25名、国内自然環境学習者25名）、日本語母語話者35名分、計225名分の発話データ及び158名分の作文データを公開した。
現在は第三次公開に向けて、文字化作業及びデータ整備を行っている。第三次公開として、来年度の30年5月に210名分のデータの提供を予定している。
6. 29年12月3日に、「第三回学習者コーパス・ワークショップ」（国立国語研究所）を開催した。第一部はシンポジウム及びポスター発表7件、第二部は、I-JASのデータに関する説明と、I-JAS中納言の使い方の講習を行った。参加者は、81名（うち国外機関所属者2名、学生16名）であった。
7. 日本語非母語話者の読解コーパス構築のためのデータ収集を行うとともに、中国語、韓国語、タイ語を母語とする学習者を中心に、29年8月29日に11件、29年12月28日に24件、30年2月26日に10件、計45件のコーパスデータを公開した。
8. 文脈情報を用いた日本語学習者の読解過程コーパス構築のためのデータ収集を行うとともに、30年3月30日に、中国語、ベトナム語を母語とする学習者および日本語母語話者の「語彙の理解」に関するコーパスデータ各1名分、計3名分を公開した。
9. 29年11月25日に、日本語教育学会2017年度秋季大会（朱鷺メッセ（新潟市））において、パネル発表「文章理解過程における日本語学習者の多義語の意味把握—文脈的手がかりを用いて—」（企画者：石黒圭）を行った。
10. 30年3月3日に、シンポジウム「日本語学習者は文の関係をどう理解しているのか—目の動きから見えてくるもの—」（国立国語研究所）を開催した。シンポジウム全体の発表件数は6件、参加者は、116名（うち国外機関所属者2名、学生29名）であった。
11. オンライン日本語基本動詞ハンドブックの見出し執筆作業を継続し、15見出しを追加公開した（累計95見出し）。また、視聴覚コンテンツのショートアニメを31点追加公開した（累計101点）。
12. 基本動詞ハンドブックに関して、5件の講演を行った（プラシャント・パルデシ、今村泰也）。（「5.グローバル化に関する計画」参照のこと）

13. ウェブ版読解教材の開発を行い、「薬の袋」シリーズ4レッスン、「バイキングレストランのクチコミ」シリーズ3レッスン、「スタンプカード」シリーズ3レッスン、合計3シリーズ10レッスンの教材を開いた。

14. ウェブ版聴解教材の開発を行い、「自宅のインターホン」シリーズ3レッスン、「コーヒーショップ」シリーズ4レッスン、「カラオケ店」シリーズ5レッスン、「コンビニ」シリーズ6レッスン、合計4シリーズ18レッスンの教材を開いた。

（2）共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

15. 連携協定を結んでいる北京日本学研究センターと共同で、北京師範大学において、29年4月21日～24日（担当：石黒圭、布施悠子、田中啓行）と29年9月9日～10日（担当：石黒圭、布施悠子）の計2回、日本語学習者の日本語習得過程に関するデータ収集を行った。また、29年9月に、国立国語研究所で4名（担当：布施悠子）、天理大学で2名、愛知淑徳大学で1名（担当：野山広）の日本語学習者に対して、日本語習得過程に関するデータ収集を行った。

16. 日本語学習者の聴解および読解に関する研究とウェブ版聴解教材の開発を国際交流基金日本語国際センターと共同で行った。

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
（1）大学院等への教育協力に関する計画	
1. 一橋大学との連携協定に基づき、連携教授1名（石黒）が演習を担当し、指導教員として、修士課程2名、博士課程10名の大学院生に対する研究論文の指導を行った。	
（2）人材育成に関する計画	
2. 13名の大学院生をコーパスの構築作業に参加させ、コーパスを用いた研究の指導を行った。 3. プロジェクト非常勤研究員（PD フェロー）を3名雇用し、日本語教育研究に関する研究指導を行った。 4. 大学院生4名を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、日本語学習者の教室でのコミュニケーションと学習の変容を分析した結果を発表した（口頭発表1件、論文2件）。 5. その他、「BTSJ活用方法講習会」を国内3回（29年5月16日、6月10日、9月9日、いずれも国立国語研究所）、海外1回（西安外国语大学）の計4回行った。参加者は、5月16日が10名（うち、学生2名）、6月10日が24名（うち、国外機関所属者2名、学生10名）、6月24日が19名（うち、国外機関所属者19名、学生12名）、9月9日が26名（うち、学生13名）であった。	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
（1）産業界や地域社会との連携に関する計画	
1. クラウドワークス社と研究データ提供に関する契約を締結し、日本テレワーク学会 Job Casting 部会との協力のもと、ビジネス文書のわかりやすさを解明する研究に着手した。 2. その他、基本動詞ハンドブックの例文音声の収録を立川市の朗読ボランティアグループや近隣の大学の	

学生の協力を得て行った。

（2）研究成果の社会への普及に関する計画

3. その他, 29年10月13日に, 職業発見プログラム（国立国語研究所）で, 新潟県立長岡高等学校の生徒に対して, 特別講義「ディスコース・ポライトネス理論とは?—誤解と円滑なコミュニケーションの観点から—」を行った（宇佐美まゆみ）。
4. その他, 29年12月8日に, 東京外国語大学大学院国際日本学研究院主催の連続講演会・国際シンポジウム「国際日本研究へのまなざし—ことば・文化・教育—」（東京外国語大学）で, 講演「学習者コーパスに見る日本語の世界」を行った（石黒圭）。
5. その他, 29年5月19日に, 第32回国立大学日本語教育研究協議会ワークショップ（お茶の水女子大学）で, 講演「読解授業でのピア・リーディングの導入と活用」を行った（石黒圭）。
6. その他, 29年7月13日に, 公益社団法人国際日本語普及協会主催のAJALT講演会（東京都港区）において, 講演「読解における文脈情報を生かした語の理解—中国語母語話者を対象にしたケーススタディー」を行った（石黒圭）。
7. 30年1月20日に, 日本語教師セミナー「地域に定住する外国人の日本語使用と言語生活について考える—縦断調査の結果や多言語社会としての日本の現在を踏まえながら—」（国立国語研究所）を行い, 33名（うち国外機関所属者3名, 学生8名）が参加した。
8. また, 30年2月25日に, 日本語教師セミナー「学習者は日本語をどう理解しているか—聴解・読解の困難点とその指導—」（ハーバード大学）を行い, 34名（うち国外機関所属者25名, 学生3名）が参加した。
9. その他, 29年10月14日～16日に, 福岡県国際交流センター主催の福岡県地域日本語教室ボランティアスキルアップ講座で「コミュニケーションのために文法を見直そう」という研修を行った（八幡西生涯学習総合センター・こくさいひろば（福岡市）・えーるピア久留米）（野田尚史）。
10. その他, 30年2月10日に, 岡山県国際交流協会主催・岡山県共催の「やさしい日本語」研修会で「外国人たちに日本語でどう接するか?—やさしい日本語の使用と相手の立場に立った理解—」という研修を行った（岡山国際交流センター）（野田尚史）。

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<h3>（1）国際的協業に関する計画</h3>	
<ol style="list-style-type: none">1. 海外在住の研究者38名を共同研究員として加え, 日本語学習者のコミュニケーションに関する研究を実施した。2. 連携協定を結んでいる北京日本学研究センターと共同で, 日本語学習者の日本語習得過程に関するデータ収集を計3回行った（「2. 共同利用・共同研究に関する計画」参照）。3. その他, インド政府人的資源開発省管轄の大学認可・助成委員会(UGC)およびネルー大学の依頼により, 国語研スタッフ（プラシャント・パルデシ, 野田尚史, 今村泰也）・客員教員（砂川有里子, 岸本秀樹, 堀江薰, 今井新悟）・共同研究員（桐生和幸）の8名で合計30モジュールの大学院生向け日本語学教材（テキストとビデオ講義）を開発した。この教材の一部は29年12月現在e大学院のホームページ	

(e-PGPathshala) で一般公開されており、ビデオ講義は YouTube でも公開されている。

4. その他、台湾からの研究員 1 名、韓国からの研究員 1 名を受け入れている。(受け入れ期間 29 年 9 月～30 年 8 月)

(2) 国際的発信に関する計画

5. NINJAL 国際シンポジウム「第 10 回 日本語実用言語学国際会議 (ICPLJ)」 (29 年 7 月 8, 9 日、国立国語研究所) を開催した (詳細については「1. 研究」参照)。
6. その他、日本語教師セミナー「学習者は日本語をどう理解しているか—聴解・読解の困難点とその指導—」(30 年 2 月 25 日、ハーバード大学) を行った (詳細は「4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置」参照)。
7. その他、EAJS2017 (29 年 8 月 31 日～9 月 2 日、ポルトガル・リスボン新大学) で、共同研究員によるパネル発表 3 件 (①「『BTSJ 日本語会話コーパス』を活用した教材作成への提案—ヨーロッパにおける自然なコミュニケーション教育のために」(企画者: 宇佐美まゆみ), ②「ヨーロッパの日本語学習者に有益な読解教育」(企画者: 野田尚史), ③「ヨーロッパで継承語としての日本語を教えることと学ぶことの意味を考える—それぞれの現場から—」(企画者: 野山広)) を行った。
8. その他、共同研究員が海外の学会や研究会で 37 件の講演・発表を行った (詳細については「研究成果一覧」を参照のこと)。

6. その他

自己点検評価	
1. 「基本動詞ハンドブック」の用例を利用して「文型」をキーにして用例を検索・抽出できるウェブ版のリソースのプロトタイプを開発した。	

平成 29 年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施した

本プロジェクトは、日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明し、研究成果の日本語教育への応用を目的として、3 種のサブプロジェクト (①「日本語学習者の日本語使用の解明」, ②「日本語学習者の日本語理解の解明」, ③「日本語学習のためのリソース開発」) を設定している。

今年度は、コーパス 3 種の構築の継続と公開、オンライン日本語動詞辞典とウェブ版日本語教材 2 種の作成と公開、NINJAL 国際シンポジウム (ICPLJ) の開催等の年次計画が全て順調に実施された。

今後は、本プロジェクトの研究目的に即して、3 種のサブプロジェクト相互の有機的な連携を図ることで、研究成果を統合して広く公開し、多様化する日本語教育に対する貢献が期待される。

(1) 本プロジェクトは、各種コーパスの構築やウェブ版日本語教材の作成と公開、日本語学習者に関する調査や共同研究が進められているが、各種の調査結果と研究成果を統合するとともに、日本語教育の実践に対する貢献を効果的に展開していく必要がある。

(2) 国内外における「日本語教師セミナー」等の開催目的は、研究成果の公開が目的の研究推進と研究成果の利用方法の説明が本来連続するものであることから、両者の関連を明確にした上で、国際シンポジウムやセミナー等の立案と実施を効率よく進めるべきである。

(3) 各種コーパスや日本語教材の利用方法に検討を加えながら、作成と整備を進める必要がある。他の研究部門との協力を密にして、今後の共同研究の進展や研究成果公開後の利用促進に向けて、コーパスの構築や日本語教材の開発を進めていくべきである。

《評価項目》

1. 研究について

今なお構築途上にある日本語教育学における本プロジェクトの目的と課題は、日本語教育の多様化に応じるものとして評価される。今年度の研究成果は、量的には達成されているが、質的な研究水準には、日本語教育の実践に対する貢献を可能にするより高度なものが課されている。

1. 2017年7月に、本プロジェクトの研究成果を日本語教育に応用するために、NINJAL国際シンポジウム「第10回日本語実用言語学国際会議（ICPLJ）」を国語研で開催し、本プロジェクト関連の研究発表を7件（全体で42件）行い、207名（うち国外38名、学生65名）が参加した。
2. 2017年12月に、学習者の作文コーパスの分析結果を研究論文集『わかりやすく書ける作文シラバス』（石黒圭編、くろしお出版）として刊行し、2017年1月に、そのシンポジウム「新たな作文研究のアプローチ—わかりやすく書ける作文シラバス構築を目指して—」（参加者141名、うち国外7名、学生28名）を開催した。
3. 共同研究員の研究成果も含むプロジェクト全体で、論文25件、図書1冊、口頭発表・講演85件、データベース等7件、その他23件を公開・刊行した。
4. プロジェクト全体で、83機関（うち国外35機関）、105名の共同研究員（うち大学院生4名）を組織し、非常勤研究員（PDフェロー）3名、非常勤研究員14名、技術補佐員5名を雇用した。

2. 共同利用・共同研究について

各種コーパスの構築と公開、使用方法の講習会等の開催、内外の学会の研究発表や講演、教材開発等の成果がある。国内外の最大多数の共同研究員を擁する研究体制であるため、本プロジェクト全体や他の研究部門と有機的連携を図ることで、研究成果の統合と公開が肝要である。

1. 2017年12月に、母語話者と学習者の自然会話コーパスの『BTSJ（Basic Transcription System for Japanese）日本語自然会話コーパス』の構築を継続して、『BTSJ日本語自然会話コーパス（トランск립ト・音声）2017年版』（333会話）を所内に先行公開し、『自然会話リソースバンク（Natural Conversation Resource Bank: NCRB）』のプラットフォームを構築・改良した。また、BTSJの利用方法の講習会を内外で4回（参加者79名、うち国外21名、学生37名）開催し、シンポジウムを2件（参加者57名、うち国外3名、学生35名）実施した。
2. 『I-JAS（International corpus of Japanese As a Second language）多言語母語の日本語学習者横断コーパス』の構築を継続して、2017年5月に、検索システムのI-JAS中納言とともに、第2次公開として225名分の発話データと158名分の作文データを公開した。また、2017年12月に、「第3回学習者コーパス・ワークショップ」（参加者81名、うち国外2名、学生16名）を開

催した。

3. 『日本語非母語話者の読解コーパス』と『文脈情報を用いた日本語学習者の読解過程コーパス』の構築を継続してデータを収集し、前者が計 45 件、後者が 3 名分のコーパスデータを公開した。また、後者のシンポジウムを 1 件（参加者 116 名、うち国外 2 名、学生 29 名）開催し、2017 年 11 月に、日本語教育学会 2017 年度秋季大会でパネル発表を 1 件行った。
4. オンライン日本語基本動詞辞典の『基本動詞ハンドブック』の作成を継続し、15 見出しと視聴覚コンテンツのショートアニメ 31 点を公開し、「文型」の用例を検索・抽出するウェブ版リソースのプロトタイプを開発した。
5. 日本語学習用のウェブ版の読解教材 3 シリーズ 10 レッスン、聴解教材 4 シリーズ 18 レッスンを作成した。
6. 連携協定した北京日本学研究センターと共同で、日本語習得過程のデータ収集を内外で 3 回実施し、国際交流基金日本語国際センターと共同で、聴解・読解に関する研究とウェブ版聴解教材の開発を行った。

3. 教育について

連携協定による大学院の授業担当をはじめ、コーパス構築作業と共同研究参加の大学院生に対する研究指導、シンポジウムやセミナー等の開催により若手研究者の養成に貢献した。

1. 一橋大学との連携協定による教授 1 名が大学院の演習と論文指導（修士 2 名、博士 10 名）を担当した。
2. 本プロジェクトのコーパス構築作業に大学院生 13 名を参加させ、コーパスを用いた研究を指導した。
3. 本プロジェクトに非常勤研究員（PD フェロー）3 名を雇用し、日本語教育学に関する研究を指導した。
4. 本プロジェクトの共同研究員の大学院生 4 名が研究成果（口頭発表 1 件、論文 2 件）を発表した。
5. 「日本語教師セミナー」を内外で各 1 回（参加者 67 名、うち国外 28 名、学生 11 名）、「BTSJ 活用方法講習会」を国内 3 回（参加者 53 名、うち国外 21 名、学生 24 名）、海外 1 回（26 名、うち学生 13 名）開催した。

4. 社会との連携及び社会貢献について

提携企業とのビジネス日本語研究や地域住民の協力による教材作成等で、社会連携を図った。

1. クラウドワークス社とのデータ提供の契約締結により、日本テレワーク学会 Job Casting 部会との協力で、ビジネス文書のわかりやすさに関する研究に着手した。
2. 立川市の朗読ボランティアや近隣の大学生の協力で、『基本動詞ハンドブック』の例文の音声を収録した。
3. 「日本語教師セミナー」を内外で各 1 回開催し、日本語教師やボランティア、高校生を対象として講演した。

5. グローバル化について

海外の共同研究者や日本語教育機関との共同研究をはじめ、国際シンポジウムや「日本語教師セミナー」等を開催して、日本語教育の研究と実践における国際化をさらに推進した。

1. 海外在住の共同研究者38名と共に、日本語学習者のコミュニケーションに関する研究を推進し、連携協定により、北京日本学研究センターとの共同で、学習者の日本語習得過程に関するデータ収集を計3回行った。
2. 2017年7月に、NINJAL国際シンポジウム「第10回日本語実用言語学国際会議（ICPLJ）」を開催した。
3. 2018年2月に、ドイツのハンブルク大学で、「日本語教師セミナー」（海外1回）を開催した。
4. 2017年8月31日～9月2日に、EAJS2017（ポルトガル・リスボン新大学）で、パネル発表を3件行った。
5. プロジェクト全体で、海外の学会や研究会等における講演と研究発表を37件行った。
6. インド人的資源開発省管轄の大学認可・助成委員会（UGC）とネルー大学の依頼により、大学院生向けの日本語学の教材を開発して提供した。

6. その他特記事項

該当する活動なし。

I. 平成 29 年度計画

1. 研究

(1) 共同研究の推進

研究系のコーパス開発プロジェクトの支援のために必要な言語処理・音声処理・言語資源構築技術に関する共同研究を進める。また「言語資源活用ワークショップ 2017」を 9 月に開催する。

(2) 研究実施体制

センター長 1 名・専任准教授 1 名・特任助教 2 名・プロジェクト非常勤研究員 5 名のほか併任教員 5 名からなる。

そのほか所外共同研究員 16 名（内 2 名大学院生）の技術協力を得て、研究系のコーパス開発プロジェクトの支援を行う。

(3) 共同利用の推進

包括的検索システムの開発を進める。特に音声配信機能に関する実装を進める。

(4) 国際化

言語処理・音声処理・言語資源構築技術に関する研究の国際会議発表を積極的に行う。Universal Dependency などの、形態論情報・係り受けアノテーションの標準化に参加する。

(5) 研究成果の発信と社会貢献

UniDic や分類語彙表などの語彙資源や、BCCWJ, CSJ, CHJ, NWJC に対するアノテーションデータおよび統計的言語解析モデルの公開を行う。

2. 教育

(若手研究者育成)

既存のコーパス検索アプリケーションの講習会を継続して行う。

II. 平成 29 年度実績

(1) 共同研究の推進

・公開ワークショップ

平成 29 年 9 月 5 日 6 日に『言語資源活用ワークショップ』(LRW2017)を開催した。総参加者数 123 名、発表件数は 36 件。また併設イベントとして、国立情報学研究所データセット共同利用研究開発センターと共同で平成 29 年 9 月 7 日に『音声資源活用シンポジウム』を開催した。総参加者数 114 名。発表件数は 6 件。

以上の 2 つのイベント合計 3 日、発表件数 42 件/3 日、参加者のべ 306 名/3 日であった。

- ・共同研究プロジェクト「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」では、音声班・係り受け班・意味班の 3 つのグループにわかれ研究を進めた。
- ・情報・システム研究機構：機構間連携・文理融合プロジェクトに 2 件採択された。

➤ 「言語における系統・構造・変異とその数理」（代表者：持橋先生（ISM））

分担者：前川・浅原・横山（国語研），菊沢先生（民博），村脇先生（京大）

2017年度 80万円平成30年2月2日に、「言語における系統・変異・多様性とその数理」シンポジウムを開催（参加者55名）。

▶ 「わかりやすい情報伝達の実現に向けた言語認知機構の解明とその工学的応用」（代表者：相澤先生（NII））

分担者：浅原（国語研）

2017年度 100万円，2018年度 300万円

平成30年3月3日に、日本語教育研究領域と合同で、「シンポジウム 「日本語学習者はどのように文章を理解しているのか 一目の動きから見えてくるもの」を開催（参加者116名）。

▶ 共同研究プロジェクト「all-words WSD システムの構築及び分類語彙表と岩波国語辞典の対応表作成への利用」（代表者：新納浩幸）の研究発表会（平成30年3月25日）の企画補助。

▶ 「言語処理学会第24回年次大会ワークショップ 形態素解析の今とこれから 「形態素解析だヨ！全員集合」のオーガナイザとして企画・運営に参与。招待発表者として登壇（岡，中村）。

（2）研究実施体制

1. センター長1名・専任准教授1名・特任助教2名・プロジェクト非常勤研究員5名のほか併任教員5名からなる。
2. 平成30年度より特任専門職員を1名雇用するために人事を行った。
3. また、所外共同研究員を平成29年10月より2名追加した（計18名・内2名大学院生）。

（3）共同利用の推進

1. 2017年9月に『日本語話し言葉コーパス』の『中納言』上での音声配信機能を試験公開し、2018年3月に同USB版契約者全員に同サービスの提供をはじめた。
2. 包括的検索系の試作版を開発した（図1）。
現在のところ、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『日本語歴史コーパス』『日本語話し言葉コーパス』『名会話コーパス』の4つが串刺し検索できる。
3. 京都大学秋田准教授の協力を得て、所内に音声・テキスト間アリンクメントシステムを導入した。
4. 所内形態論情報付きコーパス管理システム『大納言』から音声が再生できるような拡張を構築した。
5. ジャパンナレッジのライセンスを引き続き10組導入した。主に『日本語歴史コーパス』の構築作業で利用されているが、所内にいれば誰でも利用できる。



図1:包括的検索系(試作版)

6. 『中納言』の授業用アカウント発行サービスの開発に着手した。

7. ワークショップについては、上記（1）第1項参照。

8. 2017年度中の『中納言』申込件数および検索件数は表1の通り。申込件数は昨年度を上回る水準(+30%:BCCWJ CHJ)。海外での利用状況については、下記（4）第1項参照。

9. 『少納言』検索件数は年間90万件。2015年度の年間80万件水準に戻る。(2016年度は機械処理によるアクセスがあり160万件)

10. 『日本語話し言葉コーパス』(USB版)の新規契約は62件、うち商業利用は15件。

11. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(DVD版)の新規契約は43件、うち商業利用は9件。

12. 上記9-10による今年度の収入は2732.4万円。昨年度比1.6倍。

13. 『梵天』によるNWJCの検索件数は一般公開版32万件、高機能版は文字列検索が36656件、品詞列検索が5716件、係り受け検索が493件、延べログイン数2106件。

14. 『国語研日本語ウェブコーパス』の分散表現データNWJC2vecを66件の組織と個人に無償配布。

表1:『中納言』申込件数と検索件数

コーパス	申込件数	検索件数
BCCWJ-NT	4281	350508
BCCWJ-OT		8756
CHJ	3507	112467
I-JAS	3195	12477
CSJ	3687	28276
名大会話	485	11822

(4) 國際化

1. 『中納言』は海外でも用いられている。29年度のアクセス調査の結果、86%は国内だが、残りの14%は、中国(6%)、台湾(2%)、韓国(2%)、アメリカ(1%)、その他イタリア、ドイツ、タイ、ロシア、イギリス、フランスなど、世界各国からの利用であった。

2. 國際論文誌1件

Masayuki Asahara (2018), NWJC2Vec: Word embedding dataset from 'NINJAL Web Japanese Corpus' Terminology | International Journal of Theoretical and Applied Issues in Specialized Communication 24-1, pp. 7-21, Benjamins. (意味班)

3. 積極的に国際会議発表(11件)を進めた。

PACLING(1件) 意味班(会議後国際論文集post proceedingsに採択:採択率28/50)

TCP-MAPLL(1件) 意味班

DH(1件) 意味班(言語変化研究領域と合同)

INTERSPEECH(2件) 音声班

DiSS(1件) 音声班

Oriental COCOSDA(1件) 音声班

JADH(2件) 意味班・係り受け班

PACLIC-31(1件) 意味班

IJCNLP(1件) 意味班

4. 韓国日本学会招待講演1件(『国語研日本語ウェブコーパス』関連)

5. BCCWJ, CHJ に基づく、単語係り受けアノテーション UD Japanese-BCCWJ, UD Japanese-Modern を公開した。同データは CoNLL-2018 (The SIGNLL Conference on Computational Natural Language Learning) に併設されて実施される評価型タスク Multilingual Parsing from Raw Text to Universal Dependencies で用いられる。(係り受け班)
6. 下記 (6) 第3項で述べる『梵天講習会』の講習会ビデオは英語版も作成し、公開した。
http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/nwjc/bonten-tutorial.html
7. 台湾の Academia Sinica と共同研究を進め、アジア言語の音声データの整備を進めた。また、2019 年に開催予定の国際会議 LPSS の準備を進めた。

(5) 研究成果の発信と社会貢献

1. 自動形態素解析用辞書 UniDic の公開サイトを新設一元化し、分散していた情報をサイト内の用語集として集約した (サイトアクセス数 : 19,076)。
<http://unidic.ninjal.ac.jp/>
 また、CSJ での短単位の出現頻度・連接頻度に基づく統計的言語解析モデル unidic-cwj-2.2.0 と unidic-csj-2.2.0 を構築、UniDic の 7 年ぶりのメジャーアップデートとして公開し、それぞれ 510 件、210 件のダウンロードが行われた。また年度末には Windows 向け GUI, ChaMame を同梱した unidic-cwj-2.3.0 と unidic-csj-2.3.0 を公開した。本アップデートでは、BCCWJ や CSJ だけでなく、開発中の日常会話コーパス CEJC の統計情報も利用し、自動解析性能の向上に努めている。次に述べる wlsp2unidic により、解析対象のテキストに分類語彙表番号が付与できるようになった。
2. 分類語彙表番号と UniDic 語彙素番号の対応表を公開した。
<https://github.com/masayu-a/wlsp2unidic>
3. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『日本語話し言葉コーパス』の語彙表・語数表の整備を行った。
http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/bcc-chu.html
http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/csj/chunagon.html#data
4. 「言語資源活用ワークショップ 2016」「言語資源活用ワークショップ 2017」の発表論文集を国立国語研究所学術情報リポジトリより DOI つきで配信した。
<https://repository.ninjal.ac.jp/>
5. 国内論文誌 5 件採抲 (技術資料 1 件含む)
6. ブックチャプター 2 件 (海外 1 件、国内 1 件), 解説 2 件
7. 国内学術発表 26 件 (言語資源活用ワークショップ 2017 発表分を除く)
8. 新たに公開した言語資源は以下の通り
 - UD Japanese-BCCWJ 上記 (4) 第 3 項
 - UD Japanese-Modern 上記 (4) 第 3 項
 - unidic-cwj-2.3.0_beta, unidic-csj-2.3.0_beta 上記 (5) 第 1 項
 - wlsp2unidic-1.0.1 (分類語彙表-UniDic 対応表) 上記 (5) 第 2 項
 - 『分類語彙表増補改訂版データベース』(ver. 1.0.1)
 - 『国語研日本語ウェブコーパス』から学習した統計的言語モデル nwjc2vec 上記 (3) 第 13 項 の skip-gram モデルを追加

- 鶴岡調査データベース 言語変化研究領域と合同
- 『日本語話し言葉コーパス』中納言版（発音情報拡張） 音声言語研究領域と合同
- 『名大会話コーパス』中納言版（メタ情報拡張） 音声言語研究領域と合同
- 『現日研・職場談話コーパス』中納言版 音声言語研究領域と合同
- 『日本語歴史コーパス奈良時代編』中納言版 言語変化研究領域と合同
- 『日本語歴史コーパス室町時代編 II』中納言版 言語変化研究領域と合同
- 『日本語歴史コーパス江戸時代編 I』中納言版 言語変化研究領域と合同

(6) 若手研究者育成

1. 以下の通り所外向け講習会を実施した：
 - ①全文検索システム『ひまわり』に係る講習会（9月7日実施、9名参加）
 - ②オンライン検索システム『中納言』に係る講習会（9月7日実施、17名参加）
 - ③『Praat』に係る講習会（9月7日実施、12名参加）
 - ④『日本語ウェブコーパス』の検索ツール『梵天』に係る講習会（4/3, 27, 5/12, 15, 7/11, 24, 8/1, 3, 9/28, 11/2, 2/10, 2/24, 3/29） 411人参加
 - ⑤コーパス検索系講習会（12月10日実施、於比治山大学（広島）、12名参加うち学生3名）
 - ⑥視線走査装置講習会（3月2日実施、2名参加）
 - ⑦コーパス検索系（『梵天』・『ChaKi.NET』）講習会（3月20日実施、19名参加）
2. 以下の通り所内向け講習会を実施した：
 - ①Python 勉強会（9か月間）6人参加
 - ②Praat 講習会（半年間）7人参加
 - ③UniDic Explorer 講習会（4回）13人参加
 - ④形態論情報修正作業講習会（1回）24人参加
3. 外部評価委員のコメントを受けて、7月と8月に2回 YouTube Live! による「梵天講習会」をビデオ配信した。
4. 『梵天講習会』の講習会ビデオを作成した。
http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/nwjc/bonten-tutorial.html

自己点検評価	計画どおりに実施した
--------	------------

平成29年度の評価

《評価結果》

計画をどおりに実施した

「言語資源活用ワークショップ 2017」における研究発表、共同研究プロジェクトの採択、国際論文・会議発表からコーパス日本語学・日本語教育学の共同研究の着実な進展が確認でき高く評価できる。

- ・日本語話し言葉コーパスをはじめとして各種コーパスやデータベースのコンテンツの公開が精力的に進められており、検索や音声配信など各種利用法の拡大や一定のサイトに公開情報をまとめるなど成果へのアクセス利便化が図られていることは評価できる。
- ・一方、一般の閲覧者がそれらのコーパスの意義と使い勝手を知るためのガイドはまだ改善の余地があるよう思える。例えば、「梵天」を使おうとしても最初の画面になかなか行き着けなかった。
- ・「梵天を用いた研究業績」が「梵天」サイトに付加されている点は、当該コーパスの研究利用を触発するものとして評価できる。
- ・外部評価委員会の提案に応えて作成された「梵天講習会ビデオ」は分かりやすくできている。YouTubeビデオ配信と共に評価できる。今後もコーパス普及のために同様の取組を継続することを期待する。

研究情報発信センター

センター長：プラシャント・パルデシ

I. 平成 29 年度の計画

研究情報・研究資料を収集・整理・保存するとともに、大学共同利用機関としてそれらを公開・発信するため、以下の取り組みを行う。

- (1) ウェブサイトの整備
- (2) 研究資料室の環境整備
- (3) 各種データベースの整備・公開
- (4) 機関リポジトリの整備
- (5) 『国立国語研究所論集』の刊行
- (6) ことばに関する質問や相談への対応
- (7) 情報システムの整備

II. 平成 29 年度の実績

(1) ウェブサイトの整備

・トップページから各コンテンツへの動線を分かりやすくするとともに、深層に埋もれていたコンテンツへのアクセスを容易にすることで、利用者の利便性を向上させるため、研究所メインサイト（ホームページ）の改修を実施し、デザイン・レイアウトの変更（メガドロップダウンメニュー導入など）、メニューの整理（データベース一覧、刊行物一覧の掲載など）を行った。

(2) 研究資料室の環境整備

- ・国語研メインサイト内に「研究資料室」ページを新規開設した。
(<https://www.ninjal.ac.jp/info/aboutus/material-room/>、平成 29 年 12 月)。
- ・「国立国語研究所研究資料室収蔵資料」サイトにおいて、収蔵資料群概要 12 点を追加公開した。
- ・収蔵雑誌について「中央資料庫未製本雑誌所蔵リスト」を一般公開した。また、国語研 OPAC に収蔵雑誌を登録し、利用促進に努めた。
- ・国語研の過去の研究で収集した映像資料の所内試視聴システム（所蔵映像データベース）を制作し、配信サービスを開始した（278 点、平成 30 年 2 月）。
- ・音源資料の所内試聴システム（所蔵音源データベース）の改修を行うとともに、17,174 点を追加収録した（全 17,662 点、平成 30 年 2 月）。
- ・中央メディア保管庫収蔵資料の配架替えを行い、利用しやすい環境を整えた。
- ・各種メディア目録の整備を平成 28 年度に引き続き行い、地図目録の整備に着手した。
- ・収蔵資料の保全と再利用のため、音源資料（カセットテープ等）と映像資料（ベータビデオテープ等）のメディア変換を行った（全 2,224 点）。
- ・劣化資料の保全対策として、各種社会調査の調査票の再ファイリングに着手した。
- ・研究資料公開・利用時の個人情報保護に関して、「研究資料室の個人情報等に関する取扱い要領」を新規

に制定し、併せて「国立国語研究所研究情報発信センター研究資料室運用指針」「研究資料室資料の利用に関する申合せ」「国立国語研究所における研究資料等移管取扱いについて」を改正した。

- ・学会発表 2 件。論文公表 1 件。

(3) 各種データベースの整備・公開

《日本語研究・日本語教育文献データベース》

- ・日本語研究・日本語教育文献データベースは定期的な情報更新を行い、約 23 万件のデータを公開している（平成 30 年 3 月末）。29 年度は 5 回の更新作業を行い、新規データ 5,300 件を追加公開した。
- ・データ化されていない『国語年鑑』1954～1993 年版掲載図書の遡及入力を行い、データの追加を開始した（1954～1961 年版 約 1,700 件）。
- ・オンライン・ジャーナル掲載の論文データ追加を開始した（平成 30 年 3 月末時点約 140 件）。
- ・韓国国内発行関係文献調査を行い、韓国学会誌掲載論文の登録準備作業を開始した。
- ・リポジトリ等で Web 公開されている論文（1985 年～）について論文本文へのリンクを完了した（平成 30 年 3 月末時点のリンク件数 21,000 件）。
- ・1993～1995 に行われた科学研究費国際学術研究「国際化時代における日本語研究文献情報の収集と分析」で収集された海外発行日本語研究文献目録データを当データベースに追加するための準備を開始した。
- ・英文 Web ページを作成し、トップページの改修を行った。
- ・韓国日本語学会で研究発表を行った（平成 29 年 9 月）。

《データベースコンテンツ整理》

- ・各種データベース類について、アクセス及び管理を容易にするため、コンテンツ整理（データ公開用サーバへの移設、総合的なデータベースリストの整備）を開始し、研究所メインサイト（ホームページ）の深層に分散して配置されていた「『日本言語地図』地図画像」「日本語観国際センサス」などの整理を行った。

(4) 機関リポジトリの整備

- ・オープンアクセス推進の一環として、(1)国語研定期的刊行物については発行次第、編集責任者から当センターへデータ提供を受けリポジトリに登録すること、(2)リポジトリ登録コンテンツには原則 DOI を付与すること、をセンター運営委員会で確認した。
- ・上記運用に沿って、「言語資源活用ワークショップ発表論文集」（2016 及び 2017：85 件）、「国立国語研究所論集」（13 号及び 14 号：30 件）を公開、DOI を登録した。
- ・ウェブサイトの「刊行物データベース」からリポジトリへのデータ移行について本文 PDF・メタデータの作成・整備を進め、「国立国語研究所報告」（主に図書：177 件）、「幼児のことば資料」（6 件）、年報、要覧、記念誌等（75 件）をリポジトリで公開し、DOI を登録した。・ リポジトリ登録データの英語拡充に向け、「英文の研究成果紹介」の英語データの点検整備を進め、メタデータに統合公開した（約 150 件）。

(5) 『国立国語研究所論集』の刊行

- ・論集の編集校正を進め、13 号（平成 29 年 7 月）、14 号（30 年 1 月）を刊行した。
- ・15 号への応募が近年の号の 2 倍以上の件数であったため、編集委員会で検討し、これらを 2 号分の刊行

に充て、15号を2018年7月、16号をその3か月後の10月に刊行することとした。

- ・15号・16号の投稿締切～査読の日程は同じため、2号分の査読済原稿の整理～編集校正を進めた。

(6) ことばに関する質問や相談への対応

- ・ことば質問や相談に専門的に対応するスタッフが常駐しており、29年度は459件の質問や相談に対応した。

(7) 情報システムの整備

- ・コンピュータシステムの脆弱性対応等のセキュリティ対策を実施し、ネットワーク・サーバの運用保守を、年間を通じて適切に実施した。
- ・コンピュータ室へのサーバ・ネットワーク機器の増設に対応するため、コンピュータ室電源容量の増設工事を実施した。さらに、コンピュータ室のセキュリティ強化策として入退室記録用のカメラを設置した。

自己点検評価	計画どおりに実施した
--------	------------

平成29年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施した

- ・ウェブサイトの整備により「各コンテンツへの動線」がたどりやすくなり、ともすれば「深層に埋もれ」がちだったコンテンツへもアクセスしやすくなった点は高く評価する。
- ・「研究資料室」ページが新設され、収蔵資料リストが容易にアクセスできるようになった点も、国立国語研究所の過去の調査研究の一端に手軽にふれられる点で貴重である。
- ・機関レポジトリ整備では、オープンアクセスを意識してDOI登録を含むリポジトリ登録運用ルール化が進められて国語研成果へのアクセス利便化が図られた。しかし「学術情報リポジトリ」のコンテンツアクセスは検索方法を含めてより一層の利便化が望まれる。(例えば、「幼児のことば資料」を検索結果から探すのは手間がかかった。)
- ・「ことばに関する質問や相談への対応」は、国語研を一般の方々とつなぐ重要な業務である。一般の人にとって質問の入口がHPのどこなのか、どのようにして質問するのかが分かりにくいので改善していただきたい。「お問合せ」の欄では「研究所に関する質問」となっており、「ことばに関する質問」をすることをためらわせる。「よくある「ことば」の質問」のページからも質問できるようにしてはいかがか?

平成 29 年度「管理業務」に関する評価シート

業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するために取るべき措置

1. 組織運営の改善に関する目標を達成するための措置

【計画】

外部有識者の参加を得て、運営会議及び各種委員会を開催するとともに、機関の組織運営に研究者コミュニティ等の意見を積極的に取り入れる。

【実績】

運営会議において、外部委員から研究所の研究活動の広報について意見等をいただき、研究所HPメインサイトの見直しを図った。また、研究教育職員の選考について審議した。その他に、外部評価委員会からいただいた研究所の活動に係る意見を反映しアジア圏の大学と交流協定を締結した他、複数の研究班による研究集会を開催した。さらにコーパス利用の研修及びNINJAL フォーラムをネット配信した。

2. 教育研究組織の見直しに関する目標を達成するための措置

【計画】

機関拠点型基幹研究プロジェクトの共同研究プロジェクトを研究系とセンターにより推進し、国際学術機関等の連携及び国際協力の推進を国際連携室において図る。また、研究事業の進捗状況に関する情報をIR推進室において管理する。

【実績】

毎月開催している共同研究プロジェクト推進会議において基幹研究プロジェクトの進捗状況などを確認するとともに、4月18日、26日、11月21、28日にはプロジェクト研究交流会を開催し、延べ160名を超える研究者がそれぞれ参画しているプロジェクトと他プロジェクトとの連携の可能性などについて意見交換を行った。また、プロジェクト相互の連携を促進し4つのプロジェクトによる合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション - 話者の属性 - 」を実施した(H29.9.8、参加者82名)。

国際連携室では海外研究機関との協定をアジア圏のネル一大学言語学科、東吳大学日本語文學系の他に英語圏のミシガン大学日本研究センター、ハワイ大学アノマ校との交流協定締結を締結した。とりわけネル一大学との協定は、ネル一大学及びインド政府人的資源開発省管轄の大学認可・助成委員会(UGC)から日本語教材(テキストおよびビデオ教材)の開発協力依頼を受け、国語研究スタッフ8名で合計30モジュールの大学院生向けの教材開発に協力し、日本語教育研究の更なる発展につながっている。教材の一部は現在ウェブで一般公開されておりビデオ講義はYouTubeでも公開されている。

また、国際連携室を中心にヨーク大学、ペンシルバニア大学、コロラド大学、ブランドイス大学と「統語解析情報付きコーパスのアノテーション方法および検索ツールの構築」について共同研究を実施した。北京師範大学と北京日本学研究センターとの学術交流協定等に基づく共同研究「日本語学習者縦断コーパス構築のための調査」を実施した。IR推進室においては過去7年間の実績を

ファクトブックの形でまとめた他にIRに関する人間文化研究機構6機関合同のワークショップを平成30年3月14日に開催した。

3. 事務等の効率化・合理化に関する目標を達成するための措置

【計画】

機構内機関及び機構外機関との業務の共同実施

【実績】

第8回西東京地区国立大学法人等共同開催の職員研修を3件実施した。具体的には①西東京地区国立大学法人等中堅職員研修（東京外国語大学）として、職務遂行に必要な知識等の修得、能力資質棟の向上、国立大学法人等運営の中核となるべき職員育成及び国立大学法人等職員としての一体感を培うことを目的とした研修に1名の職員を参加させた【平成29年10月25～27日】。②西東京地区国立大学法人等共同開催職員研修（国立天文台）として、「業務改善、業務の進捗管理、整理・整頓、人材育成について」をテーマとした対症療法だけでなく、長期的な体質改善を前提とした「考え方」と「手法」を身につける研修が実施され、7名の職員を参加させた【平成29年11月27日】。③東京学芸大学副課長研修として、副課長としてのリーダーシップの在り方や組織マネジメントを向上させ、幅広い視野に立った業務運営の在り方を培うことを目的とした研修に3名の職員を参加させた【平成29年12月4～5日】。また、平成29年11月29日に職員の男女共同参画に関する意識高揚を図ることを目的にした4機構連携男女共同参画シンポジウムに2名の職員を参加させた他、平成30年2月2日に?事評定の意義と評定者の役割を深く認識させることを目的とした事務系職員評価者研修に3名の職員を参加させた。④公的研究費の運営・管理にかかる法令やルールの正しい理解と研究を行う上で不可欠な研究倫理の理解、修得を目的としてコンプライアンス教育研修会及び研究倫理教育研修会が機構主催で実施され（TV会議）、16名を参加させた。【平成30年2月19日】

自己点検評価	計画どおり実施した
--------	-----------

《評価結果》

計画どおりに実施した

プロジェクト研究交流会やプロジェクト合同シンポジウム等、プロジェクト間の研究交流を積極的に推進している点は評価できる。

- ・国際連携では、特にインドのネルー大学の日本語教育教材開発への協力が評価に値する。
- ・IR推進室によるファクトブックは過去7年間の実績を統計的にまとめているが、こうした振り返りのスパンを広げた自己点検・評価も有意義である。
- ・機構内機関及び機構外機関との事務系職員の共同研修への参加が、所内業務をより広い視野で見ていくことにつながるものとなっているかどうかのフィードバックがあった方がよい。

財務内容の改善に関する目標を達成するためによるべき措置

1. 外部研究資金、寄付金その他の自己収入の増加に関する目標を達成するための措置

【計画】

常勤研究者の科研費への研究代表者もしくは研究分担者としての参加率を毎年度 80%以上にするため、競争的資金の申請に向けた説明会や研究計画書の作成支援等を実施する。

【実績】

- 平成 29 年度に配分された科研費（新規及び継続課題）に研究代表者又は研究分担者として、常勤研究者 33 名のうち 31 名が参加した（参加率 93.9%）。また、平成 30 年度の科研費（新規及び継続課題）に研究代表者として常勤研究者 33 名のうち 31 名が申請・参画した。
- 近隣の研究機関と合同で科研費説明会（9 月 28 日）を開催した。
- 外部資金についての公募情報を所内グループウェアに掲載するとともに、全研究者宛てに電子メールで周知した。特に、科研費については、常勤・非常勤を問わず全研究者を参加対象とした科研費申請準備会議を開催（10 月 18, 19 日）し、申請者が他分野を含む研究者と研究計画・方法について意見交換を行い、若手研究者の育成にも配慮しつつ科研費申請を奨励・支援した。
- 『日本語話し言葉コーパス』及び『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の有償頒布を行い、AI 開発の動向もあり 29 年度は総額 27,324 千円の収入を得た。前年度比約 10,000 千円増（約 1.6 倍増）。

2. 経費の抑制に関する目標を達成するための措置

【計画】

（1）一般管理費の分析を行い、分析結果を基に教職員に対しコスト意識の啓発を図るとともに、契約方法の見直し等を実施する。

【実績】

- 研究所内の事務室内、廊下やエレベータ前、トイレに、電力節減、夏期の軽装励行のポスターを掲示し、職員に対するコスト意識・省エネ意識の啓発を図った他、4 階テラスに遮光及びグリーンカーテンを設置し、昨年度に引き続き省エネを図った。
- 複数年契約を実施している「施設常駐管理・消防設備等点検」の各業務委託契約については、対 27 年度比（実施年度）702 千円を削減した。
- 賃貸借契約と保守契約の一本化、複数年契約の締結により複写機については対 27 年度比 1,206 千円削減した。

【計画】

（2）業務の外部委託等を促進させるとともに、職員の人事費や外部委託の状況を分析し、経費の抑制策を検討する。

【実績】

- 第三期の人事費シミュレーションを行うと共に外部委託の状況を分析し、人事計画に活用した。
- 7,8 月の 2 ヶ月間、管理部職員を対象に「ゆう活（夏の生活スタイル変革）」を実施。実施者に対して定時時刻で帰宅するよう促す他、会議の設定時間や一定の時間以降に仕事の依頼を行わないよう全職員へ働きかけるなどして超過勤務の抑制を図り、職員のワークライフバランスに努めた。
- 毎週、水曜日の定時退勤日について所内放送及びメールで全職員に周知するとともに意識啓発を促

し、超過勤務の削減を図った。	
・施設管理業務及びネットワーク管理業務について、専門業者に外部委託を行い、引き継ぎ管理業務の効率を図った。	
自己点検評価	計画どおり実施した

《評価結果》

計画どおりに実施した

- ・科研費獲得にむけて説明会や申請準備会議等で努力している点は評価できる。
- ・国語研常勤研究者 33 名中、平成 29 年度に科研研究代表者となっている研究者が 29 名 (88%) いる点は、常勤研究者の研究水準の高さの一端を表すものとして高く評価する。今後はこの点をアピールするために、「参画率」だけでなく、研究代表者数も併記した方がよい。
- ・国語研の研究者が申請できるような外部資金は、科研費の他どのようなものがあるのか、それへの応募状況はどうなっているかについても報告がほしい。
- ・「働き方改革」によって専門職の過重労働が懸念されている状況を考慮すると、ワークライフバランスに努める姿勢は重要である。

自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標を達成するためとるべき措置

1. 評価の充実に関する目標を達成するための措置

【計画】

自己点検・評価等を実施し、組織運営の改善に活用する。

【実績】

所内に自己点検・評価の実施、評価結果の公表及び活用に関する目的とした自己点検・評価委員会（委員 6 人）を設置し、今年度から共同研究プロジェクト推進会議（研究所が実施する共同研究プロジェクトの推進及び連携・調整を図ることを目的とした）と合同で会議を開催し、PDCA サイクルを管理するとともに、機関拠点型基幹研究プロジェクトの検証を行うため、外部評価委員 8 人による自己点検評価・外部評価を29年12～30年3月に実施した。

2. 情報公開や情報発信等の推進に関する目標を達成するための措置

【計画】

国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書など評価に係る情報等を、ウェブサイト等に掲載し、広く社会に公開する。

【実績】

- ・国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書に加えて、外部評価委員会による研究系・センターの実績及び組織運営の評価をまとめた外部評価報告書を、ウェブサイト及び『国立国語研究所年報』を通じて公開した。
- ・研究プロセスの可視化と研究成果の普及のため、一般向けの研究情報誌『国語研 ことばの波止場

(vol. 2, 3)』(pdf版)を公開するとともに、一般向け講演会NINJALフォーラムを2回開催した。1回目は「オノマトペの魅力と不思議」を29年9月10日に開催した(立命館大学大阪いばらきキャンパス、参加者215人)。2回目は「ことばの多様性とコミュニケーション」を30年2月3日に開催した(東京証券会館ホール、参加者235人)。なお、「オノマトペの魅力と不思議」は、昨年度、一橋大学一橋講堂で開催した同名のフォーラムが好評であったため、本年度は関西で実施したもので、昨年度のフォーラムの成果は、窪田晴夫(編)『オノマトペの謎』として刊行した(岩波科学ライブラリー261、岩波書店、166頁、29年5月)。また、29年9月10日に開催したフォーラムのビデオ録画をネット配信した。その他に、小・中学生を対象とした「ニホンゴ探検」を開催した(29年7月15日、参加者354人)。また、上記「ニホンゴ探検 2017」で行われたミニ講義を撮影・編集した動画や、文字の疑問をテーマとした動画を新たにウェブで公開した。

- ・メールマガジン(月2回)を配信し、国語研が開催するシンポジウム、講演会や講習会、データベース公開等の情報について発信した。また、YouTubeに開設した研究所のチャンネルを通じた動画配信も行った。

自己点検評価	計画どおり実施した
--------	-----------

《評価結果》

計画どおりに実施した

- ・自己点検・評価委員会と共同研究プロジェクト推進会議との合同会議を行うことでどんなメリットがあったかを報告していただきたい。
- ・ホームページが刷新されてウェブページ内の情報に以前よりもアクセスしやすくなったのにともなって、研究情報誌やフォーラム、講習会などのビデオなどの公開が進んできていることは評価できる。
- ・ファクトブックによると、近年、国語研からメディアへの情報発信数がかなり増えてきている(危機言語・方言関係のものが多いのではないかと推測するが)のは好感がもてる現象である。国語研の調査研究活動の意義を一般の人々に伝えていく努力は重要である。

その他業務運営に関する重要目標を達成するためとるべき措置を達成するための措置

1. 施設設備の整備・活用等に関する目標を達成するための措置

【計画】

- 1) 施設整備・既存施設の維持管理及び省エネルギー対策を実施する。

【実績】

- ・定期的な施設・設備の点検結果及び日常的な研究所内外の施設点検等(樹木剪定、通路の補修等)により、計画的な維持管理を行い、職員及び利用者の適切な予防安全に努めた。
- ・研究所の事務室内、廊下やエレベータ前、トイレに電力節減、夏期の軽装励行のポスターを掲示し、職員に対するコスト意識・省エネ意識の啓発を図った。また遮熱フィルム及びグリーンカーテンの設置、照明器具のLED化など省エネを図った。

2. 安全管理に関する目標を達成するための措置

【計画】

危機管理に関するマニュアルに基づく訓練や研修等を実施する。

【実績】

- ・「事業継続計画（BCP）」を策定し、立川市作成の「立川市地域防災計画」を基に想定される被害状況を策定した。また、研究所内におけるライフラインについての調査を行い被害想定に基づく対策を策定した。本BCPは、全職員へ「国立国語研究所における危機管理体制（情報伝達システムの概念図）」とともに周知した。
- ・立川防災館において昨年度に引き続き火災や地震発生時に取るべき行動や人命救助の方法について学ぶ体験学習に職員を33名参加させ防災の意識向上を図った（29.12.18,19）。

3. 法令遵守等に関する目標を達成するための措置

【計画】

公的研究費の適正な使用に関する研修会等及び研究倫理教育等を実施し、受講者の理解度チェック及び受講状況の管理監督を行う。また、情報セキュリティに関する研修を実施する。

【実績】

- ・コンプライアンス教育研修会及び研究倫理教育研修会を機構内共同実施（平成30年2月19日）。
- ・情報セキュリティ研修（e-learning研修）を実施（平成30年2月23日～平成30年3月16日）。
- ・「人を対象とする研究に関する研究倫理審査」を27件実施した。
- ・自然科学研究機構主催の情報セキュリティ研修（10月4, 5日）に国語研CSIRTメンバーが参加した。

自己点検評価	計画どおり実施した
--------	-----------

《評価結果》

計画どおりに実施した

- ・国民的資産とも言うべき重要な資料やデータベースを収蔵している機関であるだけに、地域自治体の「防災計画」と連動した危機管理体制をしっかりと立てることは極めて重要である。

【総合評価】

- ・「総合的日本語研究の開拓」という機関拠点型プロジェクトの趣旨からしても、プロジェクト研究交流会やプロジェクト合同シンポジウム等、プロジェクト間の研究交流を積極的に推進していくことは非常に重要である。この点での今年度の実績は、十分評価に値する。
- ・ホームページの刷新で全体としてウェブサイト内情報へのアクセスが以前よりも容易になったこと、さまざまな資料やデータベースの公開も順当に進んでいることは評価できる。ホームページについては、例えば、「ウェブ内閲覧コースガイド」、「ことばへの質問コーナー」など、一般の閲覧者が立ち寄ってみたいと思えるような、さらに親しみやすい構成や手法の工夫を期待したい。

2. 資 料

国立国語研究所外部評価委員名簿（敬称略）

- ◎ 門倉 正美 横浜国立大学名誉教授
専門： 哲学，日本語教育
- 小野 正弘 明治大学教授
専門： 国語学・日本語史
- 沖 裕子 信州大学教授
専門： 談話，方言，日本語教育
- 片桐 恭弘 公立はこだて未来大学学長
専門： 情報科学，社会言語学
- 坂原 茂 東京大学名誉教授
専門： フランス語学，認知言語学
- 佐久間 まゆみ 早稲田大学名誉教授
専門： 文章・談話論，日本語教育
- 橋田 浩一 東京大学教授
専門： 自然言語処理
- 森山 卓郎 早稲田大学教授
専門： 日本語学，日本語文法

任期：平成 28 年 10 月 1 日～平成 30 年 9 月 30 日（2 年）

◎委員長 ○副委員長

国立国語研究所平成29年度業務の実績に関する評価の実施について

1. 評価の実施の趣旨

国立国語研究所では、共同研究プロジェクト及び機関拠点型基幹研究プロジェクトにおける研究計画の実施状況について、プロジェクトの代表者が行った自己点検評価及び実績報告書の妥当性を検証するため外部評価委員会による評価を実施している。

2. 評価の実施方法

評価は書面審査で行った。研究所が作成した、平成29年度の計画及びその実施状況が記入された「29年度業務の実績報告書」（「プロジェクト・センターの研究活動」、「組織・運営」、「管理業務」）の内容を検証した。

「プロジェクトの研究活動に関する評価」の点検項目及び観点は次の通りである。

点検項目	観 点
研究成果 (研究) (共同利用)	研究業績の量的側面 ・どれだけ論文等のアウトプットがあるか
研究水準 (研究) (共同利用)	研究業績の質的側面 ・どれほど学術的意義や社会的意義があるか
研究体制 (研究) (共同利用)	研究推進にあたっての制度的側面 ・どれだけ大学と組織的に連携し、大学の機能強化に貢献しているか
教育	研究過程及び研究成果の教育的普及 ・どれほど大学等の機能強化に貢献しているか
人材育成	若手研究者の育成、及び社会人の学び直し ・どれだけ受け入れて取り組んでいるか
社会連携	自治体・産業界との連携など社会との協業 ・どれほど社会と連携しているか
社会貢献	研究成果の社会への普及 ・どれほど社会に向けて発信しているか
国際連携	研究体制における国際的協業 ・どれだけ海外の組織と連携しているか
国際発信	研究過程及び研究成果の国際的発信 ・どれだけ国際的に発信しているか
その他特記事項	

機関拠点型基幹研究プロジェクト一覧

研究系	プロジェクト名	プロジェクト略称	リーダー
理論・対照研究領域	対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法	対照言語学	窟薙 晴夫
理論・対照研究領域	統語・意味解析コーパスの開発と言語研究	統語コーパス	プラシャント・パルデシ
言語変異研究領域	日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成	危機言語・方言	木部 暢子
言語変化研究領域	通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開	通時コーパス	小木曾 智信
音声言語研究領域	大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究	日常会話コーパス	小磯 花絵
日本語教育研究領域	日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明	学習者のコミュニケーション	石黒 圭

国立国語研究所外部評価委員会規程

平成21年10月 1日
国語研規程第7号
改正 平成28年 4月 1日

(趣旨)

第1条 この規程は、国立国語研究所組織規程（国語研規程第1号）第15条の規定に基づき、国立国語研究所（以下「研究所」という。）外部評価委員会（以下「委員会」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

(任務)

第2条 委員会は、次の各号に掲げる事項について審議する。

- (1) 自己点検・評価の結果に基づく評価に関すること。
- (2) 研究所の中期計画及び年度計画の評価に関すること。
- (3) 共同研究プロジェクト等の評価に関すること。
- (4) その他評価に関すること。

(組織)

第3条 委員会は、10名以内の委員をもって組織する。

2 委員は、研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。

(任期)

第4条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選により決定する。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。
3 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。

(議事)

第6条 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

2 委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(意見の聴取)

第7条 委員会は、必要に応じて委員以外の者に出席を求める、意見を聴取することができる。

(外部評価の実施等)

第8条 外部評価の実施は、研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。

2 委員会は、評価の結果を所長に報告するものとする。

(庶務)

第9条 委員会の庶務は、管理部総務課において処理する。

(その他)

第10条 この規程に定めるもののほか、外部評価の実施に関し必要な事項は、委員会が別に定める。

附 則

この規程は、平成21年10月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成28年4月1日から施行する。

国立国語研究所外部評価委員会【平成 29 年度実績評価】(第 1 回)

日 時： 平成 30 年 3 月 6 日 (火) 15:00～17:00

場 所： TKP 東京駅前カンファレンスセンター「5F カンファレンスルーム 5A」

議 事：

1. 前回議事概要（案）確認
2. 機関拠点型基幹研究プロジェクト平成 29 年度点検・評価報告書について
3. 機関拠点型基幹研究プロジェクト平成 30 年度年次計画について
4. その他

資 料：

1. 国立国語研究所外部評価委員名簿
2. 国立国語研究所外部評価委員会規程
3. 前回議事概要（案）
4. 国立国語研究所プロジェクト等別 平成 29 年度評価担当
5. 機関拠点型基幹研究プロジェクト平成 29 年度点検・評価報告書
6. 機関拠点型基幹研究プロジェクト平成 29 年度 実績報告書
7. 国立国語研究所機関拠点型プロジェクト評価実施の手引き
8. 機関拠点型基幹研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」
基本計画
9. 機関拠点型基幹研究プロジェクト平成 29 年度年次計画
10. 今後のスケジュールについて（イメージ）
11. 機関拠点型基幹研究プロジェクト平成 30 年度年次計画

国立国語研究所外部評価委員会【平成 29 年度実績評価】(第 2 回)

日 時： 平成 30 年 6 月 29 日 (金) 14:00～16:00

場 所： TKP 東京駅前カンファレンスセンター「4F カンファレンスルーム 4A」

議 事：

1. 前回議事概要（案）確認
2. 平成 29 年度共同研究プロジェクト評価について
3. 機関拠点型基幹研究プロジェクト評価について
4. 平成 29 年度「コーパス開発センター」及び「研究情報発信センター」の評価について
5. 平成 29 年度「組織・運営」、「管理業務」の評価について
6. 次年度評価におけるヒアリングについて
7. 委員長の選出方法について
8. その他

資 料：

1. 国立国語研究所外部評価委員名簿（平成 30 年 4 月 1 日現在）
2. 国立国語研究所外部評価委員会規程
3. 前回議事概要（案）
4. 国立国語研究所プロジェクト別 平成 29 年度評価担当
- 5-1～5-6. 平成 29 年度共同研究プロジェクト自己点検報告書
平成 29 年度共同研究プロジェクト評価シート
6. 機関拠点型基幹研究プロジェクト総合評価
- 7-1～7-2. 平成 29 年度国立国語研究所 2 センターに関する実績報告書
平成 29 年度国立国語研究所 2 センターに関する評価結果
8. 平成 29 年度「組織・運営」、「管理業務」に関する評価結果
9. 平成 29 年度業務の実績に関する外部評価報告書の構成について
10. 基幹研究プロジェクトに係る平成 29 年の実施状況に関する評価結果について

国立国語研究所 年報 2017 年度

2019 年 3 月 18 日 発行

編集・発行

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2

TEL: 042-540-4300 FAX: 042-540-4333

<https://www.ninjal.ac.jp/>

